
Achieve ~ 与えられた試練 ~

Tale Jack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Achieve ～与えられた試練～

【Nコード】

N7638E

【作者名】

Tale Jack

【あらすじ】

▼3月20日第55部掲載（本章5thにあたる） これより当作品を閲覧して戴ける方は、活動報告の7を御覧下されば幸いです。高校二年生手前、何故か父親から呼び出しが掛かる。親元を離れて暮らしていたあゆむは、疑問に思いながら父親の元へ。「こちらの高校に転校しなさい」そう啖呵を切る父。最初は困惑していたものの、とある理由であゆむは転校を決める。そしてある手続きをした帰りの事、あゆむはとある光景を目にする。心を痛めながらも過去の出来事からのトラウマと葛藤。しかしその末あゆむは決断する、

「手を差し伸べよう」。転校後、ある経緯を経て生徒会長を目指す事に……。しかし対立候補に強敵が現れる。その上、全幅の信頼を寄せていた女の子が反旗を翻し強敵側に。前途多難な中、あゆむを擁護しようと様々な勢力が現れる。しかし、それでも勝利の見込みが微妙で……。シリ阿斯・コミカルが入り混じった作品です。ドタバタ青春学園ラブコメディー調。（改稿後のあらすじ）

P r o l o g u e F i r s t

 { F i r s t C o n t a c t }

（前書き）

未熟な私ですが読者の皆様のお力をお借りして成長したいと思っているのでよろしく御願います。この作品に少しでも興味を持って戴ける様精一杯励んで参ります。

「……て……さい。すみ……て」

ボクの身体が誰かに揺られる。誰なのか分からない。もしかしたら莉紗子かも。だとしたら起きなくちゃ。またクドクド言われてしまうし……。

「う……うう、ふあゝっ」

家のベットってこんなに硬かったっけ。もつとふつくらしてたよ
うな……。起きて伸びをする。長い間眠ってた気がする。気のせい
かな。だけどそこは予想外の場所だった。

「やっと起きていただけました？ もうすぐ日が落ちますし風邪を
ひきます。加えてそのベンチに腰を掛けていてもバスは来ません
し。今日はバスの休業日なんですから、残念ですが……。それとも
たまたまココに腰を掛けたんですか」

この人誰だろう？ そう疑問に思った。そして辺りを見回す。そ
うか、ここで眠ってしまったんだ。

ベンチやバス時刻表に向いていた視線を目の前の女の子に戻す。

ショートロングで茶色がかった髪、多分美少女コンテストにでた
ら優勝できるんじゃないかなと思うほどかわいい。目が大きくて口
元が小さい、夕日のせいか唇は朱色に染まっているように見えた。
なんでボクに声を掛けてくれたんだろう。でもちよつと嬉しい。

辺りは確かに薄暗くなっていて、街灯がつくのだろうか眩い光がチカチカ点灯し始めている。

思い出した。これから通う新しい学校に、転校届けをお父さんと出しに行った帰りバス停に着いた。その時急にお父さんが近くの仕事場に用があると言った。だから一人でバス停に待つことになってしまった。定刻のバス時刻になっても中々来ないので、そのまま寝てしまったんだ……。っえ、バスがもう来ないって言ってた、あぁどうしよう、家に帰れないし。迎えに来てもらおうにも携帯を自室の机の上に充電しっぱなしで置いてきたからないし……。

自分のマヌケさをただただ自覚するしかなかった。

「はぁ、何で確認しなかったんだろう……」

溜息交じりにそう言い捨てる。

「はいっ？ ふふ」

咄嗟に出た言葉に対し女の人に笑われてしまった。

「お隣いいですか」

「えっ、ええ……どうぞ……」

そういつて女の方はボクの横にチョコンと腰を掛ける。

「お名前を覚えていただけませんか？」

「源あゆむです」

「あゆむさん……ですか。私は誌条雪穂といいます。雪穂って呼んでくださいね。あっ、いきなりこんな事言って困りますか」

「い、いえ」

いきなり初対面の人に自分の事を下の名前を呼んでなんて少しビツクリした。

「良かったあ。歳はおいくつですか」

「えっ、歳ですか。17歳ですけど……」

「偶然ですね。私も同い年なんですよ」

前にかかった髪を掻き分けて、上品にウフフと笑いながら右手を口に当てる。

「ということはもしかして同じ学校なんでしょうか……」

「え、えと……」

ふとボクの持っていたカバンを開けてワタワタしながら学校の資料をみて

「あ、あった……奏応^{そうおう}学園」

ボクは手元のパンフレットから顔を上げて

「奏応学園です」

ボクの手に行っている学校からもらったばかりのパンフレットの学校名が記載してあるところに指をさして言った。

実は転校すると両親から教えてもらったのは引越してから。ボクは最初引越したところから前の学校まで全然通える距離だったからかようつもりだったんだけど、ちよつとした諸事情で通えなくなっちゃって。だからここの学校の詳細を聞いたのは実質さっき。さすがに今日の朝まで学校は転校しないものと思ってたから唐突にお父さんに『今日転校手続をするから支度をしなさい』と言われた時は物凄くビックリした。でも妹やお母さんは驚いたような素振りではなかった。聞いたらボクにだけ言うの忘れてたんだって。通う本人が知らされないって一体全体どういうコト。頭の中が真っ白だった。新しい友達や先生達、確かに素晴らしいコトが待っているかもしれない。

でも……正直新しいトコロでやっていく自信がなかった。勿論前の学校を離れたくないっていうのもあった。折角一年間付き合ってきた友達や先生達なんだからこのまま一緒に卒業したかった。でももう決まってしまった事だし、お母さんや莉紗子が同意してるなら……しょうがないことなんだ。そう無理やり思い込もう。

「一緒、ですね。……もしかして転校生さんですか。」

やっぱり分かるよね。学校の名前もパンフレットを見なきゃ分からないんだから。

「はい、明後日からここに転校してきます。」

「へえ、そうですか……でも不思議ですね。この6月に編入してくるのってものすごく大変なんですよ。途中からの編入試験ってものすごく難しいって言いますし……」

雪穂さんは人差し指を顎の辺りに当てて思案していた。

「あ、あつと、なんとかたまたま、たまたま編入することが出来ました……」

ボクの目は斜め上を向いていた。試験なんて受けてませんなんて言えないよ。第一、お父さんから試験のしの字も出てきたっけ。多分出てきてない、と思う。そんなのがあるなんて一言も言わてない。試験を受けずにこの学園に転入できたのはなんでだろう……。その疑問ばかり頭の中をリフレインしていた。

「謙遜しなくてもいいんですよ。本当に凄い人っていうのは口には出さないといえますし。それより、どこに行かれる予定だったんですか。もしかしてご自宅ですか」

「ええ、でもバスが来ないとなると、困りました……」

「もしよろしければ、私の家のお電話をお貸ししましょうか。ここから意外と近いんですよ。私の家に来ていただければご家族の方と連絡できると思いますし。どうでしょう?」

いきなりのもち掛けだった。雪穂さんのお家？確かにボク的にはありがたいけど……。ホントにいいのかな。ボクは下を向く。しばらく考える。

「もしご迷惑でなければ……ですが」

ものすごく悩んでいる時にその言葉で決定打だった。

「めっ、迷惑なんてとんでもないです。え、えつとじゃ、じゃあお言葉に甘えましてお借りします、お邪魔します、えっあ、はい」

ボクの言葉はたじろぐ。それぐらい緊張しているんだと思う。やっぱダメだなあ。ボク、こんなにキレイでかわいい人と話しているのに目を見て話す事が出来ないよ。いつもお父さんにはちゃんと相手の目を見て話さないって言われているのに、失礼だと思うのに……目、見れないよ。

「はいっ。じゃあ行きましょうか」

そういつて雪穂さんは立ち上がってボクの手を引いて前へと歩いていった。

「最近引っ越してきたってことはここら辺を歩くのは初めてですよ
ね」

なんでだろう……。手を引かれてるだけで顔がほてって。いや、でもこれはいわゆる初体験なわけだし仕方ないっていったら仕方ないのかもしれないけど。

「あゆむさん。大丈夫ですか」

「え、あつ、はい。気にしないで下さい」

初めてなんです。その……女の人に手を引かれるの、なんて言えるわけないよ。ボク達はそのままだ道なりに歩いてゆく。海に面した一本の道路を。右側には木が生い茂る丘。その頂上に学園がある。左側にはボクたちが歩くがけの下に海岸があつて夕日が海の水面に反射してダイヤモンドのような光を放つ。

歩いて行くに連れて街灯が設置してある間隔が次第に広くなつていつていような気がする。モチロン、ボクの考え違いかもしれないけど。ってコトは街から遠ざかっているってコトかな。これも想像だけど。ボクは雪穂さんの家へ向かつていった。

「ここが私の家です」

「えっ」

雪穂さんの家に到着した頃には夕日はもう沈んでいた。あまりの驚きに目をパチクリ大きくしてしまった。大きな門扉。周りは物凄く高い塀。外側を見るかぎり豪邸以上の邸宅。家というより……城に近い。雪穂さんは門扉の前に立つとおもむろに自分のスカートのポケットから携帯電話を取り出して

「私です。只今帰宅いたしました。開場していただけますか」

そういつて電話を切つてまたポケットにしまった。ん、携帯電話？　なんだつたっけ。なんか忘れてる。途端に門扉がキーという音を立てて徐々に開いてゆく。すると真ん前に一台の黒塗りの高級車（？）が止まっていた。その車はエンジンをウォーンという音を

立ててボク達の側につけた。そして運転席から一人の中年のSPらしき男の人（黒サングラス装備）が降りてきた。

「お迎えにあがりました、雪穂様。……、そちらの方は、どなたでしょうか」

その男の人はそういうと走ってボクの目と鼻の先まで顔を近づけて下から上へとなめ回すように見た。絶対このサングラスの奥の瞳はボクに眼を飛ばしてるう。ものすごく冷や汗かいてきた。

「平賀、その人はわたくしの客人です。そんな態度は失礼に値します。おやめなさい」

そうおかんむりな口調で雪穂さんが言うとそのSPらしき男の人は

「し、失礼いたしました。そうとは知らず……」

そういつて頭を下げた。

というか客人じゃなかったら来ませんって。とういうかボクの手がまだ雪穂さんの手から放されてないんですよ。

「この人は平賀^{けい}圭。見ての通り運転手です、恐そうに見えて恐くないんですよ！ 少なくとも私たちは怒ったところを見たことはありません。加えて意外すぎる趣味もおありのようですし」

そういつてクスクスと雪穂さんは笑い出す。

こんな眼飛ばしてそんな男の人に意外すぎる趣味って……何？

「おつ、お嬢様。恥ずかしゅうございます。いやっあのつ、コホン
つ、お乗りください」

そういつて男、いや平賀さんは後部座席のドアを開けた。

「ありがとうございます。っさ、あゆむさんも乗ってください」

そういつて雪穂さんは後部座席奥へと詰めた。ボクは渋々乗り込んだ。それを確認して平賀さんも運転席に乗り込んだ。

「本日は33号館でよろしいですね」

「ええ。よろしく願います」

電話を借りたいだけなのに。ん？ 電話？ そうだ！ 雪穂さんがさっき持ってた携帯を貸してもらえばよかった。ああ、失敗だあ。わざわざここまで来なくても。なんか申し訳ないし。窓から辺りを見渡す。辺りはライトアップされていて光の三原色をベースとした様々な種類のお花畑や大きな噴水、テニスコート、湖、建物は洋館（お屋敷）が主だけど和風の建物もいくつかあった。というかアメリカのワシントン辺りの白いでっかい建物に似たものもあったような。ふと雪穂さんに視線を移す。この人は一体何者なんだろう。

「あの、ゆっ、雪穂さん……」

「はいっ」

そういつてニツコリ微笑みかけた。

「んと、なんで色々な建物があるんですか」

「ええ、それは父がやっている仕事の関係で色々な人がココに入りするものでしてこんなに建物があるんです」

「お父さんは一体何をやっているんですか」

「外資系の仕事です」

外資系？ だからこんなに敷地面積が大きいそんな豪邸に住んでるのかな。でもこの話題から話を展開させて他の話題をふることはできなかった。

この度はPrologue Firstを読破いただきありがとうございます。いや、笑えるエッセンスゼロですね。なんて私が言っちゃっていいんでしょうか。ラブコメと銘打って皆様へ通知していながらのこのストーリー。最初なのであまり笑いを入れられるような腕があればいいのですが、残念ながら私にはそんな技術は持ち合わせておりません。やはりまだまだですね。次のストーリーを読んでいただければ幸いです。

追記（4月1日）

読者の皆様からのご指摘もありまして前半部分の大幅改編を行う予定です。

ストーリーの主軸は変わりませんのでご安心下さい。

尚、現在は時間的に余裕がありませんのでストーリーの改編のメスはまだ入れられる見通しはありません。

そこで、この短時間で出来る事と言ったら文法の間違いを修正する事だと思いましたが更新させて戴きました。

徐々に突っ込み所を減らしてゆこうと思っておりますので変わらぬ応援の程宜しくお願いできれば幸いです。

また、何かおかしい部分があれば仰って戴ければ嬉しいです。

加えましてご評価・投票ランキングの方もして戴ければ感謝致します。

この場を借りて一応宣伝をさせていただきます。

私にとって『なろう』に投稿した中で処女作である『Achieve』与えられた試練』に続く新たな作品を企画・執筆中です。

一応ファンタジー（魔法）・ラブコメを題材とした王国物語を予定しております。

題名もまだ決まっておらずまだ3部分までしか執筆できていない状態ですが10部分程執筆出来次第投稿したいと思っています。その際にはこの作品とリンクしてご覧戴ければ感激です。それでは長々と失礼致しました。

Prologue Second ｝Mystery

「着きました」

そういつて平賀さんはカチャカチャッとオートマを操作した。車は33号館の車寄せの所にキーンツツという音と共に停止した。すると後部座席のドアが開いて

「お帰りなさいませ、雪穂様」

メイドの格好をした若い女の人が礼をしながらそういった。

「ただいま戻りました」

そういつて車を降りる雪穂さんと一緒にボクも降りる。周りには執事さんやメイドさんが33号館の入り口に沿って二列対応で頭を下げていた。ほんとにボクここにいていいのかな。上を見上げると33号館は高層高級ホテルみたいだ。一体何階まであるんだろう。

見当もつかない。とりあえず前二列対応の間を堂々と通ってロビーに入った。中央に待合場であるのか大きなソファがいくつも並べてあるトコに様々な種類の観葉植物が置いてある。至る所に花が飾ってあつて風流かも。昔だとかんなのを『をかし』っていうのかもしれない。何故か大きいシャンデリアやレッドカーペッドにマッチングする。雪穂さんがロビーで受付の人と話している傍らそんな感じでボクは周りを見渡していた。

「本日はどちらのお部屋にいたしましょうか」

「最上階のスイートを用意してください」

「申し訳ございません。本日は奥様が大事なお得意様とご商談の為使用中でございます」

「それじゃあ5階のマスタールームを用意してください。あそこは大抵滅多なことがない限り使用しないはずですよ」

「申し訳ございません。そちらは御当主様がお使いになっております」

「お父様が。一体どなたと……」

雪穂さんは手を口元に持っていた。少し俯いて

「それじゃあ63階のクイーンルームを用意してください」

「ええ、そちらであればご用意できます。お食事のほうもすぐお持ちいたします」

食事よりお電話をお借りしたいんですけど……とは言えない。折角おもてなししてくれるわけだし素直に受けるべきかな。いやでも本当の目的としては電話を借りたかったわけだしやっぱり食事は断って電話を借りてすぐ帰るべきか、実質さつき雪穂さん携帯電話持ってたし。うーん、どうするべきか。ボクはその場で佇んで考え込んでいた。

「そろそろ参りましょうか。これから行く部屋に国内用電話があります」

やっぱり、行くべきだよな。よくお母さんがお言葉に甘えることは

大切だつて教えてくれたし……。ん、国内用つてコトは。国際用もあるの。

「あつ、国内用つてことは国際用もあるんですか」

ふとボクはエレベータに乗り込んだ時に雪穂さんに聞いてみた。

「ええ、ありますよ。私を含める家族は全員ほとんど海外の支部との連絡や取引先との商談のアポイントメントなどを取り付けるときに使うので国際用を主に置いてあります。国内用は限られたところにしかないんです」

普通の家庭においてるのはどちらも兼用して使えるものばかりだとおもっただけだなあ。知らないのかな、今の時代分けて使っているのは公衆電話ぐらいだよ。分けて使う必要あるのかなあ。

「そうなんですか……」

ってこんなこと聞いている場合じゃない、明後日から折角、学園に通うんだし友達にならずにちや。あつ、でももう友達なのかも。いや、でもまだ会ってから時間も経ってないし。

「なにか趣味とかあるんですか」

こんなありふれた質問しかできない自分に失望する。

「えつ、そ、そんないえるようなものなんてありません」

雪穂さんは手をブンブンさせて否定した。ボクなんか変なこと聞いたかなあ。

「好きなモノとかありますか」

こんな質問抽象的過ぎないかな。でもそんな心配は要らなかったみたい。

「読書を……少々嗜みます」

読書かあ。ボクも結構読んでる。なんせ半ば強制的に家の妹が読め読めっていつて感想をいうまで出て行ってくれないんだ。しかも自分が読みたい本だったらまだしも何故に外国のラブロマンスものばかりなんだろう。男の子と女の子ではそれぞれ主観、価値観とか違うと思う、だからボクじゃなくて女友達に薦めたらどうなのっていつてもボクがいいんだって。理由は分かかってない。なんでだろう。妹は教えてくれない。

「ボクも結構好きなんですよ。」

「本当ですかっ！　っあ、いえ、その……すみません、私、本の事となるとつい舞い上がってしまって。どんな本を読まれるんですか？」

「えつと最近……『すみれ童日記』　って知ってますか」

ラブロマンスものを読んでますっ！　なんて言えない。だからボクはその類以外でボクのお気に入りの本を言ってみた。

「それっ私のお気に入りの本なんですっ！　あっ、また。重ね重ねすみません。」

雪穂さんは慌てて口に手をあてた後、頭を下げる。

「謝らないで下さい。いいですよ、舞い上がっても。少なくともボクの前では」

ボクは優しく微笑んだ。意外だった。これほど本のことにくいつくなんて。しかももつとも抽象的な質問で。

「初めてです。私にそんな優しい言葉を掛けていただいたのは。うれしいです」

さっきまでの大人しい雪穂さんとは違った表情。目がキラキラ輝いてる。笑ってるし。今までの雪穂さんを知らないけど今の顔が一番いい表情をしている気がする。少なくともさっきよりは全然いい。雪穂さんが少し間をおいて再び口を開く。

「『すみれ董日記』」

おおしは平安時代に大柴友法によって書かれた書物。全15

巻。本紀や列伝などが主とされますがこの世を去る前にかかれた最後の15巻は自分の苦難の一生を書いたんですよ。友法は名門の武士の本家に生まれ一時は武士を志したもののその本家はあるところとか優秀な門下生が謀反を立てて焼き討ちにあったそう。そこからがこの物語の始まりですよ。私何回読んでも泣けちゃって、特に友法が当時難病だった柴又病にかかってしまい、助かる方法が伝説の秘薬しかないと聞いた本家唯一の生き残り、織子が必死に探しにいった、やつとの思いで見つけて戻ってきて友法はなんとかそのお陰で助かったものの織子はそれと引き換えに死んでしまった。自分のために一生懸命やってくれた人、なにより幼い頃から一緒にいた織子がいらないですよ。それってあんまりじゃないですか」

「ボクもそこが一番印象深かったです。友法としてはやりきれな

気持ちでいっぱいだったはず。だから友法は2年後……」

「それ以上言わないで下さい。思い出し泣きしちゃいます」

少し笑みを浮かべて目に少し浮かんだ涙を人差し指でゆつくりと拭く。なんだろうものすごくうまがあつ。同じ趣味。同じところが一番好きなんて、こんなことあるんだ。

「ごめんなさい」

「気にしないで下さい。……気が合いますね。本がお好きだと伺ってもいままでどなたも私と同じ本が好きなんて言った人いないんです。まあ無理もないですね、この日記自体世の中に2組しかないんですから。私の家に一組、もう一組は行方知れず。ん？ では何故……」

甲高いアナウンスと共に眼前の扉が左右に開かれた。どうやら63階に着いたようだ。

「えっ！」

それは目を疑うような光景だった。何故こんなところに……。中年の二人の男性が並んで真ん前に立っていた。一人は背が高く、無精髭を生やして黒ストライプのスーツを着たこの人は

「お父さんっ！」

お父さんは口をポカンと開けて驚いたような顔でボクを見つめていた。

「あゆむ……」

お父さんが何でここにいるの。仕事場から今頃帰って自宅に帰ってるんじゃないの。さまざまな疑問が頭の中に思い浮かんだ。

「なんでここに」

「あゆむちゃん、いい話があるんだ。雪穂ちゃんも一緒に来ていただけるかな」

「雪穂、パパも来て貰いたい。大切な話なんだ」

ぱっ、パパ？ ってことはこっちの少し太ってメガネを掛けているスリッ姿の優しいような人は雪穂さんのお父さん。ますます謎だよ。なんでボクのお父さんと雪穂さんのお父さんが会ってるの。

「はい」

ボクはとりあえずうなづく。

「この方があゆむさんのお父さんですか」

「そうです、父です」

隣にいる雪穂さんにそう答える。雪穂さんは正面にいる雪穂さん父に向き直って

「お二人はお知り合いだったのですか」

すると雪穂さん父がそれに対して

「ああ、そうだよ。その詳細も含めてこれから話し合おうじゃないか」

ニッコリ笑ってボクたちに話して父親達二人は先に歩き出す。

「私たちも行きましょうか」

「はい」

ボク達もその二人についてゆく様に歩き出した。

Prologue Second (Mystery) (後書き)

この度はPrologue Secondを読破いただき至極の致すところです。

しかし自分が執筆した今ストーリーを見てみると少しマンネリ化している行動や仕草をいれていたり、
会話文が多かったりと皆様のご期待に添えなかった部分が多々あったように思います。

直そう直そうと思いこんな感じに仕上げましたが腕がまだまだ足りませんね。

それでも気を落とさずに頑張ってまいりたいと思いますので
皆様の温かい応援やコメントをよろしくお願い致します。

それではまた次のストーリーを読んでいただければ幸いです。

Prologue Third { Truth Part 1 }

長い廊下を歩いて一番奥の部屋に入ってしまった。クイーンルームという名前がつけられていることだけはあつて、入り口は歴史の感じられる年季の入ったドアがやけに高級感を演出していた。中は半円形ほどの床から天井にかけての長方形型のガラス張りの窓が取り付けてあつて、そこまで歩み寄つて外を眺めてみるとあたりのイルミネーションがボクの目に美しく映る。さっきのライトアップしたものをここからみると物凄く神秘的に見えるのはここがやっぱり高いところだからだろうか。眩い光を放つ室内の大きなシャンデリア。床一面は大理石。長テーブルがあつて、たぶんここは食事をする席かな。

「あゆむ君といったね、座ってくれ」

雪穂さん父の声でふと視界を外から内へ変えた。雪穂さんを含め他の二人も着席していた。ボクは一番窓から近い席にある雪穂さんの隣の席に腰を掛けた。ボクが椅子を引い座ってから少し間が空く。沈黙……。だけどそれを最初に破つたのはやっぱりお父さんだった。

「さて、なにを話してよいやら……。まずは、すまなかつた」

お父さんはいきなり立ち上がつてボクに向かって頭を下げた。

「何に関して謝っているの？ お父さん何にも悪いことしてないでしょ」

「いや、お父さんはなあ、嘘をついていたんだよ」

「……嘘？」

ボクはゆっくりと口元を転ばした。

「じつはな、父さんの会社は非メーカー系のガレージメーカーじゃないんだ。あゆむはいつも父さんの会社の仕事を副社長として手伝ってくれたね」

「えっ、だってあゆむさん、まだ高校生なのに……なんで？」

雪穂さんは小声で言った。

「まあ……そうだね」

確かめるように返事した。

「結論から言おう。父さんの会社は貿易会社だ。それも外国も含めた業界トップの最大手企業、Minamoto Tradeのね。全国に186ヶ所にわが社の系列がある。父さんはその中で社長をしている。では何故あゆむに嘘をついていたか、それは……私の会社を将来的に継いで欲しかったんだ。様々なコトを勉強して経営というものを学んで欲しかった。その一步としてモノづくりを考えるひらめきや仕事の大切さを学ばせたかった。だからこそ小さなアントレプレナーの会社を立ち上げて、わざわざ内の社員に手伝ってもらってアントレプレナーの仕事を手伝ってもらった。だが嘘をついたことは悪かったと思ってる、この通りだ、許してくれ」

お父さんは少し頭を下げた。正直信じられない。そんな大会社の社長だったなんて。でも信じろって言うほうが無理かもしれない。いきなり、父さんは貿易会社社長だ、あゆむに経営というものはな

んたるかを学んでもらうために嘘をついた。なんて、でも……。

「あの会社はどうなるの」

ボクは少しトーンを落としてそうたずねた。幼い頃からあそこで社員の人やお父さん達と一緒に頑張ってきた思い出も沢山出来た。あそこはボクにとって大切なもの。

「そのことなんだが、実はあの会社は買収されてしまった。どの会社を買収されたかは調査中だがきつと取り戻す。あそこはあゆむだけじゃない、父さんやわが社の複数の社員にとってもかけがえのないものなんだ。確かに最初はあゆむの経営学を学ばせる準備段階の部分で学ばせるために父さんが立ち上げた。正直最初の頃みんなモノづくりなんて興味はなかった。ただ父さんの友人がアントレプレナーをやっていたんで、イタチごっこというか、その、真似事をしたんだ。だからあの職を選んだのには理由はない……。しかしモノづくりという、消費者の視点になってよりよいものを発案したり、試してみたりする。そんな仕事に愛着が徐々に湧いてきたんだ。確かに経営的にキツイときもあった。なんせわが社の勢力範囲では未開拓の部分だったからな。失敗が多くて……。でもそんな時いつも隣に座っていたあゆむは画用紙いっぱいアイデアを書き出してイラストを描いていたね。その時のあゆむは目をキラキラさせて汗だくで汗を拭く余裕もないくらい鉛筆を動かしていた。父さん、それを見てもの凄く感動した。『俺はなにをやっているんだろ。あゆむがこんなに頑張っているんだから俺も……』って奮起させられた。社員の皆にもその光景に心動かされたはずだ……」

お父さんはしみじみと話した。そう、あの頃はやる事が発案しかなかったから一生懸命画用紙いっぱい書き出していたなあ。白い画用紙。鉛筆で文字やイラストをいっぱい書く。そして間違ったら

消しゴムで消す、何度も、何度も。時には手が痛くなつて鉛筆ダコが出来た。それでもなんとかガムテープで手に鉛筆を固定して描いていた。それも今となつてはいい思い出……。お父さんも同じ気持ちだつたんだ。なんか嬉しい……。

雪穂さん父や雪穂さんはただ俯いてずっと聞き入っていた。少しの間沈黙が続く。部屋の中にある大きな古時計がカチカチという音がやけにボクの耳に入ってくる。やがてゴーン、ゴーンという音を立てる。それが鳴り止むと今度は雪穂さん父が口を開いた。

「ユウちゃん、いや、あゆむ君のお父さんと私は大学時代に知り合つたんだ。もう長い付き合いになる、最近は連絡だけ取り合つていたが昔はよくお互い愚痴を溢す為に近くの居酒屋に飲みに行ったものだ、ハハハ。コホン、あゆむ君のお父さんは私にその買収した会社と一緒に探してくれなかったわ。」

わざわざ私に頼みにここにまで来たんだよ。

そんなこと電話でもいいのにね。つま普通はどの会社を買収されたか分かるんだけど、不思議なことにその知らされた会社はダミーだつたんだ。一体なんでそんな事をしなければならなかつたか、検討もつかない。まあともかく私たちがそんな話をしている最中、^{さなか}雪穂と男の子と一緒にクイーンルームを使用する、まあこの部屋だなどという情報を家の警護班から聞いてね、どんな男の子を連れてきたんだろうつていう興味があつてこの階に上がってきて待ち構えていた、という訳さ」

雪穂さん父は優しい口調で淡々と語りかける。お父さんもあの会社を大事に思つてくれてたんだ……。

「父さんも興味があつたんだ。なんせよくここに父さんは所要で来

ていたから雪穂ちゃんがカワイイ子だっけ知っててそんなカワイイ子が連れてくる男がどんな男かと思えばあゆむだった訳だよ……。なんか父さんのには複雑だよ……」

ボクは咄嗟に隣の雪穂さんを見る。雪穂さんはウッフフと少し笑っていた。

「おじ様にはここに来たとき少し遊んでもらっていたんです。優しい方で、その人があゆむさんのお父様だったとは……」

そういうことだったんだ。全然知らなかった。

「あゆむ、ここで大事な話がある」

お父さんは改まった様子でこちらを見つめる。なんだろうこんな改まっちゃって。シャンデリアからの眩い光が充滿するこの部屋には緊張した空気が流れていた。

Prologue Third 〽 Truth Part 1 〽 (後書き)

Prologue thirdを読んでいただきありがとうございます。
嬉しき限りです。

しかし、今回は少し短いですね。

その所はどうか容赦ください。

それではこのAchieve〽与えられた試練〽というのお話に少しでも多くの方に関心をもっていただければ幸いです。

そして次のストーリーも御覧いただければ感激です。

「知つての通り源家は代々貿易会社を經營してきた。經營者になる資格のあるものは全員乗り越えていることだから当然あゆむにもそれを課さなければならない。実質父さんもあゆむのおじいさんにあたる父さんのお父さんがそれを課して乗り越えたから今俺は社長になつてゐるしな」

お父さんは人指し指をたててそんな事を言い出した。何をボクに課すつていうの、ものすごく心配なんだけど。

「その課すこととはな……父さんの言う3つの事を成し遂げることだ。目標としては高校卒業までと父さんは考えている。一つ一つ区切つてその指令を言う。達成でき次第次の指令を言い渡す。それを全て達成できた時にわが社の正式な經營者として認められることになる。これを拒否したものは源家から即座に出て行つてもらふ。これが家訓だ。だから申し訳ないがあゆむには拒否権はないよ。心配すんな。父さんの言う事を3つだけ達成すればいいんだ。なぐに、あゆむならできるさ、なんせ父さんの子なんだから」

そう言つて二ヒヒといった顔でボクを見る。3つの事？ なんだろ。大体やるもやらないもボクにはそれを達成する自信がない。というかそれ以前に經營者になるとかならないとか今のボクには分からない。でも小さい時からお父さんはボクに跡を継いで欲しいつてことは言つてたからボクはそれを叶えるつもりでは一応いた。でも……。

「おじ様」

隣の雪穂さんが問いかけるように口を開いた。

「詩条家の人間が源家の方に言っただけで良いのか分からないのですが……あゆむさんはまだ高校生で跡を継ぐ継がないの話はもつとあとで良いのではないのでしょうか、なんて偉そうな事を言っただけでいい」

そう言っただけで雪穂さんは押し黙る。でもこの人はボクの思っただけで分かるのかな。やっぱり同じ趣味が好きなのだけある……かも。

「いや、全然謝らなくていいよ。雪穂ちゃんの言ってる事は正論なんだから。正直に言えば、私のお父さんはね、私が大学を出てから跡を継がせるといふ話をしたんだ。多分私の経営者としての適齢期がその時期だったんだろうね。それから私の学業が一段落するのを待ってくれたかのどちらか……。どちらにせよ最終的には跡を継ぐんだ。能力がない人間なら『跡を継げ』なんて言わないよ。それも源家では代々守られてきているからね。ところがあゆむは私なんか、いや、今までの源家の中でひよつとしたら一番Minamoto Tradeの経営者にふさわしいかもしれない……。一番会社を大きく出来るかもしれない……」

お父さんはそう言っただけで腕組をして椅子の背もたれに寄りかかる。ボクにそんな力なんてあるのかな。多分お父さんはボクを買被り過ぎていたような気がする。現にお父さんはお母さんと一緒に昔から今にかけてボクを手塩に掛けてくれて育ててくれた。勿論、妹にもだけだ。だからその愛情がそのまま期待に代替されているんじゃないかな。

「どうしてそんな事が言えるんですか」

やはり問いかけたのは雪穂さんだった。ボクの心臓の音が一瞬高鳴ったような気がした。絶対にボクの思っていること筒抜けだよ。

「それはあゆむの頭脳にある。

あゆむには昔IQテストとPQテスト、GIFテストを受けてもらったんだ」

ボクは頭の引き出しからその記憶を探していた。すると確かにそんなような事をしたような……。そうだ！お父さんに『楽しいゲームがあるんだ！父さんが質問するからそれに全部答えられたら今日はお子様ランチにあゆむの好きなモノ3つ追加していいぞ！』って言われて当時喜んでやったんだ。あの頃は無邪気だったなあ……。ボクは色々な事を回想していた。

「そのテストで3つのテストの結果に私は驚いた。驚愕の数字だったんだよ。IQ183、PQは忘れたが平均値を大幅に上回った、そんなことよりもGIFだ。これは3つのテストの中で一番重要だった。なんせ、なにに対して一番素質があるのか、それを計るためのテストだったからね。GIF3056PH^{パーヘクトカルポイント}P。しかもどれもこれも経営者に必要な能力の素質が現れているんだ、まあそれだけではなかったけれども……」

「……」

ボクと雪穂さんは言葉を失っていた。けど雪穂さん父はあまり驚いていない様子だった。ただすこしそれを聞いて頷いていただけ。ボク自身あまりの驚きに声も出ない。そんなすごい結果だったなんて、今日は信じられない事が多すぎる。

「そんな結果も含めてユウちゃん、もとい、源雄司はあゆむ君に厳しい難題を出したんだと思うよ。どうだい、拒否権はないらしいけど、コレを受けるかい」

雪穂さん父がボクに向かって問いかけた。そんな今すぐにはそんな答えは……。

「母さん、莉紗子もあゆむにはこれ乗り越えてくれることを期待している。父さんも同じだ。すこしでも父さんの跡を継ぐ意志があるのならコレを乗り越えて欲しい」

「まだ継ぐ継がないは置いておくとして、お父さんの望みは叶えたって気持ちはあるよ」

そうコレは親孝行ではない。親だから、とかそんな半端な理由じゃなくて一番近くで経営者としてアントレプレナーをやっていた頃のお父さんを見ていた一人の人間としてこの気持ちは心の中にあるんだ。経営というものを一生懸命にやってのける、仕事を愛し、家族を愛し、社員を愛しているお父さんはボクの憧れなんだ。

「じゃあやってくれるね」

ホントにこれに同意していいのかな。でもボクに拒否権はない。お父さんの目を見つめる。険しい目をしていた。その険しさの奥にはなにがあるんだろう。期待？ 愛情？ 願望？ いや多分違う。……信頼。絶対あゆむならやれる、だから父さんの跡を安心して任せられる、そんな風に語りかけているようにボクには思えた。

「うん、やってみるよ！」

こう言い放った時、お父さんの目は少し潤んだように見えた。

「そうか……あゆむならそういつてくれると思ってた、ありがとうな。指令だが後日また改めて言うことにする」

しみじみそんな事を言った。

「あゆむ君」

「はい」

今度は雪穂さん父がボクをよんだ。

「さつきユウちゃんとも話してたんだが、さつきの条件をのんでくれたあゆむ君には我が家に居候してもらおうよ」

「なっ、どうしてですか」

ボクはビックリして立ち上がってその衝撃で椅子を後ろに押し倒し押してしまった。ボクが、雪穂さんの家に??そう思うとお酒を飲んだ時(お正月に薦められて少し飲んだくらいだけど)みたいに顔に熱が充満した。顔がほてる。こんな豪邸に? それ以上に多分距離は近くないにしろ同じ敷地内に住むってことでしょ、やっぱり信じられない。こんな……、そう思ってボクは雪穂さんの方を見る。雪穂さんは目を大きくして口を手でふさいでいた。どうしたんだろう。

「貿易会社を経営するということは外資のことも勉強しておかなければならない。そこで外資系企業で最大手のshijōコーポレー

シヨンの経営者であるエイちゃん、コホン、もとい、詩条栄治氏に外資のhow toを学んでもらいたい」

お父さんが雪穂さん父の言った事に理由を補足する。

「今日来た理由にそのお願いも含まれていたんだよ」

雪穂さん父がそれにまた補足を重ねた。そうだったんだ、そのためにお父さんはここに来ていたんだ。でも待つてそうしたら、

「ってことはお父さんやお母さん莉沙子と離れて暮らすって事になるって事？」

ボクは少々声を大きくして聞いた。いつも寝食を共にしてきた家族と離れて暮らすなんて寂しすぎるよ。

「それなら心配ない！ 父さんたちもココに暮らすから」

「おっおじ様たちもですか」

雪穂さんが驚きの声を上げる。

「あつ迷惑だったかな」

「いっいえ、人が多いほうが賑やかで楽しいですし……」

「あゆむ君と色々話せますし……かい」

雪穂さん父がまるで先読みをしたかのように雪穂さんに問いかけた。

「いえっ、あの……えっ、あっ、……」

そう言っつて雪穂さんはすこし首をたてに振っつて下を向いて顔が少し赤くなつたように見えた。

「どうやら雪穂はあゆむ君に興味をもつたようだ」

雪穂さん父がそうつぶやいた。

「実は父さんの会社の傘下に入っている会社とエイちゃんの会社の参謀が業務提携をするんでその一端の為なんだけどな。まあ父さんたちとあゆむとは別館になるだろうけどね……」

別館になれども家族みんなで暮らせるんだ。そんな安堵の気持ちとコレが夢なんじゃないかという気持ち、更には雪穂さん達住まうこんな豪邸、しかも雪穂さん達と同じ敷地内に住むことへの緊張感がボクの脳裏の中で渦巻いていた。

「そしたら明日から引越し開始だ。もう母さんや莉紗子には言付けしてある。了承も得ているしな。そうと決まれば帰るぞ、あゆむ」

お父さんが席から立ち上がった。『じゃあまた明日、世話になるよ』と頭を下げて雪穂さん父に言った。加えて雪穂さんの方に向き直つて『雪穂ちゃん、またね』と微笑んで言った。そうしてドアの方に向かつて歩いていった。ボクも立ち上がった。二人にペコリ礼をしてお父さんの方に歩き出そうとしたら、雪穂さんがボクの服の裾をチョコンとつまんでボクの方を見て無言で手を仰いだ。ボクはなんだろうと思ひながら耳を雪穂さんの口元に近づける。

「あのつ、あつ明日付き合っていただけませんか。新刊をチェックしに書店に行きたいんです、それでもよろしければお勧めの本などを紹介していただけたら……なんて、どうでしょうか？」

いきなりの提案だった。ボクは『エッ』と少し声を出して雪穂さんを見てしまった。雪穂さんと二人で本屋に？ 緊張してしまうけど、転校がいきなりだったから学用品とかまだ買ってなくてどうせ明日買おうとしてたし……。

「……お受けします」

額を少し人差し指でかきながらボクはこう答えた。そういうと雪穂さんはニツコリ笑って

「では明日家へ引越しに来たときにでも詳細は考えましょうか」

「はい」

そう言ってボクはお父さんと部屋から退室しお父さんの車で家に帰宅していった。

Prologue Fourth 〽 Truth Part 2 〽 (後書き)

Prologue fourth を読んで戴きありがとうございます。

少しでもこのストーリーに興味・関心を持っていただければとても嬉しいです。

これから多くの読者の皆様にこのAchieve〽与えられた試練〽を読んでいただいて、かつ、少しでも楽しんでいただけるようにこれからも努力し、精進して参りますのでどうかよろしく願います。

それではまた次のストーリーを読んでいただければ幸いです。

Prologue Fifth } Sister }

「……で、起きて……だから……」

またベンチで眠っちゃったのかな。 いやでも昨日確かにお父さんと家に帰ってお母さんと莉紗子は先に眠っていたからそのまま就寝したんだ。 ご飯も食べずに。

「ああ、またボクベンチで……」

「なにが『ああ、またボクベンチで』 よ。 お兄ちゃんには珍しくエッチな夢でも見てたのお？ でもベンチであんなことやこんなことなんてもしかしてお兄ちゃん趣味変わった？」

何故か寝ているボクの膝の上に馬乗りしてニシシといった表情を浮かべている妹、莉紗子がいた。 うわぁ……もしかして寝ぼけて変な誤解をさせた？ 大体趣味ってなんだよ。 まるでボクの趣味を熟知しているような物言い、第一そんなの莉紗子に教えた事なんか誓って一度もない。 うん、絶対に！

「なんでボクの膝に馬乗りしてるの。 しかもこれだけは誤解して欲しくないから弁解しておくけどいかがわしい夢なんてみてないから。 そんなおかしい事をその歳でいうのはやめなさい」

「うーん！？ おかしなことってどんなコトお？？」

そう言っただけでボクの額に莉紗子の額が当たるぐらいの距離まで顔を近づけて疑うような視線で数秒ボクの目を見つめた。 屁理屈が減らない妹だこと。 ボクは内申少々呆れモードに入っていた。

「つま、そういうことにしといたげるう。それより朝ごはん出来たよっ！大体さつきから10回以上朝の目覚ましコールしてるのにお兄ちゃん全然起きてくれないからこうして馬乗りして必死に起こそうと努力してるんじゃない？！朝から妹に大変な迷惑をかけて申し訳ないと思わないのかなあ、まったく。加えて今日引越しいい……」

莉紗子はむくれてそんな事を言った。そういえば今日は雪穂さんの邸宅（お城？）に家族みんなで引越す日だ。

「あの……莉紗子？」

「ん！？何。どうかしたの、お兄ちゃん」

さつきからずっと思ってたんだけど

「重いからよけてもらいたいんだけど」

莉紗子の表情が一瞬固まる。少し間が空いてから、

「あ、ごめんなさい、んによいしょっ」

平然と全く心のこもってない謝罪の言葉を述べつつゆっくりとボクの膝から身体をどかしてゆく。

「じゃあ、あたしは下に先にいつてるねえ。早く来ないと祝引越し莉紗子特製とろろ汁が冷めちゃうから着替えたらすぐ下に下りてきてねえ！」

そう言つて莉紗子は部屋を駆け出して出て行つた。全く、こんなシチュエーションを毎朝繰り返してたんじゃ朝からどつと疲れるよ。待てよ、さつき特製とろろ汁がなんとか言つてなかったっけ？
そもそも莉紗子つて料理できたっけ？

（お兄ちゃん、まだあゝ！？）

下の階層から妹の催促の声が聞こえる。

「いま行くよおゝ！」

大きな声で下にも聞こえるように通る声で言つた。また催促されないうちに早く着替えなきゃ。催促を3回くらい（平均で）莉紗子から受けると大体一週間コキ使われるんだ。これはもちろん過去の実績から言っただけ……。ボクは素早く服に着替えた。ジーパンに薄手の白いＴシャツに半袖の青いシャツを羽織つた服装というなにもありふれた服装。でもいくら雪穂さんと今日、本屋に行くつていった理由だつておしゃれたんじゃ自分らしさが無いし……。うん、これで今日はいいんだ。変じゃない、多分……。

それから朝食のため階下^{かいか}に降りていった。そういえばお母さんや莉紗子はなんでお父さんが引越しを提案した事に対して同意したんだろ。少しは拒んだつていいと思うのに……。階段を下りながらそんな事をボクは思っていた。

『ガチャッ』

リビングの扉を開ける。いつもと変わらない風景。庭に面した力ーテンを開けた大きな窓からは朝の太陽の木漏れ日が差し込んでい

た。これから食事をするテーブル、結構昔から使っていて少し最近調子が悪い大型液晶型テレビ、ボクのひいおばあちゃん（母方サイド）の形見だという食器棚。最近買ったばかりの冷蔵庫。こう言ったらおかしい人かもしれないけど、それ以外にもここだけじゃない、この家に置いてあるものには少なからず全部思いいれがあった。

お父さんが昨日リビングに一緒に入った時に呟いたんだ。これも明日で見納めか……って。ただの物品なのになんか無くなると思うと寂しいね。

「ホラ、お兄ちゃん！　そこでボヤつとしてないで早く食べてちょうだい」

お母さんがリビングから対面カウンタ越しにボクにそう呼びかけて、ボクは我に返った。

「う、うんっ」

そう返事していつもの指定席（それも今日で終わり……）である莉紗子の隣に腰を掛けた。一家の大黒柱であるお父さんの席はお母さんの隣、つまりボクの対角線上に座っている。

「もう、遅いよ、お兄ちゃんっ!」

やっぱり子供っぽい。そう心の中で思う。中学2年生に今年なったというのに身体は幼児体系とまではいかなくても近いトコには位置していると思う。身長低いし……。しかもそんな幼児体系の妹が今日はいつもとはうってかわって髪を二つあみからポニーテールに変えていた。

これは妹の担任の先生から聞いたんだけど今時の人たちはえつと……『萌え』っていうんだっけ?その言葉は莉紗子のためにあるとかなんとか中学の全学年の大半の男子が言っているらしく、それは日ごとに熾烈^{しれつ}を極め、しかもその中学校には莉紗子のファンクラブまであるんだって。ハッピやウチワを持つてるとか、正式な部活動として認める認めないのって学校側とのデモ活動が行われてるとか言ってたかな?

まあどちらにせよボクにはそんなことが現在の国立中学で行われているなんて信じられないし、その『萌え』とかいう意味が分からないのでコメントのしようがありません。でもたまに妹として力ワイイなっと思うときもあるんだけどね。

「お兄ちゃん、このトマト食べないのお? うわぁーい、いっただきいー!!!」

有無を言わずボクの今日の朝食から食物を掻^か攪^{かく}つてゆく。知ってるか? 妹よ。トマトにはビタミンCが結構含まれていて、身体の機能を調節したり、各栄養素の働きを円滑にしたりするから絶対ボク達人間には必要なエネルギーなの、分かる??

「莉紗子ちゃん??」

ボクはワザと妹の名前をちゃん付けで呼んでみた。

「ん〜？ なにい〜？」

平然とこれっぽっちも自分の罪を恥じる部分もなく箸を加えながらこちらを見た。

「お兄ちゃんも……」

「お兄ちゃんもお？？」

「莉紗子の卵焼きいただきい〜」

サラリとそんな事を喋って、素早く莉紗子の大皿から玉子焼きを一個掻っ攫う。

「っあ〜！！ それえ、私の大好物う〜。ヒドイっ！ ひどすぎるよお。あたしが玉子焼きが一番好きなの知ってるくせにい〜。こんな仕打ち、ううん、妹にこんなプレイしていいと思ってるのお〜〜！？」

大きな声で若干起こり気味にボクの方に眼差しを向ける。いやいや、ヒドイ仕打ちってやり始めたのは莉紗子からでしょ？ それをしっかり忘れないで戴きたい。しかも……朝もちゃんと注意したのに。この娘には『馬の耳に念仏or寝耳に水』だ、おそらく……。

もしやと思ってお父さん、お母さんの方を見ると、お父さんはさっきまでゴキゲン調子で鼻歌を歌いながらスラスラ新聞を読んでいた目がいきなり莉紗子の方に向けられ目を大きく見開き、鼻歌

も止まり、対するお母さんはさっきまで使い終わったフライパンなどを台所で洗っていたのにその手が止まり、さっきまでいつも通りだったリビングが妹である莉紗子のたった一言で一瞬にしてあ然空間に変わってしまったのだ。

「莉紗子……朝も言ったけどさあ……そのおかしい発言やめなさい」

ボクはこの空気で呆れた風に莉紗子に再びこの言葉をおくつた。

「お兄ちゃん、そういえば莉紗子特製のとろろ汁飲みたくない？
ううん、ぜったい飲みたいでしょ？ うん飲みたいハズうー！ ル
ンルンルン」

ボクは一言も飲みたいとも飲みたくないとも言っていないのに、勝手に一人で乗り気になっている妹が席を立ち、洗い物をようやく再開したお母さんがいる台所へと歩いていった。というかボクの話ちゃんと聞いているのかな？ 昔からそうなんだよね、人の話半分のトコ。

- - - - -

朝食後ボクは自室にいた。莉紗子の作ったとろろ汁……飲まされたよ←←← しかも強制的に。ヒドイ仕打ちをされたのはこっちだよ。はい、自称莉紗子特製とろろ汁が作成者莉紗子さんの手で運ばれてきました。まず、ボクの目の前に出されてボクの第一声『これ……ドロロじゃん』 続けて二声目『……正直、飲まなくていい？』最後に第三声『……絶対身体によろしくない成分入ってるよ……』

お母さん、お父さんがいる前なのにそんなボクの本心を聞くなりいきなり何処からかナプキンを持ってきて椅子にボクを縛りつけ、『お兄ちゃんがそんなに喜んでもらえるとは思ってなかったよ、うん！それでこそ作り甲斐があったってもんだよ』心の底から……褒めてない。

そうニヤつきながらボクの口に無理やりその……ドロロ？（もうその名前でいいや）をかき込まされた。妹がいない今だからいえるけど『作り甲斐^{がい}』じゃなくて『作り害^{がい}』じゃないの。さつきからお腹痛いしさあ。やっぱりよろしくない成分入ってたよ。しかもそのシーンを見ていたお父さん、お母さんは止めるのかと思っただけで期待してたらお母さんは

「莉紗子が折角作ったんだし、お母さんはいいいけどお兄ちゃんなんだから飲み干さなきゃダメよ！」

「そうだぞ！父さんはいいいけど、ドロロ、いやとろろ汁を飲み干すんだ！」

さてこの二人の会話には2点ほどおかしい点があると考えられる。まず一点目、『父さん and お母さんはいいいけど』この最後の『はいいいけど』という部分に着目してみると、次のように解析することが出来ます。『お父さん、お母さんは飲まないけど、重ねて言うけど飲まないけども……』

いや、ボク一人にこんなことを押し付けるんですか？第一知ってるんです。ドロロ汁の誕生秘話。お母さんが口頭で（莉紗子はそれをメモる）レシピを間違えてできてしまったんですよ。たまたま風呂から上がったボクが牛乳を飲もうとリビングに入ってくる時に聞いたちゃったんですよ。ボクも前お母さんに教えてもらって覚え

てたし。

だからお母さんにも責任はあるわけです。責任逃れ……しないでください。お父さん……見捨てないで下さい。

二点目、『飲み干すんだ』の部分。一見普通の文章に見えます。ですがこれを解析すると、『ただ一口飲むだけではない。言葉の通り最後の一滴までその恐ろしい液体（通称：ドロロ）を胃の中におさめるんだ』。こういう意味があります。二回目だけど次こそはボクを助けて……。

その数時間後ボク達は荷物と共に詩条家に引っ越していった。さつき思ってたことは勘違いだったみたい。たまたまお父さんの会社の専務さんが家を探していてボク達の家を貸し渡す事になったんだって。モチロン、物品もね。ボクは詩条家に向かう車の中少し浮かばれた気持ちに浸っていた。

Prologue Fifth 〈Sister〉（後書き）

Prologue fifth を読んで戴き至極の至りです。

本当にありがとうございます。

毎日アクセス数を確認すると意外とユニーク数が多く、読者の方々一人一人に感謝しております。

読者の皆様にはこのストーリーにあまり過度な期待を寄せず気軽な気持ちでこれからも末永く（長編となると思うので）見ていただければ有難いです。

私と致しましては今後一人でも多くの読者の皆様に読んで戴き、興味・関心を持っていただける様、一生懸命に頑張って参りたいのでよろしく願います。

それでは次のストーリーを見ていただければ幸いです。

「昨日は残念でしたね」

「ええ、でもその後ボクの買い物につき合わせてしまつてごめんなさい」

その日はボクにとって奏心^{そうしん}学園初登校日だった。ボクと雪穂さんは運転手を平賀さんとする車の中そんな会話をしていた。昨日は本屋に行ったら休みで、結局ボクの学用品を買うのに雪穂さんにつき合わせてしまった。

「そんなことはありませんよ。自分の思ったとおりにはいかない事だつて沢山あつて人生でしょう。だから全然いいんです。何より昨日は楽しいモノを見せていただきましたし……」

「いついや、昨日は店員さん達が勝手に……」

「着せ替え人形みたいで面白かったです、フフ」

雪穂さん……ボクはモノじゃないです。ボク達は昨日制服を新調しにある制服店に行った。でもそこで対応した20代の女性店員さん達8人がくわせモノで、ボクが『かわいい』とかなんとか言つて、制服以外のメイド服？とかウエイトレス服とか婦人警官の服とか何処からか持つてきて、ボクに無理やり着せて写真を撮つたんだ。そんな写真どうしようつて言つたろう……。第一なんで制服店にそんな服が……。もしかして制服つて色々の制服をさしていたのかも。分からないけどボク達がいた一階には学校の制服や学用品しか置いてなかった。暗幕を張つていた2階への通用口を通ればも

しかしてボクが無理やり着せられた服があつたかもしれない。これはもちろん想像だけ……。全くボクには理解ができないよ。

「あゆむ様、昨日^{さくじつ}ご用意致しましたお部屋に不都合な点はございませんでしたか」

突如、バックミラー越しに運転をしていた平賀さんが話しかけてきた。

「……、特には……ないです」

「作用でございますか。御当主様から突然仰せつかりお嬢様の隣のプライオリテールームを改装し急ぎで用意したので、心配でしたが、それなら良かったです」

ボクはコメントしづらかった。何故ならボクの部屋は……。

「私のお部屋の隣じゃご不満ですよね……」

ボクの表情を見てなのかこう呟いて、雪穂さんは隣で落ち込み気味に俯く。そう、ボクの部屋は予想だにしていなかった雪穂さんの部屋の隣。

「い、いえ。そんなことないです」

ボクのこのコメントを聞くと雪穂さんは顔を上げて嬉しそうに

「良かったです。あゆむさんが隣のお部屋なのでいつでも本の批評ができるのでとても嬉しいです」

「そうですね、ボクも嬉しいです」

「クラスは何組になるんでしょうね。私、あゆむさんと一緒のクラスになれば嬉しいですよ」

恥ずかしげもなく直球と真ん中に心情を伝えてくる。少しボクは照れた。確かにボクも唯一学園で知り合いになるであろう雪穂さんと一緒のクラスになればうがどんなに助かるか……。でもこればかりはボクの思い通りにはいかないだろう。

「さあ、でもボクも雪穂さんと一緒のクラスになれば安心です」

「私、なれるようにお祈りしてますから」

そう雪穂さんは言って自分の通学バックの中からなにやら取り出した。よく見えない……。そして両手で握り締め本当にお祈りを始めてしまった。いや、本当にすることはないのでは？ バックミラー越しにふと平賀さんを見ている。見る限りこの光景を微笑ましく見ているようだ。視点を変えて、雪穂さんの手に握り締められたものをじっと見てみると、雪穂さんが気づいたのか聞いてきた。

「どうしたんですか」

いや、それボクのコメントでもあるんですけど。モチロン心の中の声は口には出さないように。

「いっいや、な、なにを握り締めているのかなって思ったんです」

「これですか、これはですね……」

お守りだった。でも何かが違う、何かが……

『あつ』

ボクと雪穂さんはお守りを見てビクリしてしまった。お守りは確かにお守りだけど、これは、

「あつ、あんざん？」

そう、それは安産のお守りだった。雪穂さんは瞬時にバックにそれを戻してボクの方から顔をそらした。聞きたいことは山ほどあった。でもここはあまり触れるのはやめておこう。きっと何かの手違い。そう心の中で解決する事にしよう。それ以降車の中で雪穂さんと話す事はないまま、学校の正門に車は到着したようだ。

「お二人とも、着きました」

そう平賀さんは言って運転席から外に出て後部座席のドアを開けに来た。雪穂さんが最初に出て、次にボクが。

「行つてらっしゃいませ。今日は15時36分49秒にお迎えにあげます」

なんか物凄く中途半端な時間だなあ。それに関して雪穂さんは頷くだけで一言も発しなかった。平賀さんがそれを見て頭を下げ、ボク達は昇降口に向かって歩き出す。数歩歩き出すといきなり雪穂さんが頭を下げ始めた。

「わ、わたし先に行きます！きよつ、今日は日直なので朝の先生との打ち合わせがあるんです。」

「ごめんなさい。じゃ、じゃあ、また……」

そう言つて、走つて行つてしまった。一人取り残されるボク。やっぱ恥ずかしいよね。周りには誰もいない。それもそう、実際の登校時間よりも2時間も早く来たのだから。こんな時間に来てる人なんかいないよ。そう、しかも部活の人だつてもう少し後にくるだろう。

辺りは閑散としてて、たまに風が吹いて周りの木々がそれに揺らされてカサカサつという音を立てるくらい。正面に見える校舎も大きい。一体何人の人が通つてるんだろう。そう思わせるほど大きかった。6階建て？！しかも建てられたばかりみたいに新築？加えて学校とは思えないほどのモダンな造り。前にも一回来たけど本当に学校なのかと疑いたくなるほどの校舎だった。とりあえずあとは隣になぜか国立競技場みたいなグラウンド。ここ、学校？編入届けを出してきたときに続けて2回目の疑問。雪穂さんは行っちゃったし時間もたつぷりあるし、ボクは少し周りを見て回ることにした。

まず驚いたのはこの学校の敷地面積。東京ドームいくつ分？分らないけど校舎も幾号館があつて、テニスコート、バスケットコート、サッカーコート、弓道場、室内プール。色々あつた。特に驚いたのは乗馬場があつて、馬小屋らしきものがあつたということ。この学校すごいお金持ちなんだなあ……。でも少し気になったことがあつた。それは剣道場が見当たらなかった。

何故剣道場が気になったかというところやっぱりボクのおじいちゃんが剣道をやってて毎日のようにしごかれたから、やっぱり少なからず思いいれがあったんだ。まあ、剣道部に入りたいわけじゃないけどね。

あれってもの凄く痛いから。面は金具のところに当ててくれればいいけど皆その奥の布地の所に打ち込んでくるし、籠手こてだってスナツプがきいた人がやるとめちゃうくちゃジンジンして痛いし、胴も外されたら最悪。一回だけ下の方の急所に当たったことがあって（わざとではなかったらしい）死にそうになったことがあったし（袴の下は何も穿はかないからなおさら）それ以来もう剣道はやらないって決めたんだ。モチロンおじいちゃんにその旨むねを伝えたら残念がってたけど……。

しばらく探しているとさっきの校舎の方面に向かって歩いている女の子が見えた。ちゃんと制服着てる（当たり前だけど）あの女の子に聞いてみよう。ボクは走って行ってやっこの思いで彼女の元にたどり着いた。

「あつ、あの」

「……なに？」

ボクを睨み付けるかのような目。

髪はロングで赤髪、顔はモデルのような顔立ち。

「て言うか、あんた誰ッ」

腰に手をやってそうボクに尋ねた。

「源 あゆむです。転校生で……ちょっとお聞きしたことが」

「転校生？　それで何、私これから行くところがあるの、手短かにしてくれる」

少し不機嫌な口調でそう言って、溜息をつき始めた。とにかく感じが悪かった。

「えっと、剣道場はどこかなって」

「剣道場!？」

彼女は驚いた面持ちでボクの方を見つめる。

「そんなものないわ」

「そうなんですか……」

「用はそれでおしまい？」

「ええ、まあ」

「じゃあ私は行くわ。さよなら」

そう言っただけで何処かに消えてしまった。剣道場がないことは少し残念だった。さてこれからどうしよう……。――

「あゆむ様」

背後から声が聞こえた。振り返ってみるとスーツ姿で耳にイヤホンをつけた若い男の人がいた。こんな人知らない、っていうか学校の関係者なのかな。直感からいって違うかも……。

「私は源家専属執事一尉水島と申します。あゆむ様とはお初にお目にかかります。こちらに来ていただけますか」

訳が分からないままその人についていった。さっきの校舎の中に入ってエレベータで6階に行つてその中の一室に入つていった。

「ここでお待ちください」

中は大会議室みたいに長机と椅子が置いてあつた。そしてその中の一番上手にあたる席に座らせられ

「あそこのモニターを御覧下さい。もうすぐご主人様と通信がつかるはずです」

お父さんど？！ 一体何の用だろう……。水島さんは一礼して部屋を出て行つた。机を触つてみる。白いホコリが手につく。よっぽど長い間使つていなかったんだなあ。

「あゆむ、ちゃんというな」

その時モニターにお父さんが写つた。

「お父さん、一体何用なの」

「何用つて、お前に第一の指令を言い渡すためじゃないか」

ああそうだった。すっかり忘れてた……。ボクは源家の家訓を果たすって約束してしまったんだ。

「ああ、ゴメン。忘れてた」

「じゃあ、申し渡す」

「うん」

「この学校で生徒会を立ち上げる。勿論あゆむには生徒会長をやってもらふ。まず人員を確保してそれから学校の皆にこの生徒会が認められれば任務完了だ。その時は部屋の外で待機しているだろう水島に言い渡してくれ。その時またココで次の指令を言い渡す」

ブチっという音と共にお父さんとの通信は途絶えてしまった。

やっと本章に入る事が出来ました。

まだ若干入ったくらいですけど・・・。

これから頑張っていくますのでよろしく願います。よろしければ評価のほうも徐々によろしく願います。

それでは次のストーリーを見ていただければ幸いです。

それからボクは外にいる水島さん呼び出し、その部屋の中で色々な事を話しあっていた。いままで住んでいた家ともう一つ家があったらしくその家で執事をしているらしい……。加えて他にも何人も召使さん^{めしつかい}がいるらしい。詳しくは時間がなくて聞く事が出来なかった。その後ボク^{のち}は教員室のドアの前に立っていた。少し緊張して開けるのに手間取ったがやっと決心がついてドアを開けようとしたとき内側から開いてしまった。

「あらっ」

中には女の人が立っていた。しかも露出度マックスな服装。胸元開けすぎじゃないかと思わせるほど開けてるし、下を見下ろすと赤いハイヒール履いてるし……。メガネは側面がつりあがったものをしてるし。ここはどこかのキャバレーですか。外見からして痛すぎるよ、この人。でも多分教員室から出てきたんだから先生だろう。早く担任の先生に挨拶しなきゃ。

「おっおはようございます。あの、ボク転校生で、登校日初日ここに来いって言われて来たんですけど」

「お名前教えてくれる」

「源あゆむです」

「あらっ、私のクラスの子だわ」

口元に手をやってそう喜び驚きする先生。先生はボクの頭を撫で

始めた。この人がボクの担任ですか……。第一印象から感じるに出来る限り関わりあいたくないんですけど。

「いつらしゃあい。私のクラスになるってことは私のどれえーになるのよおっ。あゆむちゃん、まず手始めにクラスに行く前にあゆむちゃんを食べちゃっていいかしら。私朝ごはん、まだなのおっ」

先生。ボク食用生物じゃありません。朝ごはんにしないでください。しかも雌じゃありませんし。

「柊先生。セクハラですよ」

先生の後ろから初老で白髪はくはつの男性の人がこう言った。

「きょうトウくには関係のない事ですわ。私は若いエッセンスを取り入れないと身体のピチピチさが保てないんです。ほら、この胸元の肌なんてもうツヤツヤで、やっぱりこれは生徒に愛撫あいぶしてもらってるせいかしら……」

自分の胸を持ち上げて谷間を見ていた。先生、愛撫という言葉を公の場で言ったら即刻、監獄へと誘いざなわれると思いますよ。おそらくですけど、ボクが相手だったら完璧にひきます。

「ピチピチどころか、もうビチビチでしょうよ。ご自分の実年齢じねんを弁わえた上で発言して欲しいものですな」

教頭先生は自分の眼鏡を少し掛けなおしながらそういった。

「いまカツチンきました！ きょうトウくもその白髪しろがの量を弁わえた上で発言なさったらどうかしら。河童になるのも時間の問題です

わ

「わっわたしの一番気にしている事を……」

「ほら撫で撫でて差し上げますわっ、ほらもうすでに薄いじゃありませんかあっ」

「ムツキーっ！ 柊先生には一週間の謹慎処分を言い渡しますっ！」

「そんなあ、冷たいじゃないのきょうトウちゃん。ほら髪が生えるように旋毛を三回押してあげるから。いち、にい、さん。ほらっ」

そういつて先生は恐れ多くも上司である教頭先生の頭の旋毛を親指で押した。

「……。柊先生……」

「何か？」

「それはより禿を促進させる行為です」

「ええ。だからなんですか」

元々知つてての実行犯ですか。

先生、教頭先生が可哀相です。先生だつて朝、育毛剤を頭に塗り手繰たぐつてるかもしれないのに……。少ない髪をどうこれから死ぬまでもたせるか、教頭先生だつて毎日寝る前に思案しあんしている筈です。教頭先生の事を考えてあげましようよ。そう心の中で思っていた。

「……。ええい、もう一言はありませんっ、自宅謹慎ですっ！」

「そ、そんなあ」

「きょうトウー、それだけは」

「撤回なしですからね。これ絶対です」

それから先生は教頭先生に許しを乞うためにあれこれして、結局今度植毛で有名なサロンに先生が連れてゆくということで決着したようだ。その一部始終を全て目の前でじっくり見せられたよ。おかげで1時間目HRなのに30分も遅刻してしまいましたよ。まあ先生も一緒だったけど。今ボクは先生と共に教室の扉の前に立っている。

「あなたのクラスはここよ、2年B組」

なんだろう……なんか緊張する。

自分の前の扉がやけに大きく思える。ボクは少し躊躇^{ためら}った。そんなボクを見かねてか後ろに立っていた先生がいきなりボクの前に出てきて扉を開けた。

「はあゝい、皆。今日も欲情^{じゅじやう}してるうゝ？」

ボクは堂々とそんな事を言いながらボクより先に教壇に歩き出し

ている先生をドア入り口付近から垣間見ていた。先生、さっきの教頭先生の訓示はしっかりと真摯に受け止めたほうがいいと思います……。教室の中は閑散としていた。やっぱり皆も痛いと思ってるのかな……。

「えーっ、私、ピッチー可奈子が転校生を紹介しちゃっつ、ほらっいらっしやあーい」

そういつてボクに向かって手を拱こまねいている。ピッチーってお笑い芸人みたいな名前やめたほうが……。しかも下の名前可奈子って言うんだ……。色々とツツコミどころ満載だったけどそこは置いておいてボクはゆつくりと先生の隣に歩き出す。教室の中の人間の視線が一点に集中する。その対象であるボクはここに入る前の緊張に加えて閑散とした空気がやけに緊張を高めた。

「今日からこの学校に転入してきました、源あゆむです。よろしく願います」

少しの間沈黙が続く……。

「キヤーっ、カワイイっ！」

「なんか母性本能をくすぐるわっ」

「触ってみたい……」

そんな言葉がいきなり飛び交い先ほどの閑散とした空気が嘘みたい、辺りは騒然そうぜんとしていた。

「源クンの席は窓際から2列目の後ろから3番目の空いてる席ねっ」

「はい」

そう言つてボクは自分の席へ歩き出す。まだ辺りの視線はボクに集中していた。席に着いたところで隣を向いてみるとそこには見た事がある顔があつた。赤髪……、さつき会つたあの子？　つまらなさそうな表情。頬杖をつきながら前を向いていた。

「あの……」

上体をおこしながらこちらをむいた。

「さ、さつき会いましたよね」

「話しかけないでくれる。今色々考え事してて邪魔されたくないの」

さつきと同じ、嫌な感じ。ものすごく話にくい。っと後ろで指で突付かれた。後ろを向くと頭がスポーツ狩りの男がいた。

「やめとけて。志倉はいつもそうなんだ」

「志倉さんって言うの？」

「志倉季節。成績優秀、容姿端麗だがコミュニケーション能力に欠ける。そこがいいという奴もいやという奴もいる。まあ俺としてはお勧めできないがな」

小声でそう言った。いつもこんなに冷たいの？

「俺は手塚^{てつかわたる}涉。よろしくな！」

「よ、よろしく」

この出会いでやっと初めての男友達ができた。ボクの心配は解消されつつあるの、かな……。

更新が遅れてホントごめんなさい。

いや、最近仕事に追われてて執筆活動が進まなくて。

ちよつとこの先も更新が多々遅れることがあるかもですがそのところは了承してもらいたいです。

あと、感想、評価等の方を送っていただければ励みになりますし、創作意欲も湧き出て執筆活動にも影響してくるかもなのでどうかよろしく願います。

それでは次のストーリーをまた見ていただければ幸いです。

Regular Chapter 3 ~ Uneasiness ~

手塚渉。17歳。高校2年生男子。パソコン部所属。性格……現時点ではよく分からない。でも話した感じではいい人っぽい。その人の好意で放課後に学校を案内してくれるっていうからそれに甘えて現在最初の目的地、理科室に案内してもらっている。

「手塚くん、ホントにありがとう」

「気にするな、それと『手塚くん』って呼び方やめてくれ。渉様と呼ばたまえ！」

「……あつ、渉様」

「じよつ、冗談だよ。普通の呼び方でいいから」

「うつうん。……でもまだ慣れないから時期が経ってから自然に変えていくね……」

「わかった。んでこれから行く理科室だけどホント注意しろよ、とだけ言っておく」

まあ確かに薬品とか人体模型とか試験管とか結構高価なものもあるだろうし何より危険だね。ちゃんと今から少し心を緊張させなきゃ。

「……うん、注意するよ」

「あの人がないことを願おう……」

手塚くんは不安な面持ちでそう呟いた。

「あの人？」

「いついや、会わなきゃいいんだ、会わなきゃ……」

さっきあった先生（痛すぎる担任）と同じ類たぐいなのかな？ だとしたら今のうちに精神力を高めておかなきゃいけないけど。

「それって女の先生？」

だとしたらもってきたビタミン剤を飲んでおかないと。ボクは自分の制服の懐ふところを見た。

今朝、莉紗子にもらった。第一なんで中学生の莉紗子がこんなもの持ってるんだか……。『お兄ちゃんっ、お父さんが持ってたビタミン剤あげるう。これ飲むと身体がピンピンになるんだってっ、疲れたときに使ってえ！！』蛇足たそくかもしれないけどお父さんの了解は得てないらしい。

「何言ってるんだ。男の先生に決まってるだろ」

「良かったあ」

女の先生じゃないんだ。さっきみたいの類じゃなくて良かったよ。

「何が良かっただ、全然良くない！ あんな危険な……」

手塚くんは言葉に詰まった。それ以上口に出せないのか良く今の

ところ分らない。

「危険?!」

「つまあ、行けば分かる」

なんか不安になってきたよ。さっきの痛すぎて触れる事が躊躇^{ためら}われる人を思い起こして心配してたけど、今は……。ボクと手塚くんは隣の建物と繋がっている3階の連絡通路に向かった。結構建物の中が広くて中々そこまで行くのに時間がかかったけどやっとここまでたどり着いた。

「結構この校舎広いだね……」

「まあ確かにな。俺も入学したばかりの時はチビリそうになった。」

まあこの学校はただの私立じゃないしな。どっかの御曹司^{おんぞうし}やら御令嬢^{ごれいじやう}やらの家の莫大な寄付金があるとかないとか、噂だけだな」

御令嬢^{ごれいじやう}って……一人心あたりがあるよ。

「ほら、噂をすればその一人と噂されるお方がやってくるぞ」

渉は前方を指差した。その先をよく見ると今から行こうとしてる隣の建物から雪穂さんが歩いてきてた。何か本や辞書を持っているようだ……。なにやら浮かない表情をしているようだ。朝のこと気にしてる……。訳ないよね? なんであんなの持ってたのかは分からないけどボクはもうそんなこと気にしてないし、明日になれば忘れる事だって可能です。雪穂さんのことを見ていたら雪穂さんはこちらに気づいたようだ。ボクは軽く一礼した。そうすると雪穂さんは

少し小走りでボクの方にやってきていきなり……

「ごめんなさいっ」

雪穂さんは口元に手をやりながらそういった。目線は横を向いていた、そうか……。いやっいきなり謝られても困りますっ。ボクは自分の手ワタワタさせながら

「謝る必要ないじゃないですか……悪い事したわけじゃないですし」

「でも、あんな間違い……」

確かになんであんなものを雪穂さんが持っているのか疑問に思っただけ、でも少なからずボクに迷惑を掛けたわけじゃないんだし

「と、とにかく早く忘れますから気にしないでください」

「……分かりました。あら？」

雪穂さんは渉へと視線を移した。

「お友達ですか？」

「ええ、今日知り合ったんです。えっと、手塚……」

そう言おうとした瞬間に思いがけにないことが目の前で起こっていた。少し隣で距離をとっていたはずの渉がいつのまにか雪穂さんの真ん前まで移動していた。手塚くんは片膝かたひざを立てて雪穂さんの右手をとって口づけをした。

「なっ何をつ」

ボクは思わず声を出してしまった。雪穂さんは顔を真っ赤にしていた。

「手塚渉17歳、高校2年、B組随一の男前と称される男です。お見知りおきを！ 安心してください、独身、一人身、加えて家のお風呂は広いです。一緒に日ごろの汗を洗い落としませんか？？ 私があなたの心まできれいさっぱり洗い流して差し上げます。ちなみに希望を言えば私の背中を流して欲しいんですけどね。まあそこはステップを踏んでからという事で。ああそうそう、賞味期限もまだ過ぎておりません。どこかでお会いしませんでした？ 初めてあった感じがしないですよ、これって運命って言うんじゃないですかね？！」

途中までは真実だと思うよ。でもさB組随一って言うのは……、なにより独身って当たり前だからね。賞味期限って何！？ よく分からない……。分かる人がいたら今ココに来て説明して欲しいよ。っていうか、いきなり口説くんですか？ しかもベタ過ぎない！？ 80年代の人が使ってたようなクサイ口説き文句。雪穂さんは少し対応に困ってるようだった。笑顔が微妙に引きつっている。

「えっ、あっあの……」

「手塚くん……やめなよ」

「あゆむ、人の恋路こいじを邪魔するのか？ 俺の今までのナンパ成功率を知ってての物言いか？ 49,1956パーセントだぞ」

大体二人に一人の確率ね。それに賭けてるんだ、この人は……。

でも雪穂さん、あきらかに困った顔してるし。

「理科室行くんでしょ？　だったら早く行こうよ、ホラっ！」

ボクは跪いている手塚くんを引つ張って隣の建物に向かった。

「ゆっ、雪穂さあ〜ん、次はあなたに会いに行きますからね〜っ！
」

渉は雪穂さんに向かってそう叫んだ。ボクはそんな最中手さなかを振った。雪穂さんはなにか言いたげだった。ボクは渉を早く雪穂さんから遠ざけるためにそれを吹っ切ることにした。隣の建物に入り、雪穂さんが見えなくなると渉は自ら立ち上がり溜息をついた。

「あゆむは雪穂さん知ってるのか？」

「うん、まあ……」

流石に雪穂さんの家に居候してるなんていえるはずないけど……。理由まで聞かれたらどうしよう。

「そうか……。詩条雪穂、超絶お嬢様、その可憐さかつ華麗さ・しとやかさには誰もが魅了されるといわれている。」

ちなみに俺の校内ランキングでもトップ5には入っている。

まあ一応ファンクラブ実務部長だしな……」

手塚くんは自信満々にそう言い放った。まあ確かに可憐・華麗・清楚だよ。分かるよ、雪穂さんの部屋の隣に自分の部屋が用意さ

れててきがきじゃないんだから。というかファンクラブ存在するんだ。まあでもなんかありそうだとは思ってたけど。よくパソコン部なのに両立できるよ。まあパソコン部だからこそ両立できるの間違いか……。

「それって、ちゃんと雪穂さんに許可取ってるの？」

取ってなかったらただのストーカー集団だからね。まあそこところはちゃんとモラルを弁^{わきま}えてるでしょう。渉^{わたる}はそんな人間じゃないと思う……。勿論コレは初対面の感情だけで思ってる事なんだけどね。

「モチロンっ！」

やっぱり。良かったあ。モラル、ちゃんと弁えてるんだね。

「非公認にきまつてるだろうー！」

そっちですか。ちゃんと許可ぐらい取ろうよ。でもそんな許可、雪穂さんが出すわけないか。だからこそ非公認なんだろうね。

「心配するな、俺は清纯派だ。純真・無垢が好きなんだ。あの清々しさ、うーん、あなたの氷をボクの心でメルトしてみせますよ」

そんな事一切聞いてない。一体何を言ってるんだろう……。第一ボクは渉の好みの内容なんてどうでもいいし。

「しかし困った事があってな……」

手塚くんは俯き加減にそう言った。困った事？ 一体なんだろう。

「それって」

「おっ、もう着いたか。ここが理科室だ。ちょっと待ってる」

気づくとそこはもう理科室の教室の真ん前だった。手塚くんは理科室の下窓をしゃがんで見ていた。

何してるんだろう……。

「いないみたいだな、今のうちに入るぞ」

渉は立ち上がってボクの先陣を切ってドアを開けた。中は薄暗い。どうやら暗幕あんまくがひかれてて外からの光が遮断しゃだんされているようだ。その場の雰囲気はやけに薄気味悪かった。

「でっ電気つけようよ」

ボクは真ん前にいる手塚くんにそう持ちかけた。

「あ、ああ」

手塚くんは電気のスイッチの場所まで行ってスイッチを押した。カチッという音と共に天井の蛍光灯が、

「つつ、つかない……」

手塚くんがそう驚いた口調でそう呟いた。理科室……なんか手に冷や汗かいてきた。色々友達とかから学校の七不思議ななふしぎだとか怪談話かいだんばなしとか聞いたことある。走る人体模型じんたいもけい、喋る骸骨がいこつ、妖しげな光を放つあや

自白剤じはくざいを飲ませようとする白衣を着た男の話、思い出しただけで身震いがする。有り得ない話だっていうのは分かってる、でも……。

「仕方ない、ココは詳しく詮索せんさくしない事にしよう、いいよな？」

それが上策じやうさくだと思う。やっぱり触らぬ神に祟たたりなしじゃないけど下手に案内してもらって変なもの見たくないし。

「う、うん」

「じゃあ次だ」

そう言っつて渉は入り口のほうに向かつていった。手塚くんが部屋を出ようとした時

「そこで何をしておる？」

うつ後ろから低い声が聞こえた。少し声が震えている。薄暗くてあまり顔は見えないが白衣姿の男……、はっ白衣を着た男！ まさかあの怪談話は本当マシ？ 渉はおどろおどろしていた。手塚くんは目を大きく見開きはその人物を見つめていた。入り口からの明るさ以外にこの部屋の中の光はない。気のせいかこの理科室内は少し冷気があるような気がした……。

薄手の白ワイシャツの袖から僅かにその空気が入ってきててなにか嫌な感じがした。

Regular Chapter 3 〽Uneasiness〽 (後書き)

読破お疲れ様です。

読んで戴けて非常に嬉しく思います。

やつと学校生活的な内容に踏み込め、登場キャラの性格、特徴など様々なモノを伝え始めたところです。

いやゝまだまだですけどね………。

これから応援よろしく願います。

指摘・感想等ありましたらご評価の方を通してコメントよろしくお願いたします。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

その人は徐々にボク達に近づいてきてその顔が明るみに出てきた。

「どつ、毒闇先生ッ！ いたんですか」

三角フラスコをもった初老で白髪 of 男の人だった。先生ってことはよかったあゝ、やっぱりあの怪談話は嘘だったって事だよね。でもなんか白衣とか少し焼けてて破れてる部分とかあるしなんか別の意味で怖い、かも。

「おっほいつ！ いちゃ悪いかね？ ここは私の教室、いるのは当然じゃろ」

その人の眼鏡の奥に隠された瞳にボクは違和感を感じた。

「ホントに先生なの？」

ボクは手塚くんの耳に囁きかけた。いつものもやっぱり先生にしては結構……。

「ああ、いないと思ったんだけどな」

手塚くんは囁き返した。

「何をボソボソ言っておる？」

『い、いえ、なんでもありません』

なんかとりあえずここから逃れて次の場所に行った方がいいと思うんだけどな。

「それより、ここにはやはり例のワシの申し出を受けるために来てくれたんじゃろ？」

例の申し出？　なんだろう、ボクには分からない。先生は徐々に渉に歩み寄ってきた。手塚くんは人差指で額ひたいをかいていた。少し沈黙が続き今度は先生はボクに顔を近づけてきた。眼鏡を少し唸うなって持ち上げながらボクの顔を見た。

「見ない顔じゃな？　おぬしは誰じゃ？　何故なにゆえここに来た？」

「えっと、今日転校してきた源　あゆむです。だから、その、案内してもらってたんです、手塚くんに」

今度は手塚くんに顔を移して

「真まことか」

「つま、真まことです」

「そうか、ワシについて来いっ！」

そういつて先生は暗闇の中に消えた。ボク達は遅れを取らないように着いて行った。先生は理科室の奥にある扉を開けて中に入っていた。暗いよ。やっと渉と先生の影が見えるくらい。よく先生は目的地の位置がこんな暗闇で分かるよ。さっきの入り口からの光が少しも入ってきてないし、やっぱりこの部屋も暗幕を引いてるし。

「手塚くん？」

「なんだ」

「なんでこの部屋暗幕張ってるの」

ボクは前方にいる先生に聞こえないように声を潜^{ひそ}めて涉に問いかけた。

「それに関しては様々な情報を得ているんだが残念ながらどれもが不確かだ。それ以前に確かめようとしてもしない。それにはやはり毒闇先生の噂が関係しているようだ。詳しくは今本人の前だから話せないがその噂のせいでこの理科室には誰も入れないようだ。加えて俺もその一人だしな。本当は今日は先生がいないと思ったからココに入ってきたというのに……」

噂ってまたよからぬ噂ですか？ 薄暗くてよくは先生の顔を見ることは出来なかったけど、なんかおぞましい雰囲気を感じられたんだよね。なんて、疑ってかかったちゃダメじゃないか。先生だって生徒の考え違いで噂が立っているわけで（まだ内容は知らないけど）実は心優しい人かもしれないじゃないか。信じてみてもいいかな……。

「止まるのじゃ」

先生の呼びかけにボク達は立ち止まる。辺りに何があるのか分からない。手塚くんも先生の指示に従ってボクの真ん前で静止した。先生はどこにいるのか分からない。

「ん？」

ボクは足でなにか踏んでいるような感触があつた。なんだろうと思ひその場でしゃがんで足元に手を伸ばしてみる。人差指と親指で擦つた感触からすると紙ペラみたいなもの。なんなのかは分からない。

「どうした？」

真ん前にいた手塚くんが小声でボクの方に振り返る。

「うん、なんか落ちてるみたいで、手で触つた限りでは紙みたいだと思ふんだけど、なんだろう」

「貸してみる」

そう言われて手塚くんの掌てのひらにその紙ペラを渡そうとした。だけど持ち上げてみると少し重い。コレは紙だけど……本だ。とりあえず手塚くんに手渡す。

「これは本だな。ちょっと待ってろ」

そう言つて手塚くんは急にモゾモゾしだす。何してるんだろう？

「あつた、あつた、ここあんまり見えないから携帯の光でもないと」

そう言つて手塚くんは携帯をスライドして待ち受け画面（角度的に見えない）と共に光がそのモノを照らす。と同時にボク達の近距離だけ辺りが照らされる。先生はいないようだ。辺りは机があつてその上に実験器具や薬品やら置いてあつて

「じつ、これは！」

ボクはなんだろうと思って渉の手元に視線を移す。

「あつ」

ソレを見てしまつてボクも思わず声をあげてしまった。なんでもんなものが理科室に！

『す、スクール水着の中身?!』

その本の表紙には高校生のような感じの世間ではロリ系と言われるのか分らないけどそんな感じの6人がスクール水着を着てプールサイド（室内）にあられない姿、ポーズで表紙を飾っていた

「ちょ、なんでそんなものがココにあるのっ！」

「ちょっと黙つてろ、俺はコレを捜し求めて1ヶ月と15日10時間54分22秒。誰がどうして持つてるかなんてどうでもいい。いか、これから俺はコレを見る。じっくり見る。なんせプレミアものだからな。だから話しかけるなよ！ いいな？」

「先生が来たらどうするのっ」

「愚問だ！ 隠すに決まっているだろう」

「先生の私物つてこともあるんじゃない」

「それは気にする必要ない。いいか？ この学校の規則として教師

とあれどもこんなモノを持ち込むのは厳禁なんだ。破ったら……」

「……破ったら？」

「予想できるだろう？ 取り上げられそうになっただらそれを逆手にとって脅せばいい、あっ、ヤベツ、光がつ」

手塚くんは携帯をスライド再びしなおす。根性ひん曲がつてるなあ。なんか手塚くんっていう人間が少し分かってきた気がするよ。ちよつとこの先、手塚くんの全てを知っていくのが……怖い、かも。

「もう分かったよ」

ボクの顔の温度が少し上がる。右手で頬を触ってみる。やっぱり熱^{ほて}ってる。ボクには刺激がちよつときついかな。なんせもう……平常心が。……ズボンのチャック部分に当たって。そうだ、こんな時に莉紗子にもらったビタミン剤を飲もう。ボクは懷から小瓶^{こびん}を取り出して薬を何粒か水なしで飲んだ。

「うわあ！」

ボクの反応に涉はこつちを向きもしない。気にもしないのか。なんで？ 下半身にやけに力が……漲^{みなぎ}る。お父さんが持ってたつて、コレは！？ 追い討ちかけないでよ、っああっ。莉紗子っ！ ボクはズボンのチャック部分に両手を当てて蹲^{うすくま}る。帰ったら抗議してやる、莉紗子。お父さんも同罪だよっ！

携帯の光が辺りを照らす薄暗闇の理科室（？）の中、先生が消えてしまった間ボク達はそれぞれの問題に対処していた。

読破戴きありがとうございます。

さて今回は量的に少ないですが少しでも楽しいと思っていただければ嬉しいです。

最近ユニーク数が初期段階に比べ飛躍的に伸びている事が確認でき至極の限りでした。

ですがこの状況に満足せず更に新規読者様を増やし、

現段階で読んで戴いている皆様に少しでも満足して戴ける精一杯頑張って参りたいと思っています。

質問・感想などありましたら評価の方をどうぞよろしくお願いいたします。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

暫く蹲つまたっていると隣で座り込んでボクの事なんて気にもしなかった手塚くんがさっきの如何いかわしい本を閉じた。やっと読み終えたのだろう。ボクは少し安堵した。やっとボクの心配をしてくれるのかな。

「っさ、持って帰ろう！」

えっ？ お持ち帰りですか？ ここに置いてあった、いや、落としてあったんだからここに戻したほうが……。可能性としては窃盗せつとうになりかねないよ。とはいえそんなこと注意できる状況じゃない。結構限界まできてる。

「待たせたの」

そう言って何処からか分からないけど先生の声が聞こえた。何処にいるの？ 携帯の明かりはもう手塚くんが如何わしい本を読み終わったことにより消えていて辺りは再び暗闇に誘いざなわれた。再び不安がやってくることもなく、別の意味の緊張がやってきた。隣の手塚くんは何もすることがなくなったからか先生を気にし始めた。

「先生えー？ どこにいらっしやるんですかー」

「ここじゃよ」

いきなりボクの耳元に先生の声が聞こえた。ボクはなんかものすごく気持ち悪い感じがした。耳元で微妙に震える先生の声。何度もボクは耳を擦こすった。そしてボクは振り返る。先生は小さい試験管を

持ちながらしゃがみこんでボクの方を見ていた。しかもその試験管の中にはさつきとは違う色、エメラルドグリーンのような色彩を放つ液体が入っていた。見るからに怪しい事は言うまでもない。一体なんだろう。ボクは先生の手元に持っている試験管をずっと見つめる。それを見てか先生は

「気にするな！　すぐに分かる」

「嫌な予感がするぞ」

隣で手塚くんが呟く。^{うつぶせ}ボクも同じ気持ちだよ。何をしようとしてるんだろ。すぐ分かるって……っあ！　先生はいきなりその液体を口に含み始めた。もしかして先生が飲んだ？　先生は瞬時にボクの頭の髪の毛を掴んで先生の顔に近づけ始めた。

「先生！　痛いですっ！　イタイッ」

痛がるボクを尻目に先生はいきなりボクの唇に先生の唇がピタリ、先生は吸い付いた。その光景を隣で見ていた渉はすぐさま後ずさりした。

「んっっっ！」

先生は拳句の果てにこんな声を上げるボクなんかお構いなしに口の中の液体をボクに流し始めた。

これは悪夢だろうか……。それなら早く覚めてくれ。ボクは先生の額を思いっきり突っ張って顔を引き離れた。その瞬間ボクは口の中のモノを思いっきり吐き出した。そのブハアと勢い良く吐き出したモノは運が良いのか悪いのか、先生の顔に思いっきり噴射でき

た。だが不運にも少しその液体を飲み込んでしまった。

「なっ、何するんですかッ！ そんな趣味ボクにはありませんよッ！！」

ボクはそういいながら腕で口を拭う。でも先生の唾液は拭いきれ
ても、唇の感触は拭うことが出来なかった。それでも何回も、何回
も拭う。そんなボクを見て先生は意外な言葉を残す。

「……ワシもそんな趣味ないもんッ」

なんですか？ その回答は。先生の目を睨む。ボクの初めて……
いや、これはカウントしないんだ。うん！ コレはノーカン。

「おぬしのためじゃよ」

先生は続けてこう言った。ボクの為？ 何故に。

「どういうことですか」

ボクは少し怒り気味に言った。先生の目を睨むのを少々弱める。

「おぬしの下半身……」

ボクの下半身そういえばもうキツくない。丁度いい感じになって
る。先生はボクの事を思っ……。

「ありがとうございます」

ボクはしゃがみながら頭だけペコリ礼をする。

「ありがとうございますとは？」

「っえ？」

「ボクを助けてくれたんじゃ……」

「おぬし、なんか力が抜けていく感じがしないか」

「しませんけど……」

「何？ ワシの特製PWQ183-LZ薬品が効かないだっ！
効かないはずはないっ」

人に勝手に薬を口移しして飲ませて効かない、効くの次元の話じゃないでしょ。やっぱりこの人信用できない。そんな事を思っていると辺りがいきなり明るくなった。上を見上げると蛍光灯がついたのだ。一体誰が？ 辺りを見回すとやっぱり机や実験器具ばかり。ボクたちの周りは机に囲まれていた。しかし前方だけは机がなく、あるのは扉だった。しばらく見ていると扉がガラガラっという音と共に開いた。そこから出てきたのは白衣のポケットに手をつ込んだ若い女の人だった。しかも美人。なんでこんな人がここに？

「おいハゲっ！ 老いぼれっ、ここで何をしてる」

っえ？ ボクは目を疑った。

こんなに美人な人なのに言葉遣い悪いの？

「ひいゝえっ！ 雪野先生っ！ 何故ここに、確か、出張のはずで

は……」

「静養の為に掛けるつもりでしたが、論文が仕上がっていないことに気がついて戻ってきました！」

一体何が起ってるの？

「戻ってきてみれば、どうせまた生徒に変な薬飲ませたんでしょう！いつもいつもバカの一つ覚えみたいに……。ほんと、さすがハゲですね」

「こめんなさいですじゃ。もうすぐ教頭と柊先生と植毛サロンに行ってくるから許していただきたい……」

「おい、ハゲっ」

そう言っつてその女の人は毒闇先生の胸倉むなぐらを掴んで顔を近づけた。

「ひい〜」

先生は悲鳴をあげる。ボクと渉は別空間にいた。先生が少し可哀相でもあったが、さっきのお返しというかなんというか、助けてあげる気持ちはあまりなかった。というか、皆無かいむに等しい。

「そんな事を聞いてんじゃねエ。生徒さん方に迷惑かけたんだろおっ？ それもこれもテメエの日頃の素行そこうが悪いからだだろうが。毎日毎日飽きずにエロ本ばっか見やがって。しかもこの前私に隠れて表紙がスク水着てたロリ女が出てた本買ってたよな。あの誓約書書いた翌日に！ 黙認してやった恩も忘れやがって。おどれは物覚え悪いサルか？ 少しは学習能力を身につけろっつーんだ！ いいか。

今すぐ迷惑をかけた生徒さんに土下座して謝れっ！……いいですね？」

その女の人は引きつった笑顔で毒闇先生を見る。先生の頬に汗が流れるのを確認できた。多分冷や汗だろう。先生は怯えた声で

「はい」

「ごめんですじゃ」

ボクの方に向き直って正座をして頭を下げた。この先生よりこの女の人って力関係的に上なんだなあ。完全に尻に敷かれてるよ。

「もうしないで下さいね」

ボクは弱い口調でそう言った。そう、もう二度と男の人と口付けなんて交わしたくない。気持ち悪くて逆に鳥肌が立つよ。

「ごめんなさいね。この通りよ」

その女の人は頭を下げた。

「いや、もういいんですよ」

「私はこの先生の助手をしてる者で、雪野雫よ。この人の無礼は許してあげてね。多分好奇心からだと思うの。」

彼女とのその後の会話はそれから続いた。

読破お疲れ様です、と共にありがとうございます。

まず最初にラブコメとお知らせしておりますが未だラブの部分を出せずにいる自分に少々もどかしさを感じております。それにつきましては謝罪申し上げます。

段々とヒロインやその他の女の子を出しつつ自分なりの本来のラブコメに近づけて参りたいと思っている所存ですのでどうか気を長くして待っていただければ嬉しい限りです。

質問・感想等ありましたら是非、評価の方を宜しくお願い致します。それではまた次のストーリーを見ていただければ幸いです。

「さっきはビックリしたぜ」

ボク達は先生から説明と弁解を受け終わった帰りに廊下を歩いていた。どうやら先ほどの事件は毒閻先生がボクの気力を失くさせてボクを自分専属のパシリにさせたかったという自己中心的且つ意味不明な理由が故の行動だったらしい。この学校にはこんな先生ばかりが大半のウウエイトをしめてるのかって思っていた。まったく困ったものだよ。担任といい、理科教諭といい教頭といい……。しかもボクを見捨てなくなつて……。まあしかしながら何でボクをパシリにさせようとしたかという理由を聞いてみたら、「使えそうだから」いういかにも簡潔それ故に腹立たしい回答が返ってきた。ボクの何処に使えそうな要素を感じることができようか。

担任に加え理科教諭に対しても別の意味での不信感が僅か今日1日で得られましたよ。それに比例して渉の拒絶の仕方は比例してたけど。

「ぼつ、ボクはそんな気持ちは一切なかったんだからね。誤解してもらつたら困る」

言いふらされても困るけど、流石に渉はそこまでしないかな。そこは信じてみても良いかも。

「まあそういうことにしといてやろう」

行く先も分からぬまま、またまた長い長い廊下を歩いている。左方から木漏れ日が差し込んできてその光が廊下中に充満し、ほんわ

かした雰囲気は漂う中何処まであるのか疑問に思ってしまう廊下を
渉と一緒に歩いていったのだ。

「そういうことにしといてやろうじゃなくてそうだって！」

信じてよ！ まあそれは置いて置いて、今何処に向かつてるの」

「あの光景を見て信じろというほうがおかしいと思うが、まああの
後毒闇先生の弁解を受けたし信じてやるよ。ああ、今向かっている
のは……」

『パソコン部、パソコン部、会議をやるさかい、至急パソコン
室に来なはれ』

急にそんなドスの利いたアナウンスが手塚くんの言葉を遮る。

「っあ！ しまった。俺とした事がッ！ ワリイ、俺これから打ち
合わせだからまた今度学校案内するよ。勘弁な！」

そう言って駆け出してどこかへ消えてしまった。詳しくは今度聞
いてみることにしよう。さて、これからどうしよう。ボクはその場
に佇んだ。ボクの横を通り過ぎていく人々はボク事をチラチラ見て
いく。何もすることないし帰ろうかなあ。ボクは腕時計を見た。平
賀さんが来るまでは……、えっと、2時間近くあるな。どうしよ
う……。帰ろう、そう思って後方を見た。

どうしたのかなと思いい後ろを振り返ってみると向こうからこちら
に向かって山積みみのノートが歩いてきた。って足があるからそれは
ないか。時たま千鳥足でこちらにくるので歩いている人はそれを避
けて歩いていった。山積み過ぎて顔が見えない。一体誰が……？

第一これを見て誰も何も思わないのだろうか。これは一人じゃ無理じゃないかな。ボクでも少しキビシイ部分があるよ。ってボクなんかと比べちゃダメか。

「あの〜」

ボクはそのノート越しに声を掛けた。

「はい」

透き通るような声。女の子じゃないか。なんでこんなものを女の子一人に運ばせてるんだろう。あまりにも可哀相だよ。

「お手伝いします」

せめてボクがこの力不足に感じられるであろうボクが力になってあげられれば、そんな気持ちから出た言葉だった。

「えっ、あつ、おつお願いできますか……。さっきは学級委員の子と一緒に運んでたんですけどパソコン部の子で会議とかでそっちに行っちゃって」

その子はノートを地面に置いた。ボクと少し境遇が似ていた。

「ふう〜」

そう言っおそてその子は面を上げて額の汗をポケットから取り出したピンクのハンカチで拭う。なんとも言えないほどかわいかった。雪穂さんとはまた違う部類だ。黒のロングショートの髪型で目がクリクリ大きくしてどことなく輝きを放っていた。耳には少し控えめな

赤く小さいイヤリングをしていた。雑誌とかに出ててもおかしくないレベルだ。

「あたしは2年F組の白木爾菜しらぎにいな、よろしくね！」

白木さんは手を伸ばしてきた。夏服だから半袖である。腕から手にかけて真っ白でもの凄く目を惹かれた。

「ボクは2年B組の源あゆむ。こちらこそよろしく」

ボクはいきなりで戸惑ったがしっかり手を取って握手した。

「同じ学年なんだね」

「うん」

ノートを床に置いたまま立ち話をしていた。

「なんか凄い偶然」

彼女はニツコリ笑ってた。こんな笑顔見せられたら、男子は皆落ちるだろうな……。そんな事を思っていた。

「じゃあ、半々でもっていきつか！」

彼女の提案を受けて視線を下に落とす。半々というのは平等ではないと思う。男子と女子だし、ここは男子であるボクが大半を持つて行った方がいいよね。そう思って徐おもむろに山積みになったノートの8割がたを手にとった。

「わるいよお、そんなに持ってもらっちゃ。私がこんなに少ないのはおかしいし……」

「いいんだよ。ボクは一応男の子だからこれぐらい持たないとダメなんだよ、というか持たせてよ！」

これは勝手な自分の中の常識を言ったただけだけど。でも普通はコレが妥当^{だとう}なんだと思う。

「えっ、じゃあ、お願いしようかな……」

白木さんは床に置いてある残りのノートを持ち上げる。さっきの表情より大分楽になったような少しほころんだ顔をしていた。ボクのこのボランティア的な活動は一応役に立ってるのかなあ。少しでも楽になってくればそれで。白木さんは持ち上げた後^{のち}

「じゃあ、行こー！」

そういつて前に歩き出す。ボクの方の歩幅がその場の感情で若干白木さんより遅くなっていた。それに気づくと修正しようと歩調をあわせる。

「白木さん……」

「はい？」

「何処にコレを持っていくの」

「教員室よ」

なんか嫌な感じがした。あまり会いたくない人物が一人二人三人いたような……。まあ即効で置いて帰ってくればいいかな。話が途切れてしまった。なんとかこの場をつながなければ。

「白木さんってなんか部活動入ってるの」

「ううん、入ってないの。入ろうと思ったんだけどやってみたい部活がなくて」

「みなもと君は？」

「ボク今日転校してきたばかりだから入ってないんだ」

「ホントにッ？ 転校生なんだ、どうりで知らない顔だと思った」

白木さんは^{つぶや}呟く様に言った。

「でも一応入るトコは決まってるんだ」

そう一応お父さんの指令だから果たさなければならぬ。

「ドコに入るの？ っあ、待って！ あたしが当てるッ。……吹奏楽部？」

「いや」

「それじゃあ、マンドリン部とか？」

「いや」

「そしたら、コンダクター部とか？」

「いや」

全部音楽関係なんだね。

「ダメ、もう降参。一体何なの？」

「……生徒会だよ！」

「生徒会……」

白木さんはその場で立ち止まった。そして浮かない表情で再び歩き出した。その後階段を下った。それまで終止無言。白木さんの顔を見てみるとなんだか考え事をしているみたいだった。一体何を……。途中彼女の足が止まった。それに合わせてボクも止めた。少し白木さんに見入っていると、白木さんが目を合わせて口を開いた。

その時ボクにはそれらが何を意味しているか知る由もなかった……。

R e g u r a r C h a p t e r 6 ｝ N e w F a c e ｝ (後書き)

読破ありがとうございます。

9月からの更新ですが日曜日(不定期)に行おうと思います。

ですがあくまで出来ればなのでどうぞ参考になさってください。

加えて評価・感想等をよろしくお願いいたします。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

口を開くなり言葉を発するかと思えば一瞬躊躇した。不思議な事に周りには誰もいなかった。

「どうしたの」

ボクは思わず問いかけてしまった。

「あのね、生徒会ってホントに立ち上げるの？ 知っての通りこの学校には生徒会ってないの、って正確にはあっただけど……」

『あつた』とは……？ 普通そのまま存続しているハズなのにね。大体生徒会なんて普通名前が違えどどの学校にもありそうなのにこの学校にはない。それはかねてから疑問に思っていた。まあ異質なものはあれどもね……。

「立ち上げるつもりだよ。どうして」

「この学校で生徒会を立ち上げるんだったら気をつけて。数年前に生徒会の役員8名全員が突然辞任を表明したの。なんでかは分からないけど一説では誰かによってやめさせられたらしいわ。それで降も生徒会に入った人々は全員不思議にも辞任を表明したの。だから本当に気をつけて、何かあってからだ大変だから……」

この話を話そうか話すまいかさつき思案していたのかな。でも結局話してくれた。少しボクに話してもいいと思った部分があるのかな。誰がどんな手を使って辞めさせたんだろう。しかもその動機は一体……。

「それでもボクは立ち上げるよ。ボクはやらなくちゃいけないんだって言ってもメンバー集めなくちゃいけないけど……。ありがとう、教えてくれて」

「えっと、全然、あたし何にもしてないし……」

彼女は遠慮目に手を前で振った。

「じゃあ、行こうか、教員室だよな」

「うん」

ボク達は再び歩き出した。階段を下りたらもうすぐそこに目的地があった。結構さっきの所から近いもんだなあ。ってさっきボクはあの先生に会いに行つて経験があるんだけど。教員室の扉の前に立つなり彼女はノートを床に置いた後扉をノックした。そしてノートを持ち上げ扉を開け中に入つていった。ボクもそれについていく。

中へ入るとやはりさっきの予想通り、ボクの担任がたまたまボクの目の前にいた。ボクはマズいと思つて目をそらす。しかし、時既に遅し。気づかれてしまった。担任の口元が緩んでいた。ボクは顔を背けながら前にいる白木さんについてゆく。そして誰かの先生（不在）の机の上に置いてボク達は立ち去ろうとした。勿論白木さんはボクと先生の間のことは何も知らない。故に置き終わったところで仕事が終わした白木さんはさっさと教員室の扉に手をかけた。その時ボクは更に別の意味での『仕事』が増えたかと思つたけどココまで来ればもう何もないなと油断していた。

だけど人生そんな甘くない。初対面だったけど大体担任の性格はつ

かめていた。というのも分かりやすいほど安易な頭の持ち主だったからだ。それは教頭とのやり取りで大体分かった。そんな人がこの部屋を出ようというボク達に声を掛けたのである。なんと無常な事か。

「待ちなさ〜い！」

ボクはギクつとなった。背筋に微妙に衝撃が走ったというかそんな感覚に瞬間陥った。やけに甲高い声もその理由に加味されている。声が大いのではないのだ。白木さんは何かとクルつと声の主の方へと向き直る。ボクはゆっくりと振り向く。先ほどの表情に更に拍車をかけたように今度は頬もつり上がっていた。

ボクは恐る恐る返答する。

「……………なんですか」

ボクの声を受けるなり、先生はボク達の目と鼻の先まで歩み寄ってきた。そしてボクの方に顔を向けた。

「源君つたら転校初日なのに手が早いのねえ〜！」

やつぱり誤解している。ボクは何故か冷や汗が額から流れ落ちる。それと共に吐き出される溜息。白木さんは少しビクリしていたようだ。何に対してなのかは検討もつかない、思い当たる点がいくつもあった。このまま無視をして退室してしまうのも上策であろう。しかしながら今日知り合ったばかりの人にそんな事するのは殺生かもしれない。やはり最初のうちは触れてあげよう。

「先生ッ、違いますよ。誤解をしないで下さい」

ちゃんとここで弁解をはか図っておかないと白木さんにそんな魂胆だったのかとこれまた本当の誤解をされてしまう。それは流石にまずい。本当でもないことがもし流れてボクが生徒会を立ち上げられない事になったら……。

加えてそんな思ってもいないことを白木さんに誤解されたくない。そんな気持ちからの便宜へんぎであつた。

「別のクラスの子といちゃいちゃ二人でここまでノート運びしてたんでしょ」

やっぱり人の話を聞かない。それに『いちゃいちゃ』ってここまでの経緯を見たうえでいつてないでしょ。それなのにそんないかにも体たらくでふしだらな事しませんよ。

「違います」

「ん!？」

先生は白木さんの方を見て首をかしげた。

「もしかして、白木爾菜さん」

「はい」

「あゝっ、やっぱりいゝ!」

白木さんに加えてボクも首をかしげた。

「この学校にいたなんて驚きだわあ。あなた今人気急上昇中の演技派アイドルの白木爾菜さんでしょ」

アイドル！？ 白木さんが……。ボクは目を疑った。さすがにそれはないなと思つて捨てた選択肢が急に浮上しそれが確定事項となつてしまったのだから。

「白木さんがっ！？」

ボクは白木さんに面と向かつてそう言った。

「まあ、人気急上昇とか演技派っていうのはわからないけど一応アイドルです……」

ん？ 待てよ、なんでアイドルの子が学校にいるのに先生はその事を知らなかったんだ？ いくら別のクラスとはいえ、そのことは校内や勿論教員室でも話題になることうけあいだ。

「先生はなんでこの学校に白木さんがいるって知らなかったんですか」

ボクはふとそんな事を聞いてみた。でも返ってきたのはは予想範囲内、ど真ん中直球の返答だった。

「先生は先月までお暇もらつてたから」

隠したいわけね。自発的ではなく、用は先生、停職処分くらつてたんでしょ？ また今度は校長か理事長あたりに失礼な事をしたんでしょ。

「それより、あの有名な一流名門プロダクション、Minamoto
の芸能プロダクションに入ったって世間では実しやかに囁かれて
るんだけど本当なの」

「ええ、何とか厳しい審査を潜り（くぐ）抜けてたまたま入れまし
た」

「たまたまって、あそこに入ったアイドルは誰もが売れっ子になっ
て成功を収めていると言われてるのよ。つまあ、審査員によるん
だけど……、先生が応募した時はあまりの先生の美貌と艶あでやかなオ
ーラ、セクシーさを出しすぎて審査員が先生を第一次審査でボツに
したの。まったく、罪なプロダクションよね、アッハーン、でも
先生攻められるって好きなのお、この間もねホストクラブにいつて、
……」

それ以降も先生のプライベート話は続いた。ボクは白木さんに色々
聞いてみたかったけれども担任のマシングントークに耳を傾けたく
なくても耳を傾けるフリをしなければならなかったので話が終盤を
迎えるまでそれは叶わなかった。

実際のところ、先生のプライベートな話なんて聞きたくないです……。

お疲れ様でした。

今回のストーリーはいかがでしたでしょうか。

感想・評価・要望等は随時承っておりますのでよろしく願います。

また質問等も受け付けておりますので何かご不明な点などありましたらご評価お願い致します。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

厄介に感じた担任の話はおよそ1時間決着を見ることはなかった。それまでじつとボクと白木さんは聞いていたのだ。少しぐらひは話される側の視点に立ってみて欲しいよ……。白木さんが途中痺れを切らす光景も常々見受けられた。笑顔をいくら表面上では絶やしていてもやはり他人のそんなプライベートな話をされても対応に困るというのが本心なのだろう。なんてこんな卑屈になっているのはあまり思わしくない。

担任の話が終わりを迎えた後教員室から急いで廊下に出た。ボクの後に白木さんが扉を閉めた瞬間に白木さんから溜息が漏れた。それはそうだと内心思っていた。先ほど予想したとおりだ。若干間を入れて白木さんの一言。

「ちょっとキビしかったかな」

白木さんの顔は明らかに疲れを見せていた。

「なんか、ごめんね。あの人ボクの担任の先生なんだ」

「あ、謝らないで、みなもと君はなにもしてないし……」

ボクはさっき先生の口から口走られた言葉に少し疑問を抱いていたので聞くことにした。

「聞いてもいいかな？」

「うん」

白木さんは快く承諾しボクに笑顔を向ける。

「アイドルって本当なの？」

「やってるよぉー！」

「ボク全然知らなかったよ」

「ヒドいなあ。結構テレビとかにも出てるのに」

テレビなんか最近全然見てないなんて言えない。

「ゴメン」

「今度あたしが出る番組が近くなったら言っね！」

「うん、その時は欠かさず見ることにするよ」

「あら、爾菜じゃない」

背後から声が聞こえる。どこかで聞いたことのある声だった。誰だっけ。頭の中の引き出しを開けてゆく。後ろを振り返る。

「えっ……」

驚きだった。そこには志倉さんがいた。今帰るのだろうか鞆を持って立っていた。ボクは最初に受けた印象から誰も友達がいらないものと思っていたからだ。そんな志倉さんが最も逆サイドに位置するであろう白木さんに声を掛けているのだ。二人は友達なのだろうか。

「志倉さん……」

「……」

志倉さんは白木さんに向けていた視線をボクの方に移す。目が数秒間合わさる。しかし志倉さんは何も反応を見せなかったかのように白木さんに歩み寄る。

「爾菜はなんでコイツといるの」

志倉さんは多少小声で言ったようだがまる聞こえだ。その場に居辛かったのは言うまでもないだろう……。

「みなもと君はね、あたしがノート運ぶの手伝ってくれたの」

白木さんはそう志倉さんに弁解する。弁解というか真実を言ってくれた。

「ふーん……」

志倉さんはそう言ってボクに向き直って近づいてきた。若干沈黙が続く、志倉さんと暫くの間目を合わせていた。

「どういっつもり」

「どっいっつもりって」

「転校初日からアイドルに媚売こひつとこうなんてどんな神経してるの。男は皆最低ッ！ おべっかばかり使って人格形成良さそうに見せ

て置いて結局は上辺だけ。アンタもそんな中の一人なんですよ！
爾菜になんかしたら私、許さないから」

「あのね、季節」

白木さんは話そうとしたが聞き入れることなく白木さんの方に歩いていった。

「行くわよ」

そう言っただけで白木さんに声をかける。白木さんはボクに手を合わせて急いで志倉さんを追いかけていった。

ボクは複雑な心境だった。そんな気持ちで白木さんを手助けしたつもりなんてこれっぽっちもないのに……。

お読み戴きありがとうございました。

若干ストーリーの流れがゆっくりかと思いますがそこところはど
うぞご理解いただきたいと思います。

尚、質問・感想・評価等、ドシドシ頂けると執筆活動に創作意欲が
湧いて参り、作業にハリが出てくるのでよろしくお願い致します。
それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

ボクは階下へ降りて行き、昇降口から靴を履き替えて外に出た。足取りが少し重い。やはりさっきの事がどこか心の片隅でこびり付いているからだろうか……。自分でも分らない、しかし……。

昇降口の外から校門に向かう途中には結構長い一本道がある。幅も狭くはない。地面には敷き詰められたレンガ。そのレンガの色は不規則に模様していた。それとは対照的にその一本道に沿うように規則的に生い茂っている植物。しかしながらその中でも一際目立つのは両端に伸びている木々だ。右方に目を向ける、桜の木だ。緑の葉を細い枝から出だしている。春までの準備期間中はこの様に緑々しいのだろう。

冬になれば緑の生命は地面に落ち、その葉にバクテリアがつきそれが土の栄養分となって桜は最盛期ともいえる春を迎える。左方を見やると銀杏いちょうの木。この木々もまた緑の葉を出だしている。秋になれば扇形の葉をヒラヒラ舞散らせ、それがまるで金色こんじきの舞を見ているかのような感覚にさせられる。例えばまた冬を向かえその細い枝から葉や花びらがなくなり丸裸になったとしてもまた巡りくる季節、春や秋がやってくる。

自分が主役の時を迎える事ができる。ということは今の期間は銀杏にとっても準備期間。ボクはどうなんだろう……。学校生活に慣れ、友達ができるまでの間のこの時期はこの桜の木や銀杏の木と同じように準備期間なのだろうか？ いつかは最盛期を迎えることができるのだろうか。

主役になんて望んではない。ただこの学校にいち早くなれて友

達を沢山作って腰を落ち着かせただけ。色々な事を思案していると校門に着いてしまった。校門から外に出ると学校を取り巻く塀の前に雪穂さんが鞆を持って待っていた。もしかして結構待ってたかな。ボクは雪穂さんの方に近づいていった。

「す、すみません。物凄くお待たせしました」

「大丈夫ですよ。私も先程来たばかりですから全然待つてはいませんよ」

雪穂さんはボクに向かってニツコリ微笑んだ。ホントこの人は気を使ってくれる。

「それでは行きましょうか」

「はい」

学校の塀に沿って歩いていった。行き着いた先はタクシープールのような車が屯^{たむろ}っている場所。ただタクシープールと違うのは黒塗りの車がズラリと並んでいる事。その中の一台の車の中から平賀さんが出てきた。そして一礼した。雪穂さんが先陣を切って平賀さんの待つ車の方へ歩きだし、ボクもそれについて行く。平賀さんが後部座席のドアを開け雪穂さんがアツプボンネットの淵に頭をぶつけない様に配慮してか手をその部分に添えていた。

「っさ、あゆむ様もお乗りください」

雪穂さんが乗り込んだのを確認した後今度はボクに投げかけた。ボクは頷いて車に乗り込んだ。やがて平賀さんも運転席に乗り込みエンジン音とともに車は発進した。

「学校はどうでしたか」

「ええ、意外と知り合いができました」

「あの今日お会いした男性の方とかですか」

「はい。まだ本質などは分かりませんが、たぶんいいヤツだと思います」

「ええ、私もそう思いました。いきなり手にキスされた時は少々驚きましたが、面白い方だと理解しました」

「ボクもまだアイツと会ったばかりでそこまでするとは想定外の出来事でなんかごめんなさい」

「あゆむさんは何も悪い事はしていないじゃないですか。謝る必要、ないですよ！」

「今日はなにかあったんですか」

雪穂さんは続けてボクに問いかけた。やっぱり雪穂さんにはお見通しなのかな……。

「そんなことがあったんですか……」

「ボク自身は厚意でやった事が実は相手にとっては無礼講だったな

んてこともあるんじゃないかなって思ってた……」

「あゆむさん？」

「はい」

「あゆむさんが厚意を持って手伝って差し上げたのならそれが誰であれ嬉しいと思いますよ。もし私がそんな重いものを持っていたら手伝って欲しいと思いますもの。ですけども下心があつてした事なら志倉さんにそんな事を言われても仕方ないかもしれません。しかしながらあゆむさんはそんな気持ちは一切なかったのでしょうか？でしたら気にする必要はありません」

なんだろう。雪穂さんに言ってもらうとなんか心強い感じがする。

やっぱり雪穂さんって凄いや。

読破お疲れ様でした。

同時にお詫び申し上げます。

実は今回のストーリーは原本の4分の一なのです。

ではなぜその原本をそのまま出さなかったかといいますと大変告白しにくいことなのですが下書き部分の文章を4度も消去してしまっただからです。

故に今回のストーリーは要点部分だけを掲載しお笑いのエッセンスなしでの文書となりました。

大変皆様にはお待たせしてしまい且つストーリーの文書が短かった事、それらに関しましてもお詫び申し上げます、すみませんでした。

尚、10月からの更新日程ですがおそらく不定期となります。ご了承下さい。

最後になりましたがこの作品に対してのご意見・ご要望・ご感想等・疑問点等を評価と一緒に送って戴けると喜ばしい限りです。それでは次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

その日はやはり雪穂さんと同じ車で通学をしていた。ところでこの日本国での象徴とされる天皇陛下のお乗りになれる御領車について話しておくことから始めようか。

おそらく日本国民の大部分がご周知の事かもしれないが、天皇両陛下のお乗りになれる御領車の運転手というのはただ運転が上手ければいいのではない。運転席以外のシートに蠟燭等そつそくを立てて運転し、その蠟燭が倒れないような運転をして始めて天皇両陛下のお乗りになれる御領車を運転することができるのだ。

さてこの前置きを踏まえたうえで言おう。平賀さんはどうやらその運転ができるらしい。そのためスピードの上下変化問はず常に安定した走行が可能だ。故にボク達の乗るこの車は不安定になる事などはいままにでなかった。しかし今日はそれが突如起きた。

車にぶつかつたようだ。幸いなことに若干コツンと前方の車両に当たつたらしい。

「うっ」

平賀さんは少し前につんのめつた。雪穂さんとボクも含めて何が起こったのかと目を大きくしながら前方を見ていた。

「どつしたんですか」

ボクは平賀さんにそう尋ねる。

「車にぶつかってしまったようです……、お怪我はございませんか」
まあさっきの衝撃からそれは分かったけど。

「ええ、大丈夫です」

「ボクも平気です」

平賀さんが一呼吸おいてから応答した。

「前方の車が信号が黄色になってギリギリで進み通すかと読んでいたのですが、急ブレーキをして停まりました。申し訳ございません、お嬢様、あゆむ様」

平賀さんが前方から後方に視線を移して頭を下げた。すると運転席側の窓からコンコンという音が聞こえた。一同はその音のほうに目をやった。するといかつい顔をして白のタキシードを着た男が立っていた。平賀さんは窓のオープンスイッチを押した。

「どこを見ておられるのですか？ お陰で御車のバックバンパー付近にキズがついてしまったではないですか。これではお坊ちゃんに示しがつきません」

雪穂さんは不安げな面持ちで二人を見つめる。平賀さんは何も言わない。どうしたのだろう……。

「大体、この御車が何方たがひご所有の物か分かったの狼藉ろうじきですか」

平賀さんは俯いた。ボクの想像してた平賀さんの人格っていうのはこういうことには誰に対しても強気だと思ったんだよね。それど

ころか今回は平賀さんから聞いた話からすれば相手に過失があるんだから黙ってないで言い返せばいいのに。何故黙ってるんだろ…。

信号機は赤から淡い青色に変わり右左方の車線から車が前へと流れ出す。後方を振り返る。ボク達の騒動により後ろの車たちはクラクション鳴らしまくり。後ろの運転手の人が顔を顰^{しか}めている。眉間にも皺^{しわ}が寄っているような気がする。

クラクションのピッピーという頭に残りそうな音が前頭葉に響き渡る。雪穂さんは黙って二人を見つめていた。

「木野城家と言えば知らないはずはないでしょう」

その白いタキシード姿の男の人がその名前に自信を持っているかのように誇張気味に言った。しかし木野城家なんて聞いた事がない。

「雪穂さん」

ボクは黙って二人を見つめている雪穂さんに向かって声を小さくして呼んだ。雪穂さんはゆっくりとボクの方に顔を向ける。やはり心配なのだろうか、かすかに唇が震えているのが見て取れた。

「なんでしょう」

「木野城家って聞いた事ありますか」

「ええ、私達と業界は違えどPC業界としては最大手の会社の社長の姓です。私も何度かパーティーでお会いした事があります」

「そうなんですか……」

視点を二人に戻す。少し間を置いてから再びその白いタキシードの男は口を開いた。

「大体どこの馬の骨かも分からない人の車に木野城家の車がキズをつけられるなんて……」

すると前方の車の後部座席から誰か出てきた。どうやら長身の男性のようだ。よく見るとボクと同じ制服を着ている。明らかに同じ学校か。ノートパソコンらしきものを片手に抱えている。その人が段々こつちに近づいてくる。そしてその白いタキシード姿の人の前で立ち止まりその謎の男の人は自分の眼鏡を中指でクイツと上に上げた。

「少しは慎んでくれ、吉永」

するとそのタキシード姿の男の人は頭を下げ始めた。

「ですがこの運転手は木野城家の所有物にキズをつけたのですぞ」

「吉永……まだ気づかないのか？」

「はい？」

白いタキシード姿の男の人は何を言ってるのか分からないといったように首を傾^{かし}げていた。ハアと深い溜息をつきその謎の男は今度は視点を平賀さんの方に向けた。その後

「申し訳ない」

深々と頭を下げゆつくりと謝罪した。平賀さんは驚いた様子だった。

「坊ちやま！ 何故このような者達に謝罪するのです？」

「吉永！！」

少し強い口調で名前を呼ばれた白いタキシードの男は少々ビクンと身体に衝撃を受けていた。

「あつあ、えつ……」

何がどうなっているのか分からないのだろう、言葉が見つからないらしい。頭を下げたままその謎の男は首だけその白いタキシード姿の男の人に口を開いた。

「悪いのは私達だ。黄色信号ギリギリで進みきろうとしたが無理だった。しかもスピードも結構出ていた。なのにかも関わらずこちらが被害者である方に怒りを差し向けるなど腹違いもいいところじゃないか」

「……」

「頭をお上げください。私にも過失はありますからこちらこそすみませんでした。修理代は後ほど木野城様保有の本社に送ります」

平賀さんは畏^{かしこ}まって言葉を発した。そしてその謎の男は頭を上げる。

「ありがとっ、恩に着る。こちらの運転手の教育不足で迷惑をかけた。こちらで再教育を施すので、あしからず」

そしてその男の人は今度はボク達に目を向ける。

「もしかしてそちらにいらっしやるのは詩条雪穂さんかな？」

その男の人は平賀さんに問いかけた。

「ええ、詩条雪穂様です」

「後方の窓を開けてくれるかな？」

その要望にすぐさま平賀さんはオープンスイッチを押して応じた。

「ありがとっ」

そう言っただけで今度は後部座席の方に歩いてきた。そしてその窓から覗き込むように奥の方にいる雪穂さんの方を見つめる。雪穂さんは前の膝の上に手を重ねるように置いて淑やかに座っていた。先ほどの一件が安堵の方向へと落ち着いたのである。

「お久しぶりです。雪穂さん」

「久しぶりですね、晴紀さん」

そして目を細めるようにしてボクの方を見る。すぐさまその視線は雪穂さんの方に移り変わり

「こちらのお方は」

そう雪穂さんに訝しげに尋ねた。雪穂さんは手先をボクの方に向けて

「こちらは私の友人の源　あゆむさんです。訳があつて私の家に居候しておられる方です」

「居候？」

ピッピというクラクションが鳴り止まない事はない。というか次第に罵声が飛んでくるのが聞こえた。このまま事が進み警察が来て事を荒立てるのは思わしくない。そこでボクは学校へ行きましようと呼びかけようとした時

「まあ、後ほど話は伺いましょう。今はこの後ろの渋滞をどうにか解消しなければならいようですからここで話しても思わしくないのでしょう。ではこの辺で失礼します。吉永、車を出してくれ」

ボクはこの人は教養のある人かもしれないと心の中で思っていた。そういつて次の信号が青に変わった瞬間に再び走り出し、ボク達も後を追うように学校へと向かっていく。

お読み戴きありがとうございます。

いかがでしたでしょうか？

感想・評価等頂けると嬉しい限りです。

よろしくお願い致します。

また次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

木野城とかいう人の車の後に続いてボク達の車も校門の前に止まった。そしてボク達より先に校舎に入っていき結局その日の昼休みまで会う機会がなくその日はもうあの顔は見ないかと思っていた。

そのとき4時間目終了の甲高いチャイムが後者中に鳴り響いた。

「はい、ここまでにしとこうか。ホントは区切れのいいところで終わりたかったけど目が血走ってる人が男子大半に見受けられるので仕方ないわね。じゃあ、号令っ!!」

4時間目の物理担当の女の先生はそう言っただけで学級委員の方に視線を送った。そう、確かに血走っているといっても過言ではないと思う。大体正面を見てる人なんか男子にほとんど見受けられない。かろうじてボクと後ろの手塚くんが向いてるくらい。あとの大部分の男子は足を真横に出して向いてる方向は出入り口付近。おそらくというか絶対に近いんだけど皆お昼ごはんの確保に必死なんだと思う。でもそんなに大変なのかな。そんなに菓子パンやおにぎりとか供給がないのかな。そんなハズはないと思うんだけどな……。

「起立、先生に礼！」

ボクはちゃんと礼をした。完全に無視パターンだよ。皆先生に礼なんかしてない。学級委員の言った事なんか耳にも入ってないんだろっね。ご苦労をお察しますよ、眼鏡が特徴的な学級委員君。と同時に名前を知らなくてゴメン。もっと周りの事を知っておくべきだね。

なんて数秒の間に色々考えていた。先生が教壇から降りて教室のドアに手をかける瞬間には教室の中には女子と一部の男子以外は蛻もぬけの殻だった。このスピーディーさは一体なんだろう。アメフトもしくは陸上部・短距離担当的な瞬発力すさの凄まじさ。正直圧巻だった。

「終わってたなあ〜」

後ろの手塚くんがそうボクに投げかける。ボクはその声を受けて後ろに振り返る。

「そうだねえ……、なんか疲れちゃったよ」

「俺も同感。しかし物理っていいと思う。なんでも女の子に置き換えてみれば楽しくなるしな」

意味が分からない。正直回答の意図が読み取れません。

「どついつ事」

ボクは詳細を聞く事にした。その内容がどうとは知らずに……。

「例えば今日の摩擦の問題の時は物体を女の子に置き換えてみれば問題を解くことが面白くなる。まあ例えばあゆむの斜め前の女、志倉などを毎分5キロメートル毎秒で斜面40度の部分から50メートル滑り……」

それから5分間止め処なくこの意味の分からない理解不能な説明を受けた。聞かなきゃよかった……。でもぶっちゃけて言うところな事を物理の時間に考えて授業を受けてるかと思うと鳥肌が立つよ。将来二つの輪っかに腕を通さなければいいけど……。

「手塚くんってさ、いつも授業中そんな事考えてるの？」

ふと口からこぼれ出てしまった。

「まあ……そうだな」

「で今日は志倉さんの話をしてたんだ」

「そういうことになる。俺個人の気持ちとしては本望ではなかったんだが……」

肯定するんだ。ボクの背筋に若干震えが走る。斜め前の志倉さんに目を向けてみる。お昼なのに何も口にせず机の上には物理の教科書とノート加えて文房具が出たまま、志倉さんは窓から遠くの方を見ていた。

「志倉の気性からいって男の中でもMの奴らが支持しているらしい。知っているか？ この世界の7割の人間がMな事を！ つまりこの世界は”Mの世界”と言っても過言ではない。しかし残念ながら俺はどちらかと言えばSだからそんな奴らの仲間入りなどは果たしていないわけだ、悪しからず」

確かな情報なの、それ？ というか勝手に自分で世界に命名を施さないでよ。地球も人間も可哀相だよ。しかも手塚くんのSかMかなんて他者にとってみたらどうでもいいことだから『残念ながら』という言葉は使わないでよ。ボク達はおそらく君に期待を抱いてはいないよ。

大体こんな勝手な事をこの人は話していていいのかな？ 後で絞め

殺されてもボクは知らんぷりでもしようかな。そんな話を聞いていたのか否なのか分からないけれど徐に席を立ってボク達のすぐ横を通ってゆく。その時に志倉さんはボク達を一目睨んでいった。

やっぱりボク達の話聞いてたのかな。ボクの額からは冷や汗がジトーッと染み出ていた。

「やっぱりマズかったんじゃないの」

ボクは手塚くんにそう投げかける。手塚くんは両手の掌を上^{てのひら}に上げた。

「本当の事だからいいだろう」

いやっ、本当のことだったなら何でも言ってい訳じゃないんだよ。手塚くんは周りを見渡した。

「昼飯どうするか」

「どうしようね、ボクここで昼飯食べるの初めてだし」

「まあそれは昼飯はどうするつつても購買部はもう売り切れだろうから学食しかないんだけどな、とりあえず行つとくか？」

「うん！」

ボクは首を縦に振って応答した。そしてボク達は立ち上がり教室のドアの方に向かった。前方には志倉さんがいる。足取りがゆつくりだ。

やがてドアから出た一步目の所で志倉さんの足が止まった。どうしたんだろう……。ボク達は段々とその距離を詰めてゆく。

「志倉さんなんで止まってるんだろう」

「分からん。というか志倉なんて俺にとってはどうでもいい」

そのどうでもいい人の事を少なからず物理の時間に考えていたくせに！　そしてボク達は志倉さんの真後ろで止まった。

「おつ、おい……」

隣の手塚くんが驚きの声を上げる。もの凄く図体がでかくて竹刀を肩に担いだゴツイ男達は何人も険しい顔をして志倉さんの前に立ち往生していた。

「おい女あまっ！　これはどういう事だ！？」

その男の中の主格人物は右手になにか紙を持っていて指差していた。紙に目を向ける。男の左手には黒い鍔が装着されている図太い竹刀を肩に担いでいた。

なになに……。『これから半年間当部活動への出入りを禁ずる、志倉 季節』これを志倉さんが書いたって訳ね。ところで志倉さんの所属している部活ってなんだろう。

「読んだままの通りだけど」

志倉さんはムスっとした態度でつまらなさそうに言った。

「俺達は何したって言うんだよ」

「何したですって！？ 白々しい。そんなことも言わなきゃ分らないの。アンタ達が下級生である一年生や二年生に酷い事したからでしょ！」

「あれはただ下級生をかわいがってやったただけだ」

「自分達よりも実力が上の下級生に怪我を負わせたり、下級生の女の子にちよっかい出したくせによくそんなことが言えたものね」

志倉さんは両手を腰に当ててそういきり立つ。

「オマエはそんなに偉いのか？ 部長でもない奴にそんなこと言われたくないっ」

「馬鹿じゃないの」

「なんだと！？」

その男の集団全員が顔を赤らめた。

「部長を始め部員全員そう思ってるに決まってるじゃない。アンタ等みたいな人間がいるから剣道部全体のイメージが悪くなるのよ。少しは自覚を持ったらどうなの！」

剣道部？ 確か志倉さんと最初に会って聞いた時にはないって言うてなかったっけ？

「黙って聞いてれば好き勝手言いやがって！ このやるおっ」

その主格は竹刀を振りかぶった。

「危ないっ！」

そう瞬間的にそう思い思わず声まで上げ、気づけばボクはいつの間にか志倉さんの前に立っていた。咄嗟の事で竹刀はターゲットを志倉さんからボクに変遷しボクの頭の前頭部目掛けて剣先辺りが襲ってきた。ボクはその剣先を片手で驚掴^{わしづか}みして軌道通りにそのまま下に手で押してやった。結果男は前につんのめった。

「なんだデメエは？」

声を荒げて今度はボクに罵声を浴びせる。志倉さんは目を若干見開いていた。

「やめてください！」

女の子にこんな暴力的な事をするなんて黙って見過ごす訳にはいかないよ。

「あアン？ デメエには関係ねエだろ！ 引っ込んでろッ！」

主格の男は竹刀を持ち直して思いつきりボクの頭に向けて振り下ろしてきた。ここは力ずくでも分からせるしかない。ボクは主格の男の懐に入り込み顎元を突き上げた。

「ハウんっ」

男は勢いよく上に飛びやがて地面に叩きつけられた。

「やつ、ヤベエ」

「こいつ、できるぞ」

その男の取り巻きからそんな声が聞こえる。

「ここは一先ず退散だっ」

取り巻きの中の一人がそう言い気絶しているその主格の男を抱えて男達は走り去っていった。

「フー」

ボクから安堵の溜息が出る。ボクは志倉さんの方に振り返る。志倉さんは口をあぐり開けていた。

「大丈夫？」

ボクは志倉さんにそう声をかける。

「べつ、別に一人でも大丈夫だったんだから」

「はい？」

「勝手なことしないで」

「えっ？」

「かつ、感謝なんてしてないんだから」

そう言い残して何処かへ消えてしまった。

「あゆむどつという事だよ!？」

手塚くんはボクに顔を近づけて驚きの声を上げた。

「何が？」

「何がって、さっきあの凶体の大きな男を一撃で吹っ飛ばしただろ
う!」

ああさっきの事か。まあとつさ的に出てしまったんだけどね。

「子供の頃から空手をやってたんだよ。最近はやってないけどなんか実践的になると不思議と身体が勝手に動くんだよね」

「あゆむ、凄いな!」

「あむむさんっ」

後ろから声がする。この優しい声は……

「雪穂さん」

そこには重箱らしき風呂敷包みを両手に持った雪穂さんがいた。

「どうしたんですか」

「お昼、ご一緒しませんか？」

雪穂さんはニツコリ笑ってボクに持ちかけた。廊下に真昼の太陽が差し込みそれが雪穂さんに当たってまるで雪穂さんが天使のように見えてしまった。

「はい、喜んで！」

後ろから強い視線を受けているような気がする……。ゆっくりボクは振り向く。手塚くんは目をボクに見張っていた。やがて……

「俺の事は気にするなよ。どうせ一人で寂しく学食でチョココンと座ってかけうどんでも啜ってるさ……」

そんな悲しげに言わないでよ。ひどく罪悪感、感じるんですけど。そして手塚くんは小走りでこの場を走り去っていった。

「なんか申し訳ない事をしましたね」

雪穂さんが俯き加減にそんな事をもらす。

「いえ、多分大丈夫だと思います」

ボクは雪穂さんに罪悪感を感じさせないために声にハリを持って言った。

「そうですね、折角ですし……」

「ちょっと待った！」

またしても背後から聞いたことのある声が聞こえる。振り返ると

そこには朝方に会ったあの男がいた。

「ご機嫌麗しゅう、雪穂さん。木野城 晴紀、只今参上しました」

畏^{かしこ}まつて木野城くんは雪穂さんに向かって一礼した。

「はい。晴紀さんもお元気でなによりです」

その社交辞令に一区切りつき今度はボクの方に向き直った。

「これはこれはMinamoto グループの御曹司の源 あゆむ君」

何か嫌味に取れるんだよね。

「木野城くん」

「おお、名前を覚えてくれていたとは光栄だねえ」

君が印象深かったから覚えてるよ。木野城くんが右手を前に出した。ボクも右手を差し出し、握手した。握手をしたのはいいのだが若干木野城くんの握力が段々と強くなっていく。さっきあの主格の男の人を突き上げた時の拳が締め付けられてズキズキ痛む。やっぱり最近鍛錬を積んでないから鈍^{なま}っちゃってる……。

木野城くんはにこやかに笑っているがよく見ると笑顔が引きつっている。次に木野城くんはボクの耳元まで顔を寄せ、そして小声でボクに囁いた。

「君だけに雪穂さんを独り占めにはさせないよ。ちなみに私はずっ

と前から雪穂さんを狙っていたのでね」

そう言って顔を遠ざけた。木野城くんはニヤリとボクの方に微笑みを向ける。しかし木野城くんの目は確実にボクを見下したような目だ。正直ボクの心は複雑だった。いきなり雪穂さんに好意を寄せる人がやってきてボクにその気持ちを打ち明ける、それって……。

「晴紀さんもお昼と一緒にしますか」

雪穂さんが木野城くんに優しく声を掛ける。

「ええ、是非一緒にさせていただきたい」

なんだか分からないけど非常に腹が立ってきた。折角雪穂さんが誘ってくれたのにいきなり割って入ってきて堂々として。こんな人に負けないぞっ！ ボクの目は闘志の炎で燃えていた。

お読み戴きありがとうございました。

結構ストーリー性にスパーク的エッセンスが効いてなくて申し訳ない限りです。

これからのプロットですとおそらくスパイス的部分を増やせるかと思えますのでご了承ください。

さてこの場をお借りしまして読者の皆様からの数々のメッセージを賜りとても感謝、感激の極みなのですが読者様が折角送って戴いたメッセージに返信しようと致しましてもそれが出来ないといったような事態が生じております。ですのでお手数ですが今一度、御自分のアドレスに不都合な点はないか確認して戴ければ幸いです。

尚、皆様からの感想・ご要望・ご指摘等のメッセージをこれからも糧として参りたいのでよろしければ送ってください。

勿論評価をして戴いても結構です。

宜しくお願い致します。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

*注：今回は番外編です。

尚、今回の話は次回のストーリーへの布石ですのでご了承ください。
加えて、PV20000突破致しました。

これも偏に読者様の日頃のご愛読により致すところであります。感謝申し上げます。

時は雪穂さんの家に引越してきて間もない頃……。ある日の夜の頃だった。

ボクは自室に入った。内装としてはボクの意志に関係なく設えられた高級感溢れる赤いカーテン、クイーンサイズのベッド。天井まで支柱が伸びていて支柱と支柱の間に垂れ幕のような薄くて白いシルク状の布が架かっている。下は大理石の上にこれでもかといったくらいに端まで大きな絨毯じゅうたんが敷き詰められている。

窓はやはり天井から床までの直径あるガラス張りな重厚さを感じられる。ガラス越しに外を眺めてみる。やっぱり周りのイルミネーションが綺麗だ。光り輝く噴水の水面。光に映えて更に緑々しさを増す木々達。手入れがここからでも窺えるそんな観葉植物や芝生、アスファルト。

見ているボクになんらかの希望を与えてくれそうだ。さて今日は色々あって疲れたし……。ボクはベットの方を見やる。ピンと張られたベッドのシート・掛け布ら、ふかふかそうな横の長さが4人分寝れそうな白い枕。こんな布団に眠るのにどれだけの勇気がいるか。

自分はこんな豪華な部屋で快眠できそうな布団に逆に寝てしまっているのだろうか。こんなに大きな枕だからドッペルゲンガーが出てこないなんて保障は何処にもない……。

心配は日を追う毎に増す。しかし他の人になんか言えないし。よし！心を落ち着けるためにお風呂に入ろう。そう思ってみたものの周囲を見渡すが何処にもお風呂場なんて何処にもない。どうした

ものか……。

まさかこの家の人ってみんなお風呂に入らないとか！？ そんな不潔な…… ってことはないか。

平賀さんに聞いてみよう。いや、ここは隣の部屋の雪穂さんの方が早いかな。そう思い立って部屋を出て雪穂さんの部屋の真ん前に立つ。そして軽く握った手を前に出し徐にノックする。しかし返事はない。

どっか行っちゃったのかなあ再度ノックしてみるもののやはり声はない。少々悪いとは思ったもののドアにピタリと耳を当ててみる。これで声とか気配が感じられなければ平賀さんの所に行こう。まあどうせ結果は見えてるだろうけどな。

『……おっ、おっ、あっ』

何故か声がする。耳を澄ませて全神経を集中させる。

『あっ、……いい、あっ、そこっ、はうっ』

ボクは耳を急いで離れた。そして数歩後ずさり。こっ、これは……。中で一体何が行われてるの！ まっ、まさか雪穂さんが！？ そんな、…… そんなはずは。誰と？ まさか…… イケメンのコールマンを部屋に呼び出して夜中の調教！？

もしくはイケメンコックを呼び出してアナタの腕はどうかしら、とか？ うわー！ ボクのイメージ上の雪穂さんがどんどん崩壊してゆく。あんなに大人しくて性格温厚で容姿端麗な雪穂さんが夜中の女ご主人様なんてそんな。

雪穂さんってそんな攻め手でSだったんですか！？

梟^{ふくろう}より過敏な夜行性ですかっ！？

夜^{へんげ}に変化を遂げる女狼ですか！？

実は相当のやり手ですか！？

もう頭がパニくっています。ここはもう乗り込むしかないよっ！
ボクはドアの方に再び歩み寄る。そしてドアの前へ、若干左右を見渡す。大丈夫ボク一人！ よしっ、ボクはドアノブに手をかける。そしてゆっくりとドアを引いてゆく。

鍵が掛かっているけれど。そんな心配はすぐに消えた。
鍵が掛かっていなかったのだ。無用心すぎじゃないかな、雪穂さん。
そして中をゆっくりと覗き込んでみる。

今度は対照的に声や音すらもしない。一体どういう事だろう……。
中に入ってゆく。そして大広間に辿り着く。シャンデリアのダウンライトだけが照らされた落ち着いた雰囲気。どっかの貴族のお部屋みたいだ、なんと豪華なことか。

ボクの部屋よりも装飾が凄かった。室内なのに螺旋^{らせん}階段があったりピアノがあったり……。なにより天井が高い。

『あうっ、いいっ、うっ』

また声がする。どうやら右側の扉の奥からするようだ。この雪穂さんの部屋にはまたその中に6つくらい扉があった。ボクの部屋の

反雪穂さん側の部屋の扉は外廊下に数歩歩けば行き着く。しかしながら雪穂さんの部屋から一番奥の外廊下までは一つとして扉がない。初めて見たときは不思議に思ったけどこういう事だったんだ。しかしまた不思議な事が急上昇、ボクの目の前に種が一つある。声のするドアの方に行ってみる。そして一呼吸おいた。

落ち着いた時点でドアの取っ手に手をかけ一気に開錠！ 中に広がっていた光景は……

「ひつ、平賀さん！」

平賀さんが口。オ。ーイに跨またがっている姿があった。しかも物凄く気持ち良さそうな顔をしている。サングラスを掛けていてもその状況がよく分かる。しかしそんな平賀さん見なくなかったな……。

ボクの声でその顔が急に啞然あぜんとなり雰囲気も凝固する。ボクと平賀さんは口を開いたまま顔を見合わせていた。肩には肩こり用マッサージ道具らしきモノが装着されていた。

なんだが見てはいけないモノ、パンドラの箱を開けてしまったような感覚だった。どうしよう……、この状況をどうやって潜り抜けようか？

「みつ、見ていません！ そつ、そんな平賀さんが健康道具を使つて快感を味わっているなんて光景、見てませんから！」

思いつきり顔を背ける。こんな嘘八百の御託ごたを並べ立てた点前たてまえ的な処置など通じる筈はおそくないだろう。

「いつ、いえ、なんというか、その……」

『見られてしまったらしかたねえ、貴様を処刑台に送ってやる。来な兄ちゃん、まずは磔を試してみようか……、ヒツヒツ……』とか言わないよねえ。平賀さんって本性絶対隠してるって！ まあそれ以前に雪穂さんがこの場にいないくてそれはせめてもの救いだっただけ。

「ご勘弁を！ 私は日ごろ乗ってみたくて……その、乗った次第でして。あゆむ様には知られたくはなかったのですが……」

平賀さんの額からは無数の汗が垣間見えた。

「大丈夫ですよ。誰しも疲れた時はリラックスしたいものですし」

しかし、これが雪穂さんの部屋にあるって事はこれは雪穂さんのかな？ 結構あんな雰囲気なのに日々疲れてるとか？ だとしたらなんで気づいてあげられなかったんだろう……。

ボクは健康器具を見つめていた。すると平賀さんが思いついたように忽然と言葉を発した。

「ごつ、誤解しないでください！ これらはお嬢様の所有物ではないのです。私の部屋に置けなくて困っていたところを『私も乗ってみたいから』などという理由でこの部屋に置いて下さったのです！ ですがそんな使った様子など窥えません。お嬢様は私の事を思ってくださったのです。本当に雪穂お嬢様はお優しいく思いやりに長けておられ、思慮に分別のある方です」

雪穂さんっていつもそうだよ、人の事を最優先だもんね。彼の有

名な中国の思想家である荀子が唱えた性悪説を根本から覆しそうだよ。さすが、改めて尊敬しちゃうよ、雪穂さん。

「雪穂さんって色々凄いですよね。寵愛ちようあいなんて言葉はあの人にはないのでしょ。皆、雪穂さんと関わりあう人全て平等に愛を振りまいているとボクは思います」

ボクはしみじみと言った。

「……雪穂様は執事である私にも愛想を振りまいてくださいます。私も若い頃雪穂様に色々助けて戴きたただでさえ恩恵を預かっている身なのに。……、あゆむ様っ」

「はい」

「私がサポートできない部分はあゆむ様にサポートをして戴きたいのです」

ボクはその時その意味を全く理解できていなかった。平賀さんのどんな想いが込められているのか汲み取れなかった。

「はいっ、分かりました」

ボクは何にも考えずにその言葉を言い放った。

「ところで私に何か聞きたいことがあったのでは」

なんでボクの思っていた事がしかも今の今まで忘却の彼方へとあった用事が平賀さんにどうして分かってしまったのか？ やっぱりこの要素はこの人も雪穂さんと同じカテゴリに同一化されるな。

「ええ、そうなんです！聞きたい事があつたんです」

そして後ろに数歩あゆみだして周りを見渡す、やっぱり見当たらない。平賀さんに向き直って再び話を盛り起こす。

「ボクの部屋や多分この部屋にもだと思うんですけどさっきお風呂に入ろうと思ったら見当たらないんですよ……」

ボクは疑問の念を平賀さんに伝える。

「ああ、すみません、この前まで部屋の塗装が未完成ということとで28号館の方でお休みになっていたため、お伝えしてませんでした。誠にすみません」

そう言って深々と頭を下げられた。そして頭を上げ再度話の続きを喋る。

「とうやかた当館には各室内にお風呂は設けておりません。これは雪穂様起つてのご希望で全て当館の地上83階と地下16階までに温泉施設を兼ねそろえております。ですからそちらをご使用くださいませ！」

平賀さんの手の上にはいつの間にも用意したのか白いバスタオルとフェイスタオルと何故か下着と浴衣が用意されていた。恐るべし、平賀さん。お辞儀をして恐る恐る平賀さんの掌のモノを取った。そしてボクはお風呂に向かうのだった。

番外編 P a r t 2 乞_レつご期待！
(未定)

読破戴きありがとうございました。

ここで私事で誠に恐縮なのですが、仕事の関係で今月の更新はこれをいれますとおそらく1～2ストーリーとなります。どうかご了承ください。

しかしながら評価や感想、メッセージ等は随時お受付致したく存じ、同時に返信をなるべくしたいと思い致している所存です。よろしければコメント・評価等宜しくお願い致します。

今ストーリーを書き上げた時点で思いましたが、やはりまだまだ腕が足りませんね。

申し訳ありませんと謝辞を述べるより日々精進し更なる飛躍を目指しますという宣言をこの場を借りてしたいと思います。応援宜しくお願い致します！

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

「それでは参りましょうか」

なんだか知らないけど木野城くんは雪穂さんの背中に手を回し歩き出した。

「ええ」

という返答と共に雪穂さんもそれにつられて前へと歩き出す。

ボク置き去りですか?!

「あゆむさん、行きましょう」

雪穂さんが振り向いてボクに微笑んで呼びかけた。

やっぱり雪穂さん優しいよ……、ちゃんとボクを忘れない。

ボクは急ぎ足で雪穂さんの後ろについて行く。

そしてボクたち一行は高い建物、色々な特別教室があったりする1号館に入ってしまった。

エレベーターで17階に行き着く。

ピンポンと調子のいい音が鳴ってエレベーターの扉が左右に開いてゆく。

徐々に目の前の光景が広がっていく。

そこはとても建物の中とは思えないほどの場所だった。

何処かの庭園かと思えるほど照葉樹林や観葉植物が植えられており地面一体は芝生が緑々と生い茂っていた。

その伸び具合は丁度よくて毎日手入れをしていると窺えた。うかが

そして白い丸テーブルやそれに調度の合った西洋風の白い椅子。

そして右方はガラス張りで太陽が差し込んでくる。

加えて何処からか鳥のさえずりが聞こえる。

まさに清潔感漂う雰囲気だ。

「あそこにしましょうか」

木野城君が空いているテーブルを指差して言った。

「でも椅子が一つ足りませんね……………」

雪穂さんが残念そうな面持ちでそうもらした。

「……………、自分のモノは自分で持ってきたらどうか？」

木野城くんがボクに視線を送る。

やっぱり性格良さそうだけどそれは外見上だけ！？

教養ありそうだったのに……………。

周りを見渡してみる。

どこも人が座っていたりして空いている椅子なんてありません。

雪穂さんは心配そうにボクの方を見る。

「……………ちょっと探してきます」

ボクは後ろの方向に足を出してゆつくりと歩き出した。

「あゆむさん、待ってください」

そこで雪穂さんが呼び止める。

なんだろう……………。

「はい？」

「椅子が二つでもいいじゃないですか」

「えっ？」

何を言ってるのか分からない。

椅子が二つしかないんだから二人しか座れないじゃないか。

というかこのまま立ち去るっていう選択肢もあったと思うけど折角雪穂さんに誘ってもらったし……………。

ボクは訝しげな眼差しでに雪穂さんを見た。

「半分ずつにしませんか」

半分ずつ？

どういう事？

椅子を真つ二つに切って座るって事？？

勿論違うと思うけど……………。

「私と半分ずつ椅子に座りませんか……………、駄目ですか？？」

ボクが雪穂さんと一つの椅子に座るって事。

色々な座り方が考えられるけど流石に雪穂さんに抱っこパターンはないよね……………。

それはいくらなんでも興奮してしまうよ……………。

「いえ、駄目じゃないですけど、雪穂さんに悪いですし……………」

すると雪穂さんは片手を振って答えた。

「悪くなんてありませんよ。今までそんな経験ありませんでしたからやってみたくなって思いました」

「ちょ、ちよつと待ってください!」

そこに木野城くんが割って入った。

そして雪穂さんの目の前に立ちはだかった。

「ゆつ、ゆゆ雪穂さんっ?! 私と一緒に座りましょう位置的に私と雪穂さんが一番椅子に近いですしっ」

木野城くんはなんだか慌てた様子だった。

そんなに彼はこんなシチュエーションが羨ましかったのか。

でもちよつと残念だなあ。

雪穂さんと一緒に椅子を半分こずつにして座れたかもしれないのに………惜しい事をしたかもしれないなあ。

「すみません、それはできません」

雪穂さんは深々と頭を下げた。

断った!? なんで、ボクは目を見開いて雪穂さんを見つめていた。

「どういう事ですか? 源グループの御曹司とは出来て私とは出来ないんですか!」

木野城くんは掌てのひらを上にして上下させた。

「あの・・・・・・・・、その・・・・・・・・」

「ええ！何かあるのならハッキリ言って戴きたいです」

「あっはい・・・・・・・・そこまで仰るのなら・・・・・・・・身体が大きいんです、あのっその・・・・・・・・晴紀さんの・・・・・・・・、

ですから椅子の大きさから言って晴紀さんと二人で座ることは困難です、ゴメンなさいっ」

再び雪穂さんは深々と頭を下げた。

木野城くんは口をポカーンと空けて凝固していた。

確かに身長165センチのボクの方が木野城くんより遙かに低い、加えて身体も大きくない。

そして若干間が空きやっと木野城くんが口を開く。

「そっそそ、そうですね。では雪穂さんは一人席の方に行って下さい。」

私は仕方なく、いえ是非、進んで自らあゆむ君と一緒に座りたいと思います、いえ座らせてください！！」

はいっ！？

流れるに意味が分からないのですが一体どういう事??

ボクがなんで木野城くんと一緒に席に半分こずつして座らなきゃいけないの!?

ボクはBLじゃないからね。

木野城くんの笑顔が引きつっている。

木野城くんの方を見ていたら目が合った。

確実にあの目はボクを威嚇^{いかく}してる目だよ。

「いいんですか」

そう木野城くんに優しく問いかける。

「……ええ」

さらに木野城くんの口元が上に吊り上り、加えて眉間に皺^{しわ}を寄せている。

「ではお言葉に甘えまして」

そう言つて雪穂さんはゆっくり一人席に腰をかける。

ボクは木野城くんの方を見る。

木野城くんも視線をゆっくりと合わせる。

ゴクリっ。

これはやっぱり木野城くんと一緒に座るパターンなのっ!?

ここは雪穂さんに気づかれないうちに囁き声で木野城くんに話そう。

「なんでボクと一緒に座るなんて言ったの!？」

「雪穂さんとキミと一緒に座っているところなんて見たくないからその回避術に決まってるだろうっ!!勘違いしないでくれっ」

木野城くんも小声で返答する。

「どうしたんですか、お二人とも」

雪穂さんが催促の声をボク達に投げかける。

そして二人一緒に椅子の方を凝視くする。

やっぱり何回見ても一つには変わりがない。

これは………、ボクと木野城くんの額からは普通と違う汗が流れ出ていた。

そして

「何とか座れましたね」

「ええ、お陰様で」

木野城くんが笑顔で答える。

それにしても木野城くんの背中とボクの背中とは相対している。

それぞれ別の方向を見ているのだ。

「さあ、戴きましようか」

雪穂さんが桜の模様が散りばめられている風呂敷の結び目を解いてゆく。

解くとスルスルっと勢いよく四方に布が落ちた。

中身はやはり黒の漆を基調とした重箱。

しかも結構重段が高い。

ひい、ふう、みい、よお、5段！？

そして雪穂さんはゆっくりとその重箱を解体してテーブルに並べてゆく。

煮物、西京焼き、肉じゃがその他にも格段の重箱にはぎっしりと和食が詰まっていた。

雪穂さんが兩人差指を当てたり離したりしている。

そして視線を落としながらボク達に若干上目遣いで言った。

「え、えっと、どうぞ、召し上がってください。」

お口に合うかどうか分かりませんが……」

ボクの胸を何かが締め付ける。

なんかこういうシチュエーションいいかも……。

ゴクリッ。

隣から唾を飲む音が聞こえる。

木野城くんは目を見張ってお重一点を見つめている。

「じゃっ、じゃあいただきます！」

「ええ」

そう自分のポケットから箸を取り出して玉子焼きに手をつけた。

どっから持ってきたの、その箸？

そして結構がつつくんだね、もう早々と6種類の料理に手をつけ始めているよ。

木野城くんは口一杯に料理を詰め込んだせいか頬っぺたが膨らんでいた。

とっても幸せそうな笑みを浮かべている。

「ゆきふおさん、ふごくふおいすいです！どれもこれも、家のシエ

フなんか足元にも及ばない！！

流石です、世界一です！」

言葉の序盤、木野城くんは口の中をモグモグさせながら言った。

なんかちよつと下品じゃない？

これで食べ物が飛んで雪穂さんの顔に飛んでもしたら取り返す
つかないよ。

ともあれ、木野城くんがこれでもかといつくらいに弁当を褒め称
える。

いわゆるベタ褒めだ。

「そうですか、そう言って戴けると嬉しいですっ」

雪穂さんは優しく微笑んで木野城くんに言った。

ふと雪穂さんはボクの方に視線を転換する。

「あゆむさんは召し上がらないんですか」

「え、えっと……」

どっかの人と違って箸がないんですよ。

ボクは視線を真横に送る。

「すみませんっ！箸がありませんでしたね、どうぞ」

慌ててそう言ってボクに箸を手渡す。

雪穂さんの手って綺麗だなあ。

白く透き通ってて指も細いし……。

ボクは見とれていた。

「どうしたんですか」

「いつ、いえ、なんでもありません！」

そう弁明して箸を受け取る。

……しかし

「イッテっ」

箸はスルスルとボクの指をすり抜けていって地面の芝生に落ちた。

「どうしたんですか」

雪穂さんが驚いて心配の面持ちでボクに尋ねた。

さっきの拳がズキズキ痛む。

ボクの手先に幾度か微衝撃が走る。

「手をさつき壁にぶつけちゃって・・・・・・・・」

ボクは作り笑いをして雪穂さんに話した。

でもこれじゃあ雪穂さんのお弁当食べられないよ。

食べたかったのに・・・・・・・・。

手を無意識の内に擦さすっていた。

ボクは溜息を漏らした。

そんなボクを見てなのか雪穂さんが椅子を引いてボクの方へやってきたかと思ったら、

いきなりボクの手を取った。

「大丈夫ですか・・・・・・・・」

そう言ってボクの裏拳辺りに目を近づける。

「え、えと気にしないで下さい、家に帰る頃には自然治癒しますから大丈夫ですよ」

ボクは慌てて手を引っ込める。

こんな手を取られただけなのに女の人っただけなのにこんなに緊張するものなの！？

「あゆむさんっ、ダメですよっ！！そういうのを放っておくと後で

後悔しても取り返しがつかない場合だってあるんですよ。

ですから今回は私が食べさせてあげます!」

はい!?

今なんと仰いました? 食べさせる? ボクにですか……。

そんなハズない。

うん、絶対聞き間違いだよね!

「もう一回言ってくださいか」

ボクは疑いの余地満々で雪穂さんに尋ねた。

「ですから、今回は私があゆむさんにお弁当を食べさせてあげたいと思います!」

そう真剣に言い放つ雪穂さん。

やっぱり聞き間違いじゃなかった……、隣から嫌なオラ出してるような……。

ボクは隣を横目で見てみた。

さっきまでみるみる内にお弁当をたいらげていつていた木野城くんの箸が止まってるよっ!

そのせいで玉子焼きがポロツと箸から転げ落ちた。

というか、もしかしても玉子焼きですか？もしかして好きなの？

しかも悲壮感たっぷり俯いてるし……………。

そう横目で見ているボクにいきなり俯きかげんな姿勢をとっていた木野城くんがいきなり顔を上げてボクを凝視した。

こっ、コワイ……………。

最初に会った時はかなり良心的な人かなって思ったのに……………。

「いえ、いいですよ、雪穂さんに迷惑がかかりますし……………。

折角お誘い戴いたのに申し訳ないですけど、今から保健室に行つて湿布張ってきますから今日のお昼は遠慮させてもらいます」

これ以上状況を悪化させたら木野城くんになにされるか分からないしここは一旦引くしかない。

「でしたらお気になさらないで下さい。

私は他の方に食べさせて差し上げるのは苦ではありませんから、ただしやって差し上げた人は過去にいませんけど……………」

そう言われると逃げ道がなくなっちゃったよ。

どうしよう……………。

ああ、もうここは！

「じゃあすみませんが・・・・・・・・・・お願いします・・・・・・・・・・」

ボクはこそばゆい感情で雪穂さんをお願いをした。

雪穂さんにはっこり笑って返答する。

「ええ」

「ちよつ、ちよつと、待ってください！」

そこでまたしても木野城くんが割って入ってきた。

さつきよりも必死さが窺えるほどの見幕だった。

「はい？」

雪穂さんは首を傾げながら木野城くんの方を見る。

「ゆつ、雪穂さんにそんなご面倒な事はさせません」

「ですから、私は別に苦でもなければ面倒でもありません」

「しっ、しかし・・・・・・・・・・」

木野城くんはポケットから白いハンカチを取り出して額の汗を拭いた。

そしてなにか閃いた様に突然、

「わっ、わわ私があゆむくんに食べさせてあげましょう。ですから雪穂さんはそこで召し上がっていてください。」

雑務は私に任せてください！」

雑務って………傷つくよ。

まあ確かに他人からしたらそうだと思うけどさ、ハッキリ言わなくても………。

しかも待つて！今なんか聞きなれない言葉言わなかった！？

まさか………。

ゆっくりと木野城くんと目を合わせる。

「わっ、私が食べさせてしんぜる！」

ボクの額からは嫌な汗が流れていた。

木野城くんからは目の下にも若干水滴が。

ぼっボクは嫌だからね！

そんな木野城くんに食べさせてもらうなんて、だってボクは………。

「ボクはBLの趣味ないんだってばー！」

ボクは木野城くんに小声で若干切実にこう言い切った。

すると木野城くんは首を幾度も横に振った。

「なな何を言ってるんだ！？かん、勘違いしてもらっちゃ困るっ！

私だってそんな趣味はさらさらないさ。しかしこのままだと雪穂さんがキミに食べ物アーンといった形の、

なんとも目も当てられないような状況下に客席として私が誘^{いざな}われるような事になるじゃないか！！

それだけはなんとしても避けなければいけないっ。

故になんとも屈辱的な事だがキミに弁当を食べさせてやる！っさ、口を開けるんだ！

しかし、私に食べさせられて……おっ、おお美味しいなんて微塵も感じるんじゃないぞっ。

わわ、私もそんな趣味は一切ないんだからなっ！！！！」

木野城くんが必死に理由を説明し忠告する。

要はあくまでボクを雪穂さんと接近させないようにしたいわけね。

加えてボクも同じ事思ってたよ。

ボクに食べさせることが快感だなんて微塵も思ってくれないでよ。

気持ちが悪い事に拍車がかかるから。

そして口が塞がってるボクに無理やり箸を使ってボクに薩摩芋の甘酢漬けをくつつける。

これは拷問じゃない!?

もしこれが他の人に見られたら・・・。

「ほっほらっ、大人しく雪穂さんの手作りのありがたいお弁当を食べるんだ!

口を開けろっつてっ!」

ボクは尚を必死に抵抗した。

「見てくれが悪かったでしようか?」

そう雪穂さんが落ち込んだ表情でボクに問いかける。

「ふいつ、ふいえ、しょんなこと、んぶぐっ」

雪穂さんの状態を見てか更に木野城くんの箸の加圧が激しくなってくる。

決して嫌じゃないんだけど男の人に食べさせてもらうって言つのがホントに嫌、

「みなもと君??」

背後から声がする。

やはり聞いた事のある声だ。

マズイっ、ここは！

ボクは振り返る瞬間に木野城くんの箸に刺さっていた薩摩芋の甘酢漬けをパクツと口で箸から抜き取る。

そこに居たのはこの前ノートを運ぶのを手伝ってあげた黒のロングショートの髪型の女の子。

確か……白木さんだっけ。

「こっ、こおんにちいわ」

口に御芋が入ってるから言いづらい。

「みなもと君口の周りになんかベタベタしたものが付いてるよ。」

ちよっと待ってね」

そう言っってポケットからピンクのハンカチを取り出して人差し指を基盤としてそのハンカチをあてがって

ボクの口の周りを拭いた。

そっそんな、結構マズイ状況下に置かれてるのにそんなこと！

「はい、取れたよ！」

隣からの視線を感じる。

そしてボクの耳元に近づいてくる。

「キミは白木嬢にも手を出しているのか？」

アイドルという位置に君臨している彼女に心を奪われるなんて、君もそんな程度か。

確かに君はオパール原石を磨いているかもしれない。

しかし私はダイヤモンド原石を磨いて将来それを自分の左手薬指に……ッフ。

フンッ、まあいい。だったら雪穂さんは諦めてもらうぞ！

私はキミとは違って雪穂さん一筋だから、っん！？」

なにか起こったらしい、白木さんから視線をそむけ動作主の方へと首を動かす。

そこには何人ものお弁当箱を持った女子生徒が立っていた。

結構カワイイ部類の女の子が木野城くんを半囲いしていた。

その子達が不安そうな面持ちで木野城くんを見ていた。

「なんだ、キミ達は？」

木野城くんは周囲を見回しながらそう言った。

「今日私のお弁当を食べてくれるんじゃないかなかったですか？」

「私のも食べて戴けるといってお話じゃ……」

「私だって約束しましたよっ！」

「あたしも約束したわっ」

「私も」

皆が皆口を揃えてそんな事を言う。

木野城くんって女だったんじゃないか！

雪穂さん一筋なんて言っでさ。

「ままつ、待て待て！！わわ、私はそんな約束はしていないぞ！

雪穂さん一筋のこの私がっ！！！」

「いいえ、先輩が吉永さんを通して話をしろって仰ったんで吉永さんにアポイントメントちゃんと取ったんです。

OKという返事でした！だからこれから私と一緒に食べるんですっ！！」

その中の代表格的女の子が言った後に皆が首を縦に振った。

「あたしも食べるんだからっ！！！」

そんな声が幾度も連呼された。

吉永さん？ああ・・・あの運転手の人か、って事はこの人たちは皆吉永さんからOKもらえたって事！？

気づけばどんどん木野城くんが女子の渦へと飲み込まれてゆく。

なんとも可哀相だよ、そしてお^{いたわ}劳しい。

「吉永あゝッ！！！」

そう叫んだのを最後に木野城くんは女子達に引つ張られてどこかに消えてしまった。

残ったのはボクと雪穂さんと白木さんだった……………。

「この間はごめんね、季節があんな事言っちゃって……………」
でも分かってあげて！季節も悪気があって言っただけじゃないと思っの。

私の事を心配してくれてみなもと君に強く言っちゃったの……………。

悪いのは私なの！私がちゃんとあそこで事情を説明してれば」

白木さんが落ち込んだような顔をして俯いた。

そうだ……、志倉さんに誤解をさせてたんだ。

でももうボクは大丈夫、だって雪穂さんに導いてもらえたから！

って別に雪穂さんがどこぞの教会のシスターじゃないんだけどね。

「いや、白木さんのせいじゃないよ！

ボクもそんな疑われるような余地があつたから言われたんだし、気にしないでよ」

ボクは笑顔をもって白木さんの状態を改善しようとした。

「許してくれるの」

白木さんは顔を上げて思案しながらボクの方を見つめる。

「いや、許すもなにも白木さんは何も悪いことしてないって、と
いつか誰も悪いことはしていないよ」

「みなもと君って優しいんだね……あらっ……」

白木さんの視線はボクの頬の横を向いていた。

ボクは振り返る。

その先には椅子を引いてお辞儀をしている雪穂さんが見えた。

「詩条さん??」

雪穂さんは頭を起こした。

そういえばこの二人って一応知り合いだったっけ。

「お元気そうですね、白木さん」

「ありがとう詩条さんっ！今日はみなもとくんとお弁当？」

「ええ」

「お重に入ってるお弁当なんて初めて見たわ」

「よろしければ召し上がりますか」

「いいの？」

「是非召し上がってみてください」

白木さんは箸を取ってひじきの煮物を一口。

「おいしいっ！詩条さんっってお料理上手なのね」

「いえそんなことは、ただ子供の時からお料理はやっていましたから慣れているだけです」

そう言いながら手を左右に振る。

「子供の時から……か、みなもと君も幸せだね！こんなお弁当食べれるなんてっ」

その時白木さんのスカートのポケット辺りからプルルという音が鳴る。

白木さんは携帯を取り出した。

「もしもし………？分かったわ、うん、すぐ行くっ」

そう言って携帯を再びポケットにしまった。

「ちよつと社長に呼ばれたから行つて来るね！詩条さん、お弁当ホントに美味しかったっ。

ありがとね。またね！！」

そう言って白木さんは立ち去ってしまった。

その後午後の授業が迫っているというのでお弁当もそこまで切り上げて雪穂さんとボクは

各自のクラスへ戻った。

R e g u r a r C h a p t e r 1 2 ｝ L u n c h T i m e ｝ (後 書 き)

お読み戴きありがとうございました。

感想・評価等をして戴ければ至極の限りです。

また次のストーリーも見て戴ければ幸いです。

それはある6月後半の頃。

朝、いつも通り学校に雪穂さんと一緒に登校してきた。

最近のボクの悩みはグッスリ寝ること、いわゆる”グッスミン”
出来ない事。

不眠症とは若干異なる。

レム睡眠とノンレム睡眠の振幅の変動の……。

そんなボクの悩み話を淡々と述べても誰も解決なんてしてくれない
でしょうね。

だから心の中で、色々ソリューション的思考に基づく提案を一人
で寂しくディスカッションしていますよ。

まあこんな悩みのあるボクは当然この”グッスミン”出来ない事
が身体の表面上に出てくるわけだ。

例えば目の下のくまとかね。

これを結構、手塚くんにイジられたよ。

「あゆむは何をそんなに頑張っているのさ。もしかして……………」

PCゲームとか？」

「ここでまず誤解を解いておく必要がある。

手塚くんの言うPCゲームとはあの男性が夜中^{マニ}にやってグヒヒとか笑っているイメージの強い、

というかそういう先入観をもたれているアレである。

勿論ボクはそんなモノを一つも持つてはいないし、やる気も毛頭おきない。

否定するわけじゃないんだけどね。

ただそんなモノは現役高校生がやるモノじゃないと思うから。

だってボクたちって一応青春時代を生きているのだよ。

プラズマ的に楽しまなきゃ。

この事を手塚くんに言つてあげたい。

でもその状況下の中では言う事が困難であつた。

ボクの立ち位置が被告人のポジションにあるからである。

そこから逆に原告側、ましてや裁判官側に回することは出来ないと言つて恐らく過言ではない。

しかしちゃんと誤解は解いておいた。

まあ、まだちゃんと受容されていないんだけどね。

今日もいつも通り誤解を解いてゆく必要がある。

毎日聞く理由性からそんなシチ面倒くさい事をしなきゃならない。

おそらくコレはボクの顔のくまが取れるまで。

学校までは他愛のない雑談などして、あっという間に学校の校門まで着いた。

ボクと雪穂さんは昇降口で別れた。

教室に向かう為、上履きに履き替えて階段を昇って行く。

最近男女問わず、編入当時に比べて声を掛けられる頻度が高くなつた事が嬉しい。

新しい学校に溶け込んできたのかなあとちょっと自信がつくからである。

今日もまた声を掛けられるかなつと若干心が躍動やぐどつしていた。

案の定、結構挨拶される。

それとは対照的方向、背後から

「あゆむ様」

勿論振り向かずとも大体誰かは検討がつく。

ボクの身の回りのヘルピングや屋敷と学校間の送迎をしてくれたりする人。

あのいかついサングラスを掛けたあの男性ヤクザでしょ。

でもアノ人は実はボクにとっての救世主メシアでもある。

忘れ物を届けてくれたりしたしね。

忘れ物と言っても教科書とかそんな面積の大きいものではなくて、例えば物理の記録テープとかね。

しかも驚くことにそれはボクの部屋レンタルの机の引き出しの中に入ってたやつ。

あれを渡された時は目が飛び出しそうになったくらいの気持ちだったよ。

その日物理の加速度のレポート提出でその記録テープも出さなきゃいけなかった自分にとっては、

ソレを忘れることは死活問題であるから本当に平賀さんが届けてくれて助かったんだ。

一瞬、平賀さんが神ゼウスに見えてしまったものね。

まあ、信仰心はまだ薄いけど。

しかし平賀さんは屋敷の Cock 達の作った食事の味見をしたりして、ソレを指摘したりもしている。

雪穂さんによると平賀さんは調理師免許を取得していて、洋・和・中全ての頂点とも囁かれる

ワールドクッキングコンテスト
世界料理大会において毎年優勝しているとか。

雪穂さんの料理の腕も平賀さん仕込みらしい。

だからこの前の雪穂さんの手作りのお弁当も元を辿れば平賀さんが原点に位置する。

これはどちらを凄いと言っているのか………。

まあ、ここは二人とも凄いでしょ。

つまり平賀さんは多面的用途性があるわけだ。

すなわち執事というポストに一番最適な人物であろう。

たとえ、サングラスによっていかつい顔に仕上げられたとしても………。

外見で人を判断しちゃダメだって事だね。

そんな事を思いつつ後ろを振り返る。

しかし、そこにいたのは自分の予想とは全く異なる人物がいた。

「おはようございます」

スーツ姿に銀のフレームの眼鏡をかけている男性が立っていた。

髪は金髪で後ろで束ねている。

やけに黒のスーツ姿がこの人の顔にマッチングしている。

男子のボクから見ても眼鏡がよく似合う美男子であった。

少し外国人に見えなくもない。

要は今で言う”イケメン”なのかもしれない。

始めてみる顔………。

なんでボクの名前を知ってるんだろう。

「あつ、はい、おはようございます………」

戸惑い、言葉がたじろぐ。

ボクが困った表情をしているのを見てかすぐにその美男子は

「申し遅れました。私は源家関東本部専属執事お側御用室室執務長、
色部 愁作と申します」

初対面な事には変わりはない。しかも日本人。

聞いたことのない名前。

大体ボクの家って一体どういう構成されてるのさ。

しかもなんか名前の前に役職らしきものついてるし、なんか全国に部署がある的な匂わせ方もさせてるし……。

「ええ……こつ、こんにちは……」

更に戸惑いを隠せない。

「源家関東本部専属執事大御所執務室第一尉の水島みずしま 智法ともりの代行役として参上つかまつしました

次第でございます。

本日は、水島より言伝いんでんを預かっておりますのでそれをお伝え致します」

色部さんは眼鏡をクイッと上にあげる。

眼鏡の奥の瞳は真剣そのものだ。

「はい、なんでしょうか」

一呼吸置いてから色部さんは口を開いた。

「もうすぐ生徒会選挙を行い下さい。」

御当主様は期限をあゆむ様に仰っていらつしやらないかと存じますが、御意向と致しましては夏休み前までに行いたいとの事でした。

あゆむ様は生徒会長に立候補されるのですよね」

「ええ、はいっ」

「そう致しましたらまず支持者を最低3名お集めくださいませ。

その人数が集まり次第、学校長に申告してください。

この学校には生徒会という組織は存在していたものの今となつてはその中身がない状態なので生徒会選挙というのは

ここ近年行われておりません。従つて、こちらから申告をしなければ生徒会組織の骨組みができません。

加えて、この学校の生徒会という集団の令というのがありまして、私も詳しくは存じ上げておりませんが、

どうやら生徒会長以外の役職のポストは立候補制度を執つておらず、生徒会長による推薦によつて決定するとの事です。

故に、あゆむ様が前もつて何方かどなたをその各々（おのおの）のポストに位置づけるのかをご自身で決定なさつて、

その方々に事前にアポイントメントを取つておく必要があるようです。

ちなみに生徒会のポストの数はその年々（としどし）の生徒会長

によつて変動しています。

故にどの仕事をどのカテゴリーの中に入れるかも考慮すべき点になつて参ると思います」

突然言われて上手く脳で処理できず、処理できるまで少し時間を要した。

今まで忘れてた訳じゃないけどいつ選挙とかすればいいのかなつて思つてた。

そう思いつつも全然なにも行動を起こしてなかったんだけどね。

そういえば白木さんが前に生徒会に何かあつたみたいなこと言つてたな。

なんか色々やることが多そうだよ……………。

でも頑張らなきゃ！

「わざわざありがとうございます」

「では」

そう言つてボクに向かってお辞儀をし、色部さんは方向転換し、階段を下り始めた。

「あのっ」

ボクはその色部さんを引き止める。

そうしたのはちょっと気になることがあったからだ。

「はいっ？」

「水島さんどうかしたんですか」

「娘さんの運動会だとかでそちらに行っております」

あの人結婚してたんだ。

いいパパだね。

でもあの人って一体いくつなんだろう………。

ささやかな疑問だった。

「そうですか………」

若干、風邪でもひいたのかと心配してしまった。

「水島の家庭環境は以前は悪かったのです。

水島は源家の執事、仕事ばかりに一生懸命になっていて家族の事などに目をあまり向けていなかったのです。

ちなみにこの事は水島からケンカのあと相談に乗られました。

ケンカというのは夫婦間も含まれますが特に娘さんとの騒動は水島の心に大打撃を与えたようです。

その事がきっかけで水島は自分のあり方を見つめ直して、現在は家族仲円満なようです。

しかし今度は執事としての仕事おつてが疎かになってきています。

休みを取りすぎなのです。

まあ、でも以前よりも表情が豊かになった感じがします。

さつきメールで『アンパン二人三脚親子競争で一位になった』というメールとその写真が送られてきました。

家族全員満面の笑みで写っていました。

家族とはいいいいものですね……。っと、私はもう仕事に戻らなければ。

それでは失礼致します」

色部さんはお辞儀をしてそのまま何処かへ消えてしまった。

水島さんにそんなことがあったんだね…………。

ボクはその場でしばらく水島さんの顔を思い浮かべていた…………。
…………。

お読み戴きありがとうございました。

感想・評価等をして戴ければ至極の限りです。

また次のストーリーも見て戴ければ幸いです。

階段で色々と思い耽ってしまつていつの間にか予鈴の授業ベルが鳴つてしまつた。

ボクは小走りで階段を昇つてゆき教室の中に入った。

しかし途端に不審に思つた。

女子が一人も教室内にいない。

これは一体どういう事？

しかも男子はボクの席ら辺で屯つてゐるし。

ボクはまああまり気に留めなくて自分の席の方に歩き出した。

迷惑な事にボクの椅子の方にまで取り巻きの人が侵食していた。

仕方がないので机の正面に回つて鞆を机の上に置く。

「あゆむ?!」

と、取り巻きの中心から声を掛けられる。

この声は……

ボクは取り巻きの中心部に目を向ける。

すると取り巻きの中から手塚くんが出てきた。

「お、おはよう」

朝から屯って何してるのさ？それが一番聞きたかった事だった。

しかし今後の展開から言ってよろしくない方向の返答が返ってくると予測してその言葉を心に留めた。

「おはようさん。今日も目の下にくまが出来てるなあ」

またその事に触れるのですか。

まあ予想はしていたけどさ。

流石に面倒くさくなってきたのだよ……。

「うん、そうだねえ」

「なんだよその面倒臭そうな返答は？！ちゃんと心配してるんだぞ」

態度に出てしまった。やっぱり気持ちには逆らえないね。

少しトーンを落として

「それはどうもありがとう」

溜息混じりにそう言う。

明らかに気持ちが悪くない。

「俺はあゆむがそんなに寝不足だといつか倒れてしまっんじゃないかって……………」

あゆむに何かあったら俺は…………俺は……………」

そう言いながら手塚くんは腕を目の前まで持ってきて悲しそうに言った。

なんか悪いことしたかな。

「ごっ、ゴメンネ。ちょっと寝つきが良くないだけ！」

でも身体は大丈夫だからさ、心配しないでよっ」

ボクは無理矢理テンションを上げた。

そうだよ、心配してくれてる友達を無碍^{むげ}に扱っちゃダメだよ。

これは反省すべきだよ。

手塚くんは腕を若干目が見える程度に落として

「PCゲームがそんなに楽しいか？」

ボクは即座に悪態をつく。

もういいよ！

さっきのボクの反省は一体何だったのさ。

しかもボクの寝つきが良くないっていうのを無理矢理PCゲームに結び付けてさ。

ボクの態度に手塚くんは慌てる。

「わっ、分かったよ。悪かったよ………ところでさ」

手塚くんは額を掻きながらそう言った。

展開早っ！

本当に悪いと思ってるのかな。

それ以前にもうこんなやり取りしたくない。

なんか朝からお疲れモードに突入しそうだし………。

どうしてくれるよ、手塚氏。

「何？」

ボクはもう話が流れた事に機嫌を取り戻す。

元々あまり怒ってはいないけど。

ただ厄介なだけ………。

「あゆむは女子が好きか？」

唐突だった。

しかもこれって何の質問さ。

大体男子が男子を好きだってここで公言したら普通に怪しいですよ！

「それはそつだよ！普通女の子が好きじゃない男の子なんていないでしょ」

「じゃあ決定だ！！オシつ、皆！」

そう手塚くんが取り巻き達に声を投げ掛ける。

その声に皆がバツと振り向いて手塚くんの方を見た。

「あゆむが承認してくれた。

これからオーダーを発表するっ！」

「やったぞ！」

「ギター！！！」

「一丁やるかつ」

「張り切っていきましょ」

「乗り込むか」

周りの男達がいきなり調子付いた。

「ちょ、ちょ、待ってよ！」

何が起こってるのか全然分らない。

大体”承認”って何をボクは承認したの？！

この状況把握の格差、どうよ。

「何かあるのか」

不思議そうに手塚くんはボクの方に向き直る。

「おっ、大アリだよっ！！！一体何なの？

ボクが承認するとかよく分からないんだけど！」

両の掌を上うわに上げて、首を振った。

やれやれといったところなのだろうか。

本当に状況が掴めない。

「洞察力に欠けているな」

「いやっ」

「もっと勉強しろ」

「だからっ」

「無駄に生きるな」

「ちよっ」

「楽しめ」

何を言ってるんだ。

全く関連性のない言葉ばかり返してきて。

知的レベルが………いやいや、これは禁句だった。

「聞いてよ!」

「だからなんだ」

「何をしようとしてるの」

「これからパーティーだ」

「パーティー??」

今は学校だしパーティーとか、学校サボる気?!

遂に不良になってしまっの、皆?

疑問の念がこみ上げてきて頭が混乱した。

それを見たのか取り巻きの中の一人がボクに問いかけた。

「何故いつもこの時間には女子が来ているのに今は蛻もめけの殻だと思う？」

よく響く声だった。

その声でボクの頭の中に一つの疑問点だけが残った。

そうだ、なんで今日は女子がいないんだろう。

あまり気にしなかったけど、実はその事と今男子が考えていることに何か関連性があるのでは？

「なんでいないの？」

ボクの問いかけにハッハッハと高らかに手塚くんは笑う。

「実は今日は女子の身体測定の日なんだ。

ちなみに男子は来週。知っているか、もうすぐ独立機関である水泳委員会（Swimming Commissioner）が動く」

「まっまさか」

「もうすぐ2年に1度行われる水泳大会が行われるからそれに備えて身体測定を行い本来の目的である水着の新調だ……二つのチャンスという訳だ……」

「ってことは」

前方の取り巻き達は朝にも関わらず大いにテンションが上がっていた。

その中の誰かがオーツという雄叫びを上げた。

その雄叫びが今度はサッカー・ワールドカップでよく聞こえてくるあのリズムの取れた応援歌調になる。

それに合わせて皆は歌う。

「そうだ。身体測定開場に乗り込みだ！！！！ではオーダーを発表するっ！」

取り巻きたちは手塚くんの呼びかけにオオツ、オオツ、オオツとそれを盛り立てた。

手塚くんはなにやら自分の机の中に手を伸ばしてノートパソコンを取り出した。

そしてパカッつと開いて起動させた。それが立ち上がったのを確認してから口を開いた。

「まず最初に本隊は俺が指揮する。本部はあゆむに統括してもらっ

作戦内容は俺から各班のリーダーに配してある手元のトランシーバーを通して伝える。

尚、全ての決定権、責務はあゆむが持つ。

故にあゆむの指示は絶対だ！

それを前提として各班の発表を行う。いいか？」

「勿論だ〜！！！」

「ちょっと待つてよ！ボクはそんなの承認しないよっ」

その言葉で辺りはシーンとなった。

皆は表情が暗くなり俯いた。

手塚くんは溜息をつく。

そしてボクの耳元に向かって囁いた。

「聞くところによると、あゆむは生徒会長に立候補するんだろう？
」？」

「なっ、なんでそれを！？」

「俺の情報網をナメてくれるなっ」

「・・・・・・・・」

「選挙には票が必要なんだろう？これで確実に男子の票は信任の方に流れる。」

そうすると有利だろう、やり易いだろう？」

「いやっ、でもそんな方法で支持を得ても……」

「あゆむはあんなに盛り上がっていた男子達をこんなにもモチベーションを下がらせた義務がある。」

それでも何か？！あゆむはこのまま義務を果たさなくて、こんなにも傷心の男子を放って置くようなそんな冷酷人間だったのか？」

「そんなことは……ないけどさ……でも」

「お許しが出たぞー」

言葉は遮られた。

その御達しのなもので皆はまたすぐにさっきまでのテンションに戻った。

皆、とんだ芝居役者だっ！

「でも女子が許しはしないでしょ」

ボクは問題点を浮き彫りにしようと核心且つ痛い所を衝く。

なんとかやめさせたいという気持ちが大きかったからだ。

だってハイリスクだし……。

「バレなければいい。そうだよなあ？！」

手塚くんは首を後ろに倒して皆に投げ掛ける。

「「そっだーっ！！！」」

国会演説の与野党じゃないんだからそんな後押しする事でもなからうに……………。

ボクの気持ちは複雑。

それはボクだって男の子なんだからそりゃあ皆と同じ気持ちが少なからずある。

でも……………。

腕を組んだ手塚くんは皆の後押しを聞いて頷く。

「という訳だ。どうか皆の意向をもとい希望を踏みにじらないでくれ！」

その希望を実現し幸福へと代替するには溶媒としてあゆむという素晴らしい人間が必要なんだ。

そっだよなあゝ？！」

再度首を後ろにして皆に投げ掛ける。

「「あゆむ様は希望の使徒だゝ！！」」

それを受けて手塚くんは再び頷く。

そして手塚くんが更に押してくる。

「あゆむは俺達にとってかけがえのないたった一人の親友なんだよ！」

「「そうだ〜!!」」

なんか……嬉しくなってきたよ。

皆の目がキラキラ輝いている。

中にはお祈りを捧げている人もいた。

「もしバレたらどうするの？」

ちゃんと失敗した時の事を考えておかなきゃダメだ。

というかまだ進んでやろうとは思わなかった。

皆の意志はよく伝わったけど、かと言ってそれを肯定することは
困色を示す。

「バレた時の事を考えていたらやっていけるはずがない。

男なら突き進むしかないんだよ、あゆむ」

ボクはじっと考え込んでいた。

この状況をどうしようか……。

しかし状況の決定打は手塚くんのある一言で決まってしまう。

手塚くんは再びボクの耳元まで近づいてきて囁いた。

「この前白木さんと仲良く話してただろう」

「あれはただ挨拶してただけだよ」

そう弁明すると手塚くんは懐からある写真を取り出し、ボクに提示した。

その写真には教員室の前で白木さんとボクが笑っている所が写っていた。

ボクはギクリとした。

「こっ、こっ、これは……」

「これを白木さんのファンクラブに持って行ったらどう思うだろうな……」。

ちなみにファンクラブはこの学校の全学年を含め約3割。でもその数字をなめるなよ！

この学校の生徒数の30%という意味……わかるな？」

ボクの顔に焦りが見え始める。

いつ撮ってたの！？しかもこの距離からのアングル……。

これを持って行かれたら……、想像しただけで憚られる。

額からは汗が流れ出る。

恐るべし、手塚くん。

「分かったよ。じゃあこれからどうするの？」

「よし、それでこそ俺のいや、俺達のあゆむだ！では会議を始める」

皆はその声を聞くなり前からの席に詰めてどんどん着いていく。

手塚くんは起動したパソコンを持って前方に歩き出した……。

お読み戴きましてありがとうございます。

今回から少し繋がりのあるストーリー展開（前篇・中篇・後篇のよ
うな感じですかね）を繰り広げて参ります。

楽しんで戴ければ至極の極みです。

尚、感想・評価・応援メッセージなど送って頂けると執筆活動が更
に円滑になってゆき、更新スピードも早まるかと思うのでこの作品
に好感を持たれている方はどうぞ宜しくお願い致します。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

追記

11月に仕事之急遽入ってしまつて12月初旬までピークを迎えそ
うです。

その為誠に勝手ながら更新が出来ない状態になりそうです。

皆様には本当にご迷惑をお掛けしますが何卒ご理解とご協力の程お
願い致します。

加えて連載のストックも足りない状況となつていまして皆様のコメ
ントやご評価で

期待の声が多ければ無理をしてもこの一ヶ月間で1〜2話更新し
たい気持ちです。

しかしこれはあくまで意志ですのでそれが叶わない場合もあると思
いますのでご了承戴きたいと思います。

執筆者 Tale Jack

ボクは手塚さんの誘導で教壇に上って教卓の前に立つ。

パソコンを教卓の上に置く。

画面にはある建物の中の図面が映し出されていた。

手塚くんはエンターキーを押した。

するとその図面の中に赤いポインタが点滅する。

「昨日、図面は覚えてきたな？」

手塚くんがよく通る声で話し始めた。

「勿論だ」

「当たり前だ」

皆その返答を聞きながら頷いた。

「そうか、実地でもしトラブって緊急回路がどこか指示するときに図面が入ってないと指示伝達に支障が起きる。」

まあ覚えてきたなら問題はない、では本題だがポイントF12…

…」

そう言って計画を淡々と説明した。

図面が頭に入っていないボクとしてはどの話もチンプンカンプンだった。

でも一つだけ分かった事がある。

用は、ボクは責任者だからバレた時の保険のようなものとして今回の総責任者に重用したという事。

皆、それをボクには言っていないがボクが計画が分からないと手塚くんと言ったときに『あゆむは分からなくていい』

という返答が返ってきた時点で悟った。

という訳で現在教室内にいる……。

ここにはボク以外に誰もいない。

空っぽの空間。

ボクは自分の席に座って机の上に残されたトランシーバーと対面していた。

聞くところによると身体測定は夕方まで掛かるとの見込み。

「こちらP4、チェックポイント1、に到達。

これから天井裏ダストに潜入」

目の前のトランシーバーから無線が入ってきた。

「こちらP1本隊、ラジャー、こちらも床下ダストを通過中、

引き続き警戒態勢の下任務を追行してくれ」

会話の内容からして上・下を攻める気だろう。

もし見つかったらボクの責務になっちゃうでしょう。

不意にため息が毀れる。

ボクはただ聞いているだけだった。

勿論、事実上手塚くんが全て仕切っているからボクは何もできない。

故に、ボクはここで待っているだけ。

どうしよう……。

しばらく何の会話も聞こえてこなかった。

きっと今頃先に進むのに一生懸命なんだろう……。

そのうち授業終了のチャイムが聞こえる。

すると後ろの扉がガラガラという音とともに鳴り響く。

それを受けてボクは振り返る。

誰だろう？

もう帰って来たのかな。

「あれ？みなもとくん？？」

扉を開けたのは白木さんだった。

制服を着ていた。

今日は身体測定のはず、なんで体操服に着替えてないの？

そんな疑問が心の中で渦巻いていた。

「白木さん、どうしたの、今日は身体測定じゃ……」

「私だけ先にしてもらったの。」

今日は仕事が入ってるから……。

それにしてもなんでこの教室にはみなもとくんしかいないの？」

白木さんは教室内を見回す。

これは怪しがられるかも、と心の中で冷や汗かいた。

「うん、みんな今日は……、あぁっ、そうそう、みんな食堂に行ったんだよ！」

ボクはふと上手い考えを思いついたまま言った。

しかしそんなのは傍から見ればウソだとすぐにバレる感じの言い様だった。

それが言い放った後すぐに後悔としてやってきた。

ボクはもっと上手いウソを言う事が出来ないのかな・・・・・・・・。

昔からウソをつく事に慣れていない為こういう結果になり、みんなに悟られるのだけれど。

しかし白木さんの態度は意外だった。

「そうなんだあ。皆仲良しだねっ！」

みなもと君は行かなかったの？」

一点の曇りも無い程快活に信じてしまった。

その快活さはボクに安堵、いや不安さえ与える程だった。

「ボクは・・・・・・・・」

口籠る。

何を言っているかわからない。

何も思いつかないというのが本音だけど。

「仲間外れにされてるとか？」

白木さんは物凄く思案したような表情でボクを覗き込む。

「いつ、いや、そんな事はないよ。」

ボクは………っあ！そうそう、今日はボクは男の子の日だからっ」

「えっ？」

白木さんが目を大きくして声を上げて疑った。

しまったっ！

なんでこんな事を言ってしまったんだろう。

「いやっ」

右手を前に出し顔を背ける。

この後どうやってフォローしよう………。

ああ、ボクはなにをしてるんだろう。

ボクは心の中で自問自答していた。

「そうなんだあ！

みなもと君の家ではまだこどもの日が過ぎてなかったんだ〜！」

さっきの切迫した空気は何処へやら、白木さんはニッコリ笑って言った。

加えて明るいテンション。

良かった、いい感じに勘違いしてくれたようだ。

その勘違いの本元を問われると回答はないんだけど………。

「うっ、うん。そんな感じかなあ、アハハハ」

苦し紛れからの脱出。

それにより言葉がしどろもどろ。

もう自分が嘆かわしい。

「じゃあ、丁度良かったよ！」

白木さんが一旦ボクに目を向けて廊下の方に目を向けた。

「ほら、隠れてないで出てきてよ！」

白木さんがその方に声を掛けた。

誰かいるのかなあ。

次の瞬間――

「なんで私がコイツとやらなきゃいけないの？」

憤懣がたまっているのか物凄く不満たっぷり白木さんに投げかける。

そう、出てきたのは志倉さん。

そしてボクを威嚇した目で睨みつける。

なんかボクって志倉さんに嫌われてるみたい。

「だって二人の方が心強いから」

志倉さんは腕組をしてつま先を何回か打ち付けてから

「分かったわよ！爾菜がいいなら仕方ないわね」

何か腑に落ちないせいか若干眉間に皺がよっている。

白木さんは志倉さんに頷いて再びボクの方に視線を移す。

「みなもとくん」

「はい」

「お願いがあるんだけど……」

「なんですか」

「実は今度仕事で武道場の看板モデルをやる事になって、CMに出るの。」

それで色々なバリユエーションの武道をやるんだけど、武道監修の人たちがちよつと忙しくて教えてもらえないの。

季節には剣道を教えてもらっただけど………、どうしても拳を使う人が見つからなくて、

そうしたらね、みなもと君がこの間剣道部の人達を退散させたつて聞いたから、

え、えと………空手だったよね？

私に教えて欲しいの。………ダメかなあ？？」

「間違つてるわよ、爾菜っ。」

コイツに教えてもらっ事は出来ないわ。だって、コイツが出来るのは酔拳、だから無理でしょ」

志倉さんは吐き捨てるように言った。

「っえ、そうなの。」

あのスーフイズムの旋舞みたいなポーズから色々なワザを繰り出すアレの事！？

「聞いてたのと全然違う」

ちよつと待つてよ!!

酔拳つて何?!

ボクつてまだ未成年だよね?

お酒飲めないし、そんなの見たことないし、第一習った事もないし、見せた事もない。

第一怪しいでしょ、学校でそんなの生徒に使つてたら。

飲兵衛じゃないんだからさ……。ハアー。

「ちよつ、ボクは空手だつてっ」

志倉さんに必死に訴えかける。

「ハア?.....アンタは酔拳でいいのよ、あんな意味の分らないようなの.....第一、一番それがアンタにお似合いよ!ふんっ」

またしても憤懣たつぷりな口調でボクに言う。

「いやいや、完全に異質のものだつて!!じゃあ、志倉さんは酔拳見たことあるのっ!?!」

ボクは自分の内心がバカにされてるようでどうにも腹の虫がおさまらなかった。

こう見えてもボクはあんまり怒ったことがない。

大抵は心の中で処理出来得るカテゴリの中に分別できる事だから。
しかしながら今回は・・・・・・・・。

大体最初からボクの何が気に食わないのさ。

そう心の中でいきり立っていた。

「ないけど、どうせ同じようなものでしょっ」

「見たことないのにそんな風に決め付けるのはいけない事だと思うなっ。」

大体ボクは志倉さんを助けるためにあんまり気の進まなかった武道を使ったんだよ」

ボクがそう言つと志倉さんは目を細めて

「誰がそんな事頼んだ」

サラリとそんな事を言った。

その瞬間ボクのボルテージが更に急上昇した。

腸が煮えくり返るかと思うくらい腹が立った。
はらわた

そりゃあボクは頼まれてもない事をしたかもしれない。

第一ボクの好意に対して別に感謝はしてもらわなくてもいい。

そんな事は端ッから望んでない。

しかし少しぐらい認めてくれたっていいと思う。

志倉さんはボクの事を対等な人間と判断してくれてない。

それが一番のボクの怒りの根本だ。

ボクの事を何も知らないような子が分かったように判断しないで欲しい。

「誰がつて・・・・・・・・」

言葉にならなかった。

あまりに頭の中に色々な感情が過よぎってしまった。

「季節っ！」

突然白木さんが志倉さんに一喝入れた。

その華奢な身体からはあんまり想像できないような喝の入れ様だった。

ボクもその喝を聴いた瞬間今まで思っていた事が抜け落ちて真っ白になってしまった。

志倉さんは目線を若干下目にしながら白木さんの方を向く。

そしてゆつくりと目線を合わせる。

口元が少し震えている。

「今のは折角季節を助けてくれたみなもと君に対して失礼じゃない？」

「だって、あたし助けてなんて一言も言っていないんだもん。

コイツが勝手にしたことだし……」

若干さつきに比べて素直な口調になっていた。

志倉さんって白木さんと信頼関係で結びついてるんだなあ……

「あのね、季節。とどのつまり、剣道をやっていたって喧嘩には勝てないと思うの。

そこでみなもと君が助けてくれた。

もしあそこでみなもと君が助けてくれなかったら、季節は今病院にいるかもしれないわ。

加えて、季節の大好きな剣道だって出来てないかもしれない、あんな大勢相手にして大怪我して二度と出来なくなってるかもしれない。

だからそこは感謝すべきじゃないのかな？」

白木さんは強い口調から教諭するような声へと変遷していた。

ボクの気持ちはどんどんおさまってゆく。

白木さんがボクの心を代弁してくれたみたいに……………。

「やっぱり、分かんないっ!!」

そう言って志倉さんは何処かへ消えてしまった。

白木さんは深い溜息をついた。

「ごめんなさい。季節は心の中ではみなもと君の事分かってると思うの。」

だけど、上手く態度に示せない子なの、昔からそう。

分かってあげて……………」

白木さんに言われると志倉さんがなんだか可哀相に思えてくるのは気のせいだろうか……………。

「うん……………」

「ありがとうっ!で、さっきの話だけお願いできるかな?」

「ボクなんかで良かったら、喜んで」

「じゃあ早速明日から特訓ね。」

場所はまた連絡するね！」

そう言って教室から出て行ってしまった。

日が落ちてまた日が昇った。

いつもと同じく雪穂さんと車で登校して、教室に入った。

教室の中には昨日いなかった女子がいた。

男子はと言うと全員が肩を落としている。

昨日の夜知ったことなのだが、ボクはあの後すぐに帰ってしまった。すっかり手塚くん達の事を忘れてしまっていた。

手塚くん達はあの後、順調に駒を進めて遂に女子の測定会場の真上のダストまで行った。

しかしそこには先客がいた……………。

理科教師、といえば分かってもらえるかな？

毒閻先生がヨダレを垂らしながら覗き込もうとしていたらしい。

しかし運悪くそのヨダレが格子の間を通って保健の先生に垂れてしまつて、気づかれたらしい。

だがその頃には手塚くん達は逃げ出していた。

ここで更に不運なことに理科教師が手塚たち達の存在を公言してしまっただが故、手塚くん達も芋ずる式に網にかかってしまったのである。

手塚くん達はここで保険役に抜擢してあつたボクの存在を道連れにしようとしてかバラしていたが、

教室にはボクはいなく結局ボクは無実の罪を着せられたという事で無罪とされた。

女子の間からはボク以外の男子は皆評価がガタ落ちになってしまった。

でもボクの男子からの評価がガタ落ちになったかというそれは違う。

男子は男子でどこかで諦めがついているらしく、ボクの事を恨んでいたりだとか、怒っていたりだとかはしていなかった。

ただただ、落ち込むばかり。

なんとか慰めてあげようかな……、そう思いつつ席に着く。

後ろで顔を伏せている手塚くんに声を掛けようとしたらアナウンスが流れた。

（全校生徒に告ぐ、これから臨時集会を始めますので講堂に集まっ

て下さい)

男子は最初項垂れていたが、重い腰をようやく上げて講堂に向かった。

勿論移動中は会話一切なし。

ブルーな雰囲気満々。

ボクはそんな男子の表情を見ながら講堂に向かった。

講堂はうちの学校は凄かった。

オペラホールみたいに備え付けの席があつて、リクライニング式。全部で10000人くらい収容できそうくらいの大きさだった。

しかも地面にはレッドカーペット、ステージの幕は真っ白なシルク。

ボク達は前の方に詰めて着席した。

周りの人も後からどんどん着席して行く。

ステージの真ん中には壇台が置かれ、その上にはマイクがあった。

「手塚くん、もう機嫌直したら?」

ボクは隣で肩を落としている手塚くんに声を掛ける。

「……………うう、ハァ……………」

もう不幸せMAX。

なんか周りから暗い色の空気が漂ってる感じなんですけど……………。

ボクはどうしたらいい？

どうやって慰めよう。

（えー、マイクのテスト中）

女の人の声が聞こえた。

おそらく先生かなんかでしょう。

何が始まるんだろう。

（本日は皆さんに重大なお知らせがありまして、集まってもらいました）

周りがざわめく。

（実は、現理事長が辞表を提出され、時期的に異例ではありますが新しく理事長を迎え入れる事になりました。

現理事長である朱鷺等 麻耶は本日付で解任となり、明日からは新理事長にならせられる源 雄司に引き継がれます。

それでは双方の挨拶を述べていただきます。）

圧巻で仕方なかった。

周りの人はざわめきからどよめきに変わり、さっきまで肩を落としていた手塚くんが顔を上

げて興味津々とステージの方を向いていた。

お読み戴きありがとうございます。

今回は如何でしたでしょうか？

面白さのエッセンスをあまり出せませんでした。このカテゴリ
の中であればこれぐらいでしか頻度的に出せませんでした。

そこは申し訳なく思っております。

しかし驚きの面とのドッキングを統合して面白いと評価して戴
けるなら嬉しい限りです。

次の更新は12月中旬になるかと思えます。

何卒ご了承ください。

またご評価・ご感想お待ちしております。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

Regular Chapter 16 〈Legwork〉（前書き）

ご閲覧ありがとうございます。

大変長らくお待たせしてしまい、申し訳なかつたです。またこれから執筆活動を再開して参ります。

加えまして、PV50,000越えを果たしました。これも偏に読者の皆様のお陰です。

誠にありがとうございます。

これからも読者の皆様にご愛顧を賜る事が出来れば至極の至りです。

講堂から教室に移りその後の授業はやり過ごした。

勿論、授業内容なんて頭に入っではない。

放課後になって廊下に出てみると雪穂さんが立っていた。

ハット目が合う。

いつもは会った言葉がすぐに口から出る雪穂さんも今日はお出な
かった。

ボクも同様に……。

多分理由は同じ……。

何故ボクのお父さんがこの学校の理事長に就任したか、と言う事
だろう。

「え、えっと、ビックリしました。

あゆむさんのお父様が理事長に就任されたなんて。

私の父からも聞いていなくて、その……あゆむさんのお父
様は凄いですね」

やっぱり、雪穂さんもそう思ってたんだ。

「ボクも驚いてます。

まあ、普段は住んでる会館が離れているのであんまり話す機会がないからかもしれないが……。

それにしてもなんでこの学校の理事長なんかやるんでしょうか？

確かお父さんは源グループを束ねる存在のはず。

にも拘らず、ここに赴いて理事長に就任した。

意味合いがあるのでしょうか？ボクはどうしてもそこが理解できません」

自分が思っていることを雪穂さんに真っ直ぐ伝えてみた。

もしかしたら、勘のいい雪穂さんならなにか察しがつくかもしれない、そう考えた。

「私も何も分かりません。

色々考えては見たのですが、どれもこれも架空論で核心をつけたと納得できるような論に辿り着けないんです。

お役に立てなくてごめんなさい」

雪穂さんが苦笑いをしながら言った。

まあ、雪穂さんでも分からない事もあるよね。

「いや、気にしないで下さい。

お父さんは気紛れな性格が若干垣間見えた事象もありましたので、今回もそのケースかもしれせんし」

雪穂さんはワンテンポ早く返答した。

「それは……違うかもしれません」

「どういうことですか」

「あゆむさんのお父様である源 雄司氏は昔、ある会社で社長不在中の臨時取締役を任されました。

不思議な事に、その会社はその社長が不在になったのを見計らったかのように株価が急降下し、ストップ安手前までなりかけた時に、

源 雄司氏は何故か経営破綻寸前の会社に自社の残高全てを投資しました。

勿論、そんな事をすればその会社で働いている人たちは思っわけです。

こんな会社に投資するなんて自滅行為だと。

しかし事態は一転、覆る事になります。

不思議な事にその直後に株価が急上昇、投資したお金が80倍に膨れ上がりました。

以後、その会社では源 雄司氏は伝説として語り継がれているうな……。

ですから、あゆむさんのお父様が意味のないことなんてしないと思っんです。

勿論確信はありません、でもこれは私の今までの勘を働かせて言える事なんです」

ボクのお父さんって一体何？

そんなに凄い人なんだ…………。

「そんなに凄い人なんですか、ボクのお父さんは？」

「凄い方だと思います。」

ところであゆむさんは、最近お父様と接触された時に何か仰ってなかったんですか」

ボクは頭の中にある記憶の引き出しを探ってみたが、額が熱くなるばかりで返って思考力が低下する。

「何も言ってなかったと思います」

「そういえば、あゆむさんのお父様は何かを伝える際に直接赴かれるのですか？

それとも他に……………」

お父さんからボクに・・・・・・・・・・?

そうだ、水島さんや色部さんを介してボクにいつも何かを伝えてくる。

「お父さんに仕えている人がボクに諸事を伝えてくれます。

最近では生徒会を立ち上げるとか言っていました。

加えて期限まで提示して・・・・・・・・・・」

一瞬雪穂さんの目が逸らされたように見えた。

まあ気のせいだろう。

「そうですね・・・・・・・・・・。ではその事かもしれませんね。

にしても確証はありません。調べてみる必要がありそうですね」

もしかして雪穂さんも一緒に調べてくれるの?

加えて興味も持ってるし・・・・・・・・・・。

「調べてくれるんですか」

そうぼくが言うと、雪穂さんはニツコリ笑って

「ええ、私も大いに気になる事ですから。

あゆむさんのお手伝いをさせて戴きたいと思います!」

なんか申し訳ないけど、折角手伝ってくれるって言うんだし、ここはご好意に甘んじて。

「是非お願いします！」

- - - - -

その後、ボク達は色々な人に聞き込み調査を行ったが誰もかれも知る人はいなかった。

まあ当然の事かもしれないけど。

蛇足として、ボクの担任教師にも聞いてみた。

その時は丁度、先生は女子トイレから出てきたところらしく、手をピンクのハンカチで拭いていた。

「先生」

「あゝら、源君じゃないの！」

なあゝにいい？！私に食べて欲しいの？

でもダメよ、今はココは学校だから。

謹慎処分期間がようやく終わって学校に出て来たばかりなの・・・
・・・でもでも」

雪穂さんの口元が若干つりあがっている。

雪穂さん・・・・・・・・・・引いてる。

というか、会った瞬間に食べて欲しいの？という問いかけを生徒にするのは非常におかしいよ。

そのせいで雪穂さんに誤解されたらどうするの！？

というかもう誤解されてるかもしれないけど・・・・・・・・。。

あゝ、もう本当に厄介な人なんだから。

まあそれはココに転校してきた最初の頃に悟った事だけど。

「先生、今日は聞きたいことがあるんです」

ボクはスルーしながら言った。

「源君がそこまで積極的に迫ってくるんだったら、この柊 英理は折れるしかないわ。」

イヤァーン。その積極さ、この身体で受け止めきれるかしらあゝ？！

ダメよ、英理！！そんな弱気になっちゃダメ！

大丈夫、英理、行けるわ、英理！

よし！！欲情は現在マックスよ！！いま注入したから！

源君も欲情してるかしら？うん、その表情・・・・・・・・・・してるわね！

じゃあ、何処でする！？

保健室？それとも屋上？それとも・・・・・・・・・・教員室、アハア～ン！！

公衆プレイねえ？！ソソルわあ～」

スルーにスルーで返した！？

ちよつと・・・・・・・・、この人は一旦暴走すると止まらないんだから。

ボクは隣にいる雪穂さんに目を向ける。

「いつ、いない？」

後ろを振り返ってみると、雪穂さんは口に手を当てて変態教師の方を見ていた。

そしてボクにゆっくりと目を移す。

潤目だよー！！

もう完璧に誤解してる！

ここで一刻も早くこの変態教師を止めなければ。

先生は右手に持って、手を拭いていたハンカチ今度は口に咥^{くわ}えて、
「グスン、しっ、詩条さんと出来てるによぉー！！アアーン！！」
変態教師は叫ぶ。

ハンカチが破けそうになるかと思うくらい、口に咥えてハンカチ
を下に引っ張った。

そして身体全体を左右に振る。

駄^{こね}々を捏ねているへそれにしては過度であるや幼稚園児みただ
った。

身体を左右に動かすもんだから、眼鏡がズリ落ちてきている。

「というかそれ以前に先生と出来ていないでしょ。

そういう関係にも発展した事は今までに一度だってなかったです
しー！！」

すると先生はさらにハンカチを下に引っ張る。

すると遂にハンカチがビリっという音と共にちぎれた。

それでもハンカチがまるではちぎれていないかのようにそのまま
の行動をとっている。

「グスン、あっ、あの時の事を忘れたによぉー！！アアーン」

「そこで何をやってるんですか、柊先生」

背後から突如現れたのは教頭先生だった。

「キョウトウー、源君がいじめるうゝ!!!」

そう言つて、教頭先生の禿頭を滅茶苦茶に撫で回した。

せつ、先生!?

それはこの前の二の舞に……。

「ムキィー!!」

- - - - -

後はこの間と同じ結果に。

翌日、柊担任はまた謹慎処分をくだされる事となった。

「ご愁傷様です。」

ボクは雪穂さんに必死に弁解して、なんとか誤解は解けた。

本当にあの変態教師は厄介なんだから。

ボクが少しでもあの人を頼りにしたのがバカだったかもしれない。

その後、ボク達は諦めて帰る事に決めた。

その為に、ボク達はそれぞれ教室に戻ろうとした時に、突如、ボク達の前に

「ちよつと待った！」

今日こそ、雪穂さんは私と帰らせて貰う！」

「きつ、木野城くん!!」

木野城くんは髪を一回はらってニヤリと笑った。

時は夕方。

夕日が何故か木野城くんが笑ったことで垣間見えた歯に反射した。

なんかキザにきめてきた……。

「じゃあ、一緒に帰ろうよ」

ボクは双方の中庸^{メソテース}を提示しておいた。

ボクがココで拒否したら、待っててくれたへ？　木野城くんに悪いと思った。

「何故君に従わなければならないんだ？」

第一、君の父親にしたって、あんなに非道な事をして。

元理事長、同様に朱鷺等嬢に申し訳ないと思わないのか？

全く、君も君の父親も気が知れないよ！」

非道な事？

ボクのお父さんが？！

って事はまさか……

「もしかして、木野城くんはお父さんが何でココの学校の理事長になったか知ってるの！？」

「知らないのか？！息子なのに信じられん。

まあ、知らないなら教えてあげよう！

君の父親である、源 雄司はこの奏応学園を……買収したんだよ」

仕事もようやくピーク期を過ぎ、これからまた執筆活動に勤しめそうです。

更新を心待ちにしていらっしゃった方、この作品に興味を持って戴いてる方、本当にお待たせしました！

お読み戴きありがとうございました。

少しシリアスな面も含めてありますが、そこはコメディ・驚きの部分とドッキングさせてお楽しみ戴ければと思っております。

加えまして感想・ご評価を賜れば今後の執筆活動にハリが出て創作意欲に更に拍車が掛かりますのでよろしくお願い致します。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

追記

ランキングタグを設置しましたので月に一度投票して戴けると感激です。

勿論、面白い・関心を少しでもお持ちの方に対してです。

ご協力宜しくお願い致します。

「詳しく教えてくれるかな」

木野城くんは顔をプイッとそらして、

「この学校を無理矢理、源グループの資金を使って買収したんだ。

まあ、それに対抗するだけの力がこの学校にはなかった……

・それは大部分の企業等も当てはまるが。

第一、君は源 雄司の息子なんだから自分で聞いてみたらいいじゃないか」

そう嫌味気に言った。

そうだ、ボク自身が聞いてみたらいいじゃないか。

こんな周りクドイ事なんてしないで。

ボクはすぐに理事長室に行く事を決意した。

お父さんの真意が知りたい。

なんで源グループの資金を使ってまで奏応学園を買収したのか……

ボクはその場から走って理事長室まで掛けてゆく。

「あゆむさん？」

雪穂さんが行き遅れた様子でボクの行動に疑問を呈す。

そして遅れを取り戻すべく

「晴紀さん、すみません。今日はお一人で先にお帰りください。

私は諸事がありますので。では失礼します……」

雪穂さんはボクに遅れをとりながら、ついて来る。

「ちよっ、雪穂さんっ！」

木野城くんは取り残された。

そして落ち込んだ様子でトボトボと昇降口に歩き始めた。

- - - - -

理事長室の前にやっと着いた。

走ってきたので多少息切れしていた。

ここまで来るのに結構距離があった。

第一、階は変わっていないのに、なんでこんなにも距離があるのか。

改めてこの学園の規模に驚く。

遅れをとりながら、雪穂さんはボクの隣に追いついた。

「あゆむさん、走るの速いですね」

自分でも速いのかよく分からなかった。

しかし雪穂さんを見ると、ここまで走ってきたわけではないのにこんなに追いつくのが早い。

小走りをしてきたのかな。

それにしても、雪穂さんから一息も息切れが生じていない。

雪穂さん………凄い。

「っさ、入りましょうか」

雪穂さんがドアノブの方に手を差し向ける。

「はい」

ボクはそれに従って、ドアノブに手を掛ける。

「っあ、そうだ」

こういう所に入る時はノックが必要な事忘れてた。

あまりに気持ちが逸^でつてしまつて後先考^でえなかった。

(コンコン)

暫く経つても返事がない。

おかしい……。

誰もいないのかな。

そう思いつつも中が気になる。

無意識の内にドアノブを捻^{ひね}る。

そして引いてみる。

ドアはゆっくりと手前に開けた。

空いてる!?

中を覗いてみるも、中は蛻^{もぬけ}の殻のように見える。

見回してみるも誰もいない。

これは入ってしまったもいいのかな。

「どつでしようか」

雪穂さんが背後からそう声をボクに問いかける。

ボクは後ろを向く。

「誰もいませんね……。いつ、いいんでしょうか、勝手に入ってしまったも……。」

ここは理性を働かせるべき場面なのかもしれない。

雪穂さんの性格から予測するに、やっぱり誰もいないのだから入らない方が良いのではという意見だろうね。

雪穂さんに聞いてみたけど、その可能性は低いのでボクは覗き込むのをやめて、引き返そうとした。

「何処に行くんですか？」

雪穂さんがボクを引き止めた。

つえ、何故引き止める！？

雪穂さんの意見としては……。

「何処って誰もいないから帰りましょうっていう流れじゃないんですか」

久しぶりに空気を完璧に読むことが出来たと確信していた。

しかし、それはいとも簡単に覆されてしまうことになる。

「誰がそんな事言っただんですか？折角ここまで来たのですし、入るべきだと思います！」

雪穂さんが声を強めてそう言う。

久しぶりに空気を読んだと思ったのに……………。

雪穂さんって意外と……………。

「そ、そうですか、じゃあ入りましょうか」

ボクはもう一度ドアノブに手を掛けて今度は中に足を踏み入れた。

中は巨大な書棚が両端にあり、中央手前には黒革のソファが各々対面して4つ置かれており、中央奥には重厚さが感じられる左右に広い執務卓。

極め付けには奥の両端にはそれぞれ観葉植物が置かれていた。

夕日が燦々と降り注げるほどの大きな窓。

大人が縦に二人並んでも尚、余裕がありそうだ。

それが左から右に所狭しと並んでいる。

そしてブラインドが開いた状態で上から垂れ下がっている。

さすが理事長室。

まず最初に気になったのはこの大きな書棚。

こんな大きな書棚に何が入ってるんだろう……………。

中を覗きこむ。

しかし……………

「何もないっ」

そう、大きな書棚の中には何も入っていなかったのだ。

これは一体、

「多分、朱鷺等理事長が退任されたのでそれに関するモノは全て取り払われたのではないでしょうか」

雪穂さんが後付けした。

「確かにそうかもしれませんがね」

ボクはそういいながら辺りを見回す。

そして執務卓の引き出しを悪びれを感じつつも覗くがやっぱり何もない。

ホントに蛻の殻だ。

「そういえばあゆむさんのお父様は明日からこちらの業務に就かれるのですよね。」

という事は今日はもうお帰りになったのではないのでしょうか？」

「ああ、そんな事誰かが言っていましたっけ」

確か司会進行役の女の人だったっけ……………。

詳しく覚えてないけど。

(コンコン)

「ゆうじゅ??いますよねえ、失礼しますよ」

誰かがドアの向こう側でノックしてきた。

誰だろう……………。

しかもボクのお父さんの事名前で呼んでるし……………。

お母さんじゃないしなあ……………。

もっ、もっ、もしかして……………お父さんのあつ、あつ、
ああいじん?ですか!?

そっ、それは息子的立場から困りますよ。

お母さんにもしもバレたら……………阿修羅だよ……………修
羅場だよ……………。

第一、ここ学校だよ。

公共の場に愛人呼んで来るなんてどんな神経してるのさっ!?

もう…………。

ボクは固唾^{かたず}を飲んでドアの方を見つめる。

ドアはゆっくりと開かれる。

しかしドアを開けたのは…………。

こっ、この人がお父さんの愛人?!信じられない。

というか信じたくない…………。

いやいや、でも普段からこの人を見てるけど全然そんな事は感じられないんだけど…………。

雪穂さんの方を向く。

雪穂さんも非常に驚いているのか、目を大きくしていた。

ボクも驚くしかなかった。

後ろから差し込む夕日がボク背中に当たって、前方に等身大より少し大きい影が出来ていた。

お読み戴きありがとうございました。

お楽しみ戴けましたでしょうか？

何か、ご質問・疑問点などございましたらメッセージの方をご利用下さい。

加えまして、この作品に少しでも関心を持って戴けてる方に加え、面白いと思って戴けている方、評価・感想・ランキング投票（月に一回ずつ）の方も宜しくお願い致します。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

S u b C h a p t e r 1 } K a n a k o } (前書き)

今回は作者T a l e J a c kが監修・監督に回り、小説に関して経験不足の代筆者である私が経験を積むという趣向から以下のストーリーを執筆しました。

いわゆるサブチャプターです（笑

何卒不慣れではありますが、宜しくお願いします。

少しでも楽しんで戴ければ幸いです。

代筆者 じい

「やっぱり、暇だわ」

柊加奈子はマンションの一室のソファで一人、寝転がっていた。

テレビには、いつもは職員室で見る昼のワイドショーが流れている。薄暗い部屋は一層、加奈子の感情を錯乱させる。

「まあ、やんなっちゃう。何が謹慎処分よ！ わたしはただただ。を××して いただけじゃない」

もちろん書けない内容をしたのである。男性教員ならすぐ処分の内容である。ワイドショーで報道されなかっただけでも良かったものの、加奈子はまだ文句があるらしくぶつぶつ独り言をかれこれ1時間ぐらい言っている。悲しい三十路である。

またビールの空き缶が増える。純粋な麦ビールを買うお金はない。今話題の第三のビールである。そしてこのお酒にも加奈子の愚痴が飛ぶ。

「なにが、本物と変わらないですよーだ。違う中の違うじゃない！ おいしくない！ おいしくない！」

まだ中身が少し残っている缶をゴミ箱に向かって投げつける。勿論入らない。そして、またソファで暴れる。はたからみたら駄々っ子である。

「あああああ、もうやだ、やだ、やだ、やだ」

そして、加奈子のはのっそりソファから起き上がり、リビングの置
くに向かう。そして部屋の奥まったところにあるクローゼットの前
で立ち止まった。そしてまた独り言。

「でも私、キョウトウーの事は恨んでないんだ。私のためを思っ
てやってくれたんだもんね！ キンシンシヨブン」

クローゼットのに寄りかかり、天井を向く。

「だってキョウトオー優しいしい、渋いしい、ニヒルだしい・・・
それに・・・」

加奈子は振り向くと、クローゼットの戸に手を掛ける。そして勢
いよくあける。

バツ

そこには加奈子のいう、優しくて、渋くて、ニヒルな教頭の写真
が所狭しと貼ってある。その数は電卓でも使わないと数えられない
ほどである。加奈子はそれを安息の地に來たような顔で、目をきら
きら輝かせ見つめた。

「キョウトウー様。私の王子様」

普通の人が見たら何処から見ても王子ではない。脂ぼい禿げた親

父である。加奈子のいいところは外見で人を判断しないところなのか、それとも目に異常な病気を持っているのか……。

「いつもどこでもこっさり後ろから見てますよ、キョウトウー様！」

そして教頭の顔写真も手に握ると軽い口付けを交わす。

ブルルルル……

加奈子が余韻に浸っていると、電話が掛かってきた。

「もうお！」

機嫌を損ねた加奈子が電話に出ると

「もしもし、柊先生。教頭ですけども……」

それは王子様からの連絡だった。いつもなら録音機をセットしておく加奈子だがそこまでの準備はできていなかった。

「あ、キョウトウーさま……じゃなかった、キョウトウーおはようございます。どうなさりましたか。」

突然の電話にいつもは使わない敬語（意識的に）になってしまう。

「いや、明日から学校きていいから。校長には私から言っただけか。それだけね。じゃあまた。」

加奈子があつという間もなく、電話を切られてしまった。

加奈子は電話を置くと、またクローゼットの写真に目をやり、独り言を呟く。

「もおゝ恥ずかしがり屋さん」

そしてクローゼットを閉め、出掛ける準備をすることに決める。

今日も教頭の後を付けに夜の街に出る。

S u b C h a p t e r 1 ～ K a n a k o ～ （後書き）

加奈子さんは変態ですっ！！

これからも加奈子さんと教頭をヨロシクお願いします！

一方、公に私の小説を公開した事がなく、今作が初めてです。

何か、感想など寄せて貰えると嬉しいです！

あと、T a l e J a c kさんの本編の作品の評価・ランキング投票等も、私の作品を含め、面白いと感じて戴けた方は宜しく願います！

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

代筆者 じい

ボクの前方のドアから入ってきたのは……

「みつ、みなもと君！なつ、なんでここにいるの？」

この高く透き通った声の持ち主、そう……

「しつ、白木さん！！ボクも同じ疑問を投げかけたいんだけどっ」

なんで白木さんが理事長室に入ってきてるの？

絶対にボクのお父さんとは知り合いになり得ない、でっ、でもさつき”雄司”って呼んでたしなあ。

「あたしは、そのっ、社長、っあっ！違う違う。次期源理事長に話があつて来たの！！」

みなもと君こそなんでココに？しっ、詩条さんまでいるみたいだけど！？」

白木さんはボクの隣に立っている雪穂さんに目を向けて、驚きつつお辞儀をした。

雪穂さんはゆっくりと落ち着いた様子でそれを返した。

やっぱり雪穂さんって”きよどる”ことなんてないのかもしれない……い……

ボクはこんなにも、まさかの場所で白木さんと顔を合わせてきよどツてるのに。

それにしても、ボクのお父さんに話しかぁ・・・・・・・・・・。

一体何を？

まあ、そこはプライバシーに関する所だから関与はしないけど。

でもさつき”雄司”って確かに呼んでたよね？！

あれは一体何故に・・・・・・・・・・。

理由を聞きたかったものの、聞くタイミングは過ぎてしまった。

現在はボクに質問を投げかけられている。

あんまりいい文句が浮かばない。

どう返答していいんだろう・・・・・・・・・・。

白木さんの目はボクの方を向いている。

「ぼつ、ボク達はその・・・・・・・・・・」

とボクが言いかけようとした時に

「私達はここで朱鷺等理事長が何か置き忘れたモノはないかと探してたんです」

「そうなの！？それでここにいたんだあ」

白木さんの目線はボクから雪穂さんに移った。

雪穂さん、ナイスフォロー！

「そうそう、みなもと君？」

白木さんが改めてボクを呼びつける。

「なに？」

「今日の放課後にあたしの武術の監修・監督してくれるんじゃないかなかったの？」

手紙が机の中に入ってたでしょ！？」

ああっ！そうだった、忘れてた。

冷や汗がジワジワ湧いてくる。

白木さんに悪かったなあ。

ん？！そういえば、放課後に机の中の教科書とか一冊ずつ確かめながら鞆に入れて、最後に確認として中を見たけど何もなかった。

「それってさ、いつ入れたの？」

「昼休みにちゃんと入れたよっ」

昼休みか、昼休みはボクは雪穂さんと食べてたけど……………。

蛇足として、木野城くんは他の娘と食べてた。

「放課後確かめてみたけど……………そんな手紙なかったんだ……………」

「なかった?! おかしいなあ……………。あたしちゃんと入れたつもりだったのに……………」

どういう事!? 入れてたものがない?

すると今まで沈黙していた雪穂さんが口を開いた。

「整理しましょう」

雪穂さんは落ち着きを払いながら話の主導権を握った。

「あゆむさんは昼休みは、昼食を私と一緒にしていました。

昼食を食べ終わった後、少し雑談などをしてから教室に戻られました。」

授業の予鈴も鳴りましたので。

なので昼休み中はあゆむさんは教室、つまり机の周りにいなかったわけです。

あゆむさん、これは事実ですよ?」

雪穂さんがボクに問いかける。

「はい、その通りです」

ボクの回答に頷いてから今度は白木さんに目を向ける。

「一方、白木さんは昼休みにあゆむさんの席の中に手紙を入れた。

間違いありませんね？」

今度は白木さんに尋ねる。

白木さんはアイコンタクトをしながら

「間違いないですつ、席を確かめてから入れたんです」

そう確信を持ったように言った。

「あゆむさんや、白木さんの証言を統合しますと行き着くところは
どうしても一つです！」

「何者かに盗まれたという事ですか？」

ボクは先をよんでから雪穂さんに問いかけた。

「ええ、そうしか考えられません」

雪穂さんの目線が若干下に下がり、回答が少し溜息交じりだった
のは気のせいだろうか……………。

「一体誰が？何の為に？」

白木さんは独り言のようにそう呟いた。

「そこは私も存じてはいません」

雪穂さんは誰ともなく投げかけられた疑問に、自らが答えた。

「ですが……………」

雪穂さんは何かを躊躇うかのように言葉を切った。

そして少し時間が経った後、

「言える事は……………、あゆむさんと、白木さんの間に結ばれた約束事に対して、良くないと思っている人です。」

残念ながら私はあゆむさんと白木さんの間に起きている事象・人間関係を全て把握している訳ではないので分かりかねますが……………」

雪穂さんのお陰で話は平行線を辿らなくてよくなりそうなの……………かな？

ふとボクの右太股がみぎふとももバイブによって震える。

ボクは右ポケットに手を入れて、その原因元となる携帯を取り出した。

見てみると着信だ。

誰だろう………。

そう思って二つ折りになった携帯を通常状態にする。

画面には『手塚くん』の文字が。

何かこれから何処かに行くから、そのお誘いかなあ。

毎回色んな所に行つて結構帰りが遅くなるから最近平賀さんが心配している。

この間なんて『あゆむ様に風邪をひかれてはこるんです………』

といってメチャメチャ落ち込んだ。

落ち込まれるのって怒られるのより堪えるんだよなあ………。

なんとか今週くらいは早く帰らなきゃ。

出ようか出まいか迷ったけど、結局携帯に出て誘いを断る事にした。

携帯のボタンの受話器ボタンを押す。

するともの凄い勢いで

「今すぐ剣道場に来てくれっ！！志倉達が大変なんだ。

とにかくソッコーで来てくれ!!」

志倉さん達がどうしたんだっ!?

ボクは徒事ではないと感じて、雪穂さんと白木さんに状況を説明した。

「とりあえずここは、話を一旦保留にしておきましょう。

今はそれより志倉さん達が心配です。

私が剣道場まで案内します」

そう言つて、雪穂さんは先陣を切つて歩き始めた。

しかしそれは一般の人から見る”歩く”という観念を雄に卓越していた。

人が普通に走るのより早い……。

実は雪穂さんのホントの正体はくのいちなのでは??

そう疑問に思わざるを得なかった。

「白木さんも行こうっ」

「う、うんっ」

白木さんに声を掛けて共に走り出す。

扉を開け放たれた理事長室に差し込む夕日は既にその光量がなくなってきた。

。そろそろこの学園の全ての電灯に明かりが灯るだろう……。

R e g u r a r C h a p t e r 1 8 〈 V a n i s h e d O f T h e

お読み戴きありがとうございました。

宜しければ、感想・ランキング投票の方もお願いします。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

地平線辺りが紫色に染まっていた。

時は夕暮れを迎えようとしていた。

ボクと雪穂さんと白木さんは既に剣道場に着いていた。

思えば、さっきの号館を一階まで下って、舗装された並木道を通ってここまで来た。

やっぱり距離的に長かった。

剣道場というのには似つかわしくないほどに近代的な建物だった。

加えて規模が大きい。

国技館を二まわりぐらい小さくしたぐらいのものだった。

驚く余裕もなく雪穂さんは剣道場の中に入っていくので着いて行く。

そして入り口に入ったところで人だかりが出来ていた。

そのせいで前の方が見えない。

ボクは制服を着ている生徒を掻き分けて最前線に行った。

前方にはまた人だかり。

しかし今度は何かを囲むようにして、剣道着を着た生徒達が立っていた。

「今日こそ、許しておけねえ！この女、^{あま}覚悟しろよッ！」

ふと誰かの怒号が鳴り響く。

それを受けて辺りはざわめく。

何か嫌な予感がする……。志倉さんは何処にいる？！

「元々覚悟なんて出来てるわよっ。

アンタ達の方こそ怖気づいてたんじゃないの！？」

恐いんでしょ、あたしが？」

取り囲みの中心から志倉さんらしき声がある。

しかも、怒号を発する者に対して挑発してる。

火に油だよ。

大変だ。

その焦る気持ちとは裏腹に、志倉さん達の関係は激化してゆく。

「なんだとお！女だと思ってりゃあいい気になりやがって！」

ボクはまたまた『すみません』と言いながら群集の中を掻き分けて、中心に急ぐ。

掻き分けてゆく瞬間に、剣道着の麻の匂いがボク感覚を麻痺させる。

汗も混じっているからだろうか……。

懐かしい。

昔おじいちゃんとやった剣道……色々な事が頭の中を過る。

そして中心部にやっとの思いで辿り着いた。

一応、現段階では野次馬の中で行く末を見てみよう。

剣道着姿の志倉さんは、この状況下で思うのも不謹慎かもしれなけれど、かなり似合っていた。

背は小さいながらも味はあるというかなんというか、風情が感じられた。

右手には木刀を持っていた。

「いい気になってるのはアンタ達の方でしょ!？」

下級生苛めて楽しいのツ?!

そんな事するようなクズには、この剣道部には必要ないのよ!

そうやってアンタ達は社会の中でゴミとして分別されていくんだわ！」

志倉さんが群集の中の一点を見つめる。

その方を見やると、剣道着を着ている男子部員が仰向けに寝せられてる。

それを看病するように男子部員たちが数人付き添っている。

そしてその内の男子が志倉さんに向かって言う。

「志倉先輩ッ！もう……………いいんです。

俺達がいけないんです。

先輩達のロッカーを片付けるのを躊躇ったから……………。

だからもうやめて下さいっ！！

怪我人はもう……………十分です……………」

男子部員が言葉に詰まると、それに続くかのように他の男子部員も

「コイツの言うとおりッス。

俺達先輩達の言う事を聞けばそれで済んだんです。

だから……………これからちゃんと……………従います」

男子部員から発せられた言葉。

加えて、男子部員の唇を見ると、思いっきり噛締めてる。

相当悔しい事が伝わってくる。

するとそれを聞いた志倉さんが即興で返答した。

「アンタ達、こいつ等の言う事なんて聞かなくて良いから。

っていうか、聞く価値もない！

大丈夫よ。本日付でこの剣道部から永久追放するからっ。

このあたしの手によってね！」

志倉さんは右手に持っていた木刀をそつと床に置いた。

男子部員からみたらこういう先輩がいたら、絶対頼もしいんだろ
うな………。

「おおうつ？そいつは面白れえ。

木刀を置いたって事は素手でいいんだよなあ！？」

この間のチンピラの主格が指を鳴らし始めた。

そして首を思いっきり左右に数回ふる。

「志倉先輩っ！やめて下さいッ！」

先輩が闘う必要なんでないんです。

俺達の犠牲でこの場は納まるんです！だから……………」

男子部員は切実にそう言い、徐おもむに立ち上がる。

そして志倉さんの方に来ようとする

「アンタ達はそこにいなさいっ！」

そこでじつと眺めてればいいのよ。

邪魔立ては許さないッ」

志倉さんも同じように、指を鳴らし始め、首を左右に数回ふつた。

そして深呼吸。

相手のチンピラは、余裕があるのか微笑を浮かべている。

「さあ、パーティーだ！」

パーティーは派手にやらなきゃな！？

でも良かったのか？こんな大勢で押しかけてよオ！？」

チンピラの主格がそういうと背後の方から木刀や竹刀を持った、
またまた剣道部員けんどうぶいんが走ってきた。

1対多数……勝てるわけない。

「このままじゃ志倉先輩が危ねえ！！やっぱり俺達も！」

そう男子部員の誰かが言って立ち上がり、それを受けて他の士気も上がりこちらもまた多数が加勢しようとする

「そこで座ってなさいっていつてるのでしょっ！！」

こんな事もまともに聞けないの！？」

志倉さんが大声で叫んだ。

館内は一瞬閑散とした。

「いやっ、でもそれじゃあ志倉先輩が……」

「アンタ達が加勢したところで、あたしの勢力は変わらない」

それを受けて男子学生はしずむ。

下を向いている……絶望してるのだろうか？

このままじゃ志倉さんがやられる。

でも自分達が加勢しようとしてもそれを受け入れてくれない。

必要とされてない。

自分達のせいなのに…………。

やりきれない気持ち。

悔しい気持ち。

いっぱい。

「さあ、熱い青春ごっこはおしまいだ。

今日はオマエを二度と表に出られないような顔にしてやるぜ」

そして時が流れる…………

間というやつだ。

次の瞬間

「行け」

そうチンピラの主格が言うと一斉に他の人たちが志倉さん目掛けて襲ってきた。

志倉さんは動かない…………

チンピラの実力者すかさず木刀を志倉さんの頭目掛けて先鋒を入

れようとした。

「何っ!?!」

「ちょ」

ボクはそれを素手で掴んだ。

極限状態まで待ってみたけど、事態の收拾がこのままだとつかない………。

「何だデメエはあ!?!」

他のチンピラ達の動きは一向にやまない。

これを全部片付けるのは疲れるなあ。

「やめてくださいっ!!」

ボクは大声で一喝した。

チンピラ達の動きは止まった。

するとチンピラの主格が

「オウオウ、この前は世話になったなっ!?!」

だが今回はこの前みたいかねエゼ。

なんせこんなに数がいるんだからな………。」

両手を広げて若干上に上げる。

そしてクルッと一回りしてチンピラ達を眺める。

その後再びボクに微笑を浮かべた。

「数が問題ではありません。

とにかくここでおしまいにして下さい。

誰に対しても怪我はさせたくないんです」

するととなりにいた志倉さんが

「またアンタなのね!？」

なんで出てくるの、アンタ邪魔なの、引っ込んで、第二アンタには関係のないことでしょっ!!

これは私達剣道部の問題なの!」

志倉さんが真剣にボクに向かって眼を向ける。

やっぱりそうだ………。

この人は嫌味ったらしく言うけれども、でも………。

「じゃあボクが剣道部に入れば解決だね………」

ボクは声を小さくして志倉さんに返答した。

剣道部の問題であり、ボクに関係がないと言つのなら、ボクがその問題の中に入れば済むこと。

この状況を黙って見過ごすわけにはいかない。

「そういう問題じゃ………」

「何をブツブツ言っただ！？オイっ、やれッ！！」

そう言って再び奇襲を決行。

あくまで最終警告を無視しますか………。

ボクは志倉さんの前に立って、床に置いてある木刀を取った。

「ちよっ、それはあたしの………」

「ちよっと借りるね」

その後、ボク達の周りには大勢の人達が円状に倒れていた。

ボクは全て峰打ちで留めていた。

程度を加減した、これは無意識の内だった。

もともと武道の心に反する事は絶対しないと最初に誓ってやり始めた剣道。

だけど・・・・・・・・。。

前方を凝視する。

残るはチンピラの主格一人のみ。

すると予想外の事が起こった。

「もう我慢ならねエ！」

そう発狂して内ポケットから取り出したのはサバイバルナイフ。

「こつ、これで、てつ、テメエ達を、へっへ、これで仕舞いだっ！
」！

ボク達に走りこんでその矛先を向けてくる。

コレは危ない。

と瞬時に察知したのか、すぐさまチンピラの主格の間合いに入り込み、鳩尾に峰を差し込んだ。

サバイバルナイフはチンピラの主格の手からすり落ち、カランという音を立てて床に落ちた。

そして膝を突いて、思いつきり前に倒れこんだ。

辺りは歓喜の声を上げていた。

館内は殺伐した空気から一変、明るい空気になっていた。

お読み戴きありがとうございました。

今ストーリーは本来ならばこの後に少し主人公と。。。との関わりを執筆していたのですが、急遽諸事情により、次話にまわすことに決定致しました。

ですので、その模様も次回まで楽しみに！

感想・評価・投票ランキング等々して戴けると非常に励みになります。

宜しければお気軽にお寄せ下さい。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

R e g u r a r C h a p t e r 2 0 〈 R e a s o n 〉 (前 書 き)

お待たせしました。

最近是非常に執筆しにくくて。

やっぱり小説って難しいものだと思いました。

今はスランプ期なんでしょうかね……。

私がこんな作者でも、応援して戴けるのなら嬉しい限りです。どう

ぞ、これからもお付き合い下さい……。

「何で……………」

後ろから志倉さんが何か囁く。

周りの歓喜の声を受けているせいか、よく聞こえなかった。

ボクは振り返って志倉さんの方を向く。

「余計な事しないでって言っただでしょっ！」

なんで余計なことするのよっ！！

こっ、こんな奴らなんかあたし一人で倒せたんだからっ。

あアンタの手なんか借りなくても倒せた」

「そうだね。

ボクは志倉さんの頼んでもいない事をした。

それは余計な事。

そう、ただボクがやりたくてやった事なんだ」

「そ、そうよ……………」

アンタが勝手にやった事……………、でっ、でもアンタのせい

であたしの立場がなくなつた……。

それは余計な事では済まない。だから……。

志倉さんは腰に付けていた竹刀を抜き取って構えた。

辺りの空気はざわめく。

こんな事になるとは思わなかった。

ボクが良かれと思ってやった事が、返って志倉さんを傷つけてしまったらしい。

志倉さんはボクと間合いを取る。

「アンタはあたしが倒すっ」

志倉さんが一呼吸置いてから……。

「イヤァー!!」

そう叫んでボクに襲い掛かってくる。

「そこまでーいっ!!」

誰かが群集の後方で叫んだ。

声が低く迫力のある声だった。

少なくとも生徒ではないとは分かった。

一体誰が………。

群集の一部が開けてゆく。

そこから出で来たのは

「おっ、おとうさんっ！」

ボクは思わず声を上げてしまった。

いつものお父さんの性格からは想像が出来なかった程だった。

お父さんは一瞬ボクの方を見てから、志倉さんの方に目を移した。

「そろそろ終わりにしてくれないか？」

お父さんが優しく志倉さんに声を掛ける。

「ゆっ、雄司おじさんッ!!」

志倉さんが畏まって一礼する。

何でボクのお父さんに頭を下げてるんだろう………。

「息子に過失は確かにあった、余計な事をしたという事については私からも謝罪する。」

季節君の面目が丸潰れだ、すまなかった」

そう言つて、お父さんは志倉さんに頭を下げる。

「息子つて、もしかして雄司おじさんの……………ですか」

志倉さんは慎重にお父さんに聞いた。

志倉さんはお父さんと知り合いなんだろうか……………。

よく分からないけれども、白木さんともなんか交わりがあるのかなあ。

ボクの知らないところでお父さんは……………。

「その通り、私の息子はそこにいる源 あゆむだよ」

「……………」

志倉さんは俯いて押し黙っていた。

（源 あゆむつて次期理事長の息子がよ……………）

（次期理事長つて朱鷺等理事長からこの学校を買収したんでしょう？その息子つて……………）

周りから色々な事が聞こえてきた。

それはボクにとって良くない事ばかり。

しかもボクが一番核心をつきたい問いだった。

「さあ、諸君は早く下校するか自分の成すべき事をしてくれ！」

お父さんは両手を叩いて皆を促す。

皆はそれに従うように群集が分散されてゆく。

間髪を入れてから

「ゆっ、雄司おじさんの息子さんなら………仕方ないですね」

「ありがとう」

普段の性格から鑑みてもこんなにしおらしくなっている志倉さんは始めてだった。

志倉さんはお父さんに向けていた目を今度はボクに向けた。

「勘違いしないでよね！雄司おじさんがここまで言うってくれるから今回は放免・不問にしてあげる。

でももし今後アンタがあたしの邪魔をするのなら容赦はしないんだからっ」

志倉さんはそう言って前方に歩きだした。

ボクが振り返るとお父さんはもういなくなっていた。

「みなもと君っ」

ボクに声を掛けたのは白木さんだった。

白木さんはボクの手を両手で握って笑みを浮かべた。

「ありがとう・・・・・・・・。」

あの子、あんな態度だけどもなもと君には感謝してると思う。

いつも素直じゃないの」

「ぼつ、ボクは感謝される程、大した事はしてないよ。

でも、ボクがした事は返って志倉さんを傷つけて・・・・・・・・。」

すると白木さんは人差し指でボクの頬つぺたを突付いた。

「ううん、大したことだよ。

それが例え季節をの心を傷つけていたとしても、身の安全の方が何よりも大事な事。

”いのちあつてのものだね” って諺あるでしょっ！

それは多分、季節もその内分かるはず。

傷はそれが分かれば癒えていくと思う。

大丈夫、大丈夫だよっ！」

なんだろう・・・・・・・・。

白木さんに言われると安心できる。

自分に少し自信が湧いてくる。

「そう・・・・・・・・かな」

ボクは白木さんに向かって微笑んだ。

ありがとう・・・・・・・・。

心の中でモヤモヤしていた部分が晴れたみたい。

でも何れ志倉さんには・・・・・・・・。

「あゆむさんっ、御取り込みのところすみません」

雪穂さんがいつの間にかボクの背後に立っていた。

ボクは驚きつつも後ずさり。

いつの間に・・・・・・・・。

さっきは誰もいなかったのに。

「はいっ?」

「おじ様は校門の方に行かれたようです」

っあ!?!忘れてた。

お父さんに聞きたいことがあったんだ。

ボクは急いで校門まで駆けてゆく。

すると校門の真ん前に黒塗りの車が止まっていた。

よく見ると丁度お父さんが乗り込んでいる最中だった。

「お父さ〜んっ！」

ボクは遠くからそう呼びかける。

お父さんはボクの方を見やって、乗り込むのをやめた。

そしてやっと追いついた。

思いつきり走ってきたせいで息が切れていた。

ボクは両膝に手をやって息を整える。

「どうした、そんなに急いできて」

お父さんは心配そうにそう問いかけた。

「あっ、あの、そのっ、はあ……」

えっと、まず、あっ、はあ、ありがとうっ！」

「礼を言われるような事はしてないぞ。」

それよりもあゆむは成すべき事をしたんだから胸を張っていいんだぞ」

「うん・・・・・・・・・・。」

あのさ・・・・・・・・・・、いきなりで突拍子もない事聞くけどさ・・・・・・・・・・
なんでこの学校に来たの?!」

お父さんの真意が知りたい。

ただその一心だった。

さっきまでは忘れていたんだけど。

その後しばらく沈黙が続く。

そして・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・退屈しのぎだよ」

そう言い残して車に乗り込んだ。

・・・・・・・・・・退屈しのぎ・・・・・・・・・・?

そんな理由って・・・・・・・・・・。

車は跡形もなくボクが反応する前になくなっていった。

ボクはしばらくその場で立ち尽くしていた。

Regular Chapter 20 〈Reason〉（後書き）

ご閲覧戴きありがとうございました。

今回のストーリーは非常に悩みました。

今回のを見て、ご理解戴ける読者様もいらっしゃると思いますが・
・・・・。

でもこの調子でいけばストーリーが一段落し、そしてやっとラブコメ
を執筆できると信じて現在、奮闘しております。まあ・・・・・
読者様には必要のない現状報告でもですが・・・・・。

評価・感想・投票ランキングの方、よければ宜しくお願い致します。

加えて、明日はクリスマス。

皆様にそれぞれ良き事がありますよう、お祈り申し上げます!!

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

Special Extra Chapter 2 } Christmas

これは特別篇です。

本章とは関係がありませんのでご了承下さい。

これで少しでもお楽しみ戴ければ幸いです。

ボクは学校を終えて、昇降口で靴を履き替えた。

そして外に出ると、雪が深々と降りしきっていた。

校門までのレンガ路に沿って植えられた木々が雪化粧している。

周りの人たちは神経質なのか傘を差す人もいれば、差さずに空を見上げながら下校する人もいる。

ボク的には差さない方向性かな。

風流だし……、それに今日はクリスマス。

これがまさにホワイトクリスマスかも。

しかしながら今日は一人で寂しく帰らなくちゃいけない。

雪穂さんは用事があるみたいで先に帰ってしまったのだ。

なんで今日に限って……。

一緒に帰る人いないなんて……なんて寂しいの。

ボクが暫く歩いていると何故か木の下で立っている木野城くんを見かけた。

しかしここは知らないフリ。

面倒くさい事になりそう………。

ボクが袂で顔を隠しつつも通り過ぎようとしたら

「待ちたまえ」

ボクは反応することなく通り過ぎる。

ここで関わったならこんな行動してる労力が無駄だった事になるじゃないか。

「つまつ、待ちたまえよっ！

スルーとはどういう仕打ちだッ!？」

木野城くんは近寄ってきて肩に手を掛けた。

厄介ですよ。

恐れていた事態ですよ。

関わりたくないNO・2ですよ。

ちなみにNO・1は色々と言いたくないですよ。

しかしクラスにいる奴ですよ。

「あなたはドチラ様で？」

ボクは少し声を変えてみて言った。

なんせまだ袂が効いてるからね。

「知らないフリしたって無駄だぞ。」

さっき昇降口から出てくるキミを見たんだから」

ボクは観念して、しかし明らかに嫌そうな顔をして

「何なの？」

ボクは袂を下ろして言った。

「ひつ、人をスルーしておいて、その言い草はないんじゃないか。」

私があまりにも可哀相じゃないか？」

「別につ」

「私の人権は？」

「木野城くんは人だったんですか？」

「そつ、そこからキミは入るかね！？」

キミはこの姿を見て、人じゃないと言つのなら、ここに存在する
コレはなんだと定義づける？！」

木野城君は自分に指を向けてそう言う。

「ボク、別に靈感強くないんですけど……」

「わっ、私は霊ではないッ！！第一、人を勝手に殺すなっ」

「もうじゃあ、人でいいですよ」

「だっ、妥協したね……、というかキミが認可できるのかっ。」

とっ。キミとじゃれ合っている暇はないんだっ。

フッ、今日は何の日だか知っているか？」

木野城くんは髪を払って三本指を額に当てた。

この人、男相手になんでキメてるのかな？

そもそもこの人の存在意義って……、とと、そんな事言っちゃダメだった、反省しないと。

「ボクは木野城くんと過ごすつもりはないからね」

「そうそう過ごすつもりはない……っってっ！違っっ！！」

「違っって、ぼっ、ボクを、おっ、お持ち帰りするのやめてよ。」

ぼっ、ボクを食べてもおいしくないからね！！」

「だぁゝれがキミを持ち帰るとっ！？」

こんなホワイトクリスマスに…………。

キミはボクのサンタクロースじゃないんだよ。

フっ、私のサンタクロースは雪穂さんだけだよっ、ハハハ。

考えただけで身震いがする。

一緒にシャンパンを開けて…………、ハッハハハ」

またキメポーズ。

「雪穂さんをそんないやらしい妄想に入れないでっ！！

木野城くんはそんな鼻の下のばして、エヘヘって喜ぶ人だったんだ」

「ちよっ、ちよっと待て！！

キミは何か勘違いをしている。

私は雪穂さんを大事にするよっ。

ただ、その後はやはり…………。」

「やはり…………？」

少し沈黙してから、木野城くんは微笑を浮かべて、はいまたさっきのキメポーズ

「キス」

「なっ、何考えてるんですか？」

接吻なんて、ハレンチ過ぎる」

「いいじゃないか、キスくらい。」

今のご時世、皆してるよ。

ボクは雪穂さんのあの艶やかな、こっ、男心を慥めようなあの唇が………ジユル」

「よだれっ、よだれだっ」

ボクはポケットからポケットティッシュを取り出して、木野城くんに差し出した。

木野城くんが何故かいつもより気持ち悪くなっているのは気のせいなのかな。

「わっ、よっ、ヨダレではないっ。」

さっき飲んだサイダーが逆流したんだ」

「その心は」

「おっ、オチなんて考えていないよ………」

「どうやったら逆流するんですか」

「ぼつ、ボクは医学部でもないよ……………」

「サイダーってそんな水質でしたっけ？」

「トロトロ感とか気にしなくて良いから」

と言いつつ、木野城くんはボクのポケットティッシュを受け取って念蜜に拭き取る。

「っと、こんな場合じゃなかった。」

ここで私が待っていたのは雪穂さんの為だった。

雪穂さんはまだ校舎内にいるんだろ？」

木野城くんの足は若干震えていた。

これは長時間待っていたのだろうか……………。

しかし、現状では木野城くんは笑みを浮かべながらボクに問いを掛けている。

ということは期待してる……………！？

「いないよっ」

ボクは即答でサラリと言い放った。

「いない！？

またまた！？キミはウソが好きなんだね？」

「ウソじゃないよっ！

今日は用があるって言って、先に帰っちゃったんだ」

「まさか・・・・・・・・・・、ここで3時間も待っていたのに・・・・・・・・・・、クソォー」

木野城くんは校門まで突っ走っていった。

後日、木野城くんは風邪をひいたという・・・・・・・・・・。

悲しいホワイトクリスマスの日だった。

Special Extra Chapter 2 ~ Christmas

ご閲覧戴きありがとうございました。

感想・評価・投票ランキングの方も宜しくお願い致します。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

「手厳しいな……」

手塚くんが溜息混じりにそう言った。

手塚くんとボクは食堂にいた。

昼休みというこの時間帯に似付く程に辺りは賑わっていた。

ボクと手塚くんは向かい合い席についた。

ボクと手塚くんの前にはそれぞれ頼んだランチセットが置かれていた。

「あゆむ、ホントに今回の選挙での当選は厳しいな。」

先日の騒動で理事長とあゆむの関係が公になってしまった。

皆少なからず朱鷺等前理事長を哀れんでいるだろう。

その反面、あゆむのお父さんである現理事長に軽蔑の眼差しが向けられている。

すなわち、その息子であるあゆむ、お前もその対象になっているんだよ」

手塚くんはランチセットの隣に置かれた水が入ってるグラスを手にとった。

「うん・・・・・・・・」

改めてその事実を整理されて言われてみると、多大なショックが心を襲う。

手先が冷たくなってきた。

「あとこれは新情報なんだが・・・・・・・・、對抗馬にあの木野城晴紀が立候補したそうだ。

アイツはこの学園の中で人気が結構ある。

特に女子から。

従って、あゆむは女子からの投票を望む事は難しい。

同じ土俵で闘ったら必ず敗戦してしまう。

そこで・・・・・・・・だ。

あゆむは誰か頼りになる人はいないのか？

こちら側の支援者となってくれる人だよ。

その支援者によっては結構な数が動く」

手塚くんは前に置かれたカレーライスを口に運んだ。

支援者・・・・・・・・？

頼りになる人・・・・・・・・？

「雪穂さん・・・・・・・・かな」

「詩条 雪穂か・・・・・・・・。」

まあ、あの人がこちら側に就いてくれたら形勢は変わってくるだろうな。

放課後に頼んでみるか」

手塚くんはボクの支援者になってくれた。

ボクは今回の選挙に自信を失くしていた。

しかし、支援してくれる人がいるなら自信が湧いて来る様な気がした。

ボクと手塚くんは放課後に雪穂さんが待つ昇降口に行った。

雪穂さんはいつもと同じく、昇降口の扉の先にいた。

ボク達が行くと雪穂さんは微笑んでボク達を見た。

ボクは深呼吸した。

雪穂さんもボクの参列になってくれるのならば非常に嬉しい。

ボクの自信は完全とはいかないまでも、ほぼ満たされる気がした。

雪穂さんはいつもボクを助けてくれた。

だから今回も助けてくれる、絶対に。

ボクはそう決め付けていた。

「雪穂さん、あの・・・・・・・・」

「なんでしょう?」

雪穂さんは目線をボクに送った。

いつもと変わらないこの落ち着いた雰囲気。

なんか心に静養が齎もたらされる気がした。

「ボク、今度の選挙に出馬するんです」

「ええ」

「それで、雪穂さんにボクの支援者になって欲しいんです!」

雪穂さんは目線をボクから逸らして外の方を見やった。

長い沈黙が続いた。

雪穂さんは小さな声でこう言った。

「・・・・・・・・すみません」

「えっ？」

ボクは耳を疑った。

雪穂さんが断る訳ない。

そう絶対の自信を持っていた。

しかし、今それが崩壊されようとしている。

「すみません、聞こえませんでした。」

もう一回言ってもらえますか？」

間髪を少し挟んでから小さな声で囁いた。

「・・・・・・・・あゆむさんの支援者になることはできないんです」

ボクは動揺した。

雪穂さんがボクの・・・・・・・・。

「なっ、何故ですか？」

隣の手塚くんも動揺してたらしく口を挟んできた。

「・・・・・・・・私は晴紀さんの支援者なんです。

ですから掛け持ちできません。

今日は気分が優れませんので先に帰ってますね」

雪穂さんは幾分か元気を失くし、ボクにそう言った。

ボクは平賀さんに断って手塚さんと歩いて帰る事にした。

「これは非常にヤバイぞ。

詩条派が相手側に回ったらこっちは相当なダメージだぞ」

「ボク・・・・・・・・ショックだった」

「・・・・・・・・、気、気にするなって！

前言撤回っ！

詩条雪穂が相手側に回ったからと言って、なんだと言うんだ！？

そんなのこっちにしてみれば屁の河童だ！

だから落ち込むんじゃないっ！！」

手塚くんは落胆するボクを慰めるように肩を叩いてくれた。

ボクは複雑な心境だったが、ここはお父さんとの約束を果たすことが最優先事項だと考えて、

ほかの事は頭から追いやった。

ボクには手塚くんがいるじゃないか。

でも………

「でも、雪穂さんがボクの支援者になってくれないとするとこっちは相当なダメージなんですよ？」

さっき手塚くんが言った言葉が心の中にこびり付いていた。

そうボクが言うとき手塚くんはニッコリ微笑み投げ

「前言撤回だつて言つたろ！？」

大丈夫、この優秀な策士である手塚 渉に任せておけ！！

策は………用意してある！」

「自分で優秀とか言うのが心配なんだけど………」

ボク達は夕暮れの中それぞれの帰途に着いた。

閲覧戴き誠にありがとうございました。

さて今回から諸事情により、ストーリーの展開を早くして参ります。

感想、評価、投票ランキング等宜しくお願い致します。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

詩条邸に帰宅し、自室に籠っていた。

勿論隣の部屋には雪穂さんがもう在室だろう。

ボクは色々聞きたいことがあった。

今からでもノックしに廊下まで出れば、この心配事は消えるかもしれない……。

しかし踏み出す勇気が無い。

それはボクになにか原因があって支援者になってくれないという事なのか、

自分の思考は多岐にわたった。

ボクはベッドの枕に顔を埋めたまま結局夜ご飯を抜いて、夜が明けた。

「でボクはどうすればいいの？」

二時限目の休み時間。

ボクは後ろを向きつつ手塚くんにそう切り出した。

手塚くんは鼻息を立てながら腕を組む姿勢をとった。

「これ以降の授業サボるぞ！」

そう唐突に手塚くんがいう。

サボるって………、ボクはこれから選挙に出ようとしてるんだよ！？

その候補者に若干グレてくれと………。

それが策士のいう事なのかいささか疑問だよ。

「手塚くんの言ってる意味がよくわからない。ボクに墮落を教授したいの？」

「ちっ、違うに決まってるだろうッ！！

そんな事した時点であゆむの選挙は終了だ。

するこちらにも困る。『策士、策に溺れる』なんてさらさらコメンだからな。

俺が言いたいのは、これから支援者に会いに行くんだよ」

「それってこの学校じゃないって事だよね！？

だって、この学校だったら授業中だし有り得ない………。

でも他の学校でも有り得ないか………。

もしかして……担任??」

あの卑猥な存在がボクの支援者になるのは拒絶させて貰うよ！

なんか話が進行しなさそうな事目に見えてるし、大体会話成り立たないし。

そう、発する言葉全てが淫乱。

若干前に痴女じゃないかなって思ったことも多々ある。

そんなワールドにボクを引き込まないで。

もし手塚くんが首を縦に振ったらどうしよう……。

「……、んな訳ないだろ!!」

常識的に考える。教師ってのはいつだって中立の立場を取るんだ。

俺が言ってるのは……、まあこれから会いに行くし、その時までの楽しみって事で良いだろう……。」

それから手塚くんは立ち上がり教室を出た。

ボクも後を追いかける。

手塚くんはどんどん廊下を歩いてゆく。

そして階段を下ってゆく。

3階、2階、1階。

その時手塚くんはボクの方を振り向いた。

「あゆむ、秘密の鍵って知ってるか？」

唐突にそう尋ねて、内ポケットから鍵らしきものを取り出した。

「何それ？」

「俺実に入ったんだ」

「何に？」

ボクがそう聞くといきなり手塚くんの鼻息が荒くなった。

ボクはすぐさま危険を察知する。

聞いてはいけない何か、触れてはいけない何かに手を掛けてしまったと。

気づいたときには手塚くんは口を開いていた。

「海パン・・・・・・・・」

「ヒィっ」

ボクはその場を物凄い勢いで立ち去ろうとした。

「ちょ、待て！何か誤解してるっ」

ボクはその言葉で振り返ってみる。

「誤解って、手塚くん海水パンツマニアなんですよ？」

もっ、ももも、もっこり具合とととか重要なん、なんなんですよ？
「？」

ボクの声は震えていた。

其れ程までにもボクの身の毛がよだっていたのだ。

「気にするかっ！！」

その勘違い甚だしい誤解やめてくれるか！？ 何か俺が変態みたいじゃないか？
「」

「変態でしょ、完璧に……。否定しようないでしょ」

「ハァー。もういい。」

とりあえず俺は水着が見たかった故に水泳委員会に入った。

そしてコレはその委員会室の鍵」

その理由はどうかと思うよ……………。

「ってことはそこに行くの？」

「そついう事だ。」

しかしながら委員会室は水泳委員会のヤツしか入り口を知らない。

理由として挙げられるのは、男は狼だからだ！」

手塚くんはボクの方に人差し指を向ける。

そして何故か知らないけど顔が得意げになっている。

「ボクにはその意味が全くと言っていいほどわからない」

「まあ、いい。」

さてこれから行く委員会室の居所は必ず秘密にしてくれ。

まあ俺はあゆむを信じているから心配ないだろうが」

そついつて降りてきた階段の方に戻る。

また階段に上るの！？

行つて来た道を逆に戻るつていうのは今までの行為が無駄だった
つて事！？

ボクは肩を落としながらそう落胆した。

すると思いがけなくも手塚くんは階段横の掃除用具室のドアの鍵
穴に先ほどの鍵を差し込んだ。

「そこは掃除用具室なんじゃないの？」

鍵穴を回しながら手塚くんは声を上げながら笑う。

ボクは何故笑っているのか意味不明であつた。

「そう、確かに皆そう思ってるはずだ！

だからこそココには誰も入ってこない。上手く隙を突いたのさ」

そうして手塚くんはドアを引いた。

ドアを開くと今度は下りの階段が出現した。

地下・・・・・・・・！？

ボクは驚愕した。学校に地下があるなんて聞いたこと無いよ……
……。凄すぎる。

ボクは息を潜めて手塚くんの後を追う。

手塚くんは階段を下りながら

「この下にあゆむを支援したいってヤツがいる……………」

ボクを支援したい人！？

そんな人いてくれるの……………。

手塚くんそんな人とアポを取っていたなんて、意外と策士かも……

・・・。

手塚くんが立ち止まった。

そう、段数がなくなっただの。

平坦な地面。

正面に見えるのは扉一つ。

手塚くんはまた鍵を鍵穴に差し込んで回す。

扉は勢いよく開かれ室内が視界に入ってくる。

そこにいたのは・・・。

「源くん、来たのね?!」

その問いかけに対し手塚くんが代弁する。

「連れて来たよ。」

しかしホントにあゆむの支援者になってくれるのか?」

手塚くんがそう聞くと

「うん、勿論。色々恩もあるし、それなしでも源くんはいい人だから応援するよ!」

私、白木 爾菜は源 あゆむ候補の支援者として傘下に入らせて

もらいますっ！」

白木さんは満面の笑みでそうボクに元気よく発言した。

白木さんがボクの支援者になってくれる……………。

「あゆむ、実はこれでも勢力的に足りない……………」

手塚くんはいきなり真剣な面持ちでボクの方を向く。

白木さんがボクの支援者になってくれるんだから相当な票が動くはず。

ボクは若干躍動していた、アイドルやってるんだし。

手塚くんの言葉でそんな躍動感が次第に薄れてゆく。

「どついつ事？」

「状況を今一度整理するか……………」

ボクは固唾を呑んだ。若干の冷や汗が額を伝つ、これは仕様なのだろうか……………。

お読み戴き誠にありがとうございました。

感謝申し上げます。

最近はスランプ気味というか、プロットは凡そ出来上がっているものの、それで上手く言葉を紡ぐ事が出来なくなってきたております。加えまして、当作品を読者の皆様に本当に楽しんで戴けているのか等の悩みの種も発足してしまい、それも影響してきているのかもしれないません。

故にこんなに期間の空いた投稿となってしまうしました。まずはその事をお詫び致します。

このスランプからいち早く脱したいとは思っておりますがいつまで掛かるかは推測出来かねます。

ですので読者の皆様にはご迷惑をお掛けいたしますが、ご配慮戴ければ嬉しく思います。

感想・評価・投票ランキング等、皆様に協力戴ければ私の執筆意欲が更に高まると思いますので、この作品に好意を抱いて戴いている読者の皆様がいらっしゃいましたら宜しくお願い致します。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

執筆者 Tale Jack

PV80000超を致しました。

ここまで来れましたのも、偏に読者の皆様のお陰です。誠にありがとうございます。

そしてこれからも応援していただければ幸いです。

何卒宜しくお願い致します！

「現状把握としてまず確認なんだが……」

手塚くんは室内にあったホワイトボードを引きながら持ってきた。

そして、黒いマジックで模式図を書き始めた。

「こちらの勢力としては俺とあゆむと白木さん。

しかしながらつい最近までは結構な人気があつたあゆむは今の段階での人気は地に落ちているだろう……」。

そうすると残るのは白木さんと俺の二人が集められる支持者がそのままあゆむの支持者に代替される訳だ」

手塚くんは三原色を巧みに使っていた。

それはとても見やすく現状を把握するには十分だった。

「手塚くんはどのぐらい集められるのかしら？」

白木さんが勢い良く聞いた。

確かにボクも分からない。

白木さんはおそらく菊間でもない程の支持者が集まるかもしれない。
い。

だけれど手塚くんってそもそも支持者とかいるのかなあ……。

「俺はざっとパソコン全部員150名つてところかな」

意外だった。

手塚くんがそんなに集められるなんて……。

ボクは精々集められて10人くらいかなと踏んでいた。

しかしそれをも凌駕するとは……、手塚くんってたまに凄いつて思う時がある。

「手塚くんって部長だったっけ？」

白木さんは不思議そうな顔をして手塚くんに問い掛けた。

手塚くんは持っていたゆっくりとマジックのキャップを被せた。

「俺は部長じゃないよ」

驚愕の回答だった。

部長でもなんでもない、ただの部員の一人が何故にもそんなに、なにゆえしかも全部員など集められることが可能なのか……。

まさか、ボクが賄賂でも渡さなきゃいけない感じになるのだろうか。

ボクはそんな非合法なやり口で当選したいとは思わないよ……。

ボクは心配そうな面持ちで手塚くんを見つめていた。

「部長じゃないのに全員の部員が集まるの？」

さり気なくもサラリと白木さんがそう尋ねる。

ボクと全く同じ意見。

「まあ、集まるよ。」

部長には皆嫉妬してるから実質、副部長の俺の支持率が100%なんだ。

そのため部長が何か指示する事は皆無視。

しかし、それでは部長が可哀相だろ！？

だから俺が部長と同じ指示を皆にするわけ。

って事は実質部長は自分のいう事を聞いてると錯覚するだろうな」

手塚くんはホワイトボードの脇にあった椅子に座りこんだ。

「そんなに支持率を失墜させてる部長って一体誰なの？」

白木さんがいよいよ核に触れるかという質問をした。

「ああ、言っただけ？」

それはあゆむの対抗勢力である木野城 晴紀だよ」

『えっ!?!』

ボクと白木さんは思わずそろえて驚きの声を上げた。

木野城くんがパソコン部部长??

しかもパソコン部内で支持率が0%って!?

「木野城くんがなんで嫉妬されてるの?」

ボクは手塚くんにそう聞いてみる。

「あゆむ……分らないのか??」

まあいい。あゆむも見たことがあるだろう、アイツは女子に手を出しすぎていた。

今こそ”雪穂さん、雪穂さん”と言っているがそれ以前が問題だ。

故に男子の獲得票は見込めないハズだった。

しかし、そこを補正するべくか否か知らんが詩条 雪穂を支援者に抜擢してきた。

カバーされてしまったんだよ。

けれどもな、こちらには白木 爾菜様がいる。

それにアイツ開票日当日になったらパソコン部の男子が傘下に入
ってない事ぶったまげるぜ・・・・・・・・。

そのことが露呈した時点でパソコン部はいよいよ俺の・・・・・・・・

「

手塚くんが不気味に笑い始めた。恐ろしい画策。まさに策士なの
かもしれない・・・・・・・・。

瞼が落ちている。これはもう今まで見たことのない表情だった。

対して白木さんは若干顔が赤く見えた。

「様なんてつけないでよ・・・・・・・・恥ずかしい・・・・・・・・」

時を待つてボクは口を開いた。

「ねえ、気になったんだけど詩条さんと白木さんで男子の票がきつ
かり真つ二つに割れてるの？」

すると手塚くんは座っていた椅子から立ち上がった。

そしていつもの表層に戻った。

そして再びペンのキャップを外してボードにまたしても何か模式
図らしきものを書き始めた。

「こちらがあゆむに齎されるであろう現段階での票数。

んでこっちが木野城側に齎されるであろう票数。

なににしろこちらの勢力がまだまだ足りない。

このままではあゆむは負けてしまう」

手塚くんは双方の勢力図を模式していた。

そしてボクの勢力の周りには青色で囲われていた。

ボクは顔を落とした。

それを見てか手塚くんが

「大丈夫だと何回言わせるんだ、あゆむは??」

こちらにはもう一人支援者がつく事になっている」

ボクにもう一人ついてくれる??

ボクは回想し始めた。

しかしボクに味方してくれる人なんてもう心辺りが無かった。

「一体誰なの?」

そう志倉さんが怪訝そうに尋ねると

「まあ、とりあえずその人が待つてゐる所まで行こうか……」

そう言つてホワイトボードや椅子を元に戻してボク達は部屋を後

にした。

そのボクの支持者になってくれる人の存在でボクは救われるのだろうか。

それよりも、その人って一体誰なんだろう??

色々な気持ちを馳せながら歩みを進めていた。

その時授業開始のチャイムが鳴り響いた。

多分3時間目が始まったのだろう。

ボク達は授業をサボってしまった……

ご閲覧戴き誠にありがとうございました。

評価・感想・投票ランキングの方、よければ宜しくお願い致します！

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

ボク達は階段を只管上っていた。

終止無言の状態。誰も口を開こうとしない。

ボクは唾を飲み込んだ。

思いがけずゴクリと音がなってしまった事に恥ずかしさを覚えた。

着いた先はその校舎の屋上でもある扉の前。

手塚くんはドアノブに手を掛けてゆっくりと捻った。

開け放たれたドアからは勢い良く風が吹き付けてきた。

そこに広がっていた景色は晴天の青空だった。

歩みを進めてみると、広がるアスファルトに何故か一箇所だけレッドカーペットが敷かれていた。

よく見てみるとその上にはアンティーク調の椅子が置かれていて脇には小さなテーブルが配置してあった。

「あの人があゆむの今回の支援者の中枢ともいえる人だ」

手塚くんが振り向いてそう言うとその誰とも知らぬ人との距離がどんどん近くなってゆく。

そしていよいよ対面の時。

椅子に腰を掛けていたその女の子はいささか不機嫌そうだった。

何故このシチュエーションで手にワイングラス的なものを持つているのか理解に苦しんだ。

しかしなにより目に飛び込んできたのは女の子の姿だった。

藍色の長い髪をして顔には上品さが感じられた。

はつきり言って美しかった・・・・・・・・。

ふと手元に視線がゆく。

爪は長くしかも調和の取れた形。

これは相当な手入れをしていなければ成せない事。

加えてこの奢侈な感じ。

これらが示すベクトルは・・・・・・・・。

女の子はワイングラスを脇のテーブルに置くとボクを一睨み。

それから手塚くんに視線を移した。

「随分遅かったのですわね？」

そう言いつつ立ち上がった。

「で、この方が源 あゆむさんですか？」

そう手塚くんに問いかける。

「そうだよ」

その女の子はボクのつま先から頭の先までながすように一望した。

「この方が源グループの……………」

「あの……………」

ボクはその女の子の方を向きつつも視線を落としていた。

女の子は不思議そうな顔をしながらボクを見つめていた。

「なんですか？」

「あなた誰なんですか？」

「つま、失礼な方ですわね。でも名乗ってはいませんでしたわね。
私、琉嶺 乃唯と申します。」

ちなみに3年生、つまりみなもとさんの先輩という事になります
わ。以後お見知りおきを……………」

そう言っちょこんと頭を下げた。

「琉……………嶺先輩？」

何故今回ボクの支援者になってくれるんですか？

勿論ボクと琉嶺先輩は今日が初対面だし……………」

すると今度は手塚くんが隣から口を挟んできた。

「それは俺から説明するよ！

この学校には二大勢力と中立勢力がある事は知ってるか？」

「知らないけど……………」

勢力って……………この学校にそんなのあるの？

全然分からなかった。

「二大勢力……………。つまりこの学校において特別視されている人。」

一人はあゆむがよく知る人物だ」

ボクがよく知る人物……………？

それって、まさか……………

「もう気づいてるみたいだな。」

そう、木野城側の最大支援者でもある詩条雪穂。
バトロン

寄付金や留学費援助や設備費や部費など支援は多岐に渡る。

もう一つの勢力……それがこの琉嶺　乃唯先輩なんだ。

琉嶺財閥にしてこの学校の設立資金投資者。

互いの勢力は敵対勢力となっている。

そしてどこにも属さない中立勢力としてこの白木　爾菜さんがいるわけだ」

手塚くんは淡々とそう語りながらボク達の周りを歩き始める。

ボクは琉嶺先輩の方に視線を送る。

この人が財閥のご令嬢なんだ……………。

だからあんなシチュエーションになってたんだ。

合点がいった。

でも……………

「なんでボクの支援者になってくれるんですか？

ボクは雪穂さんと繋がっています。

だから本来であれば先輩はボクの方につくべきではないんじゃないかな
いんでしょうか？

理由がボクにはいまいちよく分かりません」

「そうですね．．．．．」

私は詩条雪穂さんに恨みがあるのですわ。

まあここでは言わずもがなですが．．．．．。

そして詩条雪穂さんは木野城側についている。

私としてはどうしても詩条雪穂さんを圧倒したい。

という事はあなたの方につくしかありませんわ」

琉嶺先輩はそういい終わるとまた椅子の方に歩き出して腰を掛けた。

対する手塚くんは立ち止まった。

そしてボクとの距離を詰めてくる。

表情はいつもになく真顔だった。

「あゆむ．．．．．、それでもあゆむが当選するか正直分からない。

しかし俺らが出来るとはここまでだ。

勝算がたった訳ではないがこれで互角になったと考える。

後は選挙を待つだけだ……。」

ボク達はそれ以降の授業を全てサボることになった。

放課後にはボクと白木さんで支援者3名の氏名を書き込んだ願書を職員室の淫乱教師に出しに行った。

選挙がいよいよ始まる……。

なんともいえない気持ちが心の中に充満していた。

いつこの気持ちは取り払われるのだろうか……。

ご閲覧戴きありがとうございます。

残念ながらまだまだシリ阿斯な話になってゆきます。

本来のカテゴリを前面に出せないことへのもどかしさを感じながらも今後執筆してゆくのでご理解・ご協力の程宜しくお願い致します！

『総合的に楽しめた！』と思っていらっしゃって下さる方はどうか感想・評価・投票ランキングの方を何卒宜しく願います。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

早くもついに選挙日当日を迎えてしまった。

目覚めは言うまでもなく最悪だった。

すぐ隣にいるのにも関わらずあの昇降口で話した以来、登下校を共に出来ない事は愚か、会話すら出来ていなかった。

この関係を早く解決させたい。

そのためにはどうしたらいいんだろう……。

様々な事を考えながらも制服に着替えていった。

そしてネクタイをいつもよりキツくしめた。

意思は固まった。

ボクは隣の部屋の扉を通り過ぎて平賀さんの待つ車の元へと急いだ。

朝食は今までになかったが抜いてしまった。

平賀さんには勿論話していない。

知られたらお説教をくらってしまうからだ。

その分の時間を選挙前に取られることは痛手だし……………。

「こんなに早くご登校なされるのですか？」

「はい。今日は生徒会選挙なんです。いつもより1時間も早くすみません」

平賀さんにはホントに申し訳ない。

送迎をしてもらう立場からこんな事……。

平賀さんの顔を見やる。

サングラスをしていてやはり瞳は見えないけれども、口元は笑みを浮かべていた。

「お気になさらないください」

平賀さんはいつもボクに優しくしてくれる。

そんな存在がいて今のボクがあるんだ。

ボクは再認識した。

それから平賀さんに学校まで送ってもらった。

「それでは私はここで失礼します。

これから雪穂お嬢様をお送りしなければなりませんので……」

ボクは校門の前に降ろしてもらった。

そしてそんな言葉を言って平賀さんはアクセルを踏んだ。

ボクは見えなくなるまで見送った。

その後ボクは選挙会場に指定されている講堂へと足を進めた。

中はやはり規模が大きかった。

それに加えて綺麗で落ち着いた空間。

やはりどこかの音楽ホールとしか思えない。

備え付けの椅子が凄く先の方まで広がっていた。

さあ、マイクでも調整しようかな・・・・・・・・。

それでちょっと選挙演説でも・・・・・・・・誰もいないしね・・・・・・

ボクはゆっくりと前方の舞台へと向かってゆく。

そして手と足をかけてようやく舞台の上に乗った。

そして音声機器が置いてある舞台裏の2階へ続く階段を上った。

目の前には新しそうな木材質の扉。

ボクは取っ手に手を掛けてゆっくりと扉を押し開ける。

しかし予想もしない事に、白木さんがそこにしゃがんで音声機器を弄っていた。

「しっ、白木さんっ」

白木さんは一瞬ビクっとして背後にいるボクの方を向く。

「みなもと君っ!？」

ビックリしちゃったよ!この時間誰もこんなトコに来る人いないし………」

「どっ、どうしたの?なんでここに………」

白木さんは立ち上がる。

そしてボクに微笑みなげる。

「私、マイクの調整してたんだ。

本番にもしもトラブったらいやだし……」。

そう思っただけで音声機器を設定しようかなと思ってやってたんだけど、さっぱり分からなくて……」やっぱ私機械音痴なのかも………」

そう言い、頬に手を当てながらへけっと笑う。

流石にアイドルやってるだけある。

こんな何気ない仕草が、ボク達男の胸を打つ。

「どっ、どの辺が分からないのかな？」

ボクは音声機器のある白木さんの方にその距離を詰めてゆく。

「この音声Aと音声Bのボタンは多分マイクのだと思うんだけど、スピーカーから音を出すにはどうしたら……」

そう言いながら白木さんは再びしゃがみこむ。

そして沢山あるボタンの一点を指差す。

ボクも姿勢反射しながらその一点を見つめる。

なんだろう……。白木さんから仄かに香るラベンダーの匂いが鼻に入ってくる。

やっぱり女の子の匂いって……。

ってこれじゃあ変なおじさんだよ……。

ボクは横目で白木さんを見やる。

そして目線を若干落としてみると……。

そしてボクは目を大きくした。

今は夏で半袖で暑いのは十分に分かるけど……。何故第3

ボタンまで開いてるのっ!!？

左右に開け放たれた空間がボクの目に入ってくる。

正直カミングアウトするとボクは今まで見たことが無かった・・・。

女の人の・・・その・・・膨らみ？

あぁっ！もうなんでこんな事言ってるんだろう。

ボクの顔全体に熱が流れてゆく。

それにあわせて熱^{ほて}ってくる。

少し谷を成している膨らみ。

今の女子高生の平均より少し大きいかも・・・って、違います!!

もっ、勿論アイデアを浮かべて平均を言ってますっ！

へっ、変態違いますっ！ボクはそんな不純な思いでここに来た訳ではありません。

そう自分に弁解するものの・・・。

自然と視線を逸らすと汗のせいなのか下着が透き通って見えた。

ボクはすぐに視線を音声機器の方に戻した。

ダメダメっ！！自制心、自制心！

落ち着けボクっ。精神安定剤、精神安定剤は……………。

そう思いながらポケットを探してみるもののやはりそれは無かった。

ボクは深呼吸する。

「どうしたの？」

白木さんが不思議そうな面持ちでボクにそう問いかける。

「なっ、なななんでもないよっ！！」

さっ、ささあゝて、音声機器のここのボタンだよねっ」

そっいいながら適当なボタンを押してみる。

ボタン??

ちっ、ちち違うからね！

ぶぶブラウスのボタンとかじゃないよっ！！

「ここのボタンは違ったのかな？さっき押してみたんだけど……………」

そっいいつつ四つんばいになってボクの目の前のボタンを指差す。

白木さんの胸がボクの右腕に当たってくる。

「はうっ」

ボクは思わず声を上げてしまう。

今まで触れた事の無い感触。

若干のハリや弾力を持ちつつも柔らかみを帯びている。

どうしても腕に全神経がいつてしまう。

ボクは更に赤面する。

白木さんがボクの方を上目遣いで見てくる。

ダメだ……、朝から刺激が強すぎるよっ。

ボクの額からは何故か若干汗が吹き出していた。

莉紗子の上目遣いなんかとは格が違った。

これがもし無神経に成されているのなら……神を超越した存在だと思う。

「みなもと君、どうかしたの？」

心配そうな面持ちをボクに向ける。

「いつ、いやいや。なんんでもない、よ」

「そう？なんか変だけど、まあみなもと君がそう言うならあたしの気のせいだね。」

ねえっ！これじゃない？？ほら、スピーカー音量って書いてある、しっ……きやつ」

白木さんはあまりにも自分の移動可能なテリトリから逸脱して、体勢を崩してボクに倒れ掛かってきた。

「イタタタタ」

ボクはそういいながら目を開いてみる。

白木さんはボクの顔の左右の床に手をついた。

つまり……ボクの上に四つん這い、加えて顔が目と鼻の先にある……。

「ヤバイよ、ヤバ過ぎるよ!!」

ボクの自制心を揺るがさないでえ〜。

ボクは額から湯気でも出てきそうなくらいな勢いだった。

ボクと白木さんの視線が重なり合う。

こっ、ここんなシチュエーション……前にもおそらく前世でもあった事がないと思う……。

ボクの心臓の鼓動がどんどん早くなってゆく。

それは僕自身でもよく意識化されている。

ふと白木さんの唇に視線がいく。

艶やかな小さい唇。

口紅を塗っていないにも関わらず、水々しそつに感じる。

そしてその口からは若干息が漏らされている。

『あつ』

ボク達はそう言いつつ体勢を元に戻す。

お互い背中合わせになった。

「ごっつ、ごめんね……………あたし……………その……………
・夢中で……………」

白木さんは何故か少し上ずったソプラノボイスになった。

「ぼっ、ボクこそなんか……………ゴメンね……………」

ボクも何故か照れ気味に言ってしまった。

なんだろう……………とつても、しゃべりづらい……………。

少し沈黙が続く。

その内、白木さんが口を開いた。

「みなもと君・・・・・・・・あたし・・・・・・・・決めた事があるの・・・・・・・・」

白木さんは後ろにいるボクに顔を向けながら言う。

決めた事??何だろう・・・・・・・・。

「あつ、うん、何を？」

ボクは気軽に聞いてみた。

「あたしねっ、みなもと君には感謝してるんだっ！」

武道の方の監修してもらってるし教授もしてもらってる。

言い忘れてたけど、撮影終わったの。

バッチリだった、監督さんにももの凄く褒められたよ・・・・・・・・。

季節の事にしたって、季節は今色々考えてるだろうけどきっと感謝してる。

あたしだって季節があ的事件でもしもみなもと君の介入が無かつたら大切な親友が危なかった。

でもそれが回避できたわけだから、やっぱりみなもと君のお陰・・

・・・」

確かにそんな事をしたけれども別に感謝されるような事はしてないと思う。

誰だってそんな光景目にしたら助けと思う。

でも、助けられて良かった。

それが志倉さんには迷惑な事だったかもしれないけど。

そして白木さんは再び口を開く。

「あたし・・・・・・・・もし今回の選挙でみなもと君が当選しなかったら・・・・・・・・」

ボクが当選しなかったら何なんだろう・・・・・・・・。

ここで少し間が空く。

白木さんはボクの耳元まで距離を詰めてきて

「・・・・・・・・アイドル引退する・・・・・・・・」

そう囁いた。

「えっ!？」

ボクは咄嗟に振り向いた。

今……なんて言った？

アイドルを……やめる？

「なっ、なななんで？」

ボクが当選しなかったらって、ボクにそんなアイドル人生とつりあう様な価値なんて無いよっ！！

況してや白木さんが引退したら、今の芸能界がある意味覆ってしまっ。

しかもファンが沢山いるわけだしっ！！

なんでそんな事言うの？何度も言うけどボクにはそんな価値なんてないよ……」

ボクはいつも以上に必死にそう熱弁する。

白木さんが芸能界やめる事になったら、今のファンや関わってくれた人達が可哀相だよ。

「どうしてだろうね……。自分でもよく分かんない。

でもみなもと君にはそれだけの価値があたしの中ではあるんだと思うのっ。

それで、みなもと君がなにかに一生懸命取り組むならあたし出来る限り力になりたい。

だからこそ今回支援者としてみなもと君を少しでもサポート出来ればと思って立候補したし、

その試練はあたしが自分で課したモノ・・・・・・・・。だからみなもと君が撤回させることなんて出来ないの」

白木さんは顔を落とした。

それでもボクは白木さんにアイドルを続けていつて欲しい。

多分彼女にとってアイドルっていう職業は生きがいなんだ。

その生きがいをボクなんかが取っちゃいけない。

だから・・・・・・・・。

「ボク、絶対当選するねっ!!」

白木さんにアイドル辞めさせることなんてボク・・・・・・・・出来ないうっ!!

だから安心して。なにがなんでも当選してみせるっ!

例え相手側に雪穂さんがいたとしてもっ!」

「うんっ。そう言ってもらってあたし嬉しい・・・・・・・・。」

一緒に頑張ろうね、勿論、琉嶺先輩や手塚君もだけどっ」

ボクの意志は決まった。

今回の選挙は絶対に敗戦はありえない。

当選しかボクの進むべき道が無いんだ。

それが最低限、支援者になってくれた人への………恩返しだから………。

ボクと白木さんは選挙に必要な器具や準備をしていた。

その後手塚くんや琉嶺先輩と合流して舞台裏で演説の予行練習をした。

そして、選挙開始の予鈴のベルが校内に鳴り響いた。

Regular Chapter 25 〈Trial〉（後書き）

ご閲覧戴きありがとうございました。

感想・評価・投票ランキング等して戴けると励みになります♪
読者の皆様一人一人の声が私の作品を更に良くするものと考えておりますので、ご協力戴けるのならば非常に嬉しく思います！

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

奏応学園生徒会、一度は消え去った。

その理由はまだ分かっていない……。

ただ分かっている事と言えば、前の生徒会執行委員の人達は全員自らが辞任してしまったという事。

この現象は非常に不可解であった。

そしてこれからまた新しい生徒会が復活しようとしている。

ボクか木野城くんを生徒会長とする生徒会が誕生しようとしている。

何故生徒会の人達は全員辞任してしまったのだろう……。

でも今はそんな事関係ない。

ボクはただ目の前にいる支援してくれる人達のために生徒会長になるしかないんだ。

いつしか、与えられた試練が自らが与える試練となっていた。

ボクと木野城くんはジャンケンをした。

そう、勿論順番決めである。

結局ボクが勝って後攻を選ぶ事が出来た。

そして現在ボクの目の前には雪穂さんがマイクスタンドに向かって歩き出していた。

応援演説の始まりだ。

代表者は木野城くん側からは勿論雪穂さんが、そしてボクの側からは琉嶺先輩が選出された。

「皆さんこんにちは、この度私、詩条雪穂は木野城晴紀の支援者を勤めさせて戴く事になりました。

晴紀さんは……」

雪穂さんが挨拶すると男女共から歓声が上がった。

やっぱり雪穂さんはボクだけでなく皆から好かれてるんだ。

やはり痛手は相当大きい。

雪穂さんはその歓声が湧き起こる中で応援演説をした。

そしてその演説が終わり雪穂さんは反対側の舞台袖に向き直る。

今度はボクの応援演説だ。

ボクは先輩の方を見る。

何故か先輩はハンカチをかみ締めていた。

瞳には闘志さえ感じられたほどだった。

「私の番ですわねっ！」

詩条雪穂……好き勝手出来るのもここまでですわ!!」

そう呟きながら今度は先輩が演説台に向かって歩き出す。

先輩がステージに出ると女子の感極まった声がさっきよりも熱狂的に聞こえてきた。

ボクは袖幕から観客席を見回すと女子の手にはあるボードが掲げられていた。

『琉嶺先輩の付き人会、先輩に何処までもお供しますっ』

そうボードには書かれていた。

こんなに熱狂的に、大体今の時代”付き人”なんて”差別用語”なんじゃないかな。

そしてそのボードを持った人たちはほとんどが女子。

先輩が演説台の前に立つとその女子達からは声援があがり、先輩は得意げな顔をした。

それとは対照的に男子は冷ややかな目であった。

手塚くんの言った言葉は本当だ。

「皆様、この度はお集まり戴きまして誠に感謝いたします。

さて今回は私、琉嶺乃唯は源あゆむ側の支援者を勤めさせて戴きます。

それに際しまして、今回源さんに投票される方は私のオフィショツトを配布したいと思います。

そして無作為に誰かがランダムに私の水着姿の写真が贈呈される特典がついて参りますっ。

詩条雪穂さんが支援する木野城晴紀側にはなにも用意されていないようですが、ねっ。

私と詩条雪穂さんのどちらを選択するのか、まあどちらを選択するなど、投票開示等やらなくても

分かりきった事ですが……フフ。

さて、そもそも私とみなもとさんは……」

何故か先輩は自信に満ち溢れているように感じられた。

実際序盤引き気味だった男子のなかでは少数ながらも支持表明をする人がちらほら見受けられた。

女子の方は木野城くんや雪穂さんのファンを除外するしかしそれ

らの半数以上の人達がボク達に声援を向けた。

選挙って凄い。

女子からの圧倒的な声援と共に先輩の演説は終わりを迎えた。

ボクの横で手塚くんがガッツポーズをしていた。

彼曰く、”思惑通り”らしい。

そして今度は木野城くんが演説台に向かう。

そしてマイクスタンドを自分の口元に引き寄せて

「皆さん、今日は私の為に集まってくれてありがとう、感謝する！
そもそも私がこの選挙に立候補したのは……」

淡々と言葉を紡ぎだし終盤を迎えると

「それと先ほど琉嶺先輩が仰った言葉は少し違っている。

こちらに何の用意もないというのは嘘だからだ。

あちらは写真、ならばこちら写真で対抗しようじゃないか！」

そう言うと、木野城くんは内ポケットから徐に何かを取り出した。

そしてその手を上に掲げた。

『えっ！？』

場内が閑散としてしまった。

「先ほどその噴水で撮ったボクと雪穂さんの写真だ。

私が雪穂さんをお姫様だっこしている姿が良くキマっている。

まさに”ベストショット”。

こんな写真はそうそう撮れたものじゃない。

しかし特別に今回は私の方に投票をした人には特別に全員これを贈呈しようじゃないか、

なんという粋な計らいっ！

それでは私に投票、宜しく頼むよ」

言い終わると木野城くんはゆっくりとした足取りで舞台袖に向かった。

相変わらずのこの空気。

誰一人として声をあげない。

良く見てみると女子は皆あ然の状態だった。

ボクはそんな中ステージに出てゆく。

辺りは閑散さの極みだった。

皆からの冷やかな目を向けられつつも言葉を発しなければいけない。

なんというシチュエーションか。

「みつ、皆さん！」

今日はお集まりいただいてうつ、嬉しいです。

ここで残念なお知らせがあります。

先ほど琉嶺先輩が仰った写真の件ですが、贈呈しない事に決めました。

つまり今回ボクに投票して戴いても何の見返りもないという事ですっ」

「ばっ、バカっ！あゆむっ！」

舞台袖から手塚くんの焦った声が聞こえる。

そしてそれに対照的にも場内は批判の声が続発。

拳句の果てには『お前になんかもう投票しねえぞ』という野次まで聞こえてしまった。

そんな事にショックを受けている場合ではない。

何かで人を釣って支持を得ようとするなんて最悪の行為だ。

そんな時白木さんがボクの横を通り過ぎて演説台に向かう。
するとどうだろう。

場内の雰囲気はいきなりヒートアップ。

圧倒的な男子からのラブコール続発。

辺りの客席はどよめいていた。

そんな中白木さんはマイクを口元に近づけてこう言った。

「私、今回みなもと君が敗戦したら……芸能界引退します！」

言い終わると皆の声が止んだ。

そして少しの間を置いてから一気に場内は男子のパニックが起こった。

それを収集するのに1時間も要することになった。

場内が収まった時点でいよいよ投票ボタンを皆押し始めた。

ボクはステージに備えつけられたスクリーンを見つめていた。

そしてボクの支援者のいる背後を振り返ってみる。

「大丈夫だ」

「大丈夫ですわ」

「きつと当選するよ！」

皆からこのような言葉を聞かされてボクは勇気付けられた。

そして再びスクリーンを見つめる。

木野城くんは余裕の笑みを浮かべていた。

『ピンポン』

投票終了の合図だった。

『それでは発表いたします！』

そして若干の間を置く……

『木野城側投票数…… 739名！ 対する源側投票数……』

アナウンスの緊張感がスピーカーを通して伝わってくる。

ボクは唾をゴクリと飲み込んだ。

『…… 690名！ よって次期生徒会長は木野城 晴紀候補に決定
いたしました！』

そして今回は残念ながら源　あゆむ候補は敗退となりました。

皆様投票ありがとうございました』

支援者の皆の視線は下を向いていた。

全てが終わった……。

ボクは罪悪感と絶望感に苛まれていた。

ボクは……お父さんの試練を、自分の試練を、全うする事が出来なかった。

そして何故か場内のもわつとした熱気に冷気が混ざった感じがした。

ボクは膝を落とした。

皆に恩返しできなかった。

ボクに与えられる試練はもう存在しない……。

ご閲覧戴きまして誠にありがとうございました。

さて、やっと第一章の終盤に差し掛かりました。

ここまでで皆様からの感想・評価を戴けると非常に励みになります。

そして投票ランキングの方もご協力賜りたいです！

何卒宜しくお願い致します。

そして次の話ですが、結構間が空いてしまうかもしれません。皆様からの声が多ければ時期は早まるかもしれませんが、基本的にそういう事はないので時間が掛かってしまうと予想されます。まず最初にお詫び申し上げておきます。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

一ヶ月以上更新が滞ってしまつて誠に申し訳ないです。さて、お陰で当作品『Achieve』与えられた試練』のPV数が100000を越えることが出来ました。

これも偏に読者の方々一人一人のお力添えの賜物です。感謝申し上げます！これからも応援を宜しくお願いできれば感激ですっ”

果たすべき試練を果たせなかった。

そんな気持ち心が渦を巻いていた。

ボクが立候補するという事で多くの人に迷惑を掛けてしまった。

そしてその中でも白木さんに掛けた損害はケタ外れ。

ボクが当選しなければアイドルを引退するところで公言した以上後戻りは出来ない。

ボクは何で存在しているんだろう。

人に迷惑を掛けるため？

自分の私利私欲の結果このようになってしまった。

ボクは舞台袖に向かって歩き出した。

木野城くん、琉嶺先輩、白木さんは無言のままその場に立ちすくんでいた。

ボクはゆっくりと歩み寄って膝まづいた。

両の掌を地面につけて頭を伏した。

「じつ、じめんなさいっ……」

重い心持と共にその言葉が出た。

ボクが何回謝罪を繰り返そうとこの人たちに許してはもらえないだろう。

だけどその姿勢が大事なんだ。

「やつ、やめろよ、土下座なんて！ あゆむは何も悪いこととしてないだろ。頭上げてくれよっ」

「ボクは、ボクはっ……」

「ハハ、無様だな！ 源 あゆむとて所詮その程度。

誰が協力しようとも貴様が負でもってそれを打ち消す。

そう折角の労力も無駄と化す。

そもそも私と雪穂さんに勝るものなどこの世界に存在しない。

まさに私にとって雪穂さんは鬼にレーザー銃！

貴様の負けなんだよ、源あゆむ」

ボクは下唇を噛んだ。

そもそも選挙に出馬すること自体間違っていたのだろうか。

確かにボクに折角協力してくれた人の労力を無駄にした。

そのせいで白木さんの社会的な席を失う事になる。

ボクには何の手も残されていないのだろうか。

この事態を何とか挽回する何か、……何もない。

「さて、私が生徒会長となったからには勅命が出来る訳だ。

最初の勅命はこの源あゆむを校外追放することだ。

その施行は私が生徒会長に就任する明日から。

それまで精々自責の念に囚われるがいい。

そして二度と私と雪穂さんの前に姿を現すな！ハハハ」

木野城くんは近寄ってきてボクにだけ聞こえるように囁いた。

雪穂さんを見つめる。雪穂さんは目をボクから背けて俯いていた。

地面に平手でついた手を硬く握り締める。

辺りの空気は乾いていた。息がとても苦しかった。と同時に胸も苦しい。

ボクの背中に誰かが手を置いて擦こすった。

ボクが見上げると目の前には白木さんが擦こすってくれていた。

なんて優しい人なんだろう。

そしてボクはその優しさに甘えるだけで何か返しただろうか……。更に胸が苦しくなる。その好意は反ってボクの心の負担を大きくした。

「みなもと君はよく頑張ったと思う。それに、謝らないで。

みなもと君は何もしてないわ。私が好きでやってる事。

私はいつもみたいに生き活きしてるみなもと君でいて欲しいの。だから立って、ホラ」

白木さんはボクの手を取って立ち上がった。

ボクもゆっくりとそれに合わせて立ち上がったがやはり顔は上がらない。

「みなもとさんが落選したという事は全て私の責務。

みなもとさんが悔いる事は何もないのです。

私が詩条 雪穂さんに敵わなかったということ、大きな屈辱。

いつかこの屈辱を晴らします。だから次の選挙に出馬なさって。

その時はダントツな差をつけて勝利を差し上げますから！」

先輩は優しい声色でボクにそう語りかける。

気を使わせてしまっている……。悪いのはボクなのに。

全てを先輩達に任せて自発的に事を進められなかったこのボクのせいなのにつ。

「あゆむは気に病む必要ないんだぞ。

またチャンスはある！今回は状況が悪かったんだ。

それになりより俺の力不足が選挙に響いた」

「手塚 渉！キミはもうウチの部活には要らない。

今日付けで荷物を纏めて去りたまえ。

今までご苦労！ハハハ」

木野城くんは手塚くんの言葉を遮ってそう投げかけた。

それを受けた木野城くんから苦心の声が聞こえた。

木野城くんがパソコン部を辞めさせられる？

ボクは顔を上げて木野城くんの目の前に駆け寄った。

「お願いですつ、木野城くん！

手塚くんをパソコン部から除名しないで下さい！

手塚くんはボクが脅してこちらに加担したんだ。

だから手塚くんは悪くないっ。悪いのはボク、だからお願いしま
す……」

ボクは木野城くんに懇願して頭を下げた。

「あゆむさん……」

雪穂さんが悲しそうな声で囁いていた。

「フン、人をお願いするときはそんな態度でいいのか？」

これも手塚くんがパソコン部を辞めさせられない為……。

ボクは跪いて、再び地面に平手をつけた。

「おっ、おねが……」

ボクの手が上方に引かれた。その手の主は手塚くんだった。

「何をするの！」

ボクは手塚くんに向かってそう怒鳴った。

「こんなヤツに土下座する必要なんてないっ！」

手塚くんも大きな声で言い返した。

「ボクがこうする事で手塚くんがパソコン部に残れるならそれで本

望だよっ！

ましてやボクは明日この学校を去る。だからもういいんだっ」

ボクのせいで手塚くんがパソコン部を辞めさせられるなんて耐えられない。

このまま学校を去ることは更なる後悔を残すことになる。

そんなことは絶対にしたくない。

「誰がそんな事頼んだっ！俺が少しでもあゆむに頼んだか？」

第一、俺はパソコン部になんて未練はないっ。そのクソ部長にそう言われずともこっちから辞めてやるよ。

俺をあんまり見縊ってくれるなよ！」

手塚くんはいつにもなく怒号にみちた声色でボクに向かってそう言い放った。

「分かったか？」

貴様がすることは全て負の連鎖。友達の事を思ってたつもりが裏目に出る、フン。

第一、貴様の対人関係はなんだ？ 人に縋ってばかりで自発的に何にも出来ないじゃないか？

人に何でもお任せ的な、迷惑極まりない厄介なにんげ……」

「オイっ！ それ以上あゆむの悪口を言ったらお前をぶん殴って二度と口が聞けないようにしてやる」

木野城くんが言った事を遮って手塚くんはまたも声を荒げた。

「おいおい、暴力発言か？ 礼儀を知らない無知な輩はコレだから困る。」

仮にも今まで私の部員だった人間の言う事とは思えない。

フン、何度でも言つてやる、ここにいる源 あゆむは存在価値のないいていいにんげ……ムフっ」

「もう一度言ってみろ！」

手塚くんは木野城くんがそついいかけると物凄い勢いで殴りかかった。

木野城くんは勢い良く倒れこんでそれに手塚くんが馬乗りした。

「誰がいなくて居なくていい人間だつて？ エっ？

この世に居なくていい人間なんて一人も居ないんだよ！

あゆむの事を知りもせずに能書き垂れてんじゃねえっ！

あゆむは思いやりのあるイイ奴なんだぞ、知ってたかつ？

他人が危険な目に遭つてると一目散に駆け寄って自分の危険を顧

みないやつだつて、知ってたかつ？

俺がパソコン部辞めない為に身代わりになろうとしたやつだつて、知ってたかつ？

俺が影でお前の事を蔑んでいたらあゆむはお前は悪いやつじゃないって言った事、知ってたかよつ？」

手塚くんはこん身の力で木野城くんの顔を殴った。

何遍、幾度も、殴打。

「手塚くん、やめてよっ！」

手塚くんはこんなにもボクの事を思ってくれていたんだ。

それなのにボクは何をやっていたんだろう……。

ボクは手塚くんのお腹を抱えて木野城くんから引き離れた。

「ボクが悪いんだ。ゴメンっ、ゴメン、本当に、ゴメン」

そういいながらボクは憤慨して今にも再度飛び掛りそんな手塚くんを抑えていた。

すると次第に手塚くんは静の心を取り戻した。

「フン」

木野城くんはそう言つとそのまま立ち上がることは無かった。

「晴紀さんっ？」

雪穂さんは木野城くんに近づいていった。

俯きそして手を取って脈拍を測っていた。そして顔を上げた。

その事態は辺りを混乱の渦に巻き込んだ。

辺りはどよめきを極めていた。

そしてその内のあるグループは出口に向かって走り出した。

おそらく先生にこの事を報告する為だろう。

ボクはそのドアの方に視線を送っていた。

そのグループはそこに目掛けて駆けている。

そんなグループはドアは締め切り状態な事を分かっているだろう。

しかしドアマンである先生に事態を知らせるべくノックしドアを
解禁してもらったつもりだろう。

もつじきドアにグループが差し掛かる。

そこでボクは目を瞬いた。

そのグループが辿り着く前にドアが開け放たれたのだ。

勿論外にいる教師は現在の状況を知る由もない。

時間制でドアの開閉を行うのだから。

終了の時間まで残り20分……。

何故？

そんな開くはずの無いドアが今開け放たれた。

御覧戴き誠にありがとうございました。

もう少して第一章が完結します！

正直ここまで来るのに長かったです……。

作者としては色んな方からの感想や評価を賜り吸収することが沢山ありました。その事をこの作品に活かせてないかもしれませんが次作で活かしてゆきたいと思います。次作も只今目下全力で執筆をしております。

ちなみにジャンルは恋愛モノのファンタジーです。

コメディ色に富んだ恋愛のファンタジーモノに出来るよう獅子奮迅の勢いで励んで参りたいと思います。読んで戴けたら幸いです！

評価・感想・投票ランキング等もして戴ければ嬉しいです。

それでは次話も読んで戴けたら幸いです。

「只今をもってこの選挙の保留を命じるっ」

いきなりドア口から聞こえるハリのある大きな声。

よく見るとそれは女の子であつた。

遠くからでよくは分からないけれども、セミロングの髪の長さで背が高くスレンダーな女の子であつた。

その女の子はなにやら手帳らしきものを内ポケットから取り出してボク達のいる舞台側に歩み寄つてきた。

「生徒執行取締役委員会委員長の名をもってこの場は私が主軸として取り仕切らせて戴く。

尚、選挙委員会の全権限は私に委託される故、悪しからず」

ボクはポカンとした状態でそれを聞いていた。

一体何が起きたんだろう……。

選挙が終わつた今何をするところがあるんだろう。

「まっ、まさか……アイツはっ」

隣で手塚くんが驚きの声を上げた。

ボクはゆつくりと顔を手塚くんの方に向けた。

「ど、どうしたの……？」

ボクはゆつくりと手塚くんに問いかけた。

「まさかつ、いや、どど、どうしてか分からん！俺は混乱してる。
ああ、あゆむに何を言っているのか分からない、んだ」

手塚くんは動揺して頭に手を持っていった。

周りの皆の視線はその女の子の一点に注がれた。

皆もおそらく状況がつかめていないといったところだろうか。

木野城くんは声を少々うならせながら起き上がった。

「大丈夫ですか？」

雪穂さんは木野城くんの背中を片手で支えながらそう問いかけた。

「えっ、ええ。な、なんのこれしき、大丈夫ですよ」

木野城くんは頬に手を当てながら片目を瞑っていた。

流石に手塚くんの渾身の拳は痛いというのが見て取れた情景だった。

「無理はしないでください」

そう雪穂さんが木野城くんに投げかける。

木野城くんは辺りをゆっくりと見回し、異変に気がついた様にその始点を探った。

その後目を大きく見開いて驚いたように立ち上がった。

「これはこれは瀬那さん、よくいらっしやいましたね！ あなたの
お力もあつて木野城 晴紀、見事生徒会長に当選することが出来ま
したよ。」

感謝してますよ。して、どうしたのです？ここに直々にいらっし
やるとは思っても見ませんでした。

ああ、そうか、私の生徒会長就任の祝詞を戴けるのですね。なん
と、嬉しい事か」

女の子はピタと木野城くんの目の前の壇下で足を止めた。

俯きながら今まで掲げていた手帳をポケットに戻した。

「当選おめでとう……、良かったな……」

「ありがとうございます。まあ、私が当選することは選挙を行う
前から明白でしたが。」

大体私の対抗馬があんなヘタレの源 あゆむだとは拍子抜けです
よ。

そもそも私の相手ではなかった。私の前に立ちはだかろうなんて

100億万年早いことですしね。

そう思いませんか？」

「……」

女の子は沈黙を保っていた。

「雪穂さんを私から奪うからこういう事になるんだ。

まあそれを今回はよくしらしめられた機会でしたが。

仲間を頼ってばかりで自発的に何も出来ないただの無能な人間。

父の源 雄司氏であつたって会社の利益の事しか考えず人の気持ちを顧みない最悪な人間。

親子揃ってなんとまあ……。そもそも金にモノを言わせてあなたの母上の学校を乗っ取るとは、人間の風上にもおけない方々だ、ハハハ。

下民はこういう結末を迎えるのですね。父親の方には一矢報いる事が出来なかつたですが、息子の挫折を知れば打撃を与えられない訳ではない。いい気味だ」

「……つくな」

「ハハ、なんですか？もう一度言ってください」

「……、この嘘つきめっ！！ 下民は貴様の方だっ！」

突如顔を上げ怒号に満ちた物凄い剣幕で木野城くんに向かって罵声を浴びせた。

館内がその声で響き渡った。

これは一体……。

「なっ、何を怒っていらっしやるんですか？　げっ、下民が私とは一体どういう事ですか？」

木野城くんは若干焦っていたように見えた。

一体あの女の子は誰なんだろう……。

生徒執行取締役委員会の名は聞いたことがある。

生徒会の代わりとして存在する機関。

そのトップである委員長がこの学校を取り仕切っているという風に皆が噂してた。

そしてその女の子がどうやらそのトップらしい。

「貴様、私にこの学校は源家の私利私欲の為に乗っ取られたといったな？」

女の子はそう言いながら壇上へ上がる階段へと歩き出す。

「そ、そうですっ！　全てはこの源が仕組んだ事、私達は被害者とい

「つても過言ではありません」

木野城くんはその女の子の方に視線を合わせながら堂々と受け答えた。

「今なら無罪放免とまではいかないが比較的軽い罪にしておいてやる、正直に話せ」

壇上に上がったところでまたしても立ち止まり木野城くんの方を睨んだ。

「なっ、私には瀬那さんが何を仰ってるのか分かりません」

木野城くんの手元にふと視線がいく。

僅かながら木野城くんの手が震えているのが見て取れた。

ボクはまだ状況がつかめていなかった。

「ほっ……どこまでもしらを切るか……。ではこれは何だ？」

館内は静寂に包まれていた。

皆は口を開くことなくボク達のいる壇上に向かって視線を向けていた。

その女の子はスカートのポケットからなにやら数字が並んでいる紙を取り出した。

「そっ、それはっ」

木野城くんは一步足を後ろに踏み出した。

「これは九年前から去年までのこの学校の決算報告書の一部を抜粋したものだ。」

「この部分をよく見てもらえば分かるように収入の部分を何故支出の部分が毎年上回っているんだ？」

その女の子はその紙の左端の数字から右端の数字まで一連になぞった。

木野城くんの顔が若干引きつっているように見えた。

「さっ、さあ、何故でしょうね？ 私にも分かりかねます……」

その女の子は木野城くんの方に歩みだした。

「私はここの学校創設時代から代々経理を任せている木藤という人にこれが正しいか一から計算して貰った。」

結果数百億の水増しが発覚した。当人に何故このような事が起きたか聞いたところ、経理統括に自分の経理結果を渡して最終審査をして貰っていたと答えたよ。どういうことか分かるか？」

「わっ、分かりません……」

木野城くんの唾を飲み込む音が聞こえた。

額から汗が流れ出ているのが見て取れる。

「ってことは九年前から去年まで毎年この学校は数百億の赤字だったって事？」

「さらにしらを切るか……。木藤から貰ったその決算書を経理統括が提出するつまり……。その経理統括が水増しを行ったって事だつ！……さてここで問題だ……。去年まで経理統括だった人物は誰だ？」

再びその女の子は声を張り上げた。

木野城くんは急に顔を下に向けた。

「最上^{もがみ} 天^{しえみ}……名に聞き覚えがないか？」

「しっ、……。知りません」

木野城くんの声のトーンが徐々に落ちてゆくのが分かった。

まさか……。

「九年前と言えば何が起こっていたかな？ 確か木野城の会社が新天地に勢力拡大という目的で支社を全国に創設したものの失敗し大きな負債を抱えたという記事が新聞に載っていたような気がしたんだがな……」

その女の子のその一言で全ての全貌が見えたような気がした。

ボクは木野城くんの方を見た。なんでそんな事したの……。

「当時全国に勢力を拡大しようと社内で進言しその案を推進したのは誰だろうな……」

話す事を休めることなく木野城くんに向かって言葉を浴びせる。

「最上は自分の失敗を補おうとして当時片手間で業務にあたっていた奏応学園経理統括という役職を利用したんだ。

無論最上と私の母は親友であつたから……いやいや、これは間違つたな。

一方的に私の母が親友と思つていただけか……。

そもそも最上が奏応学園経理統括を任されたのも私の母のコネでなつたようなものだ。それを逆手にとって母を裏切つた。絶望していたよ……。

去年まででようやく挽回できる程の金が入つたんだろうな。去年は木野城の会社の株が急上昇していたからな。

さて、それは犯罪にあたるのではないか？ フン、第一そのお陰でこの奏応学園は多大な負債を抱えてしまった。

つまり知らぬうちに貴様の会社の身代わりになつていたという事だよっ！！

毎年毎年何か紙を見ながら私の母は頭を抱えていた。去年まで私は何で悩んでいるのか分からなかった。

というより母にその悩みの種を聞いてみたが教えてもらえることは出来なかった。

しかし、この学校が乗っ取られたという貴様の言葉で私の脳裏では合点がいった。

毎年毎年母が悩んでいたことは源家にこの学校を乗っ取られるという事で、自分の役職、学校を司る重要な役目である席、生徒を愛しつつ

その生徒の人生の指針の手助けになる指導者の最峰としての奏応学園理事長という席に執着を持っていた母がそれを奪われるという事で落胆していたのだと。

私は母を苦しめた源家を恨み、木野城、貴様の方の影の支援者として票獲得を秘密裏に行った。

だがそれは間違いだと気づいた。この学校に源が転校してきた時に母が心労で入院し、辛くも退任前日には退院できた。

私はその退任前日の夜に母に呼び出された。そう、母に私の木野城側への支援を行うというのが知れたが故だった。

母は言った、このままでは奏応学園が経営破綻するという危機的状況を打開、救ってくれたのが源 雄司氏だと。

私は非常に後悔したよ。つまり、木野城 晴紀、貴様に騙されたという事だっ――！

貴様の会社の幹部に私の知り合いに頼んで潜入してもらったスパイがいてな。

そのスパイが貴様の身边調査をした所分かったよ。

貴様と貴様の父親は直接この事には関わっていないもののそれを全て知っていたんだ。それで私や周囲を利用し源を陥れようとした。

人間の風上にもおけないのは貴様ら木野城家の方だ。正々堂々勝負の出来ないこの腰抜け坊ちゃんめっ！よくも私を騙してくれたな。

お陰で源に申し訳が立たない。どうしてくれる？

さて私はこれからこの一連の事を警察に報告する。貴様の会社は忽ち信用を失うだろう。

まあいずれにしる貴様の茶番劇も、もう終わりだ……。

明日限りで貴様はこの学校を出て行ってもらう、木野城 晴紀。

それと明日ここを去る前に貴様の会社に流入したこの学校の赤字部分およそ9年分を返金してもらう」

「むっ、無理だっ！ そんな事をしたら会社の存亡の次元の話じゃない、わが社は倒産確定だ！

確かに悪かったと思ってる。事の重大さも重々承知だ！しかし…

…」

「これは犯罪なんだぞっ！！ 本当は違法な事を知っていながら見過ごしていると貴様らも罪に問われるんだぞ。

しかし私の母はまだ貴様が高校生だからこの先の人生を見つめなおしながらこんな間違いは二度と犯さず正しい人生を送って欲しいという理由で貴様を転校扱い、貴様の父親は会社に大打撃を与える

という事で放免という比較的軽い罰で済ませようとしている。

フンっ、やはり貴様はわが身大事な人間だなっ！」

木野城くんは俯いて黙ってしまった。顔面蒼白とはまさにこの事だろうか……。

木野城くん……なんで、最初は嫌な人だなんて思ってたけどこんな事するなんて思いもしなかった。

雪穂さんもなんで？ この事知ってたのかな？ なんで木野城くんに協力したんだろう。

「加えて生徒会長の件だが貴様の獲得票は739だったそうだな。

対して源は690票その差49票。私の意向が変わったとしても、もう投票を済ませてしまったが故もう変更はきかない。

合法的にこの選挙結果を覆してやろうじゃないか。

貴様の様に汚い事はせずにな。

現在ここに在籍してないグループがいる。もうそろそろ到着する時間だ」

そう言つてその女の子は自分の腕時計を見て開け放たれたドアの方を眺めた。

すると丁度誰かが開け放たれたドアに立っていた。

胴着姿の人……、まさかつ。

「しっ、志倉さんっ！！」

目を凝らして見ても彼女である事に変わりはない。

でもなんで志倉さんがここに……。

辺りの空気は再び一変しざわついた。

ご閲覧戴き誠に感謝申し上げます♪

シリアス要素たっぷりでお送りいたしました。

まだシリアスの部分は続くかと思います。

ラブコメを期待してくださっている方々にはホントに申し訳ないと思っております。

予定では二章に入り次第ラブコメっぽく執筆してゆく所存です。

コメント・感想戴けるととても励みになります。

特に今回のストーリーは色んな方の意見を聞いてみたい所です。

それ以外でランキングの投票でも構いません、むしろそっちも励みになり感激です。

良ければ宜しくお願い致しますねっ！

それではまた次の話も読んで戴けると幸いです♪

思いもがけない展開がそこに待っていた。何故に志倉さんがここにいるの……。ボクが余計な事をして逆に彼女を傷つけてしまったとばかりに思っていたのに。

志倉さんは無言のまま当方まで歩み寄ってくる。なんとという無表情、感情を面に出さないで怒っているのかと心配になってしまっている。そして志倉さんを先頭に距離をつめて同じ当方についてきている胴着姿の男女に多くの疑問を寄せていた。同じ剣道部には違いない、この前の乱闘事件の時に顔を見かけた人が何人かいたので確信の裏付けが取れた。さつき生徒執行取締役委員長が言ったことがこのメンバーに当てはまるって事はないなと自分の中で思っていた。

志倉さんは当方の壇上にいよいよ辿り着いた。雛壇を一足一足踏み越えてゆく。背後に列をなしていた剣道部の男女はそこで足を踏み留めた。志倉さんはボクの方を一目見てから聴衆の方を向いた。そしてステージ横の司会者が使っていた講壇の上に置いてあるパソコンの方へと歩みを進めた。何をする気だろう……。固唾を飲みながら志倉さんの方を見つめていた。辿り着いたかと思えばそのパソコンを操作しているようだ。一体何を操作しているのか、大体そのパソコンは投票の集計をするために設置されたものなだけだ。

とその時驚嘆の声が聴衆から上がってくる。一体何がどうしたんだろう。聴衆の目の先を追ってみるとそこには先程集計結果を映し出す大画面モニターがあった。ボクはそうと気づくと視線をモニターから外した。先程ボクと木野城くんとでバーティカルバーで区切られそれぞれに数字が映し出されたそれはただのトラウマでしかなかった。当選した木野城くんの方に大きな赤マルがそして敗戦した

ボクの名前には大きな青バツが、まるでそれを助長させるかのよう……。全てボクの責務、多くの悔いる部分を想起させるモノ。できる事なら目を背けていたようなそんな感覚、しかし聴衆がなんで驚嘆の声を上げているのかというのも気になるところだった。ボクは恐る恐るモニターにゆっくりと視線を合わせる。

するとボクは目を大きく見開いた。なぜならばボクの視線の先には先程決定し白黒付いていた筈の集計結果が記号が取り払われ、源側の投票数字が軒並み上昇してたからである。ボクは志倉さんの方を向いた。しかし彼女はすでにもういなかった。最前列にいたはずの剣道部員もいつのまにか忽然と姿を消し先程の変わらぬ情景になっていたからである。ただ変わってしまったのはボクの集計結果。彼女がいなくなっても尚上昇している、おそらく遠隔操作で読み込みが遅いのかもしれない。百の位の桁が一つ繰り上がりそして十の位も二つほど上がっていった。

729、730、731、……

心の鼓動が次第に高鳴り、それに呼応してか喉の渇きが尋常ではなくなってきた。人間の身体の約70%は水分で出来ているらしい。そのボクの身体が今のボクの喉の状態になったらボクの身体は枯渇してしまうのだろう。若干の頭痛に苛まれながらもモニターを窺った。

737、738、739

とうとう並び立ってしまった……

一時間程前に選挙が本当の意味で幕を閉じた。結果3票差でボクの方に軍配が上がり先程の結果は見事に覆ってしまった。木野城くんは声も出せず肩を落とし力なくその場に腰を落とし俯いた。悶えていた事は傍から見ても明白であった。何故だろう、選挙期間中そして当日に嫌味を言われたりしたのにも関わらず、目の前の木野城くんに哀愁を感じてしまった。選挙結果が覆った事によって木野城くんを哀愁あいしゅうしているのかもしれない……。そして現時点では解消しつつもあった、悩みの種にも以前なっていた雪穂さんについても、木野城くんの側にいる事について納得しつつもあった。木野城くんの本質を雪穂さんは見抜いていたからこそ承諾したのではないか、勿論コレは憶測に過ぎなかったが木野城くんの本質の一部をボクは憶測によって垣間見る事が出来た気がした。兼愛に富んだ人だと改めて感じた情景だった。その後木野城くんは体調不良で保健室へと雪穂さんと共に向かっていった。

そして時は時は移り現在に至る。多くの波乱があり、もうダメかと諦め絶望の境地に達した所を救ってくれた志倉さんには感謝の気持ちでいっぱいであったし、何よりそれに勝るとも劣らず疑問の念がこみ上げてきていた。この結果を収められる事が出来たのも志倉さんを含む剣道部の皆がいてくれたからである事は言うまでもない事……。しかし何故彼らはボクなんかに投票してくれたんだろう。馴れ合いでこんな事はしないだろうという事は志倉さんの先程の瞳を見てはつきりと分かった。

それを問いかけるといふ目的も、お礼をいう事よりは重要性は低いが含んでいたが故にこうして志倉さんのいるであろう道場に諸事が終わってからすぐに飛んで来たのだ。『後は俺に任せておけよ。お前はしなければならぬ事があるんだろう？』そう手塚くんはボクに言っただけで生徒会設立に関する書類手続を行ってくれた。そして

更にはそれに白木さんや琉嶺先輩までもが加わってくれた。彼らがいなければここまで漕ぎ着ける事ができずにどこかで心折れていただろう……。感謝してもしきれない存在、人の温かみや人情という真の意味が分かった気がした。

一方生徒執行委員長には後で話があるから昇降口に来てくれ、と言去り際に言われただけで他の会話は何も交わす事はなかった。委員長にも多大なる感謝を寄せていた。状況を打開してくれた主軸の人でもあったからだ。後で会った際にやはりお礼を言おう。

道場に向かうと志倉さんはそこにはいなかった。一体何処に？ 思い当たる節がなかった。とりあえず中に入ってみる。中は漆の板張りの床に正方形の形に白線のテープを貼ってあった。上を見上げると天井が物凄く高くドーム型になっていた。辺りを見回すとそこにはもう一つの部屋が、『防具庫』であった。扉はキャスター型の引き戸で取っ手に手を当てる。ここにいるのだろうか？

「しつ、失礼します……。誰かいらっしゃいますか？」

防具を干すための大きな棚が置かれていて、換気用にと窓や換気扇も一つずつ設置されているようだ。他には何があるんだろう？ 竹刀は何処にあるんだろう……。なにやらもう一個奥の方に扉があるようだ。ここに竹刀とか鐔とかがあるのかな？ そう思つてドアノブに手を掛けて何の躊躇いもなく手元に引き寄せた。扉は開け放たれた。昔懐かしの竹刀や鐔ちゃんご対面。

『あつ』

「……………」

「……………」

「……………つ、きやあつ」

「うわあつ、なつななんで此処に？」

竹刀等を探そうと思って何の躊躇もなくドアを開けようと思っていたら本来の目的であった彼女がそこにはいた。しかし、ただいたわけではなかった。思いがけない事に袴の紐を解いて胴着姿でそこに立っていたのだ。志倉さんは手を胴着の下部分を思いつき下に引つ張つて足を内股にしていた。勿論志倉さんもボクが入ってくるなんて微塵も予想はしていなかったであろう。だから一瞬目があった時点で何も声が出なかった。志倉さんは顔を赤らめた。そつ、そんなつもりじゃなかったんだよつ、そう思いつつも叫ばれた瞬間に咄嗟に外に出てドアを思いつき閉めた。そしてドアに寄りかかり一息つく。中からは何も聞こえてこない。相当怒ったのかな、思いつきり謝ろう。そう思つてボクはドアに対面し頭を精一杯下げる。

「じつ、ごめんなさつ、うあッ」

誠心誠意込めた謝罪をしてる人間に対してドアを思いつき開けることないでしょ。ボクがドアに対面してたもんだからドアが勢いよく開いてそれがボクの頭に思いつきり当たったのだ。ゴンと鈍い音と共にボクは頭を抑えてしゃがみこむ。昔ボクが通学途中に考え事をしながら歩いていたら電信柱に頭をぶつけて頭から流血した記憶が甦る。今回もそうなつたらどうしてくれるの……

「よつ、よくも私のああんな姿見てくれたわねっ！ ゆゆ許さないんだからつ、そつ、そそそこに直りなさいっ」

志倉さんは袴を付け直しボクの前に仁王立ちで立ちはだかった。

「もっ、ももう直ってます、イテテテ」

「ちょ、ちょようにしに乗ってるんじゃないわよっ！　せせせいかいちょうになったからって何でもしていいって訳じゃないでしょっ！　ひっ、ひ跪きなさいっ」

「既に跪いてますよ……」

ボクは頭を抑えながら志倉さんを見上げる。はっ、般若？　尋常じゃないくらいに御冠になっている……。

「ふんっ」

志倉さんはそう言ってボクの頭を足で踏みつけて思いっきり地面に擦り付けた。まっ、摩擦とか凄いから、小さな砂利とかが額に擦れて地味に痛いから……。

「ほ、ぼクMにやないによ」

もう言葉にすらなっていない気がする。口元が地面に幾度も触れるのももの凄く話しづらい……。

「なっ、なにバカな事言ってるのよ気持ち悪いっ！　あ、あっち行けゴキブリっ……！」

「うあっ」

そう吐き捨ててボクのわき腹を思い切り蹴飛ばした。ボクは勢い良くごろごろと転がって壁に激突した。ボクが悪い事したにせよ扱いがひどいよ……。

「男ってやっぱり最低っ、例外なしね。あんたが気持ち悪いからもう体の一部で触れる事すら憚る、大体……わわ私の……」

「みつ、見てませんよっ!!」

ボクは痛さを堪えて力を振り絞り顔を上げてそう志倉さんに言った。

「ど、どどの目が見てないですって？ ふんっ」

志倉さんはボクの方に歩み寄ってきてしゃがみ込んで人差し指と中指でボクの両の目を思いつきり突く。あまりの痛さにボクは自発的に転がる。スッ気たつぷりじゃないかっ！ ボクは痛さをそれでも堪えきれなくて少々の呻き声を上げる。

「ビービー、ほざくなっ！ さっきあんなに鼻の下伸ばしてたくせによよよくもそんな事が言えたもんねっ！」

「は、鼻の下、のばしてなんか、いない、よ……」

呻き声をやめて、感じた事のない痛さを堪えて最後の力を振り絞って弁明を顔を上げて垂れた。

「ど、どどの鼻が伸びてなかったですって？ ふんっ」

志倉さんは虫の息で倒れているボクの背中に跨って右手人差し指と

中指ををボクの鼻の中に突っ込んで上に引き上げた。キャツ、きやめるくらうち？ 鼻の中の皮膚に志倉さんの若干伸びた爪がくい込んで尋常な痛みじゃなくなってるから、もう拷問といっても過言ではない……。

「アンタの汚い鼻水が付いちゃったじゃないのよ……」

そう言うとき志倉さんはボクの頬にそのボクの鼻水を擦りつけた。先程とはうって変わって無表情だった。ボクは心も身体ももう何もいう事が出来ないほどの疲れがやってきていた。

「このミドリムシっ！　そこでへばってろっ、ふんっ」

ゴキブリからのミドリムシ？　これはランクが下がったっていう認識でいいんだよね？　志倉さんは立ち上がってこの部屋から出ようとしていた。マズい、このままじゃ本来の目的を果たせない。

「すい、すいくらしゃん」

志倉さんは無口のままこちらを振り向き立っていた。

「きよっ、きよふは、はりはどうふおだいました」

ボクは宇宙人だろうか？　日本語が話せない。自分が嘆かわしい。

「なっ、何？　かつ、か勘違いしてんじゃないわよっ！　わっ、私はただ貸しを作るのが大嫌いなもの。とと特に、アンタみたいな汚らしい生物に貸しを作ったなんて考えただけで鳥肌が立つわ。それにそれ以上に爾菜に迷惑掛けたから……そっ、それだけよっ！　あぁっ、なんか腹が立ってきたわ。このカスがっ！　ふん」

最後に志倉さんは足を大きく振り上げてボクの頭に垂直に振り落とした。か、かかと落とした……。ボクは失神して目が覚めた時には志倉さんは姿を消していた。

御覧戴き誠に感謝致しますっ ♪

このストーリーで少しでも楽しんで戴けたら非常に嬉しく思います。若干昔の自分に起きた事を小出しで掲載させて戴きましたが、どうでもいいですね。

以前より少しシリアスさは軽減したつもりです。今後もそのように出来る時には行っていききたいと思っております。

投票ランキングもこの作品に好感を持つて戴いてる方には是非お願いいたく存じます。感想・評価等も今後の私の小説に対する創作意欲が湧いて参り、適度なハリが出てくる事と思います！して戴けたら感激しますっ ♪

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いですっ ♪

起き上がると体中に痛みが奔り多少の頭痛を伴っていた。そのため立ち上がることが困難であつたのでしばらくその場で寝そべっていた。辺りを見回すと先ほどボクに重傷を負わせた彼女はなくなっていた。まあ、とりあえずボクの果たすべき目的は果たすことが出来たので良しとしよう。だがしかしボクにはまだ行かなければならない所がある。生徒執行取締役委員長のいるであろう昇降口だ。……っあ！

「約束時間ッ！」

ハッと気がついて反動的にまたも起き上がるもやはり全身の節々に痛みが奔る。忘れてはいけない事を忘れていた。ボクは自分の腕に装着されているデジタル時計を目元に引き寄せる。時刻17時48分、良かった待ち合わせ時刻まであと12分程。身体の痛みはともかく不幸中の幸いといったところだろうか。

節々の痛みを堪えつつも自らの身体に鞭を打ちなんとか立ち上がることが出来た。自分の腕を少し揉んでみる。すると内出血を起こしているかと思わされる程の激痛が神経を通って感受させられた。こんな大打撃を与えられるのならボクが救わなくても一人で何とかできたのではないか……、そう思い知らされたような瞬間である。

少々の立ちくらみを起こしながらも一歩前に出る。先程の少々の休息の賜物なのか若干身体の融通が利いた。ボクはゆっくりと閉塞な空間へと変わってしまった主因であるドアを力を入れて開け放つ。やはり腕の痛みのせいなのか軽いはずのドアなのに重厚さが感じられた。ボクはそのまま生徒執行取締役委員長から待ち合わせ場所と指

定されている昇降口にゆつくりと向かう。

本校の最上級生の昇降口は1・2年生とは違っていて別棟となっているため一度表に出なければならぬ。本当は外に出る際には外履きに履き替えなければならなかったが若干面倒くさかったのもそのまま外の地へと歩みだした。天を仰げばまだ日は沈む気配はなく、天は橙の系統色のパレットのように様々なコントラストが見受けられる。もうすぐ夏真っ盛りの季節に突入するせいか、背中には汗が噴出してワイシャツを濡らしていた。風が吹けばよいのだがそんな事はおそらくはないだろう……。

更に歩みを進めると前理事長が趣味で手入れをしていた中規模の庭園が目に入ってきた。ボクは足をそこで止める。一人でこの大きさは厳しいのではないか。様々な色のチューリップ、椿、シユウメイギク、スイセン、ポインセチア等他にも多数の花々が植えつけられていた。その中でも心が癒されるかのような仄かなスイセンの香りが鼻に入ってくる。と、それ以前にこれらをここまで育てるのにどれだけの労力を費やしたのだろうか、前理事長……圧巻。そんな様々な感情を抱きながらも顕著に自分の心の中で思った事はこの庭園はどうなるのかという事だ。……もし誰も手入れをしないのであればボクが是非引き継ごうか。

再び歩みだし地がコンクリートに変わった時点で別棟が見えてきた。あそこが今回の約束場所だ。もう生徒執行委員長は待っているのだろうか……。距離は徐々に縮まる。そもそも用とは何だろう、そんな考えを張り巡らしながら別棟昇降口に向かった。

下駄箱が見えた時点で生徒執行取締役委員長の姿が見えた。近くの用具ロッカーに寄りかかりながら腕組をしている。これは待たせてしまったのだろうか、考えるまでもない。生徒執行取締役委員長はも

う待ちに待ったのだ。それは顔の目を見たら一目瞭然だった。目を細くしながら左右を見渡している。加えて腕に当てられた人差指。何度も打ち付けている。ボクは自分の腕時計を見て確認。時刻、17時58分、遅れてはいないハズ。

「お待たせしました……」

顔を窺いながらそう自信なく、あくまで申し訳なさそうに話しかける。さっきの行動から感じ取った事はこの人は怒っているという事。あくまでも下手に出なければ。

「いや、待つてはいない。気にするな」

生徒執行取締役委員長は寄り掛かるのをやめてボクにそう言った。やがて腕組をやめて先ほどの表情が若干柔らくなる。どういう心理変遷なのかは分からないが逆にこれは好都合。でも下手に出ることは変わらない。この人の人柄から鑑みてもボクの態度は決まっているのだから……。

「いえ、一応遅れた訳ですしお詫びします、……それで用というのは一体なんでしょうか」

ボクは頭を少し下げた後に間をとってからやめて話を切り替えた。すると生徒執行取締役委員長は下周辺に顔を背ける。どういう訳か目を合わせてくれない。

「用というのはな……、……申し訳なかった」

今度は生徒執行取締役委員長が頭を下げる。何故頭を下げる？もう事の終結は終わったはずなのに……、そうか目の前にいるこの人

は終結の延長を施しているのではなくて終結に関する綻びの収集をしているんだ。ボクはこの人の態度からそう思った。

「なっ、何がですか？ もし今までの事について言っているのだとしたら全然気にしていません。生徒執行取締役委員長の……」

「生徒執行取締役委員長という呼び方はやめてくれないか？ 本日をもって私のその役職は解任したのだから。普通にそれ以外であったら何の呼び方でも構わない」

ボクの言葉を遮った。別の呼び方と言われても困る部分がある。この人は前理事長の娘である朱鷺等 瀬那さん、という事は普通に先輩付けすればいいだけか。

「じゃあ、朱鷺等先輩」

「よろしくないな……、君は上級生である人には全員そんな”先輩”というフレーズをつけて呼んでいるのか？」

「えっ、普通はそうじゃないですか？」

「そんな普通の呼び方しか出来ない人間は将来社会に出て凝り固まった昔の石頭な古代人にカテゴライズされてしまふ。忌避したほうがいい」

この人の思想は一体どうなっているんだろう……。さっき『それ以外だったら何でもいい』って言ってたのに……。真持って理解不能。こんな思想の持ち主がこの世界にそういるだろうか？ この人は不思議と言いつい、ユニークさという個性から構成されているため通常の常識・見解の事が逆に異常に見えてしまうのかもしれない。ゆ

えに、この人と接するにはボクにもユニークさを携えなければなら
ないだろう。それはセオリーと言っても過言ではない。

「じゃ、じゃあ……瀬那さん？」

「足りないな……、うどんに七味がない感じだ。加えてねぎという
すばらしいトッピングがない薬味がないそんな回答。まだレッドゾ
ーン」

「瀬那……」

「たん」

ボクが言いかけて悩んでいると先輩は後付するようにそう答えた。
しかも表情が非常に真面目。整った顔立ちなのに発言がまるでギヤ
ツプの相違。今まで出会ったことのない人だ。

「はっ？」

この現時点での意味の分からなさ是谁でも理解できるはずだ。こ
の人の比喻を引用すると、うどんをもつてくれるおばちゃん注文
者に差し出したうどんを勝手に自分の好みの分量の七味を入れてし
まうと同等の事。この人には自分の今までの経験が通用しない。

「繋げてみてくれ」

驚きと戸惑いに苛まれながらもそれを試みる。

「瀬名……たん？」

「それでいい。まあ若干足りないがレッドゾーンではない、ギリギリグリーンラインくらい。これなら社会に行っても異邦人ではないだろう」

この人の価値観でこの世界は成り立っていないことをこの人に如何ほどに伝えるか、おそらく熾烈を極めつつ最終的に挫折パターンであろう。

呼び方に違和感と嫌悪感を持ちながらも逆らえず行つ。慣れることは今後あるのだろうか……。自分の中ではないと思っている。それがこの人の扱い方（？）を分かってきたとしても……。

ご閲覧戴きありがとうございました。

まだ続きはあるのですが今月は執筆し投稿することが困難なためストックを切り崩して投稿いたします。

そのためカッティングをしての公表になってしまいました。加えて修正の件ですがまだまだ延期となりそうです。その点も含めご理解よろしく願います。

感想・評価・投票ランキング等して戴ければ嬉しく思います。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

先輩は何故か若干目を合わせようとしなかった。疲れてでもいるのだろうか……。確かに今日の出来事から鑑みても疲労の度合いは半端ないだろう。多くの観衆がいる中であんな取り仕切りをしていれば当然である。加えて前理事長の事も視野に入れば精神的にも滅入っているかもしれない。早く家に帰って休んだ方がいいかもしれない……。とすると早めに会話を終わらせて帰ってもらったほうがいいだろう……。

「瀬那……たん」

自己嫌悪に陥りながらこの呼び方に多くの抵抗を感じている。先輩は何故この呼び方で呼ばせようとするのか……。もしかしたら疲労故にこのようなおかしい状態になっているのかもしれない。単に先輩を”変な人”としてカテゴライズしていいのだろうか……。いささか疑問であり、結論付ける事も現段階では出来ない。先程のボクの考えは間違っているかもしれないし合っているかもしれない……、まだ分からない。

「なんだ？」

先輩は顔を向けてやっとボクと目を合わせた。全体的に整った顔立ちに少々驚く。口元が小さくも夕日が反射して艶やかな朱色に染まっている。何よりも先輩の長い髪には目を惹かれた。これも夕日のせいなのか髪の毛一本一本が照り輝いていた、そんな綺麗な黒髪。そんな先輩は魅力的にも感じられた。

「ボクはもう何も気にしていません。父だってそんなの気にする人

ではありません。だからもう家に帰って休まれては如何ですか？」

「私の話はまだ結に達していない。……私が疲れている表層をしていたか？」

本題は先程の謝罪だけではなかったという事か。という事は他になにがあるんだろう……。

「はい、疲れているようにボクには見えました」

「そうか……」

先輩はそこで言葉を途切らせた。そして顔を若干下に向け何故か唇をかみ締めている。

「木野城の口車にいくら乗せられたとはいえ私のした事は許されるものではない、それも母を助けてくれた源 雄司氏の息子であるキミに……。誠もって申し訳なかったと思っている……。これを受けていくらキミが許すと口頭で言っただとしても自分の中では許す事が出来ないんだ……。私は今後どうしたらいいのかすら分からなくなっている……」

こんなにも悩んでいたのだろうか……。ボクは気にしてはいないのに先輩は気にしている。どうすれば……、

「瀬那……たん、率いる生徒執行取締委員会はこれからどうなるんですか？」

生徒会が発足する以上同じ機能を果たす生徒執行取締委員会のこれからの役目はほばない事になる……。

「私が率いている……、そうか……そうなるんだな。私が所属している生徒執行取締役委員会は事実上、閉会及び機関の廃止の手続を行った後私は何処にも属さない普通の生徒に帰化する事になる」

意味深な言葉を残しながら先輩は目を合わせる。ボクは眉を顰めながら聞いていた。しかしここは主題をそらさずそのまま流す方向性でいこう。

「そうですね……、じゃあ、先輩は何処の委員会にも属さないんですね？」

先輩は首を傾げながら口を開く。

「そうだが、それがどうしたというのだ？」

「生徒会に先輩の席を設けます。だから生徒会に来てください、いえ、これは会長命令と共に源の息子の請願です。ボクに対して罪の意識があるのならボクのいう事をしっかり聞いてください。そしてそれをこなす事によって自分を許して下さい。いいですか？」

「……」

先輩は無言だった。目を大きく見開いてボクを見据える。驚きを隠せないといった表層、そして先輩は一步前に足を踏み出す。

「い、いいのか？ 私がキミの生徒会に入っても迷惑にならないのか」

「迷惑？ なりませんよ。それに『ボク』の生徒会じゃなくて『皆』

の生徒会ですよ。学校の生徒会は一人の『所有物』なんかじゃないんです」

沈黙がそれから続いた。学校のチャイムが鳴る。これは部活の終了を告げるチャイムだ。

「ありがとう……、キミは優しいな……。……キミの手伝いをしながら自分を許せるかどうかは現段階では分からないが、キミの要求はのもう。キミの掲げる『生徒全員の生徒会』に是非入会させてもらうよ、して他の生徒会メンバーはどうするつもりだ？ メンバーの決定権は全てキミに委託されている」

「それはもう決めてあります……まず……」

それから先輩と数分話した後に話は終結を迎えた。先輩は足の方向を変えて去り際にボクの方を振り返った。

「そうそう、言い忘れていたが今度私の家でささやかながらパーティーを催す予定だ。そこには是非キミと、父君と一緒に臨席賜りたい。招待状はもう郵送した」

ボクとお父さんが先輩の家に呼ばれる？ 予想外であつた。その経緯は分からなくもないが……。

そつといい残して先輩はこの場を去っていった。やっぱり先輩は『変な人』ではないと思う。先輩の奥底に何かがきつとある。まだそ

れが何か分からないが話してみても違和感を感じた。

ボクは最後に向かうべき場所に向かうため、平賀さんの待つ車の所に歩みを進めた。

御閲覧戴き誠にありがとうございました。

ストックを切り崩したせいか、若干短いストーリーとなってしまう
ました。

感想・評価・投票ランキング等して戴けると励みになります。

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

ボクは平賀さんの待つ車の元まで歩みだす。しかし校門を抜けようとするとところで一人の男の人がボクの前に立ちはだかっていた。精悍な顔立ちな上に全体的に体格が良く背が自分の1・5倍もあるかというくらいであったので驚きつつも一步後退する。しかし、良く見ると以前に見たことのある顔だった。瞳を黒いサングラスで覆い、耳には何かイヤホンのようなものをつけている。そうだ、この人は……。

「み、水島さんですか？」

大きな存在感を醸し出している目の前の男の人に向かってそう問いかける。なんか懐かしい、確か以前会ったのはこの学校に入学した頃の頃だったかな。以前会った時より若干肩幅が広がっていた。スーツの上からでもそう見て取れる、身体でも鍛えているのだろうか。加えて髪型をオールバックに変えてワイルドさが加わった気がする。さらに顎に髭を蓄え何か平賀さんに似てきたような……。まあ平賀さんはワイルドというか、ヤクザっていう感じだから水島さんとはちよつと違う線なんだけど。センチネル持たせたら右に出るものはいないだろう……。

そういえばこの人はいつもどんな職務に当たっているのかボクは知らない。お父さんが雇っている人なんだろうけど詳しくは不明。今度聞いてみようか。

「はい、お久しぶりでございます。本日はあゆむ様にご報告がありました。参上しました」

報告？ ああそうか、この前会った時も『報告がある』とか言つてボクを呼び出してたな。って事は以前と同じ用事って事か。凡その予測は出来ていたものの一応聞いてみることにしよう。

「ホントに久しぶりですね、何週間ぶりでしょうか。して、報告とは何でしょうか？」

「まず、この度は生徒会長当選誠にありがとうございます。この水島、あゆむ様に心よりお祝い申し上げます。さて、見事生徒会長に当選なさった事により御当主様との公約を達成なさった訳で、お父様との会談を執り行いたいと思います。しかしながら当グループのカイロ支社の経営トラブルで御当主様が先程向かわれました事により本日は難しいので明日お時間を戴きたく存じます」

やっぱりそうだ、お父さんとの約束を果たしたわけだから次の試練を与えるためにまた会うんだろうなと思っていた。しかし、おかしくないか？ 8時間程離れているカイロまで先程向かいトラブルを解消しました戻ってくる。明日執り行うのは時間的に厳しいのではないだろうか。

「お父さんは明日戻ってこれるんですか？ 勿論飛行機で行ったと思うんですけど、相当な時間が掛かると思うんですよ、飛行時間・トラブル解消時間とかも加味すると明日には帰って来る事が難しいと思うんですよ……」

「シュド・シュペル・カラベルEXで御当主様は飛び立たれましたので多少の飛行時間は削減できます。加えましてトラブルといつても経営難に陥って現地の会社との経営統合をするかしないかというだけの問題ですからそれほどのものでもないでしょう……」

ヤバイ、突っ込みどころ満載なんだけど……。

「あの……シュド・シュペル・カラベルですよね？ EXってなんですか？」

水島さんは眉を顰めてボクに平然と返答する。

「普通に詩条グループが改良したのですが……」

「いやいや、おかしいじゃないですか？ あれは研究段階で留まったはずですが、しかもそんな事フランスの開発者が認めたのですか？」

「普通に詩条様がフランスの首相と仲が睦まじく色々手を回してその開発者様を傘下に迎えたようですよ」

「あの……勘違いしないでください、普通じゃありませんから。第一ソニックブームの問題はどうなったのですか？ 裁判が行われる事必然でしょう」

「普通に各国の首脳の側近と仲が睦まじかったが故に手を回して詩条家専用機のための例外措置を認めたようですよ。その代わり年間上空を航行する各国に結構な特別金を支払っているらしいです。それに使用回数も定めているらしくそんなに各国に迷惑がかかる事はないと思います。加えて、先程『改良』と申し上げましたがソニックブームの問題点を改善する事に成功致した様で各国が認可したという事ですね」

「ああ、そうですか……。でもそのカイロ支社の存亡が掛かっているのにそんな軽々しく考えてよいのですか？ 結構大きな問題です

よね」

「まあ、そうでもありませんよ。立地条件が悪かっただけで何も他に問題はありません。立地条件が悪かったが故に移動に時間が掛かりクライアントとの交渉に手間取る、作業の効率が悪くなる、業績が落ちる、ライバル社に追い上げられる。この悪循環を脱するためナイル川沿いに社を構える事に致しました。これで問題は解決です。しかしこれが上手くいかなかった場合は経営統合するしかないでしょうがまあ大丈夫でしょう……」

異常というのかこれは楽観的というのか、それとも氣道に乗りなれた揺るがぬ現状の位置に驕り高ぶった気持ちから派生したものなのか……いずれにしろこれ以上問いかける事は自分の精神的に疲れてしまう。様々な点で氣になるがやめておこう。

「……分かりました……。もういいです、準備出来次第、明日水島さんが私を呼びに来ていただけませんか？ 時間はなるべく昼休みぐらいがいいですね。それと明日は生徒会メンバーに入会通告を実施する日でもあります。故にあまり時間がありませんので早めに切り上げてもらおうよう父に仰って戴きたいです」

「承知致しました。仰せの通りに……」

「用件というのはそれだけですよね？ 私はこれから向かうべき所がありますので失礼して宜しいでしょうか？」

「いえ、まだもう一つ……」

「まだ何かあるのだろうか……、ボクはてっきりこれで最後だと思っていたけど……」。

「なんででしょうか？」

すると水島さんは顎髭に手をやり顔を下に向けた。何か考えているように見えた。

「いえ、すみません明日改めて御当主様からおそらく仰られると思いますので、お時間取らせました事に謝辞申し上げます。申し訳ございませんでした」

そう言つと水島さんは頭を下げた。ボクは軽く会釈をして振り返つて平賀さんの待つ車の元へと向かった。

水島さんの言おうとしていた事はなんだろう……、分からない。まあいずれにしろ今考えるべきは……。

御閲覧戴きまして誠にありがとうございました。

最初に申し上げておきますね。

当話は雑談の中の雑談を繰り広げていきますので多くの不満を残し次へという形になったと思います。まずその点に置いて謝辞申し上げます。加えまして当話は突っ込みどころ満載です。あゆむも色々疑問に思っていたようでしたが全てに突っ込む事はしませんでした。つまり読者の方々にはその点に置いても眉を顰める事となったと思います。ここでも謝辞を……。

さていよいよ次は……まあお分かりですよ？ 敢えてここは暗黙の了解として申し上げます。お楽しみにして戴ければ幸いです。

御感想・御評価・投票ランキング等して戴けると励みになります。ちなみに先月においてのあるサイトでの投票数は8でした。ご協力ありがとうございました。

〈感想・評価欄につき〉

special thanks：ライクス様 まっつー温泉先生

月奏様 Fail様 逍遙様 キエフ様

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

辺りが薄暗くなってきた。日が今にも沈みそうな頃に平賀さんの車が停留所に辿り着いた。ゆっくりと近づいてくるその黒塗りの車はどこか平賀さんの気持ちを投影しているようだ……。そして車のエンジン音が鳴りやみ運転席から平賀さんが降りてくる。

ボクの目前まで歩みを進めてきて頭を下げた。予想通りともいうべきか、平賀さんはボクより先に雪補さんを送り届けてから来たらしい。休みなくボクを迎えに来てくれたのか首筋からは少々の汗が垣間見える。

「お迎え遅くなりまして誠に申し訳ございません、いくらお嬢様を先にお送りしたからとはいえ執事に有るまじき事でした。お許し戴きたくお願い致します」

平賀さんはそう言って頭をボクに下げる。遅れた事なんて大した事ではないし、雪穂さんを送ってきたのだから平賀さんに非は一つもないにも関わらずここまで気にしているのはやはり自分の職務に對して、いや、自分に余程厳格だからかもしれない。

「あまり気にしない事です。あまり自分に厳しくしすぎると後々疲れてしまいますから……。頭を上げてください」

「あゆむ様がそう仰るなら、分かりました……」

平賀さんは額を少し上げてボクの顔を少し伺い、それから頭を上げた。

ボクは車の後部座席の方まで近づいて行ってドアを開けた。その後運転席のドアをゆっくりと開く。

平賀さんは驚いた表情を浮かべつつボクの方まで駆け寄ってる。

「あゆむ様」

「こういうのもたまにはいいんです。それにこれが当然の事とか思いたくないんですよ。平賀さんにドアを開けてもらうのが当たり前、運転してもらうのが当たり前、迎えに来てもらうのが当たり前、ボクに良くしてくれるのが当たり前、そんな事に胡坐をかいて日々を送りたくはありません。だからこれはボクの気紛れみたいなものです。やはりあまり気にしないでください。まあ、まだ免許を持っていないのでボクが運転する事はさすがに叶いませんが……」

平賀さんは両目を瞑って一瞬顔を上空に向けた。そしてボクを見据えながら平賀さんは後部座席のドアに片手を添える。

「さあ、お乗りください。安全運転で屋敷までお送りさせて戴きます」

「ええ、御願いますね」

平賀さんはボクがシートに腰を落ち着けたのを確認してからドアを閉め運転席に乗り込んだ。そしてエンジン音と共に車は前方へと走り出した。

「もしも平賀さんが自分の友達に嫌な事、自分の許せない事をされたらどうしますか、やっぱりその人を許しませんか？」

ボクはハンドルを握り前方をしつかりと見据えている平賀さんにそう問いかけた。

「そうですね……、私だったら例え許せない事をされてもその人を許すと思います」

「それはどうしてですか？」

ボクはバックミラー越しに平賀さんの顔を見つめる。

「『許さない』というのは客観的な感情だとは私は思っていないからです。と言いますのも『許さない』とは主観的な感情だと思うのです。つまり『許さない』のではなくその人を『許したくない』だけなのではないかと私はそんな風に考えています……」

平賀さんは言葉を切った。バックミラー越しに平賀さんの口元を良く見てみると若干震えている。この人はまだ言いたいことがあるんだ……。

「……そんな事をされた事があるのですね？」

ボクはゆっくりと平賀さんにそう問いかけた。平賀さんは首を縦に振る。若干の静寂が訪れ、その後平賀さんがゆっくりと口を開く。

「……ええ、実は私は小学・中学・高校と苛められていました。周りの方からは私の外見をみて恐がられる方がいるのですが、それは詩条家にお仕えしてからで、それまではひ弱な体系に加え精神の弱さが尾を引き先の申しました事をされていたのです。私の父は13の時に他界し、詩条家にお仕えしましたのは18の時、つまり高校を卒業した直後の母が他界した頃です。」

父の生前、旦那様の部下で非常に目を掛けて下さっていました。しかし、父が他界したため資金援助の方を残された私と母にして戴き、遂には後に残された母までこの世を去ってしまった事により私はとうとう一人になってしまいました。勿論大学なんていける訳がありませんでした、資金的にも、精神的にも……。何処へ行くともなく放浪しようかどうか、正直精神も壊れかかっていました。

その時に今までの自分を回想したんです。苛められているのはその悪友のせい、そもそも両親が私より先に他界したのもこの自分の心身ともに弱さが祟つてのここではないのか？ 日頃の行いが悪いから天が私を罰しているんだ。と共にその悲しみは憎しみにかわり悪友に思いをぶつけました。色々画策し仕返しを試みましたが逆に返り討ちにあいました。

流石にもうダメかと心も折れかかり最後の手段を自分に講じようとしたその時に旦那様が救いの手を差し伸べて下さったのです。私は決めました、こんなにも私や両親に良くしてくれた旦那様に一生この身を捧げる事を……。そのためには自分の心身を徹底的に鍛えなければならぬと思います、様々な武道、花嫁修業のようなもの、一時グリーンベレー隊に所属し戦地に赴いた事もあります。

その後心身ともに鍛えあがり、詩条家に仕えたというような経緯です。そして数年後やっと心に余裕も出てきたのか多くの事を外観

的に捕らえることができるようになりました。その時にやっと心の奥に留めてあった『苛め』について再考しました。それまで許す事の出来なかった悪友に対して初めて許そうと思えたのです。『許せない』のではない自分が『許したくない』だけなのだとそう思いました。かといってその悪友の所業を肯定している訳ではありませんけれども。……もう着いたようですね」

平賀さんの見つめる先には詩条家の巨大な門扉。平賀さんは先程の悲壮さを感じさせる表層から一変顔に微笑を浮かべてボクの方をバックミラー越しに見つめる。こんなに壮絶な過去が平賀さんにあったとは……知らなかった。

「なんか、すみません……踏み入ってはいけない事に触れてしまいました……」

「謝らないで下さい。私は決してそういうつもりで言ったのではないのですから……。あゆむ様に私の事を知りおきしておいて欲しかったのです。過去が^{むかし}あったからこそ^{いま}現在がある。この世に許せない事なんて本当はないんです。許せない事それは単に自分が許したくないだけなんです。あゆむ様もそう思っているんじゃないのでしょうか？」

そう言って平賀さんはボクの座っている後部座席に身を乗り出して紙がはさんであるバインダーを差し出す。ボクはそれを受け取り紙の文面を見る。驚く事にそこには『生徒会メンバー推薦用紙』がはさんであった。平賀さんはなんでもお見通しなんだ、ボクが何でもこんな事を聞いたのかも、そしてこれからボクがどうするのか、本心はどう思っているのか分かる、恐れ入る存在なんだ……。

「はい」

「でしたらもう迷う事はありません。ご自分の思った通りに実行なさるのがよいでしょう。そしてそれに間違いはないと私は思います」

「あつ、ありがとうございます……」

「私はあなた様の執事でもあるのですからにもお礼などされる事はしていませんよ」

平賀さんは身を引いて運転席に戻った。そして門扉は開け放たれ車は再び発進される。辺りはもうすっかり暗くなって詩条家の様々なライトアップによるイルミネーションが一際この景色に映えていた。ボクは過ぎ行く景色を見つめつつも平賀さんに目をやる。この人にはやっぱり頭が上がないな……。相談して本当の意味で良かったと思う。

「はい、もしもし」

ふと平賀さんの胸ポケットから携帯音が鳴り電話を取る。数秒無言でそのまま電話を切ってしまった。一体どうしたんだろう……。ボクはその時なにかただならぬ雰囲気を感じ取った。

「平賀さん……?」

平賀さんは終止無言で俯いていた。後に車はまだ屋敷まで達していないにも関わらずUターンをし、そのまま屋敷から出て行く。明らかにおかしい、何が起ったというのだろう……。

「平賀さ」

「おつ、お嬢様が……御自室で倒れられ、現在搬送されているとの報告が……、急ぎ病院に向かいます」

ご閲覧戴きましてありがとうございます。

前回にお伝えしたとおりに投稿できませんで誠に申し訳ございませんでした。この話は欠かすことの出来ないストーリーでしたので間に組み入れる事に急遽決定致した処で、読者の皆様には期待をさせてしまい申し訳ございませんでした。

加えまして、今話のシリアスさは尋常ではありませんでした。その点についてご不満に感じられている方にはやはり謝辞申し上げたいと思います。今後も所々そうなるかと思えますのでご理解戴ければ幸いです。

感想・評価・投票ランキング等して戴けると励みになります。

↓ 評価・感想欄につき↓

Special Thanks: ライクス様、月奏様

それではまた次のストーリーを読んで戴ければ幸いです。

追記 (7/4)

新話の方、長らくお待たせしてしまい申し訳ございません。まだ掛かりそうですが、今月の上旬中には投稿したいと思います。加えまして前々から申し上げていた当作品の前半部分の大幅改編を今月・来月で踏み切ってゆきたいと思えます。それと平行して新作のファンタジーの方ですが現段階では4話まで仕上がっているのですがプロットをもう少し詰めたいので未だ投稿する事が出来ない状態です。これが10話ほど溜まり、プロット構成がある程度できた時点で投稿したいと思えます。それにしてもファンタジーって物凄く難しい

ですね……。様々な文献を読まなければならないし、多様に絡み合う展開を書かなければならないので今以上に難しい分野ですが頑張っ
てゆきたいと思います。予定としては来月上旬には投稿出来るか
と思いますので並行して読んで戴ければ幸いです。

〈評価・感想欄・他につき〉

S p e c i a l T h a n k s : まもう様 バリトン様

一ヶ月以上お待たせを致しました。ユニーク40,000ありがとうございます。
うございます。これも偏に読者の皆様方のお陰でございます。

車内は非常に閑散としていた。お互い何も言葉を交わすこともなく雪穂さんのいるらしい病院との距離だけが縮まってゆく。また、先程の雪穂さんの事を聞いて普通車の速度を上げてもいいと思うのにも拘らず、平賀さんはそうしようとせず一定のスピードで走っている。いささかボクは疑問であつた。

さつき『急ぎます』と口語したはずなのに……。若干の苛立ちを覚えながらもボクはそれを平賀さんに問いはしない。しかし自分の膝に置いている人差指の微動は早まるばかり、雪穂さん一体何が……。

しばらくしてようやく病院が見えてきた。やはりお金持ちのご令嬢が搬送されるに相応しい巨大な大学病院が見て取れる。やけにだっ広い車寄せはこの病院の規模を表しているのだろうか？ 左棟・中央棟・右棟とそれぞれが連絡階段で連結しているモダンな創りでもここが病院とは思えないほどであつた。建物に着色されているのは白を基調としたホワイトクリーム、車寄せの中央部にはしっかりと区画整備されたスペースに植物が植えられていてとても清潔感が溢れている。

平賀さんはそこから少し離れた左棟に面して設けられた駐車場に車をゆつくりと止める。辺りには一台も車が止まっていないようにでボク達だけだつた。平賀さんは運転席から降りて、ボクがいる後部座席のドアを開けた後頭を垂れる。そしてボクが降りるのを確認するや否や『では』と言っていきなり駆け出してエントランスの中へと向かつていった。ボクは慌ててそれを追ってゆく。目を見張つたのは平賀さんが自動ドアを通ろうとした時、僅かに開きつつあるドアの隙間に手を差し込んで左右に押し開いたのだ。ああそうか、平

賀さんはボクの事を案じて急ぎたいのを我慢して此処まで安全運転で来たのか……。先程の自分の思想がなんと浅はかだったことが身に沁みて良く分かった瞬間である。嘆かわしい……。

「おっ、おおお嬢様は何処におられるっ」

平賀さんはナースステーションのカウンター越しにそう尋ねる。平賀さんは少し息を切らしつつも真剣な眼差しでカウンター越しの中年の女性を見据えた。カウンターに置いた掌はいつの間にか握り拳に変わっていて、紫色に変色しているように見える。それほどまでに雪穂さんを……。圧倒されてしまう……。

「え、えええ、えとおおお嬢様とは一体誰のこ」

中年のナースは平賀さんの目力に圧倒されてしかもそれが睨んでいると思えたのでやけに緊張してしまっていた。カウンターの裏側に設置してある緊急通報ボタンに手を掛けていたが

「詩条 雪穂さんという方です」

ボクがひよっこり平賀さんの前に出てきてそう申し出るとナースは安堵の面持ちでボタンから手を離れた。そして口から軽い一息を吐き出すと脇の患者リストボードを目で追う。

「……ええと、処置室ですね。2階の208号室に、ってあれ」

ボクが後ろを振り返るとそこには平賀さんの姿はもう無かった。ナースは辺りをきょろきょろと見回して戸惑っていたが

「大丈夫です、ボクのパパなんです」

そう言つとナースは口元を綻ばせて愛想笑いをボクに向ける。ボクは一礼して平賀さんの後を追う。

「お嬢様っ!!」

そう腹の底から叫びつつ思いつき引き戸を端に寄せる。

「平賀……」

雪穂さんはあまり上等とは言えないぞんざいな寝台に横になって平賀の方に目を向けた。

中には医者^{ドクター}がカルテにペンを奔らせていて、レントゲン写真ホルダーの照明の青白い光が頭の方に差し込んで左手で額の方に手をやっていた。どうやら処置は終わったようで且つ外傷的重症ではなくとりあえず安堵。しかし、雪穂さんはとても辛そうだった。頭が痛いのか額の上辺りに手を当てている。

「お嬢様っ」

そう雪穂さんの存在に気が付くと足早に寝台に向かって膝をついた。医者^{ドクター}は椅子を回転させつつ平賀さんの方を向く。そして

「単なる貧血だったようですね……。疲労が祟ったのでしょうか。十分な睡眠をまあ、2日ほど取られるとすっかり良くなっていると思

います」

そう言い慣れた様に医者ドクターから言葉が出てくる。

「どうもありがとうございます……」

平賀さんはそのまま首を下げて医者を見据えた。医者は立ち上がって椅子を二席程ボク達に差し出して『落ち着いたら退室ください。入院するほどのものではありませんでしたので……なにかあればまた来て頂ければ処置いたします。では』と言って部屋を後にし、部屋の中には後から入ってきたボクを合わせて3人となった。

平賀さんは再び雪穂さんに優しい眼差しを向け、雪穂さんの呆けている右手を取って強く握り締めた。

「ああ、お嬢様……よくぞご無事でいて下さいました……」

「大げさです……平賀つたら……。単に貧血だっただけじゃないですか？ ……心配掛けました……」

平賀さんはその言葉でついに抑えきれなくなったのかその握り締めた手を自らの眉間に持つてきてから、涙を一粒流す。涙の一粒は寝台のシーツに染み込み小さな斑が出来ている。ボクはただただ果然として平賀さんを見つめていた。

「私は両親を無くしてからというものの身寄りがいません。しかし有難い事に身寄りのない私をあなた様方は快く引き取ってくださいました。そこで私は亡くなった両親に誓ったのです。自分の主を何があってもこの命果てるまで守り抜く事を……、ですからどうか無理はしないで下さい……。あなた様は私の希望であり生きる理由です。

ですから私はあなた様や我が主の為であれば何でもする所存なのです。なにかお悩みになっっている事があつたら私に何なりと申して欲しいのです。確かに自惚れているのかもしれませんが、しかし何かを溜め込んで吐き出さないままそのまま放置する事は自分を痛めつけてしまいます。私はそんな事をお嬢様にはして欲しくないのです。何卒分かっていただきたく……」

雪穂さんはゆっくりと起き上がって額に当てていた手を平賀さんの手の上に乗せて包み込む。平賀さんは顔を上げると平賀さんに雪穂さんは微笑み投げ

「……本当に迷惑掛けました……。貴方がそんなに私の事を考えてくれてたなんて、ごめんなさいね」

平賀さんの顔は赤くすりなし頬には涙が蔦っている。サングラスで瞳は見えないがきつと目にいっばい溜め込んでいるのであろう……。

「あゆむさん、貴方にもわざわざご足労賜ってしまつて申し訳ないと思つています。ごめんなさい」

雪穂さんはボクの方にゆっくり視線を合わせる。

「い、いえ。ボクは何にもしていません。ただただ雪穂さんが心」

ボクはここで言葉を一回切つて平賀さんに視線を移した。平賀さんはポケットからハンカチを取り出して涙を拭っている。

ボクは自分が恥ずかしい……。

「ありがとうございますね……」

「は、はい……」

その後平賀さんが立ち上がり『外で待っている』という事で退室した。

部屋には2人きり、しかし残念ながら何の言葉を掛けていいのやら思い浮かばない。今まで微妙だった関係性がここで露呈し自分に突きつけられた気がした。

「私は晴紀さん側につきました……」

唐突にも雪穂さんが沈黙を破る。

「ええ……、分かっています」

「裏切り者だと思いましたよね」

そう言つて雪穂さんは目を落とした。

「い、いえ、第一雪穂さんは誰のモノでもないじゃないですか？
自分の意志のままに思ったとおりにするべきだとボクは思います」

「自分の意志に従うまま……ですか、そうですね、この度は私の意志でやった事です。あゆむさん……すみません……」

どんどん雪穂さんの声色が弱くなっていつて遂に涙声になってしまい最後はかすれ声になりボクに謝った。

「ど、どうしたんですか？ 雪穂さんは何も謝る事無いじゃないですか」

ボクは自分が持っているハンカチを雪穂さんに差し出し、雪穂さんはそれを徐に受け取って頭うぶを垂れる。

「違うんです……私は白々しいかもしれませんが……あゆむさんの方につきたかったのです。しかし、晴紀さんの心の闇やあとは……」

雪穂さんは口を噤み頬をハンカチで拭う。

「あとは？」

「あゆむさんのお父さんに御願いされたんです……、あゆむさんのために敵対勢力のほうについてくれて。でも勘違い、しないでください。最終的に決めたのは紛れもなく私なのですから。あゆむさんのお父さん曰く、あゆむさんは必ず私を頼るだろうからその出鼻を挫いて欲しいと、私は考えました……。どうすべきか、悩んだ末、晴紀さんの支援者になる事にしたんです……、」

雪穂さんはゆるゆると言葉を紡ぎ寝台から起き上がって外を眺める。

雪穂さんには感謝しなければいけない……。お父さんにも、もしそんな事を御願いしなければボクは雪穂さんとなんの障害もなく選挙を切り抜けていただろう。

「ボクは学校生活で雪穂さんに頼りすぎていました……。何か壁にぶつかる」と雪穂さんを当てにして自分で決めるという選択を捨てていました。ですから今回の一連の事はボクは大切な事を学ぶ良い機

会だったと思っっているんですよ。今でも、恐らくこれからも雪穂さんはボクにとつての大きな存在であると思います。しかし雪穂さんに頼りすぎることなく少し自分に厳しくしてやっていく事を自分の戒めとして生きたいと思うんです。ですから、ボクを成長させてくれた雪穂さんにも感謝を……、ありがとうございました」

ボクはその場で深々と頭を下げた。

若干の沈黙が流れ

「……つず、ずるい、です……。あゆむさん、もつと責めて下さい……。何故苦しい時にあゆむさんの側にいて差し上げられなかったのか、何故そっけない態度であゆむさんと接していたのかと、私という……詩条 雪穂という存在をつ……。どうか責めて下さい……」

そう言いながら雪穂さんは声を押し殺して溢れる程の涙を流す。

ボクは罪悪感を感じてしまった。ボクこそどうしてこの人をこんな苦しい思いをさせてここににいるんだろう……。後悔は後を絶たない。

「最初に出会った事も覚えていらっしやいますか？」

「ええ、バス停で声を掛けてもらって」

「……あれは、私は貴方を知ってワザと近づきました……」

「……」

言葉が出なかった。雪穂さんが発したその告白はボクの脳にはすんなり理解できなかったのである。……、故意に近づいた……？

雪穂さんが？

「…何のためにですか？」

「あゆむさんが、転校なさった理由というのは何でしょう？」

雪穂さんはまだハンカチを目元に当てている。

転校の理由？

「突然父が学校を変えろと言ったからです。ボクに拒否権はなく従うだけでしたので鵜呑みにするしかありませんでした……」

「試練の始まり……」

雪穂さんはそう言葉を切って

「あゆむさんのお父さんが考えた事なのですが、同意し決行したのは全て私、です。あゆむさんがもし誰も友達がいらない学校に転校したらきつと不安になるはず、です。そこで、私を媒介として、つまりあゆむさんのお友達として仲を睦まじくする、すると生徒会長選挙の時には必ず私を頼りにしますよね……それを挫くための、試練の始まりの布石だったの、です」

雪穂さんはボクの立っているほうにゆっくりと歩み寄る。ハンカチを手に握りながらボクの目と鼻の先まで来て足を止めた。

顔を赤くすりなし、まんまる潤んだ瞳をボクに向ける。身長がボクより若干低い雪穂さんの髪からはフローラルな匂いが仄かに香りボクの脳を更に刺激する。雪穂さんの腕なども見てみると非常にか

細い腕で力を入れると折れてしまうようなそんな感じがした。

「……軽蔑ですよ……、私は最低な女なんです。関係を崩して、あゆむさんを教育しようとしてもしたんでしょうか……私は欺瞞、今までの言動も全てあゆむさんのお父さんが言っただけからという理由をもみ消そうとしてとってつけたような言い草、偽善も」

「やめてくださいっ！ どうして自分を傷つけるんですか？ ボクはそんな事は気にしませんっ」

「罵って下さいっ！ 普段から八方美人で誰にでも愛想を良くして偽善者とっ、欺瞞人とっ！ 罵って……」

雪穂さんは力なく泣き声を上げて両膝を床につけた。

雪穂さんは此処まで悩んでいたのか？ 苦しめていたのか？ ……自分が憎くて、仕方がない。

ボクはしゃがみ込んで雪穂さんの顔を覗き込みながら言う。

「雪穂さん……、そんなに悩まないで下さい、苦しまないで下さい。考えても見てください、雪穂さんは何も悪い事をしていません。雪穂さんがやった事はボクに対する中立関係に位置しながら及ぼす裏返しの協力という名の一つの『好意』『支援』です。雪穂さんは選挙時、ボクの『支援者』だったんですよ。だからさっき言ったじゃないですか……『感謝している』と。それに雪穂さんがそんなに苦しんでいると、ボクも辛いです。こんな状態にボクがさせてしまっているって考えるだけで旨が張り裂けそうになります。自分が憎くて憎くて堪りません」

雪穂さんはスツと顔を上げる

「あゆむさんは何も悪い事はしていませんっ、悪いのは」

「誰でもありませんよ……。それとも雪穂さんはボクに自分を憎んで欲しいですか？」

「い、いえ」

「だったらこの件は水に流しましょう……。ねっ？」

ボクがそう言って口を綻ばせ雪穂さんに微笑みかけると、雪穂さんは自信を取り戻したのか

「はい……」

しっかりとした返事で言い、ボクは立ち上がって雪穂さんに手を差し出し、雪穂さんも立ち上がった。

「では平賀さんが待ってますから行きましょうか……」

そう言ってドアの方に向かい手を掛けて雪穂さんの方を振り向く。目がもう一度合ったところで

「今後もう自分を傷つけることは言わないって約束してください」

ボクは小指を差し出した。雪穂さんはゆっくりと首を縦に振って

「はい」

そうして小指を絡めて指きりげんまんをした。

ドアを開けて廊下に出た時、蝉の鳴き声が響き渡る。

「夏ですね……」

雪穂さんがしみじみとそう呟く。先程赤くすりなしていた顔ももうすっかり良くなって今ではすっかり前を見据えている。

「ええ、これから忙しくなりますね？」

ボクは含みを持たせた言い方で雪穂さんにそう投げかける。

「はい？　どどういう事ですか？」

「一緒に生徒会やりませんか？」

夏の夜はこうして過ぎ行くのだった。

ご閲覧戴きありがとうございました。

かな〜りシリアスな場面でしたが局面を迎えたと言ってもいいくらいの部分じゃないでしょうか？ 読者の皆様がどう感じたかは非常に作者として気になるところです！

投票ランキング・御評価・御感想等して戴けると非常に励みになります。宜しくお願い致しますッ♪

では次のストーリーもお読み戴ければ幸いです。

心地よい小鳥の囀りが外から聞こえてきてボクはベッドから身体を起こす。目を幾度も擦り、まだ眠気が拭えないまま何とか生暖かいベッドから這い出る。空調が効いてるせいかな室内は快適で足と床の温度差がやけに気持ちが良い。そのまま閉じられているカーテンの前に立つ。見回すとやっぱりカーテンの長さが長いし大きい。色を先日赤から薄いグリーンに変えたが故に閉塞感が消え去ってとても開放的。ボクは片方ずつカーテンを端まで開けてゆく。すると外からは眩しいほどの日光がボクの目に差し込んで、咄嗟に手を翳す。それでもまだ若干眠気が残っているようなので窓を少し開けてバルコニーに出てみる。すると生暖かい風がボクを包んで清々しくなった。そんな朝……

「今日は生徒会委員の任命就任式か……」

上方いっぱいにノビをしながら欠伸交じりにそう言葉を漏らす。

今日はいよいよ生徒会メンバーの任命式。ボクがオーダーを組んだメンバーでこれから生徒会をやってゆく……。それとともにこれからボクは生徒会長として様々な場面でリーダーシップを発揮し、且つ全ての事に責任を負わなくてはならない存在となる。それはボクの心を震えたたせると共に気を引き締めなくてはと思わせるものだった。

これから楽しい事ばかりではなく辛い事もあるだろう……。時には生徒会メンバーが挫折そうになるかもしれない……。その時はボクが励ましてあげなくては、ボクは責任感を持たなくてはならないんだ。それがボクを選んでくれた人、ここまで尽くしてくれこれか

らも助けてくれようとする人への礼儀。その為にはボクは芯をしつかりしなくてはいけない。しかしボクは今不安材料を抱えている……。

ボクは室内に戻り窓を開け放ったまま机まで向かう。開け放った窓からは微弱な温風が吹き込み、白のレースのカーテンをヒラヒラと揺らす。そんな中机の上に昨日置いたある紙を手にとって徐に目を落とす。

そう、平賀さんからこの間手渡された『生徒会メンバー申し込み用紙』。昨日の深夜まで悩んでやっと書き終わり今日提出し公表する為のそれは、不安材料の一つだった。

ボクが選ぼうとしたメンバーは全部で7名、しかしそれまでにはこの紙には2つの余白があった。

「ハァー……」

ボクは深い溜息を漏らし用紙を机の上に再び置きなおす。

昨日ボクは雪穂さんを自ら率いる生徒会に引き入れようと勧誘しようとするも、雪穂さんは首を縦には振らないというある意味予測の範囲外な出来事が起きそれが現在の状態に起因している。雪穂さん曰く『晴紀さんが無碍に扱うように無視する事は出来ない』とどこちらかと言えば断られてしまったのだ。

自分の鞆の中に今日の授業で使う教科書を入れ最後に先程の用紙を入れてチャックを閉める。心なしか鞆は重い……、別に今日はいつもとより教科書が多いってわけでもないのにそれでも、少し重い……なぜだろう。

重厚な大きな扉のドアノブを回して廊下に出る。辺りを見回すとそこには白いカチューシャを付け、清楚な黒を基調としたの服に赤のリボンを付け、白のレースの腰掛を掛けた頭を下げながら女の子が一人立っていて、ボクは不意に一步下がる。

女の子はゆつくりと顔を上げてボクと目を合わせた。清楚さを残しつつも何処となく儚さと思わせるかのような顔立ち。割と小顔でスウっとした輪郭、鼻と口元に反比例するように目がパツチリ大きいその女の子はボクに優しく微笑んだ。

「キミ……、誰？」

ボクは誰とも知らない女の子に声を掛ける。彼女の服装から察するにメイド……であることは間違いないんだけど今までこの屋敷にいてこんな子は見たことがない。

「おはようございます」

彼女は再び頭を垂れてその光沢のありサラサラしていそうな綺麗なショートカットの髪を揺らした。同じくらいの歳だろうか、それともボクより年下だろうか、しかしボクより年上というのは絶対な見えない。

「お、おはよう……」

ボクはその女の子に挨拶をされたのでとりあえずそれに応えるも、まだまだ彼女に訝しげな眼差しを向けている。彼女は一体何者なんだろう……。新たに雇用された人なのかなあ、だとしたら何でボクの部屋の前に立っているの？ 多くの予想をするもどれも予想の域

を出ない。

「ご機嫌麗しいようで何よりです」

ボク目の前の娘にそんな様子を向けてもいないし、今日はそんな気分も良くない。社交辞令だろうが……。

「い、いや、だから、キミは何でボクの部屋の前にいるの？」

ボクは当惑しながらも彼女にそう問いかける。

「そうでしたね、申し遅れました。本日付で貴方様、源 あゆむ様の専属のメイドとしてお側御用役として寝食を共にさせて戴く浜辺^{はまべ}深戸^{みと}と申します。雄司様の勅命^{ちうしめい}によりこれから貴方様は私の主です。何卒宜しくお願い致します」

頬が真っ白く柔らかそうな彼女はどこか可愛らしさも携えているように感じる。彼女の手には古風な漣と水仙の模様が入った信玄袋をぶら下げていて、黒のロングスカートの半分くらいまで垂れ下がっていた。ロングスカートはドレス調となっていて床にいくに連れて適度な膨らみを持たせている。

ボクの、メイド……？ しかもボクと寝食を共にするって言ったよね？ こんなに可愛い娘と……。若干嬉しさが込上げたが同時に当惑の念が込上げた。

「……そんなこと言われても困るんだよね……。ボクの身の回りの事は全て平賀さんにやって貰ってるから……その……」

ボクが最後の言葉を言おうかどうか迷っていると彼女はその清楚

な雰囲気を保つたままにボクに向かって

「不必要と、そう仰るのですか？」

「いや、そこまでは言っていないけど……、何でボクに専属のメイドさんが付くのか全然分らないんだよ……」

「私にも分かりません。しかし御当主様仰せつかっている事なので貴方様の側を離れる事は絶対に致しません。ですので良しなに迎えて下されば幸いです」

その女の子はにっこり笑って顔をちょこんとかたむける。その素晴らしく可憐な仕草に思わず一度心臓への酸素供給がなされなかった。確かにこの娘はカワイイ。それは認めるけど、なんかこの娘と一緒にいたらさらに雪穂さんと気まづくなるし、でもこの娘はボクと一緒にいるようにってお父さんから言われて来た訳だから無碍に付き返すとこの娘の立場がなくなって大変だろうし……。

「……、分かった。その代わりボクの事は何もしていいから。ただ側にいてくれるだけ、いやキミの勝手にしていいから」

ボクがそう戸惑いつつ言うとその女の子は頬を少し膨らませて目を細めて声色を変えてボクに言う。

「それでは私が何故ここに来たのか全然分からないではないですかッ！ メイドの職務を勝手に剥奪しないで下さい。そんな事されたら私、あゆむ様の枕に毎日涙をびっしょり垂らしておくと言っ暴拳に出ます。それでもいいですか？ 加えて私の名前は浜辺 深戸です。深戸と御呼び下さい」

「み、深戸ちゃん、ボクはなんと言っているのやら、この気持ち分かってもらいたいな」

ボクはこめかみをかきながら微妙な笑みを深戸ちゃんに向ける。

「分かりたくありませんっ。メイドを無碍に扱うことは別に構いませんがこういう事は例外です」

最初の清楚さより今はかわいらしさが勝っている。深戸ちゃんは胸の前で人差し指を交えつつ打ち付けていた。

深戸ちゃんは結構頑固なのかもしれない。まだまだ内面は分からないけど……

「深戸ちゃん、頑固でしょ？」

ボクは目を細めながらそう問いかけると

「そうかもしれません。たしかにそれは容認しますが、でもメイドが頑固じゃダメなんて規則に明記してありませんでした。故にこんな私でもいいのではないのでしょうか？」

「……、うん……別にいいんだけど、深戸ちゃんは、なんていうか……一瞬で不思議な空気に変えられるんだね」

「……、それも容認します。しかし源家に仕えるときに御当主様から預かった規則集に『不思議な空気に変える事が禁則事項』なんて一切明記していませんでした。ですからこんな私は存在していいんだと思います」

自信たっぷりに両手を折り曲げて両の拳を頬に寄せながら頬を膨らませた。

「うん、……なんか分からないけど……規則には……書いてないだろうね……」

この娘は全然よく分からない。なんか今までにない女の子に出会ったっていうか、返って来る言動一つ一つが不思議。

「深戸ちゃんってさ、自分の事どう思うの？」

深戸ちゃんは人差し指を頬に立てながら上を向いて考えた。

「どうって……、いたって普通のメイドだと思いますけど……。自分の事をどう思ってたっていうのはある意味死ぬ時に答えが出る事であって……、……あつ、もしかして私、死ななければなりませんか？」

深戸ちゃんは顔をボクに向きなおして平然とこう答え、終盤にはハッと何かに気が付いたように目を大きく見開いて声を大にしてボクに問いかけた。

なにをどう考えたらそういう事に結びつくんだろう？ 恐らく一生掛かって彼女の心は解読できないであろう。

「いや、そんな事一言も言ってないし、どこをどう解釈して発展すればそこにいきつくの？」

「私は老衰がいいですっ……！」

深戸ちゃんは両手をボクの両肩に乗せて懇願するようにそう言った。

「だからそんな事言ってないからっ！ もう水に流して」

「私、流水刑なんでしょうか？ マリアナ海溝で冷たい、冷たい深い海に、っあ、名前にもしかして掛けました？ 深戸の『深』に……。結局私の願いは届かなかったようですね……。……分かりました、どうぞ……。主の命令は絶対ですから……」

そう深戸ちゃんは言うと言手をボクに差し出して、いかにも縄で縛ってくれと言わんばかりの顔をした。

「だからそうじゃなくて、もう！ 深戸ちゃんは一体何なの？」

「人間且つ恒温動物ですよ！ そこはあゆむ様と一緒にです。身体のある部分は違っていますが……」

人差指を立ててボクにそう説明する。

ボクがもう訳が分からなくなって少し感情的になったのも束の間、内に、深戸ちゃんは火に冷や水を掛けるかの如くボクのさっきの感情はどこへやらいつてしまった。

「いや、そういうことじゃなくて、深戸ちゃんってどういう思想を持ってるの？」

「一から話すと長くなりますが……。……、というかい加減私の存在全てを肯定してください」

深戸ちゃんは両手を胸を押し当てて目を大きく見開いてボクにそう言う。

「別に否定してたわけじゃないんだけど、ハア……うん、もういいや。もう好きにして」

「はいっ！　これから宜しくお願いしますねっ。それでは下の大広間に向かいましょう、お食事が出来ております」

ボクは力なく両手を前にフラフラさせながら深戸ちゃんを先頭に大広間まで向かってゆく……。お父さんは何故ボクに専属のメイドを差し向ける事をしたのだろう？　足取りはいつもより重かった。

ご閲覧戴き誠にありがとうございました。

最近ミズドで5kg太ってしまった当作品の作者です。

やっぱり糖分の取りすぎは問題だと自ら身を持って体感し痛感しました。最近流行ってる『コアリズム』にでも挑戦しようかな……。

絶対続かないと自負できますが。っとそんなどうでもいい雑談は置いておいてと。

新キャラの登場です。個人的にこの子は結構好きな子ですね。なんか雰囲気とか言動とか仕草に全部惹かれてしまいます。こんなメイドいないだろうケド、いて欲しいですね。こんなやり取りしたいです！ いつもこんな妄想してるのか？ と問われると首を縦に振るしかありませんね。小説を書いている以上妄想は欠かせませんし……、ってまた別の話題に逸れてしまう。もう反省です、ごめんなさいっ(汗)話を戻しますと、あゆむはこれからどうなるんでしょうね？一応これから徐々に少しずつですがあゆむの恋路に触れてゆきます。どうぞお付き合い下さい。ああ、でもこの後はちよつとシヨッキングな事が起こります。朝食の時に……、マズい、ネタばれ注意！ 失礼しましたっ。お楽しみに！

(Special Thanks)

月奏様 ライクス様

毎度の御評価、心より御礼申し上げます。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

Regular Chapter 36 〈News〉 (前書き)

展開が速すぎだと思いますが、とりあえずは一章まで駆けてゆきたいのでお許し戴きたく思います。

全ては私のテンポの悪さにその責があると反省しています。

深戸ちゃんの背中を見やりながら力なく前に進んでゆく。最近是非常に疲労の蓄積が早い。若干の偏頭痛も患っているから結構厳しい状況といえる。しかし、そんな事は言ってられない。ボクはやるべき事が山ほどあるんだ。

ボクは力を無理矢理湧かせなおし背筋を伸ばして歩くようにした。前にいる深戸ちゃんの足取りは一定で流石メイドというだけあつて歩き方からしてなにか違う。足音一つ立てない、それで且つ不自然じゃないそんな感じ。

その内ボクは辺りを見回し始める。雪穂さんは深戸ちゃんの事は……知らないよね。ああ、なんかこんな光景見られたらどう思われるんだろう。

そうそんな事に囚われていると前方の深戸ちゃんが立ち止まり、不意に彼女にぶつかってしまい我に返る。

「大広間に着きました。先程から何か気にしていらっしゃるようですね？　どうかありませんか」

深戸ちゃんは振り返ってボクに対して心配そうな顔で見つめる。

「いや、別になんでもないよ、ホントごめんね。えっとじゃあ中に入ろうか」

そう勝手に会話を終わらせて扉のドアノブを回して前方に押し出す。中は100畳程の規模の部屋に縦に驚くほど長い白いテーブル

クロスを掛けられた食卓（？）が一つ。色とりどりの花が等間隔で置かれていて、真ん中だけ突出しているキャンドルが同じ数ある。そして各座席の前にはナプキンやらティッシュやらフォーク、ナイフ、グラスといういかにも高級そうな食器器具が置かれていた。

最近の結構な回数ここに来てご飯を食べている自分としても未だにこの部屋全てが食事室のような役割を果たしているなんてにわかには信じられない。けれども最近は実感しつつはあるんだけど、普通であればここでスポーツが出来ると思うし。

定例化している事としてもうひとつ。四方の壁際にはメイドさん達が立ち並び微動だにせず且つボク達の食事の諸事をする為に待っている。やはりなれない事は確かなのだけれども。

『おはようございます、あゆむ様』

ボク達が入ってゆくとそのメイドさん達が声を揃えてこちらに向かって一礼する。四方に沿ってぎっしりとメイドさんがいるので、行き詰る圧迫感が感じられる。それは最初に来た時よりかは幾分がそれは払われたものの、やっぱりこの人数っていうのは悩んでしまう。

奢侈さが感じられるテーブルには上座の方に雪穂さんのお父さんである栄治さんが椅子に腰を掛け、他には誰もいない。

お父さんは昨日水島さんに聞いたとおり海外出張しているし、ボクのお母さんや妹は二人とももう出掛けてしまった。

お母さんは何処そのアパレル会社に勤めていて最近新入社員の指導を任されているらしく早めに出勤しているし、妹の莉紗子は一昨

日から友達の家泊まってくると聞いている。なんでも昔からの親友で最近ドタバタしていて遊べなかったから久々に遊びたいとか。

ボクのいつもの席は下座の方、故に入り口手前の席に腰を掛けようとする。すると栄治さんがボクの方に手を拱いて自らの席の近くに手を指し示した。

ボクにそこに座れって言ってるのかなあとそう思いながらゆっくりとその席の方に歩みを進める。

「雪穂を平賀が学校に送ってしまったし、早柚瑠はいないから今日の朝は二人だけ、ちょっと寂しくってね」

そう言いながら栄治さんは苦笑いをする。皆いないんだ。ボクはその最中に席を引こうとすると

「あゆむ様、これは私の仕事です」

そう割って入ってきた深戸ちゃんが椅子の背もたれに手を掛けて椅子を引きながら言う。

「あはは、ありがとう」

ふと微笑を浮かべながら深戸ちゃんに向かってそう言葉をかける。そして徐に腰を掛けた。

深戸ちゃんは満足気に数歩後ろに下がってそこで落ち着いた。

「テレビを設置したんですか？　しかも四方に？」

席に着いて上方を見上げると各々の壁には今までに見た事が無いほどの大きさのテレビが取り付けてあった。昨夜の夕食の時には無かったものだ。という事は夜中の内に設置したっていう事？

ボクは上方の壁を見回しながら栄治さんに問いかける。

「ああ、これね。実は莉紗子ちゃんに言われちゃってねえ、『テレビがないからつまんない』って。今まで私達家族は食事の時にはテレビは見ない事が習慣化されていたんだ。だってテレビなんか頼って会話が疎かになったらコミュニケーションが取れなくなつて関係悪化に繋がるだろう？ その事を莉紗子ちゃんに言ったら、『それは違うと思いますよ！ テレビがあつて何かの番組で何かの話題が見つかつて会話が弾むんだと思いますっ。しかもそんなに会話の事を気にするんだつたらこの大きな長テーブルをどうにかすべきですっ！ 人とのコミュニケーションに距離とかつてとっても重要だと思えますよ』って手厳しい事言い返されちゃったよ。確かに一理あつたしそうしてみようかなと思つてね、昨夜の内に取り付けてもらつたんだよ」

栄治さんは四方のテレビにそれぞれ指をさしながらそう笑いを含みながら言つた。

そういう事だったのか。莉紗子って結構我儘だからなあ。なんか足りないと思つたら即座におねだり交渉とかしちゃうから、この間おかあさんが遂にキレてた所見ちゃったんだよな。『あなたの我儘に任せてたら出費が嵩んで嵩んで仕方ないわよ！ あなたにお小遣いいくら渡してると思つてるの！』って半ばマジぎれして莉紗子も負けじと屁理屈こねて口論になつてた。

ちなみにボクと妹ではお小遣いの額が大いに違う。女の子だから

色々とかかるとかそういう理由で妹は月にブランド物のバックが5個ぐらい買える額。それに引き換えボクはゲームソフト一つ買えるか買えないかの額。そしてボクはその額で月の出費を押さえ込んでいる。妹はボクより高い額でも尚足りないとお母さんに駄々捏ねる。この格差はなんだろう。『格差社会』とはよく言ったものだと思う。まだ働きにもバイトにも行っていない世間知らずのボクがもう既にその事を分かり始めているんだから、これはもしかしたら全ての世代に当てはまるのかもしれない。

「そ、そうですか。ホント我儘な妹ですみません。もう申し訳なさでいっぱいです」

絶対見たい番組を食事の時にみたいっていう願望から出たそれは詭弁だと思う。あんまり甘やかしてはいけない存在であろうね。

「いいんだよ、私が最終的に決めたことなのだから。莉紗子ちゃん はなにも悪くない。それよりも、その子……」

雄司さんはそう言うときボクの後ろに控えている深戸ちゃんに目を向ける。深戸ちゃんも雄司さんと目を合わせて首をちょこんと傾ける。

「えっと、なんと言っているやら、この子は」

「申し送れました。詩条 栄治様とはお初に御目に掛かります。私は本日付で源 あゆむ様の専属メイドに着任致しました、浜辺 深戸と申します。源家の使用人としてお仕えしております。そこでこの度着任するに当たり源家御当主様である源 雄司様に助言を求めたところ、ここに住まわせて戴く事に関して栄治様にお許しを戴いてはどうかとお言葉を戴きました。何分勝手な物言いで申し訳ない

のですが、何卒お許し戴きたくお願い致します」

そう淡々と語りながら栄治さんに向かって頭を垂れる。それを見て栄治さんは声高らかに笑う。その笑い声は室内中に響き渡った。

「ハハ、そうかキミはユウちゃんの所の、そうか。いいよ、ここにいるといいよキミの好きにしていいいから。あのちょっと、テレビ付けてもらってもいいかな？」

栄治さんは深戸ちゃんに向かって優しくそう声を掛けて、壁際にいるメイドさん達にそう頼む。

「寛大なお心、感謝致します」

深戸ちゃんは頭を上げてボクのすぐ斜め後ろまで詰めて来る。

メイドさん達は持っていたリモコンでテレビのスイッチを入れ、結構な音量で液晶画面からニュースが流れる。

「ありがとう」

そう礼を言うと二度手を叩いてメイドさん達に促すとメイドさん達を数人残してあとは退室してしまった。食事の用意の合図である。

数分後食事が運ばれてきてボク達それを食し始める。

ボクはテレビの画面を見ながら驚いている。その番組はちょうどニュースの速報が流れてきたのであった。

テレビにはなにやら巨大高層ビルが移っていて多数の他局の報道陣が背景にありながら女性キヤスターが『緊急速報です』とそう緊迫した雰囲気醸し出させる。

『こちら木野城エレクトリックコーポレーション本社前です。では緊急速報をお伝えします。木野城エレクトリックコーポレーション経理部部长代理である最上 天容疑者が業務上横領罪の容疑で逮捕されました。これにより検察側は社内搜索を決行し現在入社している模様です。更に、この事を受け株価は現在大暴落、その責を現社長である木野城 清次氏に向けられてい、彼の今後の進退につきましては先程もお伝えしたとおり会見が行われ現職を辞する事を表明しております。そして、最新情報なのですが木野城エレクトリックコーポレーションは源コンツェルンに買収され子会社化される事が先程決定しました』

ボクは飲んでいた牛乳を喉に詰まらせて、堰を幾度も模様してしまった。

「ゲホっ、ゲホゲホっ。お、お父さんが……、木野城くんの会社を買収、した」

部屋の中にはテレビからの音声だけが響き渡り、他には何も音が聞こえない。それはまるでこの部屋の中の時間以外が静止しているように思えた。

御閲覧戴きありがとうございました。

小説ってホントに難しいですね。なんてこの場で愚痴っています
が、今の時期ホントにスランプに陥っています。小説が書きにくい
事や文章・ストーリーの構成、登場キャラの情景を文章化する、ホ
ントに厳しいです。めげずに頑張つてゆきたいとは思っていますが、
現在生力に赤ゲージが点灯しています。情けない作者でホントに申
し訳ありません……。

読者の皆様からのメッセージ・ご指摘・感想、ホントに嬉しく思
います。中にはホントに至極ご尤もなご指南もありまして、感謝して
おります。しかし、それは小説全体に当てはまる事であり、修正す
る事は容易ではありません。故に一章を完結させ、その後に修正を
断行したいと思っています。基本的にストーリーの主軸に変わり
はないと思いますが、前半部分の場面が幾つか変更・加筆され、新
ストーリーを挿入する事もあるかもしれません。あくまでも予定で
すが……。

〈Special Thanks〉

イルフレーム様 ライクス様 月奏様 YUTO様

それではまた次のストーリーも読んで戴けたら幸いです。

お父さんが木野城くんの会社を買収した。それはボクにとって信じられない出来事で、確かに木野城くんの会社が停滞してゆく事は読んでいたけれどもこんな事になるとは。お父さんは何故木野城くんの会社を買収したのだろう。もし停滞したとしても時間が掛かるにせよいつか自社自身で立ち直せるであろうに。その芽を摘むようなこんな、横暴。

ふと視線を栄治さんに向ける。テレビを見ながら腕組してなにやら考えに耽っている様子。その内鼻息を漏らした。

「栄治さんは知っていたのですか？ その、お父さんの買収の話……」

栄治さんは腕組をやめて、テーブルに肘を付いてボクに視線を移した。

「今、初めて知ったよ……。まさか木野城の会社を買収するとはね、大したもんだよ」

そう栄治さんは薄笑いを浮かべながら返答する。

「大したもん？ 栄治さん、あなたは本当にそう思っているのですか。だったらボクはお父さんだけでなく、あなたにも失望せざるを得ません。いくら自分の会社の利益になるからといってやっていい事といけない事があります。前にボクの部屋のパソコンで源コンツェルンにの各分野について調べた事があります。確かに源コンツェルンはエレクトリック部門ではまだまだ発展途上の段階で自社だけ

で現状を打開して上位に上らせる事は難しいでしょう。指導顧問的な会社なり人材なり必要だとは思いますが。しかし、自社にエレクトリック部門王手三大企業の内の一つが停滞したのをいい事に子会社化するなんて事はボクは許せません」

ボクは真顔で栄治さんにそう真剣に話す。栄治さんは肘をつくのをやめて、苦笑いを浮かべ視線を落とした。

「ハハ、いやそういう意味じゃなくてね」

「ではどういう意味ですか？」

ボクは身を乗り出して栄治さんの目を見つめる。

「あゆむ君はまだ『社会』というものを知らない、複雑なものなんだ」

「でも道義に反する事をしてまで押し通す事なんですか、この諸事は？」

ボクは更に声を大にする。

「では聞こう。あゆむ君が今後、お父さんからの試練を成し得て会社を任された際の事だ。キミは経営者としてまず何を優先する？」

栄治さんは視線を上げてボクをゆっくりと見据える。

「何をつて、ですから勿論それは、道義です。いくら自社のエレクトリック部門が弱いからと言って子会社化にするというのは反対です。自社自身で真正面から成長させる事ができるはずですよ。例えばそ

れが時間が掛かり、その所作段階で不利益を蒙ったとしても」

「確かにそれも大事な事だ、しかしもつと経営者として大事な事がある。社長になるであろうあゆむ君という存在は一人でその会社を動かしているのではない。他の従業員や幹部も含めての会社であり、その統括をしているのはあゆむ君だ。故にあゆむ君一人の事だけ考えればいいのではないのだよ。つまり自分の意志だけで会社運営できない、他の従業員・幹部達全員の事を優先的に考えなければ。それは他の会社に対しても同じ、私の言っている意味があゆむ君には分かるかな？」

「確かに分かりますが、でも曲がった事はしてはいけないと思います。例えば他の人に多少の被害が及んでも、道を踏み外さなければ……」

ボクがこういうと栄治さんは小さな溜息を漏らした。そしていきなり目の色を変え、いつもの優しいおじさんからは逸脱し蛇にでも睨まれているかのようなそんな感じに変貌を遂げた。ボクは唾を飲む。畏怖をその時抱いたが、しかしそれに負けじとじっと見つめる。

「詭弁だ。社会と言うものはそんなに甘いものじゃない。従業員に対して『多少の被害が及んでも』なんて事は経営者にとつては有り得ない思想だよ。キミはまだ分かっていないようだね、会社というものを。さっきも言ったように『会社』というものは社長一人で成り立っているものではないのだよ。多くの従業員に支えられて成り立っているが故に彼らの信頼を失ったら最後、会社は倒産へと追い込まれるだろう。厳しい事を言うようだがあゆむ君の言っている事は全てがキレイ事だよ。そんな事を言えるのは行動力に伴う達成力を持ち合わせた優れた人材のみ。あゆむ君は今回の選挙を見る限りではそれには値しない。現時点では、キミはその……アマちゃんだ

という事だよ。『多少』の被害が『多大』な被害へと発展する。キミはどちらの経営方針に沿うか選択を迫られる時がその内くるだろう」

「…、分かりませんね、分かりませんよ。ボクには栄治さんの言ってる事が理解できません、というより理解したくありませんね」

頭に血が上ってゆくのがよく分かる。栄治さんはボクの言ってる事の本意を分かってくれていないんだ。ボクの意見を丸ごと否定するような言い草。

ボクは皿に残っていたスープを飲み干し、ナプキンで口を拭いてテーブルに叛投げた。ボクが勢いよく立ち上がると同時に背後にいた深戸ちゃんが椅子を引いてくれた。

振り向くと深戸ちゃんの手には自分の信玄袋とボクの学校の鞆を下げていた。

「学校があるので先に失礼しますっ」

ボクはそう栄治さんに言って歩きはじめた深戸ちゃんの後ろを歩く。

栄治さんは再び腕組をして自分の顎に蓄えている顎鬚に手をやりながら、もう片方の手で自分のワイシャツのポケットからタバコとライターを取り出してタバコに火を点した。そしてゆっくり一服、二服とボクの後姿を見つめながらタバコをふかした。

「深戸ちゃんはさ、お父さんが木野城くんの会社を買収した事知ってるの？」

今はとりあえずお父さんに事の真意を問いたい。けれどもしボクの予測どおりの答えが返ってきたら？ その後はどうする。お父さんの今回やった事は確かに許せない。しかしボクは源コンツェルンで何も影響力を持っていない。故にボクは社会に対して何も出来る事はないだろう、無力。まだ社会に適應できない自分がなんとも嘆かわしかった。今出来る事は悔いながらも出来る限りそんなお父さんがやった事を撤回させたい。木野城くんには申し訳ない気持ちで溢れている。どう謝ればいいんだろう。彼から責められることはもはや避けられないだろう。

ボクは前を歩いて先程から言葉を交わしていない深戸ちゃんにそう尋ねる。すると深戸ちゃんは立ち止まって、くるっと半回転してボクの方を見据えた。

「確かに先程の事を受けて木野城様はあゆむ様の事を悪く思うでしょう。しかし、あゆむ様は何かなさいましたか？ 私はしていません。ですから貴方様は毅然としていて宜しいですし、普通にいつも通りにしていて良いと私は思います。先程のあゆむ様のお言葉を返すようで誠に申し訳ないですが、御当主様が何か悪い事をしたようには私には思えません。むしろ私は御当主様は立派な経営者であると思います。考えても見て下さい、株価はこれからも下落し続ける事でしょう、その事から源コンツェルンに利益などあまり齎されないのでは、むしろ失益額の方が大きいです。そんな現状ではあまり利益が見込めない会社を御当主様が買収したのは訳があつての事ではないでしょうか？」

深戸ちゃんはそう淡々と語り、ボクに真剣な眼差しで返答した。

深戸ちゃんってこんな顔もするんだ。今日の朝からしか知り合っていないのに色々な面が垣間見える。

確かに一理ある。これから株価は下がり到下がってゆくだろう。

しかし、そのような利益のない、むしろ失益額の方が大きい会社を手に入れるという事は先程のボクの私利私欲説は否定される。では何故お父さんは木野城くんの会社を買収したのだろう、謎は深まるばかりであった。先程栄治さんが言いたかった裏返しがもし深戸ちゃんの考えと類似するものであったら。

いくら自分の意見が否定されて頭に血が上っていたとはいえさっきの態度は間違っていたのかもしれない。そう思うと後悔の念が込み上げてきた。そもそもなんでボクの学校の事を知っているんだろう、じやなきや木野城くんの事なんて分からないはずだし。

「ではなんでお父さんは木野城くんの会社を買収したんだと思う？」

ボクは深戸ちゃんの鋭い洞察力に若干驚いていた。ボクは目先の出来事に腹を立てていたけれども確かに周りが見えていなかった。ボクは、まだまだだ。しかしそんな自分に何か嫌気が挿して、深戸ちゃんにその思いを少々ぶつけつつあった。

すると深戸ちゃんは困ったような顔をして、

「そんな事は御自分で考えるべきです。なんでも人に頼って済ませようとする所はあゆむ様の悪いところですよ。今朝の朝食もそうです、あゆむ様の嫌いなピーマンが大皿の片隅に残されておりました。ピ

「マン農家の方がどんなに苦勞して作り上げたものなのか、あゆむ様は今一つ人の御心というのが分かっていないようですね。一度農家に出向いて仕事を手伝ってみてはいかがですか？」

今朝の食事からいきなり飛躍してピーマン農家の仕事を手伝うまで發展してしまった。しかも今朝が初対面なのにまるでボクを分かったような言い方。曲がりにも曲がったボクの怒りは更にその方向を変える。

「まるでボクの事を分かったような言い草じゃないかな、今朝出会ったばかりなのにね？」

すると深戸ちゃんは自信たっぷりそうな顔を浮かべて、

「奥様からあゆむ様についての報告書を逐一郵送してもらってましたから。全17記全てに目を通しました。あゆむ様がここに来る前からの事も、全てこの頭にインプットしてあります。それともなんでしょうか、あゆむ様のお母様がご理解されていないあゆむ様がおありだと、そう仰いますか？ だとしたらそれは間違いです、栄治様の言葉をお借りするならばそうですね……、その内あゆむ様も分かる時が来ますよ、お母様が一番お子さんの事を理解していると」

ボクの成長日記的なもの？ お母さんからそんなもの預かってるの、おかしいでしょ。

「なんか思っただけどさ、深戸ちゃんって偉そうだよな。ご主人様にはちゃんとした礼儀礼節を持って従うべきなんじゃないの？ さつきから変な語託並べて論理を通そうとしてるけどさ。じゃあこちから聞くけど、深戸ちゃんはピーマン農家に行った事があるというの？ 行った事がないって言ったんじゃないやおかしな事になるよね、

だってさっきボクに農家の気持ちを勉強したらどうかって言っただからさ。勉強した事がない人がそれやれって随分理に適っていないと思わない？」

ボクは皮肉たっぷりに深戸ちゃんにそう尋ねた、顔を若干上に上げて目を細めるように。

「私の実家は農家ですが、何かおありですか？ 加えて、メイドという存在を熟知されていらっやらないあゆむ様がその存在についてとやかく言う事は出来ないと思います。もし熟知されていると仰るのならまずメイドが成すべき所作を仰ってみてください」

すると深戸ちゃんは無表情でボクに向かってそうさりと云った。

の、農家？ 予想外の返答だった。相手を打ち負かそうとしていた自分が逆に返り討ちに遭うなんて。

「れ、礼儀？」

ボクがそう言つと深戸ちゃんはやれやれといった顔でボクを見やっつた。

「五分咲きですね。正解は立ち振る舞いです。それから言葉遣い、挨拶と次々身につけてゆきます」

深戸ちゃんは自分のスカートの布地をちょこんと摘まんで上にクイッと上げる。

「しゅ、しゅ主人が直して欲しいといったらその通りにしなくちゃいけないんじゃない？ ほ、ほ他のメイドさんは皆そうしてるよ」

ペースを大盤狂わせさせられているボクはもうどう反論してよいのか分からない。なんというか深戸ちゃんはボクよりも数段格上なような気がしてきたのだ。

「そうですか、で他になにかありますか？ 他のメイドは他のメイド、私は私。十人十色のメイドがあつてそれでよいと思います。もしも皆が同じ性格、同じポテンシャルを外面に出していたらアンドロイドみたいで気持ちが悪いとは思いませんか？ 私は私のやり方で主人であるあゆむ様に従う、あゆむ様の固定概念をなんとか打破して差し上げようとして先程から一生懸命なのですが、あゆむ様は何かおかんむりのようですね。御自分の感情に任せて発言、行動していると人は着いてきませんよ。仮にも本日付けで奏心学園生徒会長にならせられる御身がそのような事を念頭において置かねば務まるはずありません」

深戸ちゃんは真剣な目でボクを見つめてそう言った。

何か胸に刺さったようなそんな感覚だった。なんでだろう、本当の事を言われたから？ そもそもなんで今日はこんなにいつも有るまじき状態になっているのだろう。ああそうか、栄治さんにボクの意見を否定されてその感情を差し向ける対象を深戸ちゃんにしまったんだ。

つくづく自分が愚かだと思った。ボクは心を落ち着けるために深呼吸を二三次する。しかし……

「何が言いたいのか？」

今ばかりは素直になれなかった。冷静にそうといかけてしまう自

分がそこにはいたのだ。

「これ以上は何を言っても無駄のようですね」

「勝手に話を切らないでもらえるかな？」

尚も双方冷静に受け答える。

「あゆむ様……、私は一生懸命です。今朝に初めてお会いしてから時間は経っていませんが、一生懸命なんです」

ボクはハツとした。何かに気付かされたそんな感じだった。深戸ちゃんは口調は普通であるのにも関わらず、何かを必死に目で訴えてきていた。

そこで区切りがついた気がした。そうだ、深戸ちゃんはボクに助言してくれているんだ。ボクを良い方向に導くために。時間なんて関係ないんだ。

「い、言い過ぎたよ。さつきからおかしいんだ。頭に血が上ってさ、お父さんの買収話からなんでか頭がいっぱいになってそれで」

「いえ、当然の事です。様々な事が起こりましたからその整理は時間を要すはずです。しかしお忘れなく、本日は生徒会長の就任式。御気を確かに持っていますことには選出して戴いた生徒様方に示しが着きません。私も言い過ぎました。数々のご無礼をひらにお許し下さい。この通りです」

深戸ちゃんは最後に深く頭を垂れて、その間が続くとまた半回転して前に歩き出した。

「ありがとう、深戸ちゃん」

ボクが見失っていた大切な何かを深戸ちゃんが教えてくれたそんな瞬間だった。と同時にメイドさんというのはやはり主には様々な意味で欠かすことが出来ないそんな風に思う、深戸ちゃんという存在はまだよく分からないけれど……。

ボク達は平賀さんの待つ車がある玄関口まで向かってゆく。

ところで深戸ちゃん、メイド服を着たままで学校はどうするの？

御閲覧ありがとうございました。

〈Special Thanks〉

ライクス様

〈お詫び〉

大幅改編予定ですが、この分ですと予定を遙に上回ってしまつかもしれません。陳謝致します。有言実行出来なくなってしまう申し訳ございません。先にお詫び申し上げて置きます……。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

ボクと深戸ちゃんが玄関口に着くと、いつも待っていてくれる平賀さんはいなかった。雪穂さんを送っているとの事だけど、それが長引いているのかな。だとしたらそれまで待ってしよう。

それにしても、深戸ちゃんは未だにメイド服だけどいつ制服に着替えるのだろうか。ふとボクが深戸ちゃんに目を移すと、目の前にいたはずの深戸ちゃんが忽然と姿を消していた。彼女はボクのバックを持ったままなのに。

ああ、そうか今着替えに行っているのか。深戸ちゃんは頭が良いね、こういう時間を有効に使うんだ。もしかして平賀さんが遅れる事を予期していたのかも。だとしたらボクに深戸ちゃんは時間を取らせないという感心に値する事を成し得ているわけだから……、出来たメイドさんだよ。特殊技能、『予知』を習得している口がたつ不思議な超絶メイドさん。うん、なんかいい響き！

数分待っていると急スピードで走ってくる黒塗りの車が激しい轟音とタイヤがアスファルトに擦れるような音も立てながら目の前の玄関口の車寄せに止まる。ひ、平賀さんってこんなに獰猛な運転していたっけ？

ま、まあ、やっと、平賀さん帰途に着いたんだね。しかしその車はいつもの乗っているものとはどうやら違うもののように感じる。次の瞬間、ウィーンという機械音と共に車のルーフが開し、その車はオープンカーへと変貌を遂げた。近づいてみるとどこぞの高級そうなスポーツカーで、アイドリング・ストップを行っていた。

「お待たせ致しました」

運転席には黒タクシーの運転ちゃんがよくつけているあの白い手袋（？）らしきものを付け、黒のサングラスを掛けた人がこちらに向かつてそう言うてくる。助手席には何故かボクが先程どこぞのメイドさんに渡した鞆と信玄袋らしきものが置いてあった。運転者をよくよく見てみると頭には見覚えのある白の力チューシャが備わっている。まさか……

「み、深戸ちゃんっ？」

ボクがそう投げかけるとその運転席の女は黒のサングラスを額に掛けて、運転席から出てきてすぐさま助手席の扉を開けた。

「お待たせしました、車の選択に悩みまして」

「いやいや、そうじゃないでしょ。なんで深戸ちゃんが車運転してきてるの？ ダメでしょ。まあなんか駐車場かなんだと年齢に係なく運転しても捕まらないとかいう嘘っぽい事聞いたことあるけど、にしてもここは駐車場じゃないでしょ」

ボクがそう焦り気味に聞いてみると、深戸ちゃんは不思議そうな顔を浮かべてボクを見つめる。

「はい？ それはそうです、ここは確かに駐車場ではありませんよ。分かっております、して何故私が運転してはいけないのでしょうか」

な、何故に把握していないのよ？ 浜辺 深戸……、確かに日本人だよ。外見も決して日本人から逸脱したような外国人という雰囲気も醸し出されていないし、ハーフという事もありえない。ボク

は目の前のドアに手を添えている深戸ちゃんをじつと眺める。

「だ、おかしいでしょ？ 深戸ちゃん、日本人でしょ？」

すると目の前の不思議ツ子メイドは戸惑いつつ首を縦に振った。

「…、ええ、そうですが。日本人ではいけないのですか？」

こ、このままでは不思議ツ子メイドさんはわっぱさせられてしまう、主であるボクが教えてあげなきゃ。

「いけないも何も、深戸ちゃん運転できないでしょ？」

「ああ、今馬鹿にしましたね？ メイドだから運転なんて、車なんて動かせる訳がないって今そう思っている訳ですか？」

不思議ツ子メイドさんは頬を少々膨らませて目を細めながらこちらを見つめてくる。

「そういう事じゃなくてさ、というかメイドだから運転できないとかそれって差別でしょ」

「ああ、そうですね。あゆむ様はそんな人ではないですものね」

安心した面持ちとなった不思議ツ子メイド。ボクはこんな話にもって行きたいんじゃない。何故、深戸ちゃんが悪びれもなく車に乗ることが出来るのかである。だって深戸ちゃんは……

「って、そういうことじゃなくってさ。深戸ちゃんはまだ18歳じゃないのになんで車に乗ってるのって事だよ」

「はい？ 私はもう18歳ですが……」

不思議ツ子メイドさんはドアに添えていた手を離して、畏まって前で手を重ねる。

18？ 目の前にいるこの子が、精々いってボクと同年かと思っていたのにまさかのボクより先輩って事？ そんなバカな、いやバカって事じゃないんだけどちょっといや、物凄く驚いているだけ。先入観ってやっぱりいけないと心の中で深く思った。

するとこの目の前の不思議ツ子メイドさんは高校3年生、いやもしかしたらこんなサプライズに乗じて実は大学生でしたなんて事もあり得るよ。いやいや、もしかして今言った事はフェイントで、実ははたまた失礼かもしれないけど、まさかろ、浪人してるとか、さ。幾浪もしてて隠蔽のために……。

「ろ、ろろ浪人してるんですか？」

「しっ、してませんよ！ じゃ若干失礼じゃないでしょうか」

不思議ツ子メイドさんは序盤は驚きのあまり冷静さを突出してしまったが、後に戻ってゆかせた。

「じゃあ大学生ですか」

「いえいえ、まだあゆむ様と同じ高校生です」

そうか、やっぱりそんなハズなかったよね。ボクは胸を撫で下ろした。しかし、まだ消えぬ質疑があったのだ。

「まさか留年してボクと同学年とか、はたまた下級生とかそういう類だったりますか？」

すると不思議ツ子メイドさんは溜息混じりに

「いい加減、普通に見てくださいませんか？ メイドだって面倒だと……いえ、なんでもありません。加えて、貴方様は私の主なのでから歳など関係ありませんので、今までどおり普通にしてくださいでは、車にお乗り下さい」

そう言い直して、不思議ツ子メイドさんは手を助手席の方に差し出した。

「そ、それはゴメンネ。なんか色々考えちゃって」

そう言いながら言われた通り車に乗り込み、シートベルトを締める。それを不思議ツ子メイドさんは確認した後、ドアを閉めて運転席に搭乗する。そして車のエンジンを掛けなおし、大きな轟音が再び鳴り響く。そして不思議ツ子メイドさんはブレーキを踏みながら幾度かアクセルを踏みボクに視線を送る。

「と、ところで深戸ちゃんは免許持つてるんだよね？」

すると腕を曲げて握りこぶしを上から下に引き込むような動作をしながら自信満々に

「3日前に取ってきました。公道を走った事は教官と一緒にの時しかありませんが大丈夫ですっ」

その自信はどこから？　だって、教官の足元には当然ブレーキが設置してあるわけでしょう。しかし、この車は愚か一般乗用車にさえあるうはすが無い！危険を自らが回避させる事は出来ない、つまり……

ボクは額に手をやる。

心配なのである、すっかりしてそうだけど先程の有り得ない程の寧猛な運転を見せたこの不思議ツ子メイドさんが運転する車に乗って果たして無事であるのか。保証書を発行できるのならそうして欲しい。ん？　ちよつと待てよ。保証書って例えば家電とか買うと付いてくるよね。もし欠陥があつたら交換してくれる……。人間に置き換えよう。ボクがもし事故に遭つて欠陥だらけになったら、交換……。ああつ。ダメだ、ボクは交換できない。電機屋に頼んで『すみませんでした、はいどうぞ』的なノリでお手軽に済ませられる程の事じゃないんだぞ。車がオシヤカ！御釈迦様の御元へ……。

ぼつ、ボクは男だ、決める時は決めるんだ！決意を固めようじゃないか。ボクは背後を振り返りアレがちゃんと貼つてあるか確かめたがかし。そこで、今にも発進しそうな不思議ツ子メイドさんを制止する。

「ちよ、ちちよつとま待った！わ、若葉マーク付けて無いじゃんつ！！」

「ええ、なにか問題でも？」

なんの悪びれもなくそう応える。いやいや、貼つてなきゃいけないから。いや、これだけじゃない。他にも気になる事があつたのだ。

「し、シートベルトはっ？」

すると不思議ツ子メイドさんはハッと何か気付いたような面持ちを浮かべながら、シートベルトのある斜め上方の金具を一目見やるとゆっくりとボクの方に視線を移し、その場でどう見ても取り作ったような引きつった笑顔を向けてきた。

「い、いやですわ。い、い今しようと思った所、いえ間違えましたわ、オホホホ。私、発進の0コンマ6秒内にシートベルト付けられるか自分に試練を課してるいるのですのよ」

既に固めたはずの決意が揺らいでゆく。

あきらかにミスったでしょうよ。ボクも引きつった笑いをしながらふとオートマチックトランスミッションを見やった。不思議ツ子メイドさんは自分の信玄袋から若葉マークを後方のボンネットの片隅に貼り付けて満足げな顔をしながら、アクセルを踏もうとする。依然としてシートベルトはまだ装着しようとしなない。

「ちょ、ちよっと待った！」

ボクが大声でそれを静止する。

「どうしたのですか？」

今度こそ不覚は一切ないと自信持っているのか、素っ頓狂な顔をボクに向けたのだった。

「どうしたのですか？　っじゃないでしょう。ちよっとオートマチックトランスミッション見てみてよー！」

ボクがそう言うと思議ツ子メイドさんはその方に目をやって、空で手を幾度がブンブンさせた。

「い、い嫌ですわあ、オホホホ。私とした事が、いえ、ああ、あつ。で、ですからこれも私、発進の0コンマ6秒内にNに即座に帰られるか自分に試練を課してるいのですのよ、察してくださいな、察して、ウフフフ」

そう、お察しの通りオートマチックトランスミッションがRになつていたのだ。いまの供述から言うと、この目の前にいる思議ツ子メイドさんは発進から0コンマ6秒の間にシートベルトを締め、バックしているこの車のオートマチックトランスミッションをRからNに切り替えて、後方の壁にあたる前に前方発進させようとしているのだ。しかもこの車は普通の車と違って恐らく馬力が半端ないppsであろう。故にちよつとバックさせようアクセル踏んだだけだとしても相当な距離進んでしまう。後ろを見やれば『shijocoporation』のロゴが入った大理石造のエントランス壁。その距離ざつと2〜3M。む、無理だ。

オートマチックトランスミッションはRのまま。……この子やる気だ。ボクは不思議ツ子メイドさんに目を向ける。右手でハンドルを握り締め、左手はシートベルトの金具付近にセットしている。ボクが大いなる危惧を抱いているのにも関わらず、この不思議ツ子メイドさんは少々口元を綻ばせて、目を大きく見開いている。ブレーキングしながらアクセルを噴かしている。もう発進しそう。

「い、今の全部忘れよう？　ちゃんと今からでもいいから考え直そう？　大丈夫、まだ間に合う」

するとこちらに顔を向け

「いいえ、時間足らずです」

そういいながら満面の笑みを浮かべてこちらを向く。

こ、ここ……コワイ、ぜぜ絶対、死ぬっ！

「しっかり掴まっててくださいね」

「ちょ、ダメだってっ、あああ、うつつ……」

ボクが言葉を発した半ばで車は急速でバックしてゆく。ボクは冷や汗をダラダラ掻きながら、後ろの大理石壁を見つめる。ボクが予想したよりも車はもの凄く速い勢いで壁まで近づいてゆく。

隣の不思議ツ子メイドさんは瞬時にシートベルトを締め、オートマチックトランスミッションをNに切り替える。その際にボクは反動で大きく前につんのめり、不幸にも自らの額をダッシュボードにぶつける。

「うつつ、い、いい痛ッ……」

そう両手で患部を抑えながら悶えていると

「あらあら……」

不思議ツ子メイドさんはボクに目を向け、視線が一致。その後クスリと笑って再び前方に視線を戻す。

わ、笑われた……。ボク被害者なのに、犯人に笑われた。このイタイケな状態を笑いで片付けてしまったよ。どう処理してくれるかと思えばこんな。ツキヅキ痛む額、放置。

そんな風に大いに他人事のようにあしらう。ま、まあ確かに他人だけどさあ、深戸ちゃんとボクつて一応主人とメイドな訳でしょ。だったら心配の一つくらいしてみても如何ですかね。

尚、ここで確認だが隣の不思議ツ子メイドさんはボクとは対照的に微動だにしていない事をご理解戴きたい。

「か、軽い……」

悶えつつもそう言葉を洩らすも、そんな事お構いなしに隣の不思議ツ子メイドさんはアクセルを踏む

「あああ、だ、ダメだ、ああ、うはあっ」

ああ、展開はやはり予想通りに運んでしまったようだ。車はガシヤンと言う音と共にその背後の壁にぶつかりってしまった……。言わんこっちゃない。ボクは幸なのか額に比較的軽症をおった、そうは言っても不思議ツ子メイドさんは動いてすらない。でも車は止まったみたい。いやしかし後部座席の方に被害は至らないまでもトランクは……

「ああ、やつちやいましたね」

いつの間にか運転席から降りていた不思議ツ子メイドは、無残にも大理石壁にぶつかり大いにへこんでしまい傷も伴っている後ろのボンネットを見ながら陽気な声でそう言っていた。ボクは後ろを眺

めながら状況を凡そ把握する事が出来た。

「ああやつちやいましたねって、だから随分軽いなあ……。結構な事件、いや事故だよ」

ボクが現場を目にしようとシートベルトを外して外に出ようとすると

「あゆむ様そのままで大丈夫です、いけますよ」

いつの間に戻ってきたのか再び運転席に戻り、笑いながら今度はシートベルトを締めてオートマチックトランスミッションをNに切り替えた。

「だ、大丈夫じゃないでしょっ！ 人を呼んで後始末と、やっぱり平賀さん待とうよ、っね？」

すると少し顔を上げて天を仰ぎ、その内何か考え事をしながら

「いけますっ」

そう自信たつぷりにボクに言う。だから、その自信はどこから湧いてくるのさ。

「なにがいけるっていうの？ 栄治さんの所の建築物一部を壊しておいて、無理でしょ。あれ見れば分かるでしょ、大理石メチャクチャ綻びてたしさ」

ボクは呆れ半分で不思議ツ子メイドさんにそう投げかける。すると彼女は何か考え事をするように上を見ながら人差指を口元に持つ

てきた。

「まあ、私の給料から差し引かれるだけですし訳ないです。……私の手元にコツコツ貯めてたお金、全額でお支払いすれば、いやはたまた……」

「ん、何か言った？ 最後の方聞こえなかったんだけど」

すると何か気付いたようにハツとして不思議ツ子メイドさんは驚いてみせる。普通自分の給料から引かれる、まあ弁償するってなったら多少なりとも落ち込まないのかな？ なのに目の前のこの子は、いや先輩はそんな感じを全然見せない。

「い、いえ。何でもありません、ちょっと待っててくださいね」

そう言うツ子メイド服のポケットからなにやら携帯を取り出してそれを耳に当てる。

「あ、もしもし。浜辺ですが、あゆむ様が御滞在なさっているエントランスにて御領車が何者かに襲撃を受けましたが故、大至急応援に来てくださいます。尚、あゆむ様はご無事です。特に傷一つありません。繰り返し、ご主人様源 あゆむ様はご無事です。傷一つありません。ですから予定通りこのまま学校に向かいます。加えて、この事を受けて詩条家建造物の一部破損が見受けられますので修復作業の程宜しくお願い致します。最後に学校に着いた際、私は校門前で待っています故この間頼んでおいたヴァンキッシュGCの用意を」

不思議ツ子メイドさんは淡々とそう電話口に話し、早々と電話を切ってしまった。

しゅ、襲撃っ？ 受けてないでしょっ！ 何^{なに}故事^{ゆえ}の次第を大きくするの？ 加えて『傷一つありません』って、あるでしょうよ。『あらあら』ってずいぶん軽くあしらった時にボクが額を抑えて悶えてたの見たでしょ、目あったもん！それに『傷一つありません』って二回繰り返したよね？ しかも自信満々に。忘れたとは言わせませんよ。というかウソついちゃダメだって。なんでウソつく？ ああ、そういう事か。

「誰に電話してたの？」

「メイド隊です」

「はい？」

メイド隊？ って今朝大広間で見たメイドさんみたいな人をいっぱい集めて組織するアレの事？ そんなものが存在するの、まあメイドさんがいるんだからその組織があつたってなら疑問は無いけれど……。

「それってもしかして、源家の？」

「他にドコがありましたしょうか？」

「へ、へえ、じゃあ深戸ちゃんみたいなメイドさんが沢山いる訳だ」

「先程も申し上げましたが、メイドに限らずは十人十色です。ですから私みたいなメイドは沢山いません」

「ご、ゴメン。ちなみに源家に仕えているメイドさんってどのくらいいるの？」

メイド隊っていうぐらいなんだから、結構な数いるんだろうね。200とか300とかさ。

「そうですね、凡そで申し訳ないのですが700名ほどでしょうか。ちなみに執事は400名、その他調理人・運転手・庭師諸々で300名、後は独立機関で……これは今必要ありませんね」

「つえ？ そんなにいるの、よくそんなに人を雇うお金があるよね」

合計で1400名も雇ってるって事はそれほど賃金を支給しなきゃいけない訳でしょ。源ってそんなにお金あるの

「源は様々な部門で上位に位置しておりますから収益高が高いのです。なにしろ源コンツェルンですから……」

「ふうん。で、なんで嘘ついたの？」

「はいっ？ いきなりの話題展開ですね」

「そろそろ聞きたかったんだよね、いろんな意味でさ」

「さあ……、咄嗟に、でしょうか」

不思議ツ子メイドさんは人差し指を口の前に持ってきた。

「主として知る義務が」

「プライバシーの権利を行使します」

「いや、でも」

「プライバシーの権利を行使します」

「あの」

「プライバシーの権利を行使します」

「もういいや」

そんなに言いたくないんだ、まあ大体予測できたからいいんだけどさ。修繕費支払いから免れる為にそうしたんでしょ。あの大理石結構高そうだね。気持ちは分かるけど嘘は良くないよ。

「参りましょう」

突発的にそんな事を言われて目を丸くしながら不思議ツ子メイドさんの方を見る。

「何処に？」

トランクはヘコンでる訳だし、このまま走ったら公道で恥かくし。加えて、まず栄治さんにこの事を知らせて、いやでもキマツイし。ああ、でも深戸ちゃんがちゃんとメイドさん達を呼んだんだっけ、じゃあいいのかなあ……。とりあえず、他の車に乗り換えた方がいいよね。

「学校にですよ」

「何故に？」

「遅刻はいけません、加えて今日は大事な日なのでから」

「何で行くの？」

「この車しかありませんでしょう」

「いやいや、トランクとかへこんでるし、きっと傷だらけだからさ。そんなんで公道走ったら大変だって、どうせなら乗り換えて行こう？」

「『走る』？ 違いますね、安全運転で」

「あ、そう？ じゃあ安心、でもないけど。乗り換えていこう？」

「ではエンジンフルスロットルで」

「うん、『安全運転』じゃなかったの？ 加えてボクの勧誘は無視ですか？」

「いざ、『爆走』」

不思議ツ子メイドさんはその声と共にアクセルを勢い良く踏み込んで、色々な意味で不安材料を抱えたこの車やメイドさんが詩条家から公道へと向かってゆく。

「だから『安全運転』でしょ。それ口走ってる時点で自分が言った事に矛盾がでるでしょうよ！ 自分で口語したことは守ってえ」

猛スピードの中そう言うのが精一杯だった。ふと上からヘリのエンジン音が聞こえ、ボク達の後方へと向かってゆく。そして先程の事故現場へとメイドさん達が降下してゆくのが見て取れる。そして10秒掛からない内に再びヘリへと戻っていった。まさか、もう修繕できたのかな。メイドさん……ヤバイ。

Regular Chapter 38 〈 Mishap 〉 (後書き)

ご閲覧戴きありがとうございました。

この前書店でラノベを手に見てみた所、やはり一話のストーリー内容、会話量的にもですが少ないと感じました。故に今回の話で私はそれを改善したつもりです。大体このくらいの長さで丁度いいかと思ひまして。ですが、これはあくまで作者的視点でありますが故、読者の方々の意見も賜りたいです。それで今後このくらいでよいのか、それとも増減した方がよいのか参考にさせて戴きます。

〈 Special Thanks 〉

ライクス様 月奏様

毎度のコメント感謝しております。

それでは次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

長らくお待たせ致しました。一ヶ月以上も経過してしまい誠に申し訳なく思っております。

さて、めでたくもPV200,000突破致しました。

これも皆様の日頃のご愛顧によるものだと感じております。どうぞこれからも応援の程宜しくお願い致します！

学校の校門が見えてきたところで少し気持ちが落ち着いたのか、ボクは安堵の息を漏らした。

思い起こせば、隣の不思議ツ子メイドさんは運転が非常に獰猛の上無かった。アクセルを徐々に踏んでゆくに従って、スピードが出る事への爽快感を覚えたのか知らないけれども、車の奇怪な爆走ぶり。しかも運転しながら口元が緩んでいるのだから、非常に畏怖を感じざるをえない状況下。二つの畏怖心による相乗効果を体感しつつ、車はいよいよ屋敷内を走り去っていくのである。

公道に出た時点で『絶対に捕まる』、と冷や汗を掻きながら辺りを見回す。そして不思議ツ子メイドさんにボクは注意を促すのである。

「ほほ、ほ法定速度守ろう？ けけ警察とか来ちゃうから、ねっ？」

異様な片鱗を垣間見せる不思議ツ子メイドさんに対して、ボクは宥めるように温和にそう諭すのであった。しかし……

「ポリ公ですか……、鬼ごっこもいいかもしれませんね？ ……心が疼きますっ、ウフフ」

そう言いながら更に口元を綻ばせていた。その瞬間、対向車線から大きなダンプカーが轟音と共に物凄い存在感を出しながらやってくる。すれ違い時にボク側のドア擦れ擦れにダンプカーは通り過ぎるわけで、ボクは畏怖を通り越して硬直状態になってしまった。

徐に視線を車道に落としてみると気付いた。そう、車はオレンジラインをはみ出さない限界地点で走行していたのだ。

ボクはダッシュボードに手をやってそのまま何も突っ込む事が出来ずに前だけを見つめていた。

その内交差点で渋滞に嵌る。先頭車両までは9台くらいの車が停車していたと思う。不思議ツ子メイドさんは信号が赤から青に変わった瞬間に、ハンドルを左に切って猛スピードで先頭車両を追い抜いて交差点を通過しようとする。勿論法定速度などは遵守されているはずもなく、しかも先ほどのオレンジラインの事も頭を過ってボクはふと我に返る。

「ちょちょ、マズいつてっ！ ふおふおフオレンジラインみみ見たでしょ？ ふおふおふお追い越し車線禁止だってばっ！ しかも、法定速度、警察、これは本当に」

「何もマズくはありません。心配しすぎです」

「うん、何も心配しすぎな事はないから。そんな安堵の顔で騙そうとしてもそうはいかないから」

「本当ですよ。嘘は言っていないせん、だって、たかがポリ公でしょう？」

「ええ？ うん、おかしいね？ こここの世界は直接的にはその『ポリ公』によって強制されているんだよ」

「でしたら私を含め源家がこの世界を統制及び教育を行いましょうか？ 容易いものです」

「どっ、どれだけ源家の力を過信してるのさっ？ そんな力はどこから、あうっ」

この人、実はＳツ気たつぷりなのでは？

勿論当車が交差点を通過した時点ではもう後ろの９台の車を追い抜いていた。そして視界上前方には車は見当たらない事もあってかスピードをドンドン上げてゆく。故に言葉を話す事も徐々に儘ならなくなっていたのである。

突然後方で甲高いサイレン音が鳴り響く。嫌な予感がしながらもその後方へ視線を向けると……

黒の普通の乗用車のセリングには赤いサイレンが設置してある。

そう、瞬時に悟った。追い抜かしたあの９台の中に不運にも、覆面パトカーが紛れていたという事が。

ドライビング中はもうどこかに衝突したりしないか、そもそもここで自分の命を落とすやもしれないという気持ちを持っていた。だから自分の視界に入る情景全てに注意を怠らないし、なにより背後の覆面パトカーに細心の注意を払っている。

「前方の車両に告ぐ。直ぐに道脇に車を寄せて停車しなさい！ 繰り返す、直ぐに道脇に車を寄せて停車しなさい」

後方から規律の取れた声色の音声がこちらに響き渡る。それを受けてボクの恐怖心は更に高まってゆく。

「やややっぱり、だから言わんこつちゃ無い。警察が後ろに……。ほほほら、ももう距離が縮まってるって、おつ、大人しく投降しよう？　ねっ？　これ御願いだから！」

「源家のメイドたるものが警察程度の存在愚の存在に屈服出来ようものですか？　いいえ、出来るはずがありません。いいようにチヨ口巻かせてみせましょう。さあ、鬼ごつこの始まりです」

「鬼ごつことか決してそんな軽い問題じゃないから！　というか逆にこつちが教育されちゃうよッ」

「でしたらこちらは『強制』しましょう。さあポリ公の駄犬共、掛かってらっしゃい。この源家メイド隊お側御用隊序列3士の浜辺深戸がお相手仕って差し上げましょう。さあ只今より強制という名の煉獄に誘って差し上げるわ。源家の人間に刃を向けることに後悔し、悶え苦しみ嗚咽を漏らしなさい。アハハハ……」

「ヒィ〜え〜ッ」

不気味な笑みとともに、豹変を遂げた不思議ツ子メイドさんはそういうとスピードを上げまくり、全速力で公道を爆走し、それから小道やうねり道、獣道までもを利用しながら波乱万丈なドライブینگを体感する事約20分。ようやく警察も追ってくる事無く、この車は従来のスピードに戻った。（途中釘をばら撒いたり、煙幕をばら撒いたり、油を撒いたり、拳銃の果てには何処から持ってきたのかAKライフルで覆面パトカー6台の前輪をパンクさせるなどの愚行の甲斐あつてもかもしれない……）そしてこのストーリーの冒頭に至る。

高校の門前に至ると車は停車し、不思議ツ子メイドさんは助手席

のドアを開いてくれる。

「私の言った通り大丈夫だったでしょう？ 所詮ポリ公はポリ公。高貴なる源家の足元にも及びません」

——気絶による暫くの沈黙

「う、ん……。凄い、ね。でも、車のナンバーとか控えられているかもしれないし、どうせ捕まっちゃうんでしょ？」

「お気遣いは無用です。既に手はうつてあります。警視總監に捜査取りやめの指示を促しておきました。警視庁と雖も所詮は源家の犬ですからね」

「はい？ そんなら最初からそう指示しておいてくれればこんな怖い思いはしなくて済んだのに！ 頼むよっ」

「そうは言われましても、毎日の日課を欠かすことは出来ません。そもそも、警視庁にはどれだけの援助を行ってきた事が、それを鑑みればこの程度大した事ではありません」

なんか突っ込むところありそうだけど、毎度の事ながらスルーしましょうね。

「へ、へえ」

「はい、こちらがお鞆になります」

この人の精神計り知れないわ、というか度胸がありすぎと言うか、逸脱してるといつか、なんとも表現しにくい……。なんかこの人に

この先着いて行けそうにないかも。というか既に着いてゆけてないよ。

不思議ツ子メイドさんはそう言ってボクに鞆を差し出す。ボクはそれを受け取って車から出る。そして不思議ツ子メイドさんを一瞥。まだメイド服を着替えていない。

「深戸ちゃんは一緒に行かないの？」

「ええ、私如きの使用人風情がこの様な高貴な御学校に通う事など許されようもありませんから」

「じゃあ深戸ちゃんは何処の高校に行ってるの？」

「私は高校に通ってはいません」

「えっ？」

そう言つと深戸ちゃんは若干俯きがちに目を落とした。なんだろう、今までの彼女から感じてきた印象からは少し外れたこの感じ……。悲しそうな瞳が垣間見える。どうしたんだろう、何かあるのだろうか。

「で、でも高校生なんだよね？」

この質問は侵入せざるべきスペースに足を踏み入れるか、入れないかギリギリのものだとは思ったが、ボクは躊躇しつつ問うてみる。

「……ええ、高校生です。采ノ宮高校の通信ですが。恥だと思っています。源家のメイドたるものがそのような所に在籍している事自

体、許されない事だとも分かつてはいるのです、ですが……」

「恥なんかないよつ。通信で何が悪い？ そんな事誰が決めた？ この社会？ それとも貴方の勝手な社会観？ だったら直ぐにそんな観念は捨ててしまつてッ！ もしも貴方の社会観が正しいと考えるのならはこの奏応学園と一緒に通えるようボクが手配するよ！」

この人は社会的な視線を気にしている。しかも源家という社会的にブランド力のある存在に属す人間として更に負い目を感じて、不安定だろう。さっきの悲しい瞳はこの事を物語っていたに違いない。ボクがそれを取り攫うにはどうすればいいのだろうと考えた答えがこの回答にはあると思う。

すると不思議ツ子メイドさんは目線をボクに合わせて真顔で

「ありがとうございます。ですがやはりお気遣いは無用です。ご主人様のお手を煩わせるまでもありません、あと少して卒業ですし……、では私はここで失礼致します。行つてらっしゃいませ」

そう言つて頭を垂れると運転席に乗り込み車は急発進して何処かへ消えてしまった。

ボクは何か失礼な事でも言つたのだろうか？ 少なくともさっきの不思議ツ子メイドさんの態度は好意的なものではなかったと思う。でもしたらボクの何がいけなかったのだろうか……。

ふと昇降口まで続く並木道を見やるとそこには水島さんが立っていた。ボクはそこまで歩いてゆき彼の面前まで歩いてゆく。

水島さんの顔は少し強張っているように見えた。何がそうさせているのだろう、いや、仕事で疲労が溜まっているのかもしれない。ボクは徐に鞆から栄養ドリンクを取り出して水島さんに差し出す。

「お顔からお疲れの様子が窺えます。大丈夫ですか？　もしよろしければ今朝ボクが持ってきた栄養ドリンクでも如何ですか？」

すると水島さんは口元に笑みを浮かべてボクに視線を合わせる。

「お気遣い勿体無いくらいです。畏まって頂戴いたします」

そう言つてボクの手からそれを優しく取つて、キャップを開けて一気にそれを飲み干した。

「美味しいです。ありがとうございます」

「いえいえ、お役に立てたのなら嬉しい限りです。して何故ここに？」

「昨日申し上げた通りにあゆむ様に語当主様との対面を……と思つたのですが、現地でトラブルがあり、どうやら時間が間に合わないらしく」

水島さんはそう言いつつ自分の内ポケットからなにやら封筒らしきものを取り出してボクに渡してくる。

「こうして手紙という形になってしまいました。誠持つて申し訳ございません」

「いえいえ、わざわざ渡しに来てくれて感謝しています」

そういつて手紙の入った封筒を開け、手紙を取り出す。

そしてその手紙に目を向ける。

読み進めてゆくに従ってボクは大きく目を見開いた。

お父さんの第二の試練って、まさか。

こんな事を提示してくる……の。

御閲覧戴きありがとうございます。

まず最初に前半部分の大幅改編の件ですが、まだまだ時間を要します事ここにお詫び申し上げます。

出来るだけ早く行いたいと思っています。何卒ご理解・ご了承の程宜しく賜りたいと思っております。

さて次にこれはまだ企画段階なのですが、今後の創作や改編の考にとアンケートを実施しようかどうか考えています。もし実施する際にはご協力の程宜しくお願いしたいと思っております。

今回の話は少しコメディーを盛り込んだつもりです。多少なりとも楽しんでいただければ幸いです。

深戸は私的にはクセになりそうな子です。こんな子いたら日々退屈しないんだろうなあ、なんて思っています。そうそう、そういえばメイド検定つてあるの皆様ご存知でしたか？ 私がメイドの資料集めをしている時に偶然見かけたモノなのですが……、驚きましたよ。と同時に日本やりますね。何方か受けた方が詳しい方は是非に詳細をご教授下さい。

雄司からの指令にも是非ご注目戴きたい所です。一体何をあゆむに提示したのでしょうか？ お楽しみに！

~ Special Thanks ~

Rikuto先生 ライクス様

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

「御覧戴けましたか」

お父さんからの手紙の内容で、これほどにまで驚きを隠せないほどの衝撃を受けているので水島さんの言葉は耳に入らなかった。

お父さんはボクにまたも1つの試練を課し、加えてそれに付随して3つの命令を命じたのだった。4つの命令は何ら問題なく受け入れられる。しかしながらボクが驚愕を呈しているのはその何れでもない、1つの試練なのだ。

ボクは……。にも拘らず、お父さんはそれを強制的に今年度中と言う。一体何を考えているのか。そんなのまだなのに、『そういう勇氣を持て』と言う真意なのだろうか。だとしたらそれは勇氣とは言わない。それはただの蛮勇である。しかし、情けないが何れの憶測も的を得ない訳で、慧眼して'sを得た正答を出す事が出来ない。

「あゆむ様？ あゆむ様？ どうなされたのですか？ お加減でも悪いのですか」

ハッと我に返ると心配そうな顔を浮かべながら水島さんはボクを見つめていた。

水島さんの髪型は今日もオールバックであつた。やはり以前からは少し違つた面持ちでボクに相對している。そうか、水島さんが以前言つていた『そのうち分かる』とはこの手紙の内容の事だったのか……。

「い、いえ。少し驚いているだけです」

すると水島さんは声色を変えて、真剣な眼差しでボクを見つめる。

「試練の内容、ですか」

「さ、流石ですね。そう、です」

「私はその内容に関しては何も分かりません」

そう申し訳なさそうに言って水島さんは目を落とす。

そうか、水島さんはこの手紙の内容については一つの部位を除いて、他は知らないのか。それだったら水島さんに心配させる訳にはいかない、か。

「そうだったんですか、でしたらすみませんでした。なんでもありません」

「そうはいきません。私にどうか教えて戴きたく存じます。教授戴いてどうなる、という訳でもないのですが。何か少しでもお役に立てればと思っておりますので。それを私のお役目だと思っております」

水島さんは胸に手を当てて、一貫した態度でその様に言い、間を空けた後、最後にこう付け足す。

「私は本日付で源 あゆむ様付きの専属H S (Head Sp) の任に就くのですから」

そう、お父さんの4つ命令の中の一つの項目に『水島 惟則みずしま ただのりを源あゆむ付きのSPに任じる』という風に記載されていたのだ。でもなんでボクにspなんて付くのだろう。ボクはただの高校生で重要な人間じゃないし、何故。お父さんの意図する事が全くと言っていい程分らない。

でもspを付けると言うのは単にお父さんの気紛れでという訳ではなさそうだ。深戸ちゃんも言ってた様にお父さんは何の理由なしに行動する人じゃないし。

——— 自分の頭の中でよく考えよう

普通Sp付けるという事はその対象が危ないという事で付ける訳だ。ここで考えなければならぬのは「危ない」という度合いである。Spは単に用心棒という訳ではない事は分かる。『命』に関わる程の何かから身を守るために付けるもの。つまりはボクが何者かに『命を狙われている』かもしれないと予測するのが自然だろう。そう考えると何とも悪寒が感ぜられる。

「ぼ、ボクは誰かに命を狙われているのですか」

ボクは不安な面持ちで水島さんにそうゆっくりと問いかける。

すると水島さんは若干笑みを含みながら安心させる声色で

「まさか、そんな事はありませんよ。御当主様の保有社はもう既にコンツエルン化し、現在ではコングロマリット化し日本でも有数の大企業となっています。そんな御要人である御当主様のご子息であらせられるあゆむ様はこの位の備えは当然です。不当な輩もいる今日、何より危ない世の中になってきましたので用心の為ですよ。で

すから何もあゆむ様が心配する事はありません。ですから何卒安心なさってください」

そうだったんだ、ボクの思い過ごしか。でもお父さんがそんな大きな存在だったって改めて認識させられた。確かにそんな巨大な企業のトップの息子ともなればそのくらいの用心は必要なのかもしれない。お父さんの真意が今分かったような気がする。

「ええ、単に私の思い過ごしだったのですね。それでは畏まってこれから宜しくお願いしたいと思います」

「はい、全身全霊を持って任務に当たります」

そう規律のとれた言葉を放った後に水島さんはこう問いかける。

「して、あゆむ様の今回の試練は一体何なのですか？」

「それは……」

改めて言うべきか否か考えた後、ボクは口を開く。

御閲覧戴きありがとうございました。

非常に短いストーリーとなつてしまいましたがご容赦下さい。

} Special Thanks }

ライクス様

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

長々とお待たせしてしまい申し訳ございませんでした。

「それは……」

そう口から出掛かり意を決して話そうとすると、辺りの人々がどよめく。

何が起こっているんだろうと思ってその起源の方へ目を向ける。すると周りにはさつきまでとは打って変わって人だかりが出来ていた。まるでオスカー俳優の行進を見届けるかの如く、ある一線をサンドするように。その人数は甘いものに虫が集る様^{たか}に時を追うことにどんどん増えてゆく。

ボクはそこまで徐に近づいていつて何が起きているのか見てみる。人だかりの主は男子ばかりであった。という事は……。

近くまで行ってみるとあまりの人だかりにその一線に何があるのか確認する事ができない。

——どうしよう

そう思っ^てボクはその人だかりが一端切れる昇降口まで歩いてゆく。

途中水島さんがボクの後ろまで追ってきて

「どうかされたのですか？」

そう背後から聞いてきた。

「いや、少し気になりましたね……」

「左様ですか、では私もお供致します」

そしてやつとの思いで昇降口まで歩いてゆくとやつとその正体が分かった。

ロングシートの女の子がこちらに向かって歩いて来ている。そう、どうりで男子が多いわけだ。

遠めで少し分かりにくいが自校うちの制服とは違った制服を着ているようだ。黄土色のブレザーの下に一際目立つ大きな赤のリボン。紫と黒のチェック柄の割と短いスカート。生足を見せない為なのか黒のストッキングを穿いている。

その子との距離が段々と近づいてくる。辺りの男子はひそかな声であらゆる事を言っている。

「フツーに可愛くね？」

「自校うちの学校じゃなくね？」

「あのストッキング……、になりたい」

「足長げえ」

「嫁に来てくれないかな」

打って変わってその対象が目もくれず昇降口に入ってゆこうとす

るとふと足が止まる。何故か彼女は口元に笑みを浮かべている。きつと元からそういう風にしてきているのかもしれない。

そして徐に顔をこちらの方を向ける。

よく見ると髪を一点だけ白のレースで結っている。背はそんなに高いと言っわけでは無いが、顔は小顔、目がパチクリ大きいのに加え、^{まつげ}睫毛までもが長い。口元は唇が何故か艶やかでぶるんとしてそうな膨らみを帯びている。そして何よりも肌が透き通るように白い。

その内目がピタリと合って、鼓動が高鳴った。ある意味雷鳴を打たれたかのような衝撃を受けたのだった。

———この子は……

彼女はボクの方に向かって満面の笑みで手を振ってそれから昇降口に入ってしまった。

ボクは咄嗟に目を逸らしてその場を離れた。

周りの男子は皆ボクに向かって異様な眼差しを浴びせる。

そして校舎裏まで来たところで一息ついた。

「どうかなさったのですか？ あ的女性とはお知り合いなのですか？」

水島さんが心配そうな眼差しでそう尋ねてくる。

そう、ボクはあの子を知っているのだ。しかし何故彼女がここに

……。確か学校は女子高に席を置いていたはずである。成績優秀で奨学金をもらって学校に行ってる。まさか辞退するわけではあるまいに。

「え、ええ。ちよつとした……顔なじみ程度のものなのですが、ね」

「左様ですか……、して先ほどの事をお聞かせ願いたい」

先ほどの事？ あつと、ああボクに与えられた試練の事かつ

「それは……、ぼ、ぼつボクが将来のパートナーを、今年度じゅうに決めるって、そういう内容でした。無茶ですよね？ 今まで女性と関係を持った事の無いボクが女性と将来を約束するなんて」

すると水島さんは目を大きくしてボクの目を見据えた。

「それはそれは、御当主様も思い切った事を……。しかし御当主様も今の奥様と高校時代に婚約しておりましたし、私にとってはそう驚く事でもないのですが。しかし、あゆむ様にとっては一大事なのでしょう、しかしプラスに考えれば今年一年間あるのです。色々な経験をお積みになられて、多くの女性とお付き合いなされば良いのではないでしょうか」

水島さんは口元に笑みを含んでそう助言する。

「そんな、やり手みたいな事ボクが出来るわけ無いじゃないですか……、それに……」

「それに？」

ここで間が空く。暫くの沈黙。

言っているもののなか、でもこれは源家に関わる事だし。

「ぼ、ボク、あの、だから、こ、こ、ここ、婚約者が出来たみたいなんです」

辺りは静けさを呈すかの如く、風に揺れる木の葉の音が深々と響いている。

C o n c l u s i o n

T o B e C o n t i n u e d

御閲覧戴きまして誠にありがとうございました。

皆様のお力添えのお陰もありまして、めでたくも当話にて第一章の方のストーリーが完結致しました。

なんかあっさり終わってしまったと思っております。故に、これから改編を行ってゆきます。ストーリーの軸をあまり変えませんが、おかしな所は修正して話もがらっと変えます、いえ、ストーリーを膨らませるといった方が正しいのでしょうか。とにかく次に投稿する際にはまた変わったプロローグですので宜しくお願い致します。

加えまして皆様からのご意見を賜りたいと思ひまして第一章が完結したこともあり、アンケートのリンク設置も考えておりますので、施行後には何卒宜しくお願い致します。

~Special Thanks~

●ライクス様

それでは話が戻りますが、次のストーリーもご閲覧戴ければ幸いです。

The Opening Scene 〈Past〉 (前書き)

長らくお待たせ致しました。改稿後の新プロローグで、あゆむの過去に触れたものです。やはりシリ阿斯を呈さざるを得ませんでした。本章ではなるべくコミカルにストーリーを進めて参る所存です。何卒御容赦下されば幸いです。

The Opening Scene { Past }

桜も凡そ舞い落ちた春の終わりの頃。もうその頃になると段々とクラスの間と打ち解け始め、そろそろ自分らしさを呈し始めようかと思うだろう。ボクも例外ではない。持ち前の社交性で多種多様な友達を作った。楽しい日々を過ごしていた。しかしそんな事束の間、一年間と少し通った学び舎を去ることになった。

そしてボクはその先『恐れ』と直面する事となる。ある意味やつてきて欲しくないそんな出来事が、ボクに再びやってくるなんてその時は思っても見なかった。

あの出来事から約四年。その期間中再びそんな『恐れ』と直面する事はなかった。だから転校先でもそんな事はないと思った。しかし……。

生まれてから平凡な日々を送って、ボクは『平凡』な性格となった。でも『平凡』ってなんなんだ、と考えた時に『平凡』を定義付け出来ない。では何で『平凡』な性格なんて言えるのか。それは多分、本が物語るドタバタな『非凡』を自分と日々比較しているからだろう。そう、ボクはよく本を読む、それが日課となっている。そして憂う。何を？ それは

フィクション
———
フィクション
本みたいな『非凡』が自分なんかを訪れるわけがない、『空想』の世界

でも日課をこなす度に思ってしまう、こんな状況が自分に訪れれば……。しかし過去との葛藤でいつもそれが揉み消される。

自身の性格を鑑みてみると『社交性』を持ち合わせているが、持ち合わせていない。

—— 矛盾

勿論そんな事は分かっている。言葉遊びをしている訳ではない。正しくは『一方』では社交性を持ち合わせていて、『他方』では持ち合わせていない。言い方がマズかったかもしれないので訂正しようか。

—— 自分の想い人との関係に億劫おっくうになる

それは何故なのか。答えは分かっている。原因は中学時代のある出来事……

それは自分の望む正反対の現実リアルだった。小学生までは何も意識せず、ただ無邪気に外で友達と遊んでいた子供……。男女という、それでいうジェンダーの差異を気にせずに。

しかし、中学生の入学式の時に自分は人生で初めて『恋』なるものをした。『恋』というモノを初めて意識したと言った方が正しいか。それが自身の性格を変動させたと言ってもいいかもしれない。所謂、『一目惚れ』といわれるものだと思う。自分がたまたま新入生代表で答辞を述べている際、その子是最前列の一番真ん中に座っていた。

気が気ではなかった、それが当時の本音。『恋』という感情を自分とは持ち合わせてはいなかった。まるで突然やってくる津波に、どう対策を講じてよいか慌てふためく被災者のよう。

ボクは持ち前の社交性で多くの人と『友達』という関係で結ばれていた。それ以外なかった。実際、式が執り行われた体育館には男女共の『友達』が沢山いた。しかし、彼女を見た瞬間、どうであろう。しっかりと筆を認^{した}めて書いた答辞文をただ読むだけなのに、まるでその子にある意味『惑わされる』かのように、言葉が切れ切れになった記憶がある。

その際小学校時代の恩師が大勢臨席していて、その人たちの目を見開くような、そんな表層を目にするなり考えざるを得なかった。何を？

———
そもそも自分が何故中学校の答辞を賜る事になったのか

他人からは『秀才』『優等生』等と持て囃され、それに先生達も感化させられたのか、先生達はボクをこの場で『代表者』として仕立て上げたのだ。

初めての経験且つ初めての失態だった。

———
初体験

会場が次第にどよめくに従って、ボクは本来の現実に戻された。

———
自分の仕事をしっかり全うせねば……

そうでないと自分のアイデンティティが侵される気がした。

その子を極力見ないようにして、遠目で平然を装いつつ役目を果

たす。そして終わりに一礼し、壇上を降りる際に無意識にその『彼女』を見てしまった。すると彼女はボクの方を向きながら、満面の笑みで拍手を送っていた。その光景を見て、清楚さと儚さを思わせる彼女にまたときめいた。

—— 一体何処に

言葉では言い表せない。

『ときめく』それは、目と目が合った瞬間に稲妻が走る、そんな感覚。

たまたまその子とは同じクラスで、これは一種の『運命』だと思つた。これは絶対にいくべきだと、声を掛けるべきだと。しかし座席は最前列と最後列。席が隣同士という好機チャンス的な状況であれば、身近な機会を得られるかもしれない。しかし、現実はずう。

自分は彼女に声を掛けて知り合いになりたい。しかし境遇的にそんな機会は簡単には巡ってこない。ボクは初めての感覚に心を躍らせて、心の行く先を知ってみたかった。しかし、どうすれば。

—— なんと嘆かわしい、人一人に声を掛けるといふ事が出来ないのか

社交性を持ち合わせている自分が何故かその女の子にアクションをかける事が出来ない。そんな今までにない心と葛藤しながら、為にもならない先生の『訓示』を聞き流す。彼は一生懸命ボク達生徒に、人生訓を諭さとしているのかも知れないけれど、何を言いたいのかさッパリ分からない。要領を得ない、そんな教師だと言目を聞いて即座に判断した。

そんな一日千秋ならぬ一時千秋の時を経て、とうとう休み時間になった。

ここでイジイジしていても何にも始まらない。仕掛けよう、そう思つて席を立つと彼女はいなかった。一体何処へ行つてしまったんだらう？ そう思いながら立ちつくしていると、一際目立つ笑い声が廊下から聞こえる。そう、まだ入学式。だから表立つて肩幅利かせて話す人なんてあまりいない。そんな状態の中、突飛して存在感を露にする人たちにボクは嫌悪感を抱いた。

声の主はどうやら二人。男と女。誰なんだろう、そう思い立つてドアを少し開けた後、廊下を垣間見る。

しかし自身の気持ちとは裏腹な状況が目の前に起こっていた。『一目惚れ』した彼女と見知らぬ男が親しげに話す状況が目先にある。その瞬間ボクは多様なショックを受けて絶望した。

「またなのね、あの阿婆擦れ女も意外とやり手だわ。流石ってトコかしら、泥棒猫が」

そう背後から呆れ返つたような声。自分の傷心を感じている時に、さらに追い討ちを掛けられた気がした。

ボクが振り返るとそこにはセミロングの髪の子がいた。彼女はまだ入学式を終えたばかりだというのに制服を着くずしている。ボクが訝しげに彼女を見つめていると

「なに？ 私の顔に何かついてるとでも言つた」

そう聞いてきた。何かついていると言うよりも、ここの不良なんですか？ そう問いたい。しかし彼女は、その言葉に似つかわしくないほど顔は整っていた。アダルティな顔立ちで決して中学生とは思えない。雰囲気すらも大人のオーラが出てきていると言っても過言ではないかもしれない。見かけとの不一致。世の中は見かけじゃ判断しかねる事があると改めて感じた。その日二回目の感覚だった。

「いや……」

「何を落ち込んでいると言うの？ まさか、あの子に恋をしていたの」

冷静沈着にそんな事を言う彼女を見て彼女の本心を反芻しつつ、ボクは目の前のこの子に親近感を覚えた。

「そうかもしれない。何しろボクにとっては生まれて初めての感情だった、から。けどたった今その終焉がやってきた。君も同じなんでしょう？」

「なっ、何を言っているのかしら。あなたは馬鹿なの？ 何を根拠にそんな事を言っているのかしら」

彼女の冷静沈着な態度が乱れ、表層も強張っているかの如く見えた。

ボクには分かっている。彼女がボクの嫌悪感の向いた先の男に『恋』をしていた事を。彼女は今やボクにいなかった同朋だ。そんな彼女が目の前にいる事がボクの萎靡な心を癒してくれている。

「さっきあの子の事『泥棒猫が』って言ったよね？ という事は自分が好きだった人をあの子に取られた感情から出た言葉、それが根拠だよ」

「……」

彼女は口元をへ字にしながら押し黙ってしまった。

目元から二滴の雫が零れ落ちる。

ボクも彼女もただただ押し黙ったまま下を向く。

ボクの初めての感情が終わりを告げ、それとともに再びそれがやってくる事を恐れた。

その出来事以来何故かもうストーリーの結末が分かっている本を熱心に読んでいる。恐れているはずなのにそれを読んで夢を膨らませる。いや、恐れているのは『恋』をすることだ。もう『恋』が成就していると、分かっているモノへの恐れは一切無い。むしろそれに夢を抱いているのだ。だから本に韋編三絶いへんさんぜつしている。

そう、『恋』に到るまでにボクは恐れを抱いている。

そんなボクがまたも高校時代に恋をする事になる……

The Opening Scene 〈Past〉（後書き）

御閲覧戴き誠にありがとうございました。

大変お待たせした挙句このようなストーリーしか掲載できないとは、自分の無力さを感じています。申し訳ございません。

しかし、皆様の御意見を賜り成長してゆきたいと思しますので、アドヴァイスやまた、賜れるのなら御支援下さればとても励みになります。

〈Special Thanks〉

- ライクス様 ● うにゆう様 ● 未紋様 ● 投稿者様

拙作に御指摘・御支援の御言葉を戴き誠に感謝申し上げます。

お気に入り登録をなさって下さっている皆様方や読者の皆様方の御陰で、この作品は存在できています。ありがとうございます。

次話はいよいよ本章です。あゆむと雪穂が如何に出会っのかが見所になるかと思っています。

何か御質問等ありましたらお気軽に御寄せ戴ければ幸いです。

それではまた次のストーリーをお読み戴ければとても嬉しく存じます。

追記

ありがたくもメッセージを賜りました故、修正すべき点を補正させて戴きました。メッセージを下された方には最上級の御礼をこの場を借りて述べさせて戴きます。ありがとうございました。

T a l e J a c k

The Beginning Scene ｝ Encounter ｝ (前書き)

皆様大変長らくお待たせ致しました。当話が本章の始まりとなります。拙作にアクセス戴きました事、この上ない喜びに存じます。誠にありがとうございます。何かと不十分ではありますが、どうかご容赦の程宜しくお願い致します。

The Beginning Scene 〈Encounter〉

高校二年生の春。遙々地方から上京してきて、親元へ移り住む事となった。

東京都心部の淡紅梅区（ちまひく）、それがボクの新たなスタート地点。町は季節相応に淡紅梅色の桜が満開……と言いたかったのだが、ここにやって来た日は生憎の曇天模様。謂わば、『棟』という言葉が似つかわしかもしれない。空から地面を眺むれど曇天模様、いや、もはや可視化出来ないと言った方が正しいか。

緊張と自信

新たな土地へやってきた所から生まれ出でた緊張。それは淡紅梅区自体の雰囲気を感じ入るもの。

ここでボクはやってゆけるという確固たる自信。それはあの出来事から、何事もなく四年経過出来た事から生まれ出でたもの。

その両感情がボクの心の中で渦巻いていた。

指定された場所は布多美駅を直ぐ出でのロータリー。ボクはそこに向かわなければならなかった。何故か……

—— 父親から一方的に呼び出しが掛かったから

早朝からハンドバック一つを所持し家を出て、新幹線に乗り込む。只今2時間程しか床に就いていない。車内では父親に対する疑問を抱きつつ、意識朦朧。そのうち寝ふかきをこきながら目的駅へ。そして、駅に降り立ち俯く。

一息溜息を付いてしまう自分。どうして自分は……。そこから考えを廻らし、少し自問自答する。

――噬臍

自分なりの推察を立てられず、とてももどかしい思いがする。しかし、こんな思いのまま目的地に行く訳にもいかず、一旦そんな気持ちを抑えて、腕時計を確認。

――約束の時間まで15分

少々の小走りをすれば、多く見積もって10分程でロータリーへ着けるだろう。

――5分前行動

意志には反して、口元に笑みがこぼれる。これは仕様なのだろうか、と思いつつ顔を上げてはじめての一步。

流石、東京都の中枢機能を担っていると言ったところだろうか。自分はここに来るのは初めてではないものの、プラットホームから離れてみると……そう再認識する。

布多美駅。それは乗換駅から発展し、聳え立つ都庁や超高層ビル

と隣接した国内最大のターミナル駅。やはり規模が超脱している、
といっても過言ではない。加えて人口密度。これが朝のラッシュ時
か、と身体で覚えさせられた。と言うのも実はロータリーに着くま
で3人と肩が接触、内一名に突き飛ばされたのだ。

—— 都心。せかせかしている

そう思うとやはり口元に微笑。疑問と抑え込んだはずのもどかし
い思いと、心の高揚感が交錯する。

いくつもの新鮮な光景を目にしながらロータリーに着いた時、腕
時計を再度確認。

—— 約束の時間まで5分前

改札を抜け出でてみると、そこには溜息が出てしまうような情景
が目に見え込んできた。

昔、都会だから緑少なき場所なんだろうなと思っていた。しかし
改めて目の前の情景を見ると、自分はなんと浅はかだったか。数々
の植林、街路樹、ロータリーの中心に備えられた円形花壇と緑多い
ではないか。

そんな情景に感慨深さを感じ、その内八つとした。現実にもどさ
れたのだ。

—— 自分と約束を交わした父親がもう待っているのでは
ないか

そう考えながら辺りを見回すも、存在を確認できない。

父親はまだ来ていない、そう思うと溜息が零れた。

――仕方がない気長に待つか

そう思って、ふと見つけた目の前のベンチに腰をかけようと思いつく。年季の入った木製の椅子。それでいてどこか上品に感じる。

顔を近づけてみると、木目がしっかりと浮き上がるかの様に目に映る。こんなシツクなものがこんな所あるとは……。都会は、凄い。

そんな風を感じ入っていると、既にベンチに腰を掛けていた『相席者』におかしな眼で見られる。

「す、すいませんっ……」

自分がベンチになんか目を近づけていたからだ、そう思いその場から足早に離れる。何とも恥ずかしい思いをしたものだ。そう思いながら自分の汗ばんだ額を拭う。あれでは『田舎者』丸出しじゃないか。気をつけないといけないな。

仕方なく時計がある方へと足を向けようとすると、一際目立つ白塗りのリムジンがロータリー内に停車する。

こんな所に何故にリムジンが？　しかし、ここは都会。どこぞの金持ちがこれから何処かへ行くのだらう、と気にも留めないで時計のある方へ踵を返す。

「おにいさまあゝっ」

どこからともなく、声が聞こえる。これは幻聴だろうか。何故か自分には妹の声のように聞こえる。妹がここに来ている筈がないのに。いや、今は気のせいだ、絶対そう、気にしない事だ。

「おにいさまあゝつてば」

またも、幻聴が聞こえる。しかも先ほどより近距離から。疲労困憊であろうか、そう思うと眩暈がしてきた。妹は今、学校の花見会で旅行中のはずじゃないか。ここにいるわけが……

ふと、背後に誰かの気配を感じる。背後を振り向こうとすると、誰かに阻害される。おかしいな、そう思つて下を向くとおかしなものが。人間の手が自分に絡まっている。もしかして、抱擁されてる？ でも誰に、その問いが頭の中を駆け巡る。

恐る恐る、顔だけゆっくりと後ろを向いてみると、そこには……

「おにいさまあゝ、うりゆう」

妹がいた。気が動転している自分をよそに、妹は自分の背中に頬ずりをしている。

整理しよう、ボクの妹は本来であれば花見会に行つて、今ここにはいないハズ。しかし今自分に抱きついてるのは紛れもなく自分の妹。

「な、なんでここにいるんだ？」

そんな問いに妹はまるで、兄がおかしな事を言つてゐるかのような

顔をする。その内、首を傾げる。

「なに言ってるの？ あたしは、おにいさまが帰省するって聞いたから迎えに来たのっ」

立ち尽くす自分をよそに、満面の笑みでそう言い放つ。

「が、学校の花見会はどうした？ 確か、熊本県で開催しているはずだろ」

正確には熊本城近辺で行うという話を聞いていた。もちろん言わずと知れた桜の名所である。あたしとても楽しみなんだあゝ、そんな声を電話で耳にしていた。あんなに楽しみにしていた花見会に出ないハズがない。

「うう、せっかくあたしが迎えに来たのに、おにいさまは喜びもしてくれない……うええ〜ん」

両手で顔を覆い、しゃがみ込む。その後鳴き声^{うず}を上げたかと思うと、スツと立ちあがり今度はボクの背中に顔を埋める。

「いや、だからなん」

「うえ〜〜ん」

「いや」

「ええ〜〜ん」

「あの、だから」

「ううえ〜〜ん」

ボクが何かを言おうとするとまるで火に油。鳴き声がさらに増してゆく。

打開策はないかと考えていると、その内

「ぐすんっ」

——消沈

ここぞとばかりに声に抑揚を付けて口語する。

「いや、嬉しくないはずないっ。嬉しいよ、理紗子が迎えに来てくれて。ありがとう……」

すると自分に絡みついていた手が解^{ほど}ける。それを認識すると、ボクは改まった形で体を理紗子の方に向ける。

「おにいさまあゝっ」

そう言つて、今度は正面からギュツと抱擁される。

少し理紗子は大きくなったようだ。勿論身体面についてだが……。一年前に来た時よりも一回り身長が伸びている。それになんだか、ほのかに香るフローラル。香水でも付けているんだろうか、いや違う。彼女のシャンプーの匂いだ。前まではこんなに香り高い、それでいて清潔感のある匂いなどしなかったのに……。理紗子はまた大人に近づいたようだ。

「おにいさまの匂い……好き、大好き」

そう甘えた声を出して、ボクの胸に頬ずりをしてくる。そんな妹が何とも愛くるしい、愛おしくて頭に手を置こうとした瞬間、何か

周りから視線を感じる。

辺りを見回すと、大衆がボク達の方に痛い視線を送ってくる。中にはこちらを見ながら、仲間内でなにか噂している。これはいけない、そう思っただけ妹の頭を二回優しく叩く。

「理紗子、離れて」

すると理紗子は顔だけを起こして、上目づかいをしながら口を開く。

「おにいさまを感じてちゃ、いけない？」

我が妹のパチクリ大きい瞳。なんと輝かしい事か、瞳が潤んでいるように見える。しかもその悲しそうな表層がとても、演技になど見えようもないのだ。一旦思考停止する。我が妹ながらなんという破壊力。そんな一言を言われただけで、妹として、兄という立場から……心底愛でてやりたい。それほどに妹のこの行為は、ボクの心を揺さぶった。

声色高い彼女は我が妹、源 理紗子。背景色を純白にしたらとても映える程に、かわいい自慢の妹。一応だが、先ほどの様に思っても、決してロリコンなどではない。さらに、かわいいとは主観的ではなく、彼女は客観的に認められているのだ。

——ミス・ヴェラフェリーチェ

彼女の二つ名である。3学年を通して一人しか選ばれない名誉ある称号、我が妹はつい一ヶ月程前にそれを受賞した。以来学校では

その名で呼ばれ、同時に称述されているらしい。故に、主観ではないという理由付けである。

チャームポイントは三つ。

一つは髪。艶のあるロングショートで、耳横の髪をツイストさせ黒リボンで結んでいる。遠目でもサラサラ感が伝わってきそうだ。

次に西洋人形のような顔立ち。輪郭や首までもが細く、それでいて痩せ過ぎていない。少し桃色に染まっっていて、膨らみを帯びている頬はまるで赤子のよう。

最後に、彼女のスマイル。神々しいシャイン。見るもの全てに希望を与えてくれる。全てというのだから、漏れなく自分も例外ではない。気付いた時からボクにとって妹は、希望そのもの。兄としてとても誇らしく思うと同時に、一番大切にしている。

頭を再起動する。やはり理沙子は愛おしい、自分も妹が求めるのならは今のままにしてやりたい。しかしここは公共の場。大衆の目というものがある、間違っても妹を変な目で見せられない。そう思い立つと、ボクは両手を理沙子の両頬に添える。そして顔を近づけ、口を開く。

「感じてちゃいけない訳じゃない、でもボクはお父さんにも会いに来たんだ。だからこうしている訳にもいけないんだ」

すると理沙子も分かってくれたのか、腕を解いて俯く。

「わかってる、わかってるけど、おにいさまと会うの一年ぶりだっ

たんだもん。それは手紙とか電話だって定期的にもらってるけど、おにいさまっていう存在を近くに感じられないのは……さびしかったから……ね。早く会いたくて、帰ってくるって聞いて待ちきれなくて。それで、ね。いきなり抱きついて、ごめん、なさい……」

しょぼくれながら、理沙子はさつきとは対照的にしゅんとしてしまふ。落ち込ませるつもりはなかったのに、これではなんか理沙子に申し訳ない。何か理沙子が喜びそうな事はないか、と考えた末一つ浮かんだ。

「花見は結局行ったのか？」

理沙子は顔を上げて、表情一変。花見という言葉聞いて何か期待したのだろうか。だとしたら、ボクの今考えていることはとても良案だという事で……。

「ううん、おにいさまが来てくれるっていうからお休みもらったの」
「だったら今度、一緒に行かないか」

そう言つと、理沙子は目を輝かせながら手を前で合わせる。何とも美しい、何処その著名な絵に描いたような光景だった。

「いいの？ あたしなんかと一緒に、ほんとにいいの？」

「なんかなんて言うもんじゃない。理沙子と一緒に良いんだよ」

「嬉しい、おにいさまとお花見に行けるなんて。あたし、とっても幸せ者だわ」

満面の笑みを浮かべながらそう言う理沙子。

「うん、楽しみにしていてくれ。きつと連れていくから……、それ

はそうと理紗子。お父さんは今日どうしたんだ？ 電話ではお父さんが迎えに来る手筈だった訳だが」
「ちよっと待ってっ」

そう言ってボクの片頬に手を添えて顔を近づける理紗子。一瞬ドキツとする。白く透き通ったような、それでいてか細く儂げな、割と小さな手の温もりが頬を通じて感じられる。

「お兄さま、顔色悪い。ちよっと見せて」

わが妹ながらこうして顔を近づけられると、顔が少し赤面する。かわいい顔の中には少しの儂げさが感じられる。兄として守ってあげたくなる、そう再認識した。

「ダメ、ダメなんだから、あたしが居ないからって自己管理を疎かにしちゃ」

「ご、ごめん」

理紗子は腰に手を当てながら、声を強めにボクの事を気遣う。

それを聞いた瞬間、いきなり頭の中で何かがフラッシュバックした。なんだろう、なにかがひっかかる……。

「どうかしたの？ なんか考え事してたみたいけど」

少し現実から離れていたようだ。再び理紗子に視線を移す。

「い、いや。なんでもない、それより」

「おとうさんでしょ？ 来ないよ。あたしがおとうさんの元までおにいさまを連れていくの」

何かおかしい、そう思った。先ほどの気持ちが再起する。心の中のひっかかりが再び浮上したような感覚だった。何故理紗子を介してお父さんの元へ行かねばならぬのか。お父さんがこちらに来れば良いだけの話ではないのか。推測できる範囲でしてみよう。

今日は平日、大人は出勤日であるわけだ。お父さんも例外ではないが、ボクと会う以上休みを貰っている筈だ。まさか会社を途中で抜け出す様な事はしまい。何故ならお父さんの性格から鑑みて、途中で物事を中断するような事はないに等しいからだ。その事からもお父さんは確実に今日休みを貰っている。すると、疑問が生じてしまう。

—— お父さんは何故ここに直接来ず、理紗子を通して呼ぶのか

「なんでここにお父さんは来ないんだ？」

ボクは怪訝気味にそう理紗子に直接聞いてみた。

「なんでって、良くは分からないけど、なんでも今手が離せないから直接来て欲しいって言ってたかなあ？」

おかしい、自分の推測とかなりズレが生じたのか。今手が離せないから、とは現在仕事をしているという事だ。一体どうしたことになる……。

「お父さんは今日休みじゃないのか？」
「仕事だよ」

今、この時を持って理紗子に自分の推測のズレが露呈し、やがて自分の中で脆くも崩壊した。

「仕事を抜け出して会おうって事か？」

流石にそれは無いだろうと勘ぐりつつも、確認を取ってしまう自分。少し自嘲気味に理紗子に問いかけた。

「ちがうよっ。仕事で手が離せないから、勤務地に来て欲しいんだって」

理紗子の人差し指を立てながら、そう優しく語りかける。

勤務地？　そう言えばお父さんは何処に務めているんだろうか……。商社マンであるとは聞いた事があって、それ以上穿鑿もしなかった。というか、穿鑿する余裕がなかった。ボクは地方で一人暮らしをしていて、お父さん達はこちらで暮らしている。話す機会もありない。確かに理紗子とは頻繁に連絡を取っている訳だが……。全く対照的だな。

「勤務地って一体何処だ？」

ボクがそう問いかけると、理紗子は自分の着ているフリル付きのカーディガンを直した。そしてクルリと反転して、指を前に2回つつくような仕草を取る。

「おにいさまっ、いこっ」

話を流されたボクは、何故理紗子が話を逸らすのか考える。……自分が答える訳にはいかない、またはこれから行けば分かるという

事だろうか。そう悟ったボクは、深く追求しなかった。

理紗子は一步前に踏み出す。そしてある場所の元に向かってゆく。

「お、おい。嘘だろっ？ 理紗子っ！」

ボクは声を大きくして理紗子を呼び止める。何故そんな所に向かうのか？ だってあれはさっきの……

「おにいさま？ 早くあたしの所に」

理紗子はある所で立ち止まりまたも反転、ボクの方を向いてそう口語する。その内首を傾け、手で煽るような仕草をとる。

ボクはその場で躊躇逡巡し、立ち尽くす。ボクの目に映っているのは、先ほど気にも留めなかったリムジンをバックにした理紗子。その内、恐る恐るその新世界の窓口の方に足を進める。足取りは至ってゆっくり。今まで自分とは縁遠かった世界に、少し畏怖して近寄りがたかった。しかし理紗子が何故そこにいるのかが気になって、足が独りでに動き出したのだ。

気が付いたときには理紗子の面前に立っていた。

「理紗子、このリムジン……何だ？」

ボクがそう問いかけると同時に、後部座席のドアが開く。

気が動転していたのか、その音を聞くなり一步後ろに慄く。理紗子の方を向くと、そんなボクを見て微笑み投げる。再び音のしたドアの方を向くとそこには

「源 あゆむ様でいらつしゃいますね？」

そう口語する美声の持ち主。ボクは自分の目を疑った。思わず二度見してしまう始末。

「あ、あなたは」

目の前には雑誌でしか見たことが無かった存在があった。

頭にフリルの付いたカチューシャ。

体には清楚な黒を基調とした赤のリボン付きの服を纏い、白のレースの腰掛。

これは紛れもなく……世間でメイドと呼ばれている人ではないか。年齢はボクと大して変わらないように見えた。勿論、中学二年生である理紗子よりは年上そうである。

彼女は頭を垂れて、その後ゆっくりと顔を上げてボクと目を合わせた。清楚さを残しつつも何処となく儚さと思わせるかのような顔立ち。割と小顔でスウっとした輪郭、鼻と口元に反比例するように目がパツチリ大きいその彼女はボクに優しく微笑んだ。

「本日付で貴方様、源 あゆむ様の専属のメイド、お側御用役として寝食を共にさせて戴く浜辺 深戸と申します。以後お見知り置きを宜しくお願い致しますね」

その言葉を聞いた瞬間に、頭が真っ白になった。理紗子の方に視線をずらす。そして、目で訴えかける。

—— 諄諄としてボクにちゃんと説いて欲しい

目の前にいるメイドらしき人と、このリムジンと理紗子はどう関わっているのか。もしかして先ほど触れなかった、お父さんの勤務地と何か関係しているのかもしれない。

ボクは理紗子の肩に手を掛けた。

御閲覧戴きまして誠にありがとうございました。

いやゝ、しかし前作とは大幅に異なっておりますね。流れるにも今後新設定を盛り込む事と考えておりますので、お楽しみにして戴ければ嬉しゅうございます。

あゆむが理紗子に対して思う事は、過剰であつたかなと思っております。しかし、あくまで異性としてのお付き合いに発展する事はありません。何分、前話のトラウマを前提としております故。これは蛇足ですが、理紗子みたいな妹を創造したのは完全な自己欲求からではないものの……こんな妹欲しいなと思つてしまいました。これから、理紗子の魅力を皆様にお伝えできればと思っております。その為、今までにない技法を取り、もしかするとヒロイン視点で物語をお送りする事もあるかもしれません。

深戸も出て参りましたね。私が公言していなかった一人は、この人物でした。彼女は改稿前では途中から性格が変遷していました。ですから、本来の性格から逸れぬように務めて参ります。

あらずじも取り換えさせて戴きました。少しネタバレになりそうな部分は「ある」という言葉を多用させて戴きました。その点で恐らく皆様の御心がさぞ、もどかしく感ぜられた事と存じます。故に、ここにお詫び申し上げさせて戴きます。

それではまた次のストーリーもお読み戴ければ幸いです。

The Second Scene 〈Idle Talk〉

街の喧噪が一瞬止んだ気がした。そして時が止まってしまったかのような感覚を覚える。視界には理紗子と、正体不明のメイドしか映らない。

喪失感

一言で表すのならばこんな言葉。しかし、そんな感覚の周りに猜疑心が纏わりついている。それはまるで淡紅梅区全体から源あゆむという一個人を対象にされたようではない。

しかしそれでも、秒針は刻一刻と時を刻むのであった。

St・Veraferrith女学院、理紗子の通っている中学校である。世界各地のヴェラフィン教徒が、自分の娘をここに入学させようと躍起になっている。その為競争率が高い。その理由は至って簡潔。

St・Veraferrithが学園の創始者であるから

しかし、我が妹はそんな理由で入学した訳ではない。

St・Veraferrith女学院、慈愛と友愛や献身さを重んじているお嬢様学校。その方針から成績優秀者には奨学金が支給

され、3年間トータルで512万4671円から189万2983円になんと学費が減額。加えて、多国からヴェラフィン教徒がやってくるので、異文化コミュニケーションや語学力も付く。故に理紗子は御学校を選んだのだそうだ。

蛇足かもしれないが、金を積みめ入れるような学校ではない。実質偏差値71と化け物並みであるため、単に金持ちが入れる学校でもないのだ。

しかも理紗子はSt・Verafferith女学院で「TFSV」の枠に属している。意識するならば、「特別待遇秀才枠」である。この上限は学院生徒数1600名の中のたったの3人。要は超人のなかの超人なのである。故に「TFSV」に属している理紗子は学院から様々な特権を与えられるとともに、特別待遇を受けているらしい。

その内容は知らないものの、この現状はもしかしたらそこから来ているのかもしれない、と予想する。すると兄が知らぬ魁傑な妹像が創造できてしまう。

――再び寂寞の念が込み上げてくる……

ボクは妹の肩に手を置いたまま固まっていた。行住坐臥の毎日が揺らぐような気がしたのだ。

そうこうしている内に、ボクの手温度差の感じられる手が重ねられる。

――予想が確定事項に変わった瞬間だった

「おにいさま？　どうかしたの」

メイドさんに会話が聞こえないように、ボクは妹の背中に手を添えながら少し前進するように誘導する。そして少し距離を取ったところで、妹の耳元で囁いた。

「理紗子……とりあえず父さんに会いに行く前に、これだけは教えてくれ。あのメイドさんやあのリムジンは何だ？」

理紗子の特別待遇の中にこれらが含まれているのなら、合理化出来なくもない。しかし、その内のメイドが先ほど「本日付で貴方様、源　あゆむ様の専属のメイド、お側御用役として寝食を共にさせて戴く……」と言った。つまりはこのことから三つの事が言える。

一つは「専属」という言葉から類推する。専属というからにはボク以外の人にも専属のメイドさんが存在する訳だ。当然、理紗子にも。その為、兄妹に付くのだから家族である父さんに付く事も当然と言える。すると、ここで疑問が浮かぶ。

——　いくら特別待遇と雖も、生徒の家族にまで同待遇の処置を学院側が取るのか

二つ目は「お側御用役」という言葉である。この事から類推できるのは、お側御用「役」であるからして他にもいくつか役がある訳である。それを受けられる特別待遇なるものは、かなりの大規模で且つ過度な待遇とも言える。しかもプライベートの現在にまでそれが進出している。すると、またここで疑問が浮かぶ。

——　学校側がそんなプライベートまでも、世話を焼くの

であろうか

三つ目は「寝食を共にさせて戴く」という部分である。これに関しては異常と言わざるを得ない。まあ、食事に関してまでは分からなくもない。と言っても、これでも非現実的ではあるのだが……。
しかし、「寝る」に関しては理論的にも、個人的にも別である。

理論的には一つ目の時の疑問が掲げられる。

個人的には……、ボクが高校生であるという事だ。あのメイドさんは少なくともボクと同じ年ぐらいであろう。そんな女性とボクが一緒に寝るなど、あつてはならない事だ。年頃の男女を一緒にしてはならない。殊、in the bedでは。何が起きるのか分かっていであろう、神よ。もしもボクが発情したらどうしてくれる？（勿論間違つてもしないが……、強姦に発展しかねない立派な罪だからな）責任を取ってくれるのか？ ボクは隣で小動物のように寝ているメイドの腰に手を掛け、ベッドに仰向けにさせ、嫌がるメイドを尻目にボクは獣の如く飛びかかるだろう。あらゆるものをむしゃばり……まぐわ……。

——何を創造しているんだ。理性の欠如は身を滅ぼす、しっかりと胸に刻んだはずではないか

兎角、これら全てを統合すると

——これらの待遇は学院側の処置ではない

とすると関連してそんな事側は……

——父、源 雄司

そこまで浮かんだ所で思考を停止する。

「おにいさま、大体予想は出来ているんでしょう？　なんかこの事を私が伝えるべきじゃないと思うの」

理紗子は顔の前で手を合わせてちょこんと頭を下げる。

確かにそうかもしれない。お父さんが理紗子を仲介としている訳だから、本元はお父さんな訳で、理紗子に疑問をぶつけるのはお門違いなのかもしれない。しかしそれでも、自らの頭にこびり付いている異物を少しでも拭い去って欲しかった。いやいや、これはワガママなのかもしれない。

自分の顎に手をやって考え込んでいると、理紗子が目の前の視界からいつの間にか消え去っていた。

「深戸さ〜ん。早くおにいさま乗せちゃって〜」

先ほどのメイドさんにそう促すと、理紗子は後部座席に一人ですつさと乗り込んでいった。

「はい、かしこまりました〜」

理紗子が乗り込んだ後部座席に向かつてお辞儀を済ませると、ボクの方を凝視する。すると、なんの前触れもなく走ってきて、ボクの手を引っ張る。

「ゆ、ゆきますよっ、んう〜」

メイドさんは背を向けて一步前に踏み出るも、ボクを引つ張る事はかなわない。やはり、その力は外見通りに女の子のそれであった。すると今度は両手でボクの腕を掴んで引つ張り込む。しかし、どうやっても動かない。いや「動く」というアクションをしようとしていない、と言った方が正しいか。何故ならばまだボクは顎に手をやって考え込んでいたからである。

「ほ、ほら……、お気を確かにいつ、んう」

やがてメイドさんは手を離して、ボクに正面から相對する。

「さん、にい、いち、ハイっ」

ゆつくりとカウントを取っていきながら、メイドさんはまるで通せんぼをするようなポーズを取り、後ろに反動をつけた後

「お、お気を確かにいつ!!」

そう声を上げて、一気にボクの両頬をビンタする。メイドさんのフィニッシングポーズは「胸を交差して隠す」それであった。しかし事はそんな可愛らしいような事柄ではなく……

「い、いったあゝ、……」

ボクはあまりの打撃＋不意打ちに思わず腰を抜き、その場へタリと尻もちをついた。そしてやっと正氣に戻り、その動作主の方を見上げる。いつのまにか頬の痛いという感覚は、痺れという感覚に変わっていた。そしてそれが認識できたと同時に、頬に手を当てる。頬に炭酸が弾けているかのような感覚を味わいつつ、口を開く。

「何ビンタしてるの？」

するとメイドさんは人差し指を下唇付近に当てながら、上方を仰いだ後

「何って、あゆむ様……銅像なんですもの」

そうサリともらすメイドさん。ボクはどうやら人として認めてもらってないらしい。

「銅像って、何？」

すると、またも先ほどと同じようなアクションを取った後

「何って、あゆむ様……駄々っ子なんですもの」

——コミュニケーション能力の欠如！？

まずボクの問いに答えてくれない。続いては謂れの無いカテゴリーに括られる。人ではない銅像みたいなボクは……、いや。「駄々っ子」なんだから人として返り咲いたと考えて良いのか。しかしそのカテゴリーはボクの年よりも遥か下の年齢に付けられるもの。むしろ退化してないか？ つまりは、もしかして幼児として見られている？ もしそうであるならば即座に是正せねば。そう、今、この瞬間に。

「いいですか？ ボクはしっかりとした定見がある、又それを実行に移せる人間であると自負しています。であるからして、ボクは赤ちゃん言葉を使う様な幼児ではない訳です」

「ええ……」

メイドさんが少し首を傾げる様にボクを見ながら相槌をうつ。な
んとも腑抜けているように聞こえてならない。いわば内容を飲み込
めていないと言ったところか。そうなると話は変わってくる。一言
で且つ単純明快な言葉に集約しなければ。自分が中人であるという
事を認識させるためには……

「理紗子の兄ですが、何か？」

いけない、つい威圧的に口語してしまった。もしかしたら逆上す
るかもしれない。女性を怒らせた時の対処は……

「ええ、ですか」

「ぶ、プレゼント買ってあげますっ！」

メイドさんが言いかけた言葉を遮って口走ってしまったこの言葉。
メイドさんはこれを聞くと同時に目を丸くした。キョトンとしたよ
うな様子に見える。

何かおかしいな事を言ったのであろうか？ 以前雑誌で見て一度は
使ってみようと思ったから使ってみたのだが……。何故なら、女性
はまず「プレゼント」という言葉に滅法弱い。これはまず間違いな
い。

いやしかし、よくよく考えてみれば問題点はある。まずこれでは
ボクは金蔓カモに成り下がってしまう。もしも、目の前のメイドさんが
実は強欲且つ守銭奴であつたらどうする？ ボクはこれを契機に彼
女に強請られるまま、諸品を買わされる事になる。想像してみよう

……

「あゆむさまあゝ、このバッグ買ってくださいゝ、ねえ、凄く凄く欲しいんですうつ」

「ええゝ、高くない？　せめてこっちの牛革のバッグにしときなよお」

「ええゝ、そんなババ臭いの嫌ですよ。こっちの鱧皮のブラックがいいのおつ。ねえ、いいでしょう？　このあいだプレゼント買ってくれるって言ったじゃないですかあ」

そこで赚さずメイドの人差し指がボクの胸に打ちつけられる。

「だ、駄目だつて、こんなところで。分かった、分かったつてば。買うつけど……、『プレゼント買うつ』って言つて3度買つてあげたじゃない」

「だつてえゝ、回数制限なんて言わなかったじゃないですかあゝ、ねえ、あ・ゆ・む・さ・ま？」

お次はボクの胸を指先で蛇を描くように這わせる。

「とと、ああ、うう、だ、ぼ、ぼく、はあ」

そして、とどめは艶めかしい唇をボクの耳元に近づけて熱い、熱い吐息を吹きかける。

「フウゝ」

「はうあゝ、いい、いやよくな、ううわ、は、はい、分かりました、買うつ、買うつから耳にフウフウしないで」

ハイレベル過ぎる……。金蔓^{カモ}だ。いや、ここまで来ると道具^{ヒモノ}に違いない。

とそれは置いておくでしょう。そんな酷い人ではない。何故そのように言えるのか。

——メイドさんの瞳

それはよく見れば、何か温厚な人柄である事を感じさせる。しかしそう考えると、また別に罪悪感に苛まれてしまう。

——ボク、最低だ

人の気持ちをモノで買おうとしている。言動には注意すべきと教えられた筈なのに……、それに

と、そうこう考えていると

「お、お気を確かにいっ!!」

またもやメイドさんのかます両手ビンタがボクの両頬にクリーンヒット。勿論、そんな事を予想してないボクはその場に倒れこんだ。

今度は先ほどの比ではなく、痛いと感じる事すらないのだ。これは流石に一大事である。感覚神経がもしややられたのでは、そう考えて差支えないだろう

ボクが口を開こうとメイドさんの方を見ると、距離のあった顔が一気に至近距離に。

しかも、いつの間にか倒れこんでいるボクの胸倉を掴んでいたのだ。

——何故ボクの胸倉を掴んでいるんだ

刹那……

「お、おクスリは、いけませうんっ!!」

ボクは宙に浮かんだ。

飛距離、凡そ4メートル。

ボクは先ほどのリムジンのある所の地面に叩きつけられた。

直後、鈍い音と同時に背面や後頭部に激痛が走る。

「ああっ、うう……」

分かった。先ほどの疑問がやっと認識出来たのだ。

ボクの胸倉を掴んだメイドさんは、マウントポジションを取った後、まるで槍でも投げるかのようにボクを投げ飛ばしたのだ。

序盤のアレは手抜きだったって訳か……。

その内、頭を抱え丸くなりながら身悶えしているボクの元にメイドさんがやってくる。ボクが痛がっているのを心配したのか、背中を擦り、一言。

「元気ですか？」

いや、前言撤回。心配していない。ボクは思わず警戒する。

「うう、痛い」

恐る恐るボクがメイドさんの方を見やると

「やっと、正気に戻ってくださいました。『プレゼント買ってあげます』って言われた時には、寝ぼけているのかなって思いましたけど、あの……お伺いしても宜しいでしょうか」

目を背ける様にそう口語したメイドさん。何を聞いてくるんだろ
う。

ボクは首を縦に振る。

「も、もしかして、ですけど……ら、乱用者なのですか」

らんようしゃ？ 意味が理解できない。……

ああっ！ 先ほどの『おクスリ』ってまさか

「しちやいませんよっ！」

「でもでも、先ほど意識が飛んでいらっしやったようですし
「考え事してたんだよっ！」

すると胸を撫で下ろす様に安堵の息を漏らすメイドさん。ボクの上体を起こし、その後立たせる。

「さ、先ほどの御無礼をお許してください」

今度は先ほどまでの不思議ちゃんから、真剣に頭を垂れていた。

—— 万華鏡

「いい、だから、頭上げてくれる？」

ボクがそう促すと、メイドさんは顔を徐に上げる。その所作と並行して光沢のあるサラサラしている綺麗なショートカットの髪を揺らした。こんなに優美な黒髪をあまり見たことがなかった為、思わず目を見張ってしまふ。ボクが見とれて凝視していると

「あ、あの……、そんなに見られますと、わたし……」

急にしおらしくなり、頬が朱に染まったように思えるメイドさん。整っている小顔を俯け、艶やかな髪を耳に掛けるような仕草を取る。そして横目でボクの反応を覗っている。

そんな姿に心打たれたのか、ボクは思わず目を逸らしてしまう。

「ちょ、ちよつと、おにいさまあつ？」

そんな時に先ほどリムジンに乗った筈の理紗子が、不機嫌そうに両腰に手を当てながらボクの顔を覗き込んできた。

「な、なんだよ」

「このお惚気をのこっ！ メイドさんを食べちゃいけないのっ、こ

れは規則。いゝい？ お手付き禁止ッ！！」

「き、規則って何？」

何か責められている気がするのは気のせいなのであろうか。確かにメイドさんの仕草に、少し心動かされたものの……はて。何故か理紗子の視線が痛い。決して後ろめたい事は何もしていない筈なのに。第一、食べる事は愚か、お手付きすらしていないのだが……。何故か理紗子の視線が痛いのは何故だろう。

「はい、質問も認めてあげませうんつ。大体、主人がメイドに手を出すなんて本の中でしか聞いた事ないわよ……。ああ！ もしかしてそういう本、おにいさま……も、も、もってたりするのッ？」

赤面しながら、少々興奮気味に理紗子は問うた。

「はい？ そういう本って何？」

そうボクが問いかけると、理紗子はもう熟れたリンゴの如く顔を赤らめて、息を飲んだ。そして若干の間を空けた後、大きく深呼吸してから口を開く。

「え、え、えっちい、ほん、でしょお？」

「は？」

この子は何を考えているんだ。え、えっちい、ほん、だと？ 仮にボクがその官能的な本を持っていたとして、それをここで告白なんてするものか。白昼堂々どんな話題振っているんだ、理紗子は。

理紗子は顔を落として、両手をだらんと垂らしつつ、握りこぶし

を作った。

「だ、だから、え、え、えっちい、え、え、えろちつくな、ほん、でしょお？ し、しかも、まま、まにあつくな……じじよ、趣向？ む、むねは、大きいほおが、いいの、かな？」

おいおい、娘っ子がどれだけ根性座ってるんだよ。後ろのメイドさんが顔を伏せながら恥ずかしがっているじゃないか。こ、こっちだって恥ずかしいよ。こんな、公共の場で、むねの大きさについて議論しろと、そう仰るわけですか、妹よ。どう答えればいいんだよ。「お、大きいのに決まってるじゃないか」ってそう真剣に答えればいいのか？ それはいくらなんでも白痴だろう。なにか、いきなり人生の壁にぶつかってしまったような気がする。

「……」

「うう、うし、と、まないた、どっちがいい、のッ？」

ど、どう考えても極端すぎるだろッ！ 大体「まな板」とか「牛」とか、相手を揶揄しかねるぞ。

「……」

「どっちでもいけるクチなんだ」

理紗子は感心したように、その言葉をもらす。

「どっちでもいけるなんて、一言も言っていないだろうッ。第二ソレを知って、理紗子はどうするんだ？」

すると両腕を折りたたんで上から下に振り落とした。

「もし、おおきいのがすきだったら、あたしががんばってお、おおおきくなるっ」

これは健気と言うべきなのか。そもそも、自分の意思でサイズアップを図れるのか聊か疑問である。まさか自分のソレに「おおきなあれ」っておまじないをする訳でもないだろうか。

「頑張れ」

そう言つと理紗子は、先ほどとは打って変わって目くじらを立て始めた。

「何、その投げやりな言い方。あたしがいないすばでいになっても、おにいさまは気にしないってことなのっ？」

「いや、そういう訳じゃないが……」

「あの……御二方、そろそろお時間です」

そこに運良くメイドさんが割って入ってきた。

理紗子は大きく溜息をつくとボクの手を引き、踵を返してリムジンの方に誘導してゆく。そしてボク達が数歩歩くのを見届けたあと、その後をメイドさんが付いてくる。

そしてリムジンが停車している位置に付いた時点で、ボクは立ち止まった。ボクを誘導出来ないと分かった理紗子は、手を離して再び向き直った。

「な、なあ？ ホントにこのリムジンで行くのか」

理紗子の目を見ながら訝しげにそう問うてみる。

「なに、おにいさま？ いやなの？ だったら……、深戸さん？」

そうメイドさんの方に顔を向けてそう促すと

「はい、かしこまりました」

そう言つと徐に胸ポケットから携帯電話を取り出して、そして誰かに電話を掛ける。

そして数分後……

「お、おい」

ボクは驚きのあまり、何を言つてよいのか分からなかった。周りの人もどよめいている。

そう、ボクの驚きの原点は……

「これは何なんだ！」

ボクは理紗子に向かってそう強く言つた。そう言つのも無理はない。だって、普通はありえないのだ。

——ロータリー内が全てリムジンで埋め尽くされている事など……

「リムジン20台を御用意しました。どれでも好きなお車をお選び下さい」

そう平然と言うメイドさん。

これでは「どれでもよりどりみどり、なんと100円ばつきりっ！」「ていう感じの手軽さではないか。しかもリムジンに乗ること自体に違和感を覚えた為に、理紗子に問うただけなのに何を勘違いしたんだこの二人は……。

「選べるわけがないじゃないかつ。第一どこからこんなの呼び寄せたっ？」

「まあ、いいじゃないですか」

メイドさんは手を仰ぐようにそう笑いながら言う。

ここで「いやいや、良くないから」なんて言って問い詰めると、さっきの状況のように堂々巡りをするだろう。ここは流すしかないのか。いやしかし、一応言っておく、いやいや、その労力を費やすことすら……

顎に手を掛けて考えているボクを見かねたのか、理紗子が指を鳴らしメイドさんに何かを促す。

数秒後、ある一台のリムジンのトランクから何かを取り出してボクの目の前に置く。

「おにいさま？」

ボクの顔をまたまた覗き込んでくる理紗子。けれど先程とは表層が違う。

——含み笑い

何かを企んでいる、そう直感した。

「なんだ？」

「これ見て」

理紗子は指を地面に向けて突つついた。

ボクはそう促されて、理紗子の指示に従う。ボクの目に映ったのは……

——錆びれて且つペダルがボロボロの三輪車

「だから幼児ではないと、何回言えば済むんだっ」

「まだ二回しか伺っておりませんが……」

メイドさんは何か不思議なものを見る感じで、ボクを眺める。

この人たち、絶対ボクをバカにしている。間違いない。

「さあおにいさまあ？ これでとつげきいゝ！」

理紗子は公道の方を指さしてボクに向かってそう口語する。

「リムジン^{バーサス}vs三輪車で戦えというのかっ？」

「もう、駄々っ子なんだから」。じゃあ、深戸さん？」

駄々っ子とかそういうものではない。モーターがついているモノと、動力源が人間では競争できる次元の話ではないに決まっている。にも拘わらず、ボクにそれをさせるといふ事は拷問以外の何物でも

ない。

加えて、もしもボクの寛大な心でやってやろうとなつて、仮に三輪車に乗ったとしよう。

まずペダルに足を付けられない。しかもボロボロだから、いつかペダル自体がなくなるだろう。さらに、ボクの体重にこの三輪車が耐えられるはずがない。もし耐えられたとしてもそれで激走出来ようもないだろう。

そして何よりも、三輪車に乗った高2近くの人間を周りはどう思うだろうか。画的におかしい事極まりない。

ボクがそう突っ込みを考えている内に、メイドさんがある一台のリムジンのドアを開けて、ボクから間合いをいくらか取る。そして

「お、お勞^{いたわ}しいしやあゝっ！」

そう言つてボクの脇腹を回し蹴つてリムジンの中にシュート。刹那、何が起きたのか分からずボクは車内で気を失った。

リムジン20台は音を立ててロータリーを走り去つて行つた。

The Second Scene 〈Idle Talk〉（後書き）

御閲覧戴き誠にありがとうございました。

文章量が多くしたせいか、コミカル部分の描写が足りていないと思います。皆様の中で「こうしたほうがいい」という指摘点がありましたら、是非に御寄せ戴ければ嬉しく存じます。

最近体調を崩し気味で、思うように執筆が捗りません。冬だけあって、病気にかかり易いのでしょうか。皆様もお体に十二分に御気を付けて、御風邪を召しませんように。それと、何方か風邪に効くモノを何か御存知でしたら御教授戴きたく存じます。

当作品のアンケートの方を設置致しましたので、お手すきの際にでも御協力戴ければ幸いです。

〈Special Thanks〉

●ライクス様 ●うにゆう様

●当作品をお気に入り作品に組み入れて下さった37名の方、御一人御一人にも感謝申し上げます。

それではまた次のストーリーもお読み戴ければ幸いです。

The Third Scene (Self Determination)

長々とお待たせ致しました。

今回は少し長く仕上げました。皆様にアクセス戴けました事を、心より御礼申し上げます。

今までの生活に拘泥していた訳でも、執着していたのでもない。
しかし……

——愛着

これが湧いてしまふが故に、前の生活に回帰したいとも思つてしまふ。言つならば

——我儘

これが渦巻いていると言つても過言ではないだろう。しかし、言いかえればこの言葉は

——自決

とも取れなくもない。過去にあの人に抗い、争い、その果てに？
ぎ取った我儘と言つ名の自決。それがこれから揺らぐのは必至。も
しかしたら過去そのものが打ち消されてしまふかもしれない。

ボク、いや。源 あゆむはそれを受け止める事が出来るのだろうか。
か。それをよしとした場合、過去の源 あゆむという一個人を捻じ
曲げて消失させてしまふのではないか。否、そんな事はあの人の前
には風の前の塵に同じ。だから受け止めなくてはいけないのだ。し
かしそれは強制的にではいけない。あくまでも自発的にそうするの
だ。心の中のある感情が出来ている今だからこそ、その決意が出来
るのであると思う。

「ごめんなさいおにいさま、案内するのはここまで」

大きく重厚そうな漆喰のドアの前で妹の理沙子はそう口語する。

その扉の上の方には黄金色に輝くネームプレート。書かれているのは「CEO」の文字。少し俯きがちに口をへの字にしている彼女は何か憂いを帯びている顔をしている。先ほどの明るい彼女とは対照的だ。何が彼女をそうさせるのであろう。心当たりはある。恐らくはボク達が幼少期の時のあの出来事だ。しかしボクもどちらかといえば加害者側のサイドである。それをここまで改善出来たのは……。

理沙子はその時「私、大丈夫だから」と言った。あの言葉から早2年。少しでも良くなっていればと祈っていたが、実質そうではないみたいだ。なんとか修復出来ないものか。

「分かった。ここまで連れて来てくれてありがとう。態々、熊本行きを取りやめてまでこうして来てくれて兄さんは嬉しい……」

「私、おにいさまの為だったらなんだって出来る。今まで本当に感謝してるんだから」

理沙子は何かを思い出すように左頬に手を当て、その内、顔を弛緩させる。

こうして見て見ると先程まで考えていた事を少し訂正した方が良いと思えてきた。あの人はあの人なりに努力しているみたいだ。

「感謝、か。それならボクだってしている。理沙子……ボクの妹でいてくれて、心からありがとう」

理沙子にはボクに数え切れない程の事をしてくれた。ボクの事を色々気遣ってくれた。故に出てきた言葉だった。しかし、それと同時に心に翳りが差してくる。

——『理沙子、許してくれ』

そう心の中で囁き続けている。過去の、理沙子に——

「おにいさま……」

理沙子は何かを言おうとして顔を上げるも、余韻を残しつつ、後に言葉が出てこない。場はやがて閑散。

その沈黙という間に、理沙子の本来続ける筈だった言葉が理沙子の瞳を通じて伝わってくる。

——『おにいさまも、私の兄でいてくれて心からありがとう』

自意識過剰などではない。過去とは背反している現在だからこそ、理沙子の気持ちを通じる、理解できる。それはもしかしたら、罪滅ぼしの延長線上で得た代物なのかもしれない。

そう、以心伝心テレパシーという代物は罪滅ぼしという所作から生まれ出たもの。それは揺ぎ無い事実。しかし、今は愛情という感情がそれを維持している。まるでバトンを受け継ぐように——

ボクは頷くだけで返事をする、理沙子も少し首を縦に振って踵を返してもと着た道に戻ってゆく。

ボクは重厚な扉のドアノブに手を掛けた。金属特有の冷たさが手を伝う。その温度と自分の温度を融和させるが如く、ドアノブを強く握り締める。心なしに握り締めた手が赤らんでいるように見える。それが朱色に変遷した時点でドアノブから手を離して、扉をノックする。数秒後、中から甲高いベル音が一鳴りする。

それが合図と認識して、再度ドアノブに手を掛けて

「失礼します」

そう言っただけで扉を開ける。

ボクを乗せたリムジンがある一つの建物の前に停車した。大理石で出来た立石には筆記体で、でかかところ刻まれていた。

「M & H Sky Tree Usukikoba
i Regency Hyatt Hotel」

名前だけの事はあって、天にまで伸びている巨大な樹木のように聳え立つ摩天楼。

リムジンから降り立てば、理沙子は無言を言わずボクの手を取って摩天楼の中へ。中は華々しい程に飾り立てられた生花や、高級そうなソファ、一面赤い絨毯が敷き詰められ、上方から注ぎ込むシヤンデリアの光。奢侈且つ豪華な内装であった。理沙子は無言でエレベータの方面にただただ歩を進める。そんな中、疑問に思うことが唯一つ。

——こんな場所に何故に呼び出すのか

そして気になる事が唯一つ。それはエレベータに乗り込んだ時の事。エレベータに乗り込むとエレベータガールの様な人が、理沙子を見るなりこう言ったのだ。

——『ご機嫌麗しゅうございます、お嬢様。本日の御用向きはCEOとの面会で宜しいでしょうか』

理沙子は笑みを浮かべて頷いた。

お嬢様？ 誰がだ。周りを見渡すも、当然理沙子しかない。でもそう考えると、理沙子はお嬢様になってしまふ。

それにCEOとの面会？ 一体それは何だ。そもそもボク達はお父さんに会うためにここにやってきたハズ。誰とも知らない、何処ぞのCEOなんか会うために着たんじゃない。しかし、そんな事は理沙子も十分に理解している筈だ。という事はそれが導き出す答えは一つ。

しかし、それは信じられない事であった。まさか、お父さんが……。

エレベータガールは丁寧な態度で理沙子に了承の意を述べると、ボタンを押し、左右から扉が閉まってゆく。外界の景色が徐々に狭くなってゆく、そしてやがて消滅。

その光景は今までの生活との決別の様な感情を抱かせた。

扉を開けた先には20畳はあるのだろうか、それほど大きな部屋がそこにはあった。右側には都会の景色が一望出来、開放感のあるガラス窓。そして左側には床から3メートルぐらいある天井までの高さのある本棚が立ち並んでいる。向かって中央には、相対する横長のソファ。あとは、さり気無さを醸し出しながらも、海辺を描いた大きな絵画が中央奥に飾ってあった。

それを背後に大きなデスクに備えられたチェアに腰を落ち着かせているお父さん。ボクは一度下を向く。先程の事で凡その予想は出来ていた。しかし、分かっているにもかかわらず受けるものである。なんとか嘆息して、心を落ち着ける。もう一度お父さんを見やるとデスクに肘を突いて手を組んで額を乗せている。何か考え事でもしているのだろうか。

そう感じると同時に、ここまで冷静にこの状況を見れている自分に驚いていた。先程エレベータ内で予想していた出来事が現実到现在にある。流石にそれを予想していた時はまさかとは思ったが、視野に入れることで適応出来ていたらしい。いやしかし、適応できているのはお父さんが唯CEOという職業上の立場にあるという事だけだ。何故彼がこの事をボクに黙っていたのか。どういう経緯でこういう状況になったのか。そもそも何故ここに呼び出したのか。

「お父さん、あゆむです」

お父さんは顔を上げると目を大きく見開いて、勢い良く立ち上がった。その所為で椅子が中央奥の壁に音を立ててぶつかる。そんな事は気にも留めず、そのままボクの方に歩いて来て、やがて大きく手を広げて抱擁。

「あゆむ。あゆむ、あゆむよ。2年ぶりか、え？ あゆむ。大きくなったな、父さん、嬉しいぞ」

抱擁しながら、オーバーにもボクの頭を撫で回し、ぐちゃぐちゃにする。ボクの頭は嵐が過ぎ去ったように毛が乱立していた。

「う、うわあ、お、オーバーですって」

その声に心のスイッチがオフになったのか、お父さんはボクから体を離し、ボクを下から上まで笑みを浮かべながら嘗め回す様に見える。その様子がどうも薄気味悪くなって、居心地が悪くなった。

「大きくなった、ココも」

お父さんはある事かボクの股間を驚？みにして数回揉みしだく。

「な、何やってんですか」

「突っ張ることが男の、たった一つの勲章ってな」

「ソレ、意味履き違えてますから」

そう吐き捨てた風に口語した後呆れた様に嘆息。お父さんの手を制して離させる。するとお父さんは意味不明にも残念な顔をして

「なんだ、なんだ。ほんの余興じゃないか」

ボクはギロリとお父さんの事を睨むと、今までおどけていたお父さんも一歩引いて、米神を人差し指で搔き、斜め上を向きながら

「じよ、冗談。じよ、じょーく、そう、ジョークじゃないか。今流

行のアメリカンジョークっ」

「流行ではありません。現実をしつかりと見据えてください。お父さんの勝手な妄想で、アメリカと言う国家をクリエイティブしないでください。アメリカに失礼です。第一、アメリカで同姓同士を対象に股間を揉む風習でもあると、お父さんはそう仰りたいのですか？ 現実的に考えてみればそれゲイじゃないですか、しかも行き過ぎたゲイ。勿論セクハラで捕まりますがね。まあ、確かに犯罪率が高い国家ですが、もしかしくなくてもそのシェアの中に『股間を揉む』人はいないでしょうし、第一ビジュアル的にどうですか？ ボク、そんな国家に決して行きたくないです。昼、揉んで揉まれて、夜、揉んで、揉まれて、朝、揉んで、揉まれて、行く先は突っ張ることが男の勲章ですか。アメリカ人はさぞ心外でしょうよ」

「わ、若気の至りだっ」

「いきなりの転換ですね。分かりましたよ。なら、完膚なきまでに行かせてもらいます。問題一。若気の至りであれば、お父さんの言う男の勲章を揉んでもいいのか。問題二。お父さんはそもそも今年で47歳、それは若気の域なのか。そもそも、まずアメリカ人にお詫びして下さいよ」

「はあ……。くだらない話だとは思わないか、あゆむよ。そんな下ネタを親子で話したくなんかないぞ」

「お、お父さんが言っただけでしょうよ！ え、というか、下ネタの中にアメリカ人は含まれているんですか、いないのですか……」

少しの間目と目が合い、その内お父さんは大きな声で豪快に笑った。

「ハハハ、久しぶりで父さんは嬉しいんだよ」

そう、確かに2年ぶりであるからして、お父さんと顔を合わせるのは久しぶりである。お父さんの顔立ちは2年前と変わらず。息子

の立場として、これはおかしい発言かもしれないが、お父さんは47歳にしては若いと感じている。キリっとした顔立ちで、なにより目元が男らしい。ダンディという言葉が相応しかった。背も高く、昔は運動神経も良かったので女子からのラブコールが絶えなかったそう。そんなお父さんが黒のワイシャツに紫のネクタイをしてサスペンダーをしている。唯一大きく違ったのは頭である。ジェルでオールバックにしてワイルドに仕上がっていた。

「桃尻よ」

お父さんは感じ入っているボクにそう呼びかけた。しかし、その呼びかけにボクは応じずそっぽを向く。するとお父さんはボクに歩み寄ってきて、密着。そしてまたも、あろう事かボクの尻に手を当て、撫で回す。

「桃尻、W O、桃尻よ、どうして君は桃尻なんだ」

そこで勝手にオリジナリティ付けなしてください。原作に迷惑ですから。第一、その問いにボクはどう答えればいいんです？ 「はい、幼い時からおしりの形が崩れないように、締め付けが気になるのでブリーフはあまり履かないようにしていました！」とでも答えれば満足ですか。息子のそんな告白聞いて喜ぶのか聊か疑問ではありますがね。

「お父さん、いい加減にしてくださいませんか？」

「桃尻、W O、桃尻よ、どうして君は桃尻なんだ」

「……」

お父さんは何故か気分を良くしたのか更にボクの尻を撫で回し、更にはスナップを利かせてボクのソレを叩く。マゾ、マゾなんです

か、あなたは。

「す、スナップを利かせないでください、スナップを。てか、もうやめてくださいよ」

「ハハハ」

またも豪快に笑う。マゾですね、マゾなんですネ、あなたは。今はつきり理解しました。

ボクは再度ギロリと睨みを利かせると、流石に嫌がっているのが分かったのか体を離す。

「これスキンシップじゃなくて、虐待でしょうよっ！」

「なんだ、なんだ。ほんの余興じゃないか」

前、後ろを弄る事が余興ですか。とんだ破廉恥ですね。それも救いようのない破廉恥。将来、新聞の見出しにこの人の名前が載らない事を切に祈る。

「堂々巡りになるんで、以下省略。はい、終了。ボクは聞きたいことがあるんです」

ボクがそう切り出すと、お父さんは真剣な眼差しでボクを見つめてきた。やっとここから本題か、お父さんもちゃんと弁えのある人間なんだな。キリっとした顔でボクを見据え、やがて口を開く。ボクもその空気に一度心を緊張させる。

「あゆむ……、好きだっ！」

「はい？」

「お前の全てが好きだっ！」

「だから何を言っ…」

「上から下まで好きだっ！」

「ええ、だから」

「受け止めてやる、さあ、父さんの胸に飛び込んで来…いつ！」

「わはあゝい、パパあゝ」的な展開を期待しているのですか？ え？ ご所望ですかお父さん。ええ、やってやりませんとも、意地でもやってやるもんですか。というか、ボクが緊張させたあの時間を、真剣になったあの時間を今すぐに返してください。

「もういいです。ボク、帰りますから。失礼します」

そう言っ…て踵を返すと、お父さんは慌てて取り乱した形で

「あゆむ、まて待て…、ああっ」

後ろで何か鈍音がしたので振り返ってみると

「お父さん……」

靴が片方脱げた形で、豪快にすっ転んだであろうお父さんが、床に頬をつけながら悶えている。何とも憐れだ。

そう思っていると、何の予兆もなくお父さんは顔を上げて、スッと立ち上がる。そしてさっきの痛みは何処へやら、痛いという素振りさえ見せずに、真剣な眼差しでボクを見てくる。

「とまあ、短い余興はこれくらいにしておこう。あゆむ、ここからは真面目な話だ」

そう切り出して、近くのソファに片手を広げるようにして誘導させる。

ああ、はいはい。お父さんにとって今までの短い余興だったんですね。ボクにとってはとても長く苦痛なセクシユアル・ハラメントでしたよ。大体、前後のセクハラは短い余興ですか……、しかも息子の、男のこのボクに。

——お父さん、どうぞ、ゲイバーへ

ボクは無言で頷き、ソファに腰を落ち着ける。そして相對するようにお父さんもゆっくりと座り込む。先程までとは違う、緊迫した雰囲気徐徐に飲み込まれてゆく。

お互い目を見合わせながら暫し無言。そんな中、お父さんの眼差しはこう語り掛けている様に思えた。

——『父さんがこれから言う事を受け入れられるのか』

お父さんは大きく一息吸って、膝の上に両肘を乗せて、手を組む。

「あゆむ、単刀直入に言う。父さんの会社を継げ」

「はっ、はい？ 話を端折り過ぎです。経緯から教えるのが筋というものなのでは？」

ボクは想定外な事をお父さんからいきなり告げられて戸惑いながらも、なんとか話の概要を理解しようと、自分の心を隠して敢えて冷静にそう問いかける。

「それもそうだな。何から話せば良いか、そうだな。まず、源家は

江戸時代から代々続いてきた貿易会社を営んでいる。当時は本当に小規模な貿易しか行っていなかった。しかし1990年代のバブル時に急成長してな、一度も規模を縮小することなく、拡大し続け、現在ではそれがワールドワイドになっている。更に詳しくすれば全国に207ヶ所我が社の営業所がある。更に我が社の系列は他産業にも進出し、コングロマリット化している。現にこのホテルだって我が社の系列のサービス産業屈指の会社、リージェンシーハイアットを傘下に従えて建てたものだ。ほら、名前にもあつただろう？M&Hって。Mは源のM。Hはリージェンシーハイアットのプレジデントの樋口氏のHを取ったものだ。先程傘下とも言ったが、一応共同開発となつた為両氏のイニシャルを名前に入れた。まだ交渉がうまくいってなくてな、源のシェアがハーフから上がらないんだ。まあ、あそこもシンガポールのホテル業界から撤退したから、今までの強硬な姿勢を崩してくるから、心配はしていないのだが……」

お父さんはボクに全てを理解させるつもりがないのか、流れるように口早に説明した。

その為か、一語一句漏らすことなく聞くことは出来なかった。しかし、お父さんの言った言葉を注意深く聞く事で要点を纏める事が出来ていた。もしもここで再度お父さんに同じ事を聞くことは、何か自分の弱みを見せてしまう様で嫌だったのだ。何故それを厭わしいと思うのか。それはやはりと言つべきか、ボクの幼少期のあの出来事が原因なんだと思う。

それでも概要を例え凡そ把握しようが、心の中では焦燥感で一杯であつた。自分の想定していた事と今回の出来事はかけ離れていたのだ。

まさか、会社を継げなんて言われるとは夢にも思わなかった。ボ

クは自分の予想の範囲外に起きる事がなんとも気持ち悪く感じてしまふし、同時に自己嫌悪に陥ってしまふ。実際今焦燥感に加え、それらも交じり合っている訳で、なんとも歪な形の気持ちの中心に存在している。早くそれを取り払いたい、そう思うと更に焦燥感が増してしまつて逆効果。

でもそれを表に出すことは決してしたくはない。あくまで冷静沈着でありたいのだ。言い換えれば、「弱み」を誰にも見せたくない、その一心であつた。例えそれが親族であつても、いや、親族だからこそと言つた方が正しいか。

「ええ」

そうボクは冷静に相槌を打つ。するとお父さんは、首を傾げてボクの方に身を乗り出す。

「あゆむ相槌を打つのはいいが、大丈夫か」

お父さんから発せられたその言葉は、ボクの中の何かを抉つて行つた気がした。

——『内心驚いているんじゃないのか？』

疑われている。いや感づかれているのかもしれない。心に針を刺されたような衝撃を受ける。一種の「キャラ化」を施していた昔にスポットが当てられ、ボクを同一化、重ね合わされているような気がする。嫌だ、そんな風にボクを見てくれるな。今はもうパーソナリティに溶け込んで、浸透しているのだ。今更表面上に浮き上がった「キャラ化」のレッテルをボクに貼るんじゃない。二度とあんな事は、だからボクは……。心の中で囁く。——「弱みは見せない」

と

「お父さん、気にしてもらうのは有り難いですが、話の趣旨が逸れています。戻りましょう。つまりお父さんの言いたい事はこのことだと思います。源家の代々続いてきた会社を貴方の息子であるボクに継いで欲しいと、そういう認識で良いのでしょうか？」

今決意が更に固いものとなった。その為にボクは頭をフル回転させる。？まなくてはいけない、掌握しなければならない

—— 主導権

考えなければならぬ。予期しなければならぬ—— お父さんが今考えている事を

改善してやらねば、良い方へ導いてやらねば—— 理沙子と……

だからこそ、こんな事で、いや、どんな事でも源 あゆむが動揺する事なんて許される訳がないのだ。

「やけに冷静だな。父さんがこれを聞いたときにはもつと……。ああ、そうだな、その通り」

「そして先程、『源家は江戸時代から代々続いてきた貿易会社を営んでいる。』とお父さんは言っていました。加えて『会社を継げ』と。この二つだけにスポットを当てて考えてみると、経営者の自分の跡を息子に継がせるといふ風習が代々続いているのではないかと考えますが、如何でしょう？」

「ま、まあ言葉の通り、だな」

「ええ。でもそうになると疑問が生じてはきませんか？」

「疑問？」

「はい。これもお父さんが先程言っていました。『小規模な貿易からワールドワイドになった』と。『成長し続けた』と。それは前提として経営者としての資質がなければ成し得ない賜物ですよ。逆に考えれば、今までの源家の経営者の資質があつたという事。しかし、幾代にも渡って、例え遺伝と言えども限界があります。お父さんは源の会社の経営者として何代目ですか」

「正式に言えば、Minamoto Ltdの第29代CEOだ」

「29人も経営者全てに資質が備わっている。奇跡としか考えられません。いえ、まあこれは一方的な見方をすればですが」

「……、一方的な見方というのは？」

お父さんは身を引いて、ソファに凭れ掛かった。そしてその内、足や腕を組み始める。ボクはそれを見るなり少し安堵していた。一種の障壁信号だ。そう認識出来るとなると、今までの心の中の歪な形の気持ちを取り払われた気がして、何故か心地よかった。

ボクは間髪を入れた後、息を吸ってゆっくりと肺に溜まった二酸化炭素を吐き出す。それとなく二酸化炭素と一緒に何か出て行ったようだ。そんな感じがした。

「それは、そのままの素質が光っているという前提の下での見方ですよ」

お父さんは目を大きく見開き、一旦俯く。そうかと思うと、低音の唸り声が聞こえる。

ボクはその様子を見つめながら、お父さんが顔を上げて目が合うのを待っていた。

お父さんはボクのその態度に気付いたのか、目を合わせようとはせず顔を横に向けて、背後の外界の風景を見やる。しかし、暫く経つとその行為に飽きたのか、観念して顔を上げてボクの目を見据える。そして、吐息して口を開く。

「聞こうか」

お父さんの声は何か観念したような声だった。

「これはあくまで仮説なのですが……。外的にノウハウを熟知、活かせる為の教授を受けさせる。はたまた、無理難題と思える事をやらせて乗り越えさせるとか、ですかね。つまり、代々受け継いできたノウハウを伝授してゆくか、能力を強制的に上げさせるかのいずれかではないか、という事です」

ボクは一旦ここで話を区切って、足を組む。そして右の掌で髪を逆撫するように梳る。

お父さんはボクの声を聞くと、勢いよく立ち上がり背中を向けてデスクの方に向かってゆく。

「お父さん正直な、…あゆむがここまで頭の働く人間だとは思っていなかった。2年ぶりに、こちらにお父さんからあゆむを呼び出す理由が分からないまま来ると思っていたんだ。やっぱり変わったんだな。お父さんが知らない間に。……あの一件があったからか」

これを持ってお父さんが何故ボクにこの事を黙っていたのかなんとなく理解できた。

ボクも立ち上がってお父さんのすぐ後ろに足を進める。

「…、どうでしょう。でも変化の無い毎日が、あの日を境に終わったという事は言えると思います。理沙子には、申し訳ない事をしましたから、ね」

ボクの視界には、ボクよりも背が高く存在感のあるお父さんの背中が映っている。その視線をお父さんの後頭部に向け、凝視。

「分かっている、分かっているんだ」

そのお父さんの声には先程までとは違う、何か思いを込めた一言に聞こえた。

「今からでも遅くは無いんですよ。きっと心の底では理沙子は、お父さんに」

「ああ、責任は感じている。理沙子がお父さんに近づきたいという現状を作り上げたのは、紛れもなくこの源 雄司なのだから。打破したい。そう思ってみるが、恥ずかしながらお父さんは、理沙子に声をあまり掛けられない。口と声が伴わないんだ。ほんと、情けない父親だよ」

罪の意識を感じている、そこまではお父さんと一緒だった。しかしそこから我々は分岐したのだ。一方は、それを償おうとある決意を固め実行。他方は、その罪の重圧のあまり、償えず足掻く事さえも出来ない。まるで地から天を見上げていた一人が、足を踏み外し、闇に落ち行くように。

恐らくお父さんは理沙子に対して、先程ボクに取った豪放磊落な態度はないのではないだろうか。そう、2年前と変わらないまま…。いや、不変と言うのは間違いだ。変わった事がある。それは、

父親と言う立場としての自覚を持つと努力している事だ。しかし、それではまだ足りない。努力とは結果の過程に過ぎない。故に、ボクはお父さんの努力を価値付ける為、協力してあげたいと思う。

「お父さん、ボクは理沙子の兄としてこう祈願しています。愛し、そして愛されて欲しいと。だからこそボクはその為に協力したいと思っています」

その声に反応したのか、お父さんは後ろを振り向いて、ボクの目を見つめる。その目は、まるで何かに感慨深さを感じたようなであった。

「あゆむ……」

「その為にボクはどうすれば良いですか？」

一歩踏み出そうとしている人間には、その背中を少しだけ押してあげるだけでいい。それだけでその人は一歩踏み出す勇気を手に入られるはずだ。

「会社を継いで欲しい」

何かの信念が籠もっているかの様な、そんな声をしていた。表層も眉根を詰めたような、真剣な顔をしている。

『会社を継げ』と先程いきなり言われて、多少それに適応出来てきているとはいえ、即座にここで『ああはいそうですか、分かりました』等と言え様も無い、それは本心である訳で。しかしながら、ボクの心の中には理沙子とお父さんの関係をどうにかしたいという本心も存在している。

「それは先程聞きました。しかし、理沙子とお父さんの緩衝役になるのとその件はどう関係しているんでしょうか？」

「…関係ならしている。知っての通り、お父さんにはあゆむと理沙子の二人の子供がいるだろう。源家の会社は代々第一子息である長男が受け継いでいる、第一継承権としてな。しかし考えても見てくれ、あゆむがこの会社を継がなければ誰が継ぐ事になる？　そう、第二継承権の存在だよ。つまりは、理沙子が……」

「正気なのですか？」

「ああ、これは絶対条件なんだ」

お父さんはため息を付きながら、視線を下げる。

「絶対条件とは？」

「……この会社を立ち上げる際の事だ。資本金がどうしても足りなくてな、支援者が^{パトロン}必要になったんだ。そこで創始者はある方にお願いにあがったんだ。その方は当時絶大な権力者でな、今や世界中に根を下ろしている人物で……、その方と誓約を交わしたんだ。『会社の維持は永年源が勤めなければならぬ』と」

「もしも、それが守られなければ……？」

それは一線を越えた質問であると、面を上げたお父さんから感じられた。

「社は破綻させられ、何百万という労働者が路頭に迷い、第二次世界恐慌に陥ることは必至だ。そんな重圧を娘に押し付けて、お父さんは娘に普通に接することは出来なくなる」

——まるで罪に加圧が為され、押し潰されてしまうかのよう

そんな、それほどに源の会社は世界に影響力があるという事なのか。つまりは、ボクの一存で全てが決まる訳である。その全ての中には勿論、理沙子の事も。もしも、ボクがここで会社を継がない等と言ったとしたら、理沙子が強制的に会社を継がされる。それはボクの尻拭いであり、当然我侭である。そんな事は理沙子にはさせたくはない。それに、お父さんと理沙子との溝が深まりでもしたら、今の自分に対して本末転倒を投げつけるようなものである。

しかし、考えてもみよう。もしも、ボクが社を継いだとしたら何百万という労働者の生活を支えなければならない。そんな多大なる重責に耐えられるのか。いや、双方を天秤に掛けた時点で答えは見えている。

——ボクには選択権など、存在しようもないのだ

即座に答えられる訳が無いと言う先程までの自分が、何やら愚かしく感じてしまっていた。

「……ええ、了承しました。社を、源 雄司からのバトンを引き継ぎましょう」

それを受けて、次いでお父さんは口を開く。

——『こちらの高校に転校してきなさい』と

外は相も変わらずの曇天模様。しかしその一面の灰色に一筋の光かいしょくが差し込む。それを受けていくつも分裂を起こし、どんどん千切れ

雲になってゆく。しかし、その雲雲が消えることは無かった。

御閲覧戴き誠にありがとうございました。

今回は、理沙子とあゆむ、雄司の過去の事を起点に話を進めていきます。追々、その真相が分かってくるかと思いますが、次話ではきつと学校に……

しかし、今回の「セクハラ」は如何なものなのでしょうか。執筆中に、「あらあら、こんなにしてしまってもいいのかな」なんて思っていました。親子のスキンシップ……には絶対含まれません、よね。というか、もしもそんな事された日には、雄叫び上げて回し蹴りとかしていいんですよね？「セクハラです」って、民事裁判、やり過ぎか。いやでも、やり返すのは……ね。ビジュアル的に、というかそんな感覚味わいたくないです……。

~ Special Thanks ~

●ライクス様 ●月奏様

また次のストーリーもお読み戴ければ幸いです。

一度、昨日更新する等と「あらすじ」欄に書きまして、実質今日になってしまい誠に申し訳ございませんでした。平にお詫び申し上げます。

怠惰にもこれほどまでに次話投稿が出来ず、大変申し訳ございませんでした。深く謝辞申し上げます。それに伴って、本作を「お気に入り登録」して戴いている読者の方々、何卒御寛恕下さいます様お願い申し上げます。

日が暮れようという時、雲翳うんえいの状態から暗雲が立ち込めるも、段々と雲が紫苑に一掃され、後に朧月夜となった。

そんな情景を見ると、雲懸かりの月に憧憬の念を覚える。

———
秀麗

暗二藍の天上、何かを護るベールのような雲、加えてあの儚げで、それでいて明媚な月が三位一体となっている。

輝かしきものは未完成であるからこそ、美しいと思える。逆に言えば、未完成となる因子と完成された要素が融合することによって、調和がとれる。しかし、その未完成の因子が、完成された要素を穢してはならない。穢してしまうか、それを映えさせるかという線引きは本当に微妙な加減である。ボク達はその程度を弁えた上で、あの子を映えさせてあげなければならない———

平凡な一日は、父と会ったあの日を境に終わりを迎えた。いや、自ら幕を引いたと言った方が正しいかもしれない。それもこれも全ては、妹である理紗子の為である。彼女の幸せを守る為であつたらボクは、自分さえも犠牲する事を厭わない。だからこそ今回の父からの要求を呑んだ訳だが、それにしても厄介な事になったものである。

瞳を閉じて、昨日の父とのやり取りを思い起こす。

「つまり私がその奏応学園という所に編入すると」

父は真剣な眼差しで、僕の目をずっと見据えている。眉間に刻み込まれた皺は、父が今まで深く悩んできた事を物語っているかのようだった。

「ああ。早速だが明日、この書類を出しに学園に向かって欲しい」

そう言つて、自分の手に持っていた茶色い封筒をボクの目の前に差し出した。

目の前のその封筒は異様な存在感を放っていた。厚さから言つても、オーラから言つても、もしも軽い気持ちで手にとってしまったらすぐに落としてしまいそうだ。

「い、いまさらながら、本気で仰っているのですか？ お父さんからの先程の話によれば、その……」

本当に言葉に出しづらい。どうしてもそれが声をついてでないのだ。お父さんの顔を一瞬見やり、顔を背ける。

「以前は女子高だった、か？」

いざ明解な言葉で事実を突きつけられると狼狽うろたえそうになる。まさかこんな展開になるなんて思わなかった。予想だになかった、それが本音。

「なつ。そ、そうです。今なつては共学にコンバートしたのは分かりませんが、それでも…」

口に出したいのに、続きの言葉を紡げない。にも拘らず父は的確に局部をついてくる。そんな擬かしい思もどいをしながら、心の中で叫んでみる。

『本当に女子率8割の高校に通うのか！』

別に前の世界に執着しているわけではないが、異質な世界に飛び込むとなると…。

頭を抱える事態である。でもまずこれは不可避の事態なのだから、きちんと覚悟をしておかねばならない。さもなくば、自分の弱みを露呈してしまうやもしれぬ。しかし覚悟といっても、それに際して何をしようのか、具体的には何も思い浮かばない。女子に慣れればよいのか？ なるほど、概念的には局所を突いているが、方法論として具現化できるのかが問題だ。そこで考えつく案として、自己の困い込みである。平たく言ってしまうと、強制的に女子を自分の身の回りに置くこと。つまりは未来の先取りを、現在いま行ってしまうと言う事だ。しかしながらここでの問題は、若干でも恥ずかしがった場合、見知らぬ相手に弱みを露呈してしまう可能性が挙げられる。そんな事をしようものなら、前もって女子に慣れるという行為自体否定しかねなく、意味を為さない。

ここまで思い浮かんだところで思考を停止する。

「息子にこのような事を強要するような真似、大変すまなく思っている。だが頼む、現状を打破する為にはあゆむの助けが必要な

んだ。この通りだ」

そう口語すると、お父さんはボクの目の前で座りながら頭を下げた。

別にそういう意味で言つた訳ではないのに、という思いよりも、自分の「父親」という体面プライドを落としてまでも頭を下げさせる自分が気に遣る瀬無い。

- - - 使命感を尊敬の念が助長

「頭を上げてください。父が息子に頭を下げる等、威厳を失う事に繋がるかもしれませんよ」

そう冗談めかして呟くと、

「元々父さんに威厳等持ち合わせていないのだよ。第一そんなくだらないモノを捨てる事で何とかなるのであれば、幾らでも捨てるさ。まあ、一步踏み出せない人間が偉そうに何を言ってるかと思うだろうが、な」

虚空を見ながら、遠めでそんな事を言う父。父の今考えている事は理紗子との一件であろう。同じ加害者のボクは、父のそのさぞ辛い心中だと察する事が出来る。だからこそ、ボクが背中を押す媒介になりたい、いやこれは与えられた使命なのかもしれぬ。

一步踏み出せない人間、そう父は口語するがそれは否である。父は一步踏み出そうと努力をしている、それが手伝ってボクの決意に加圧が為されているのだ。

――「そんな事はないよ、お父さんは頑張ってきたよ」
等は口が裂けても言うまい……

「お父さん、もう惑いません。ボクはその奏応学園に編入します」

心とは裏腹にそんな言葉が不意に出てきた。いやしかし、これは今言わなければならない言葉なのだ。心中惑いつつも、結果的にどうにかしないといけない。だからこそ表面的にはしっかりとしておかねば。

それを受けてお父さんはその後口を開いた……

それから数日が経ったある日、ボクは奏応学園の1F事務室を後にした。

書類を提出して直ぐに学園を後に出来るかと思っていたが、実際違った。やれいきなりの編入試験だの、終われば学園指定の誓約書だの、アンケートだの、何だかんだで3時間くらい掛かってしまった。

一息つく暇もなく過ごした3時間は、非常に凝縮した濃密なものであった。すべてを終えた時点で、肩が凝ったような感覚がやってくる。思わず、両肩を上下させて肩を解す。しかし、思いの外肩が解れず残るのは徒労感のみ。溜息を零す。今日の予定は此れでお仕舞い。これから、父の命令で宿泊しているホテルに戻り、ベッドに横たわろう。そう思い本館を出て、もと来た桜並木のある中央玄関に足を向けた。

外に出ると大きな噴水と、規則的に植えられた色とりどりの花壇、そしてそれらを取り囲む植林が視界に入ってくる。規模的に常軌を逸しているそれらは、決してこの学校の雰囲気にそぐわないという事はなく寧ろ自然ともいうべきであつた。中央本館と噴水や植林、花壇等の関係はどこかヴェルサイユ宮廷をモチーフにしていそうである。勿論、本館がヴェルサイユ宮殿のような造りをしている訳ではないのだが、その他の大庭園がそっくりであつた。

加えて時は夕暮れ。空が紫苑一色になりかけ、大庭園の至る所からイルミネーションが輝きを放つ。自然と光とのコラボレーション。言葉も出ないほどに美しいその光景は、帰ろうと思つていた心を簡単に捻じ曲げた。

- - - - - っ少しだけ見て回つてみよう

そう思い立つて、大庭園の方に足を向け歩き出した。

石段を下つてゆく最中、両脇に淡い紫の絨毯ともいうべき、堇が所狭しと植えられている。そこに地面のどこからかスポットライトで照らしているのだから、感嘆してしまう。こんなトコ、自分がいた故郷にはなかつた。そう思うだけで、これからやってくる生活に少しだけ勇気が持てた。父に言つたあの言葉にも、可笑しな話だが信憑性を持つ事が少しだけ出来る気がしてきた。それだけ今、自分が見ている景色に心が揺れ動いているのだ。

石段を下り終えた所で大きな噴水が見える。水受けが三段あり、下に向かってその面積が大きくなっている。一番上の段には、石像が水瓶をもつた天使が水を流して、それが上方二段の水受けを一杯

にして、下の大水受けに流れ伝^つう。そしてそんな大噴水で桃色・緑色・濃青色のイルミネーションが踊るように水面を揺れ動く。

ボクは近くまでゆき、大噴水の縁淵に腰を下ろしてその光景を眺めることにした。

暫くして不思議な事が起こった。なにやら自分がさっき下つてきた石段を、人の大きさのウサギが下っているのである。どう見てもあれは着ぐるみである事は分かるのであるが、如何せん何故それがこの時間、しかもこの場所にやつてくるのか全く分からなかった。

- - - - - 何かの催しモノか？

そう考えてみるも、不確実性を拭えない。

ウサギ擬きはずっとこちらを見ながら向かってくる。

そんなウサギ擬きが近づいてくるにつれて分かった事だが、片手に手提げ袋を持っている。中には何か重いものが入っている様な、重量感が伝わってくる。

- - - - - 一体何が入っている？

気になる、あの中身が……、何が入っているのかが気に掛かる。

ボクは手提げ袋を凝視しながら、中身の事やウサギ擬きが何故にここに存在しているのか考えた。

そうこうしている内に、ウサギ擬きは後数歩と言う所までやって

きていて、驚き思わず顔を背けた。

目だけウサギ擬きの足元を見ると、動きがちょうど止まり、つま先がこちらを向いている。

- - - - - 立ち止まった？

一体ボクの前に立ち止まって何がしたいのか。全く持って読めない。目の前の得体の知れぬ着ぐるみの放つ異様なオーラに^{おの}の戦^わ慄^なきそうになる。しかし、誰に対しても弱みは見せないと決めたが故、考えなければならぬ。例え予想が出来なくとも。一体この「ウサギ擬き」は、ボクの目の前に立ち止まって何をしようというのだ。時期的に、一般教育機関的範疇内催事という線はあまり考えられない。すると可能性に考えられるのは……一つだけ。

- - - - - 誘拐

源家継承権第一位である自分を誘拐し、自らの利益にしようと画策している輩に違いない。ウサギの着ぐるみを着ているのは、自らの顔を悟られない様にワザとそうしているのだ。この考えならば全ての辻褄が合う。では、それに際し自分は今如何するべきなのだろうか。ああ、考えるまでもないか……。

- - - - - 逃げるより他に道は無い

そう頭に思い浮かぶ前に、ウサギ擬きに背を向ける様にして走り出した……が、ボクは一メートル進まない程度で棒立ちになった。

- - - - - 脳天から爪先まで刹那の内に神経系を減耗させながら伝う感覚、迸る戦慄

眼下には背筋が凍り付く程の衝撃を覚える様な「痕跡」が在った。

火薬のような顔を顰めたくなる匂いが鼻をつく。

それがなんなのか、考えずとも本能が理解していた。

そう、自分を膠着させたのは紛れもなく「銃痕」であると……

その事実を明解に認識した時には足が痙攣していた。

- - - - - 思考停止

何も考えられない。ただ分かっているのは、自分の身が危機に瀕しているという事。

- - - - - 殺される……何か打開策はないのか、考えろ！自分
ッ！！

その自問自答のような問い掛けを自分に課すも、何も考えられない。せめても動こうと考えても、体も膠着状態を保ったまま。頭で考え、思考停止し、ただ動けと本能的に念じるといふ、全く無意味な無限ループを繰り返してしまふ。しかし、ある所でふと歯止めがかかる。

- - - - - 理紗子……

誰に対しても弱みは呈さない。それは幼い頃に彼女にしてしまった罪を償おうとした決意した事からの表れ。この罪の足枷の重みを、一生掛けて解さなければならぬ。ボクはまだまだ理紗子になにも

してやれていない、それどころか弱みを露呈して果てようとしている。愚かだ、許されようも無い事を仕出かそうとしていたのか……。

ボクはポケットの中に手をつ込んで、先程まで勉強の為に使っていたボールペンの背をノックする。そして今も尚痙攣が止まない足に突き立てるように、その切っ先を大腿部にあてがい加圧してゆく。

「……うつ……」

思いの外衝撃が強かったので少し悶えたが、相手には聞こえていないし、表面には出さずに装う。「ここで気概を張らずにいつ気概を張るんだ！ 満身創痍になっても信念だけは貫いてみせるッ」そう奮起させ、恐怖だった対象に向き直る。思い切り睨みを利かせながら歩み寄ってゆく。そして後数歩という所まで近づいた所で立ち止まる。

視線を逸らさずにウサギ擬きを凝視していると、その内痺れを切らせたのか言葉を発し始めた。

「そんなに睨まれたら怖いすわ。源 あゆむさん？」

女？ ウサギ擬きの中身は女だったのか。てっきり男とばかり思っていたのだが……。しかしだからこそかもしれない。手の指先がこんなにも冷たくなってゆく。いや、血の気が引いてゆくといった表現の方が正しいか。今までに味わったことの無い感情、さらに状態さえ憶えさせる目の前の人間に吐き気さえ憶える。

されど、これで相手を予測できると言う材料を得た。張りのあるアルトボイスの女。戯けるような事を平気で言える事から、気丈夫

に振舞える性格の持ち主なのかもしれない。加えて自分の名前を知っていて、さらに自分を狙撃ライフルで殺させる事も出来るハズである人間がそうしない事から、先程の自分の仮説はより正確性を帯びてきた。しかしながらそれは、ボクが要求を呑まなければいつでも始末するという意味でもあり、これからの対応が非常に重要になってくる訳である。

「何故私の名前を知っている？」

いつもなら使う事がない一人称を口にし、精神を硬化させる暗示を掛ける。

「自らの恨みの対象である人間の名前くらい、知っていて当然じゃありませんこと？」

「恨みだと？」

全く身に覚えがない。しかしながら、思い当たるもの、脳裏を掠める事がある事は周知の事実である。そう、「源グループ」という枠組みの中の中枢に位置する事になった、自分だ。先代や、先々代、もしかしたらもつと前に起きた事で、「源グループ」に恨みを持っているに違いない。

「そう、恨みですわ。貴方を殺めなくなる程に……」

「ならば何故殺さない？ 正面の中央正棟の屋上に君の仲間である狙撃手を配備しているじゃないか、殺そうと思えばいつでもそうできる筈だ」

「そうですわね……。もしもそう出来たら、この恨情も少しは軽減できるのかもしれませんが。しかし、それでは意味が無いのです。生きたまま貴方を捕縛する、残念ですがそうせざるを得ません。ああ、逃げようなんて考えてはなりませんよ。ご存知の通り、私には狙撃スナイパー

手がいる。生きたまま、という条件であれば、貴方の足を打ち抜いて捕縛するだけですから」

「私を捉えて脅しの交渉にでも使うつもりか」
カード

「ご想像にお任せしますわ」

やはり誘拐という線だったか。ボクはこれからどう行動を取ればいいんだ。体は先ほどより動くようにはなっているように信じたいが、動いたとしてその先はどうなる。今、目の前の女が言っているように、ボクの足を打ち抜いて、捕縛されて結局お父さんや理紗子に迷惑を掛ける事になるに違いない。となると、残りの選択肢は二つだ。

一つは話し合いによる解決策。つまり相手の事情を色々聞いて、穏和に相互で解決しようという事だ。……、しかしボクを恨んでいる以上、恨情を宥め且つ宥和してくれるなど有り得ようもない。となると……、残る選択肢は一つだけ……。

ボクは掌を眼下に見据え、精神を集中させ熟考する。

結局一番取りたくない策に打って出る事はあまりしたくはない……。しかも相手が女なら猶更である。しかしこのままいけばボクは身内に迷惑を掛ける事になる。躊躇の念が押し寄せるが、仕方あるまい。

そう思い立つと、すぐさまにボクは身を振り、体の上半身を傾斜させ右足を抱え込み右足側頭を女の脇腹に入れた。

「かはッ」

女は脇腹を片手で抑え身を抱えようとする。ボクはその期を逃さ

ず女の首元を左腕で挟み、右手に持ったボールペンの先を首元にあてがう。そして最後に狙撃手の配備している中央本館に体を向ける。此処までの動作に2秒も掛からなかったのは、思いの外であった。先程までの体の硬直が、嘘みたいに解放されていたのだ。

ともあれ、これで迂闊に狙撃手も打ち込んではいけません。そう確信した矢先だった……

「あ、甘いすわね」

そうさりと漏らすと、女は片手に持っていた手提げ袋を放して地面に落とした。

- - - - - カラン

そんな甲高い音が鳴ったかと思うと、すぐさま白煙が辺りに立ち込め始める。何が起こったのかと上下左右見回している内に、次第に意識が遠のき始め、僕等は瞳を閉じてその場に倒れた。

その後、黒いスーツを着た男達が目の前の二人の人間を抱えてその場を去っていった……

御閲覧戴き誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

\ Special Thanks \

- 月奏様
- ライクス様
- 神楽坂様

感想・御指摘、大変ありがとうございました。感謝申し上げます。

尚、近日中に活動報告欄に読者の方々に向けてのコメントをアップしますので、併せてご覧戴ければ幸いです。

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

The Fifth Scene ~ The anonymous document

執筆そして投稿スピードが遅く、読者の皆様には大変ご迷惑をお掛け致しております。申し訳ございません。今回は少し長めに執筆致しましたので、少しでも楽しんで戴けたらと思っております。では、ごゆるりと……

源 あゆむ。それは私の兄であり、この世で最も尊敬している人物。そして、この世で最も感謝している人物。私にとってはいなくてはならない存在。かけがえの無い存在。もしも自分の兄が、「源あゆむ」それ自体でなくなっていたのであれば、自分の存在が打ち消され、「人間」として成り立たなかったであろう。

- - - - - 唯一無二

他者に兄弟愛ブラコンと言われ様が関係ない。自分の兄を超える人格を持った人間は、この世に存在しない。例えば、自分に取り得が無くとも、今は自分の兄の事だけは誇る事が出来る。

幼少期の自分が、もしも今の自分の心境を知ったら首を傾げるかも知れない。なにせ私、源 理紗子は兄である源 あゆむの事が大「嫌い」だったのだから……

寝ても醒めてもあの時の事ばかり考える。両親から相手にされなくて、いじけていた、悩んでいた、怯えていた、そんな感覚に苛まれていたあの時。お父さんは仕事の関係で海外へ出張。お母さんは単身赴任。故に私の回りには兄しかいなかった。小学校にいて普通に過ごして、友達や親友は大勢出来たけれど、空虚な毎日だった。「愛」が無かった毎日だったと言い換えても差し支えは無い。

求愛された事は幾度もあった。自分自身、そんなに魅力的なのかどうか疑問であるが、「告白」は一ヶ月に一度は必ずあった。

- - - - -「好きだ！」

言葉の終わりには必ずこう発して締めくくられる。他の人はこんな言葉に胸が締め付けられるような思いをするという。しかし、私はそうは思わなかった。

- - - - -使い古された言葉

新鮮さが無かった。私の心が全くとっていいほど潤わなかった。愛が足りてないのだから、恋人を作ってその隙間を埋めれば良いではないか。そう思っていざ付き合ってみても2日と持たなく別れてしまう。当然だ。私はその人を愛して等しいのだから。いや、そもそも愛そうという事すらしなかったと言っても過言ではない。

- - - - -何故なのであろう

そう考えてはみるものの、一向に答えは出なかった。

心に侘しさを感じつつも毎日をごしていった。しかし誰もそれを埋めてはくれなかった。例外なしに……。

あの時、兄はいつも帰りが遅かった。だから兄が帰ってくるまで家にはいつも私だけ。リビングのソファにいつも膝を抱えて誰か（・・）を待っていた。侘しさを、心の隙間を埋めてくれる誰か（・・）を、待っていたのだ。しかし、誰も私を救ってはくれなかった。自分の身内も、一番近くにいた兄でさえも交友関係で私の事等見向きもしなかった。

「ただいま」そう聞こえてくる時には私はもう床にしていた。

泣いた。布団の中で必至に体を縮こませた。涙や鼻水で濡らした膝を誰も拭って等くれなかった。両親が仕事柄帰って来ない故、私には兄しかいなかったのに……。愛が欲しいと祈り、願ったのに……。それでも私の心とは背反して、兄のつま先は私の部屋には向いてくれなかった。日増しに高まってゆく期待を、兄は知る由もなく簡単に踏み躪る。妹の、家族の、源理紗子を裏切った。そんな風に日を追う毎に私の兄への嫌悪感が強まっていった。

そしていつしか、誰も心配等してくれない。私の存在すら認めていない。

- - - - - 私は空気なんだ

そう思うようになった。だったら……

- - - - - 消えてしまおう

誰も気にしないし、泣いてくれもしない。私がこの世からいなくなっても、友達も家族も兄も笑って過ごす時を経てゆくのだろう。だからそういう考えに及んだ。そしてあの出来事は起こった。

私は誰もいないリビングでいつものように膝を抱えていた。他人^{あに}が帰ってくるまで、ひたすら自分の存在を縮こませた。

外からの街灯やイルミネーションが家の中に入ってくる時間になっても、電気をつけなかった。そして暗闇の中、他人^{あに}は帰ってきた

……

玄関から足音が聞こえてきて、リビングのドアノブに手を掛けて同じ空間に入ってきた。「理紗子、いるのか？」そういいながら電

気を点けた瞬間、私は立ち上がって刹那の内にベランダに裸足のま
ま出る。そして塀に背中を向けて、呆然と立ち尽くした他人^{あに}に向か
って「源理紗子なんて人間は、この世にいません」そう呟いて、自
分の腰を塀に掛けて背中に体重を加圧し、空中を舞った。

- - - お兄ちゃんなんて、大っ嫌い

マンションの10階から落ちる時、そう思った。謂わば地獄から
奈落の底へ堕ちて逝こうとする、そんな感覚。そんな感覚の中、私
が見上げたもの、目にしたものは……。ミステリーやオカルト
ではこのような時に回り灯籠が見える場合があるなんて説があるけ
れど、私がその時見たものはそんなものではなかった。

腕がひんやりしている、それに額がなんだか……。そう意識し
始めた時、正面から声が聞こえる。誰だろう……。

「よう、- - - ちよう、ちよう、みな- - - いちよう」

次第に意識が鮮明になってゆく。話し掛けてきているのは、いや
私を呼んでいるのは声高のソプラノボイス。しかも口語尾が窄むと
いった特徴を持っている。つまり、あの子だ。

「源会長」

そうはつきりと聞こえた時点で、漸く机に突っ伏していた状態か
ら顔を上げる。さっき腕がひんやりしていたのは私の額の重さで血

の気が引いていたのね、と自分の冷え切った腕を見ながら冷静に思う。腕にシユワシユワと炭酸が弾けるみたいな感覚を憶えている最中、目の前の淑女は口を開く。

「どうかなさったのですか？　ご気分が優れないようでしたら係りの者を呼んで付き添わせますが」

そう心配そうな表情で私に問いかける。

常時光潤で大きな目を彼女は持っている。言ってみれば、自分のする事成す事全てに自信を持っている様な瞳の持ち主だ。

「い、いえ。それには及びません。単に寝不足なだけですから」

すると彼女は安堵した面持ちで胸に手を当て息を漏らした。そして自分の座席に向かい、腰を下ろす。

「ミス・ヴェラフェリーチェに何かあれば学園中が騒動になりますわ。くれぐれも無理は為さらぬ様御願い致します。えと、それから……なんでしたっけ、何か言おうと思っていたのですが……」

ミス・ヴェラフェリーチェ。学園で一人しか選ばれず院生の模範となるべき存在。成績優秀、頭脳明晰、文武両道、素行良好が基本選考条件。そして他校に比べ異様と思える2月学年始めの全校集会の際に候補者の選挙が行なわれる。そこである一定の厳しい条件を潜り抜ければミス・ヴェラフェリーチェとしての一年を過ごす事が出来るのだ。学費大幅免除、ミス・ヴェラフェリーチェと在校生からは尊敬され、憧憬の念で見られ、学園からは「特別待遇」を受けられる。

「そうですね、皆様に選んで戴いた以上、任期中の不具合等許されませんものね。御氣遣い下さってありがとうございます、柚葉」

「会長…」

所はSt・Veraferrith女学院6階、いやここでは呼称名が違う。各階を上階から下階に向かってFL/A↓B↓C↓D↓E↓Fといった風に呼称されている。従って正しくはFL/A。別名Nonaggression Floor、不可侵階。普通であれば1フロアを26区画に仕切り、約500人程度の院生が暮らしているのであるが、この不可侵階だけは別。全校院生1603名中の入室を許可された5名が1フロアを占有出来るのである。つまり裏を返せば私達5名以外は例外無しに入室出来ないのだ。ではその限られた5名とは一体学院でどんな存在なのかという疑問が当然浮かんでくるが、それについては私が「ミス・ヴェラフェリーチェ」とは呼ばれず「会長」と呼ばれる所以から立脚している。

「どうぞ」

そう言われて、私のデスクの上に優しく置かれたのはアイスミルクティだった。コースターの上に乗ったそれは、解け終わっても薄くならない程の適量の氷、飲み易いようにストローまで付いている。彼女の氣遣いの程度が窺い知れる。

笠霧 柚葉。学院2年生。つまりは私の一つ下の後輩。背中まで届きそうな艶や光沢のある黒髪に大きな赤リボンが特徴的で、均整の取れた顔立ち。加えて氣立てが良いとあって学院では注目の的である。謂わばこの学院の院生から羨望される一人。

「ありがとう」

私がグラスに口をつけるのと同時に彼女は口を開く。

「ミルクやガムシロップの程度がイマイチ把握できてなくて、目分量で入れたのですが…如何でしょう。もしかして、甘すぎます?」「いいえ、とても美味しいわ。ミルクとガムシロップの調度が取れていて、とても私好みの味よ」

「良かった…」

「柚葉も私と同じアイスミルクティでいいかしら」

そう問いかけながら私はグラスをコースターの上に置いて、立ち上がる。そして自分がカードキーを使って入室してきた扉の方を見据えて、一歩前に踏み出す。向かうは扉横に設置された給仕コーナー、言い換えればお菓子・ドリンクコーナー。概念的にはよくファミリーレストラン等にある様なドリンクバーみたいなものなのだが、実際には高級な調度品に入れられたジュースやどこぞの王室御用達のティーセットだの茶葉だのが沢山あるようなブースである。

「そ、それには及びません。私が自分でやりますので、会長はそのままでいて下さい」

少々驚きつつ、腰を椅子から上げる彼女。私はそれを受けて右手を差し出して、それを制す。

「私がやりたいのよ。いいからそのまま座っていらっしやい」

「でも…」

「座っていらっしやい」

私がそう言うと彼女は不服そうに腰を下ろした。そして俯いたまま

「は、はい」

私はその返事を聞くなり首を縦に振って、ドリンクブースに向かう。そしてそこにいくつも重ねてあるグラスから一つを取り出し、同時にティーポッドを用意する。ティーポッドには紅茶の茶葉をすりきり三杯入れて、お湯を入れる。そして、茶葉が開ききった瞬間に氷の入ったグラスに静かに注ぎ込む。最後にミルク、そしてガムシロップの代わりに蜂蜜を入れてマドラーでかき混ぜストローを差し込む。それが済むと私は踵を返して、お手製のアイスマルクティーを彼女のデスクにそっと置く。

「……感謝」って人間にとって大事な事だとボクは思ってた。
んだ。

そう言ったのは私の兄、源 あゆむだった。

私は過去に人間として決してやってはいけない事をしてしまった。過去の「罪」はどうしても拭う事は出来ない。だからせめてこれからは人間として善くあろう、人がされて喜ぶ事をしよう。兄の言葉が私をそんな気持ちにさせた。そして私の「決意」、その根底にあるものは……

「……源 あゆむが誇れるような、そんな「義妹」で在ろう

そんな狭持が私を今の人格へと変化させた。そう、院生^{ひと}は私、源理紗子をこう呼ぶ。

「……「ミス・ヴェラフェリーチェ」……と

「ありがとうございます。会長に給仕して戴くなんて光栄余って、恐縮です」

「いえいえ、私がしたいと思った事をしただけよ。私の我儘を通してただけなのだから、そんなに畏まらなくていいのよ」

そう微笑み投げ、私は自分の席にゆっくりと戻ってゆく。席に着いた時点で辺りを見渡してみる。自席は入り口と相對していて、左と右には2席ずつ各々相對する様に位置している。従って形で言えば凹上、と言える。私から見て右手前、私の席の近くに座っている彼女は私が先程注いだアイスマルクティを飲んでいる。それ以外、つまり空席3つは未だ埋まらない。どうしたのだろう……、そう思っている

「お、美味しい」

目を大きくしながらそう呟く彼女に意識が向く。私の昔から好きなアイスマルクティ、どうやら氣に入って貰えた様だ。そう思うと口元に笑みが綻ぶ。今まで他の人には飲ました事のないそれを、初めて飲ませて、初めて褒められた。後輩ながら、いや後輩だから嬉しい。恩を礼で返して心に報いが還ってくる。

「そう？ そう言ってもらえて嬉しいわ。それはね、私の兄が昔よく飲ませてくれたのよ」

「会長にお兄様がいらっしゃったんですか、意外です。てつきり兄姉いらっしゃらないのだろうと思ってました」

そう頷いた後、私が淹れたアイスマルクティから濁音が聞こえる。

「何故そう思ったの？」

そう問いかけると、彼女は私の目を真っ直ぐ見て照れながら口を開く。

「だって、会長はすっかりしていらっしやって、氣立てが良くて、博識で、運動も出来て、礼儀礼節がすっかりしていらっしやって……。そんな方のお兄様やお姉様なんて想像出来なかったのです」

「私はそんな超人ではないわ。でも、私の兄は超人よ。私なんか到底及ばないくらいの……私にとっては雲の上の存在なの」

私は二つの仮面を付けている。「ミス・ヴェラフェリーチェ」という仮面。そして源 理紗子というあゆむの「妹」という仮面。双方の表性格は真逆。しかしどちらも私には必要なんだ。そうでないと私が私で無くなってしまふ。だから私は今「ミス・ヴェラフェリーチェ／会長」の仮面を被り、理想の院生を装わなければ。

「雲の上、それって神様じゃないですか？」

「フフ、そうね、そんな感じかしら」

そんな風に話に花を咲かせていると、私の机の上のアラームが甲高い音で鳴る。

――――会議開始１０分前

欠席・遅刻連絡はこのアラームまでとなっている。それをしてこないという事はつまり

「もうすぐ会議の時間ですね。でもまだ皆さん集まってらっしやらないですね。皆さんどんな御用なんですか？」

「それが、何も聞いていないの」

「えっ」

彼女は驚きの声を上げて、アラームから私へと焦点移動する。

「恐らく忘れている、という事よ。裏を返せば昨年の終業式から3ヶ月、会議が今日の始業式後というのを憶えていたのは私と柚葉だけだったという結論に至らないかしら？ 新入生は初参加だから仕方ないとしても、あのお惚けさんは全くどうしたもののかしらね」

私はふと左手前の無人のデスクに目を向ける。その視線を察知したのか、柚葉は少し困った様な表情をして言葉を紡ぐ。

「確かに…、では本日の会議はどうなさいます？」

「そうね、そうしたら今日のかい」

そう口語しようとしたその時に正面の自動扉からピッという機械音が聞こえ、扉が左右に開かれる。

「皆様、ごきげんよう」

そう堂々且つ優雅に入り口から入ってきたのは、空席の持ち主の内の人。茶髪でセミロングの巻き髪、肌が程よく白く、顔が人よりも小顔且つ睫が長い特徴を持った女の子。学院一年生 百合河崎ゆりがさき 愛癒。あいゆ

右手で自分の髪を耳に掛けながら、そうご機嫌を伺う愛癒さんに私達上級生は呆氣に取られていた。

その証拠に柚葉は口を小開きにして見つめている。私もあまりの衝撃に声が出ない。

そんな私達を他所に愛癒さんは空席を見渡した後、正面に座っている私に目を向ける。そして私の目の前までゆっくりを歩みを進め

て止まる。

「初めまして、ミス・ヴェラフェリーチェ。私は百合河崎 愛癒。この前入学してきたばかりの学院一年ですわ。この度は淡紅梅地区ヴェラフィン司教様からのご推挙により、当学園のこの后玉会に入会させて戴く運びとなりました。これから宜しく御願ひ致します」

私のデスクの一番上段の引き出しには一つの封筒が閉まってある。差出人は『淡紅梅地区ヴェラフィン司教 エレクトリア・グレゴリウス』。彼女からの封筒の中身は2枚の通知文と1枚の紙だった。その通知文には今回入学してくる学院1年生から、この后玉会に入会させる2名の名前や家族構成、電話番号、得意科目、趣味、司教からみた対象の人物像などが記載されてあった。故に感覚的に人物像を予想したのだが、結果予想と現実がかなりかけ離れていたといったところであった。

「えええ、初めまして。私は后玉会の会長を務める事になった源理紗子。こちらこそ宜しくね、愛癒さん」

「愛癒で結構です。色々と至らない点があるとは思いますが、ご教授の程お願い致しますわ、ミス・ヴェラフェリーチェ」

愛癒は自分のドレススカートの布をちょこんと摘まんで軽く会釈をする。

「愛癒」

そう横から呼んだのはさっきまで呆気にとられて凝固の状態にあった柚葉だった。柚葉は立ち上がって愛癒の元まで近づいてきて面と向かい、口を開く。

「まず『出席・欠席連絡は開始時間10分前』というのは勿論ご存知よね？ 司教様から召集された際に后玉会会則集を戴いたハズだわ。一年生だからといって甘やかされる訳ではなくてよ」

腕組をしながらそう問いかける柚葉。

「それは申し訳ございませんでしたわ。えっと…」

「当学院2年生笠霧 柚葉といいます。后玉会においては財務長を務めております」

「あら柚葉様、糸くずが付いていらっしやいますわよ」

「え？」

愛癒はそう言って柚葉の髪に付いた糸くずを取り、目の前に持ってきて見せる。

「はい、取れましたわ」

「あ、ありがとう、貴方優しいのね」

「いえいえ、当然の事をしたまでですわ。それより柚葉お姉様？」

「お、お姉様ツ？」

柚葉は後輩からの思いがけない言葉に驚き、照れている様に見える。もうこの時点で当初の勢いを失い、完全に愛癒のペースに吞まれてしまっている。尻を丸め込まれるとはこの事ではないだろうか。

- - - - -ある意味この後輩、末恐ろしい……

「私の^{わたくし}デスクはどちらになりますの？」

「え、あつ、そうよね。後輩の席を直ぐに教えて差し上げないなんて、私ったら。愛癒の席は私と対角線上の入り口に近いあその席です。一応事務用の文具や必要になるであろう道具は揃えました。」

それでも何か足りないようでしたら、私に仰って？」

柚葉はハッと何かに気付いたように目を見開き、次第に語気を弱く、いや優しく話し始める。

「えっと、足りないというか何と云うか……」

愛癒は右耳の付け根を触りながら、言葉を濁した。目が斜め下にいつている、何かまるで先を尋ねるという意思表示のよう。

「どうしたの？ なんでも私に仰ってくれていいのよ」

その言葉を待つてましたと謂わんばかりに、顔を上げて先輩である柚葉の目を直視する。

「折角のご縁です。私の席は柚葉お姉様のお隣がいいなと。私図々しいですわよね？」

刺そうとしている。何かが刺さる寸前、私に言われた訳ではないのに、何かが私の心に、突き刺さる手前の様な気がする。他人がこのような思うのだから、言われた当人は……。

「い、いいえ。全然図々しいなんて事はないです。どうぞ、お座りになって」

柚葉は後輩が座る座席を引いてあげて、愛癒が座るのを待っている。先輩にここまでさせる事が出来る後輩……他にいる、かしら？ しかも柚葉はそんな事を気にしている素振りとは全くなく、むしろ喜んでいた。

「ありがとうございます」
「いえいえ、当然の事よ」

愛癒は先輩が引いてくれた座席に腰を下ろし、デスクの横のカゴに自分の鞆を入れる。そして一息ついて今度は私に向き直る。――
ターゲットバックオン
- 目標決定。

「ミス・ヴェラフェリーチェ」

「愛癒、あのね、ここ后玉会では源 理紗子先輩は『ミス・ヴェラフェリーチェ』ではなくて、『会長』と呼ばなくてはいけないのよ」

さっきまでとは対称的に、柚葉は横からそう穏やかに注意する。

そう私はこの后玉会では「ミス・ヴェラフェリーチェ」ではなく「会長」と呼ばれている。何故か。それにはこの学院生徒が信仰しているヴェラフィン教との関わりがある。

「何故です？ 学院生徒は皆さん『ミス・ヴェラフェリーチェ』と呼んでいらつしやるではないですか」

当然返って来るであろう疑問に、腕組をしながら柚葉は口を開く。

「それはね、私も愛癒も信仰しているのはヴェラフィン教でしょう。ヴェラフィン教の聖典である『ヴィクトウスVictus』には知っての通り、こう記されているの。ヴェラフィン教徒はいかなる場合においても、自らが尊敬する人物には最大の敬意を表す事。この条文はご存知かしら？」
「ええ」

柚葉は後輩の当然の反応に、先の言葉を紡ぐ。

「ではここで私から質問ね。貴方は出席していないけれど、司教様から聞いていると思うから問いかけさせて貰います。当学院のミス・ヴェラフェリーチエとはどのような存在で、どのように選出されるのでしょうか？」

柚葉はそう問いかけ終わると、後ろに手を組み、徐に自分の席に戻り腰を落ち着ける。愛癒の回答を待ちわびるかのように、柚葉はデスクに肘をついてちょこんと顎を乗せる。

「まずV e r a f e r i t h女学院においてのミス・ヴェラフェリーチエの存在。それは3学年を通して一人しか選ばれない名誉。その中身は当学院の院生像とされる慈愛・友愛・献身を持ち合わせる院生の手本となる理想院生に足る存在ですわ。選出方法は有効投票数60%以上、加えて教師一人以上の認可状が必要となります。もしも決まらない場合は、他に票を獲得した候補生から票の譲り渡しが行なわれ、60%を越えた時点で決定される。こんな感じの説明でよろしいでしょうか？」

「ええ、その通り。でもここで問題なのは『ミス・ヴェラフェリーチエ』の拘束力よ。確かに『ミス・ヴェラフェリーチエ』はヴェラフィン教徒である私達から選出される。今年で言えば会長は約71%の獲得票だったわ。けれど裏を返せば約29%の人達は支持しないって事でしょう。『会長』は院生の統括象徴であり、絶対権威なの。だから少しの人にもも支持されていないなんて持つての外。しかし『会長』は教皇閣下から任命状を戴くの。考えてごらんなさい、教皇閣下という事はヴェラフィン教の中で絶対権威、誰もが崇拜しているの。その人が認めたという任命状を貰ったのだから当然、ヴェラフィン教徒である以上支持しなければならない。要するに普通に生活する分には『ミス・ヴェラフェリーチエ』と呼んでもいいけれど、こういう仕事の場においては絶対権威である『会長』と呼ぶ

のが道理なの。お分かりになって？」

柚葉は後輩に懇切丁寧に一言一句切りながらそう問いかける。そして数秒沈黙が続き、笠霧さんは頷く。すると徐に腰を上げて空になったグラスを持ってドリンクサーバーの方に向かう。

「つまり『ミス・ヴェラフェリーチェ』は単なる象徴であり、院生から見れば憧憬の存在であると。逆に『会長』は院生を仕切る后玉会のトップとして絶対権威を持つていなければならない。どの院生においても従わせなければならない、拘束力・強制力・発言力どれもが必須であると。そう仰りたいのですか？」

後輩の的確な説明に笠霧さんの給仕の手が一瞬止まる。そして少し振り返りながら

「え、ええ、概ね網羅されています。故にここでは『会長』と呼ばねばなりません。『会長』が単なる憧憬や象徴であってはならないのです」

それを聞くや否や、愛癒はゆっくりと私の方に顔を向けて口を開く。

「では改めまして『会長』、お尋ねしますが、何故ここにいらつしやるのですか？」

そう微笑みながら優しくそうに問いかける愛癒に恐怖の念を抱いた。突然、何の脈絡もなく問われたその言葉。そう、本来ならば私にはこにはいない事になっている。何故ならば私が所属する茶華道部では毎年この時期にお茶会が花見スポットで開かれているからである。今年の場合は熊本。故に熊本に向かっているハズの私が、ここ学院

のAFに居ること自体おかしいのだ。でも奇妙だ。2年生の柚葉から指摘されるなら未だしも、まだ入学したての、しかも私の事を概要しか知らない彼女が私の所属する部会の行事を知っているなんて……。恐ろしい……。

少しの間沈黙が続く。熊本に行かなかった理由。お兄様がこの淡紅梅に移り住んでくるから、その出迎えに会いたくて迎えに行つたから部会を欠席した、なんて……言えようもない。

「っあ、そうですよ。会長は熊本に行つていらつしやるハズ。さつきから何かが引つかかると思つてたらこれでしたわ。」

「そ、それは……」

思わず動揺して口竅つてしまふ。なんと答えてよいのやら、いえどう潜り抜けようか、思考に思考を重ねてみるも思い浮かばない。どうしよう……

「考え得る理由は一つしかないのではないでしょうか」

そうあくまでも穏健に、そして優雅そうに話す愛癒。これから言おうとしているこの子の推察は私にとって、恐らく脅威。

愛癒は腕組をしながらにこやかに私を眺める。

「部会よりも后玉会が好きなのですね？」

「はい？」

結果、続答は予想を斜めにいった。

「ですから、茶華道部の定例実地会よりも后玉会の初回会議の方を

お選びになつて下さつたのでしょうか？」

そう私に問いかける愛癒の瞳は何故か私に向けられる事無く、隣の柚葉に向けられた。すると柚葉は何か思いついたように私の方を向いて目を見開く。

「会長、ありがとうございます。私、定例実地会が嫌だから仕方なくこちらに來ているなんて事を考えていましたわ。なんたる愚考。何卒お許しくださいまし。会長が部会より初回会議を后玉会を優先して戴いた事誠持つて嬉しく存じます」

不思議。私を貶めようとしている様に感じられても、實際そうならない。でもなんだろう、いやな予感がする。その実態は分からないけれど、私の背筋が一瞬ゾツとしたのだ。彼女が柚葉に向いていた視線が、一瞬私に細目で私を蔑んだ様なそんな気がしたのだ。私の単なる気のせい、杞憂なのかしら。まあいい。一応これで私がそうだと認めてしまえば一件落着。

「ええ、そうなの。最初が肝心というじゃない？」

「そうですわね」

尊敬の瞳で私を見る柚葉。ごめんね、私あなたに嘘ついてる。しかし私自身がもう在るようで無い存在。私の生成要素は100%嘘と言つても過言ではない。そんな私が何を今更罪悪感に駆られ、懺悔しようとしているのだろう。烏滸がましいにも程がある。

「そうそう、もう一つ会長には言っておかなければならなかったのですわ」

またも突然、愛癒が思い出したように私に目を向ける。そう、私

の中で愛癒が恐怖から畏怖に変わる瞬間だった。

「先ほどエレベーターの前に落ちていたんですが、宛名が会長でしたのでお渡ししますね」

そう言っ て私に手渡してきたのは一つの封書だった。

「ええ、ありがとう」

私はそれを受け取っ てすぐさま裏面をしてみる。何も書いていない。つまり差出人不明、消印不明。怪しい。この手紙は開けてよいものなのか、判断しかねる所ではあるが……。もしこの中に有毒な薬品を染み込ませた紙が入っていたら？ しかしそれは杞憂でただのなんでもないイタズラなのかもしれない。どうしようか……

「開封しないんですか？」

私が悩んでいると目の前の愛癒がそう催促してくる。ここで悩んでいても仕方ないか。そう思い意を決し、腕を口に当て片手で鋏で封を切る。

中に入っていたのは……………

「じ、これは」

私は眼を大きく見開きながら啞然とその場に立ち尽くした。

そう、その封書の中身は一枚の手紙……………新聞の文字の切り張りで、読む事が億劫になるくらい血の気が引く怪文書だった。

『St. Verafelithの性別どつちかなあ。そういえば知
つてる？ St. Verafelithにはお兄さんが居て、その
お兄さんは……妹の為に命を投げ捨てるの。あなたは、だあれ？』

御覧戴き感謝の言葉も足りません。本当にありがとうございます。更新スピードが遅い事この上なく、読者の皆様には申し訳ないと思っっている所存であります。次のスパンは短く出来る様、最善を尽くしたいと思っております。

~ Special Thanks ~

●ライクス様

それではまた次のストーリーも読んで戴ければ幸いです。

P.S. その内活動報告にお知らせ等をUPするかもしれませんので、併せて御覧戴ければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7638e/>

Achieve ~ 与えられた試練 ~

2011年3月20日19時55分発行